
【でふおるまにあ・わーど】ぷちま!? ~ぷちます的な何か~

強襲兵 高天原 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【でふおるまにあ・わーるど】ぷちま！？　くぷちます的な何か

【Nコード】

N6443W

【作者名】

強襲兵　高天原A

【あらすじ】

ぷちどるが欲しくて探してみたら…出てきたのは全く違う謎の生き物！？　方向性ブレまくってますが気にしないでください！

鳴神　ソラさんとのコラボでライブぷちのキャラが出てきます。鳴神　ソラさんには許可をとってあります！　只今鳴神　ソラさん、L　AN武さんの作品に出演してきました！良かったら見てください！

別計画稼働中。

いちっ！

脳内シチュを楽しんで頂くために敢えてこの様な形で書かせていただきます。

くぷちます的な何か

A「うん？ ぷちますのSS読んでたら、俺もぷちますの小説書きたくなったなあ。どっかにぷちどる落ちてないかなあ？」
（
°。°。）（
||。|。|。）キヨロキヨロ

?「やで〜w」ガサガサ

?「むんむん！」ガサガサ

A「この鳴き声は、ぷちますか？しかも聞いたことのない鳴き声。まさか新種!？」
（
）

ガサガサ！

A「そこかあ!!」ガサガサ

ヒョイツ!!

?「やで〜?」コアラの格好した謎の生き物

?「めん!!」鶴の格好した謎の生き物

A「…!?!」(;)!?

A「ぶ、ぶちますかと思ったら、何だか全然違う生き物出てきた!」(「。。」)

?「やん?」小首を傾げるコアラ

?「めん!めん!」もう一匹を庇うように立ちはだかる鶴

A「(か、可愛い!!)」(;)

A「(しかし、なんか見たこと有る二匹だなあ?」「(??へ?)?

?「やで〜。」「コロコロ

?「めん!」羽をパタパタさせながらコアラを追いかける

A「…」(。T。)

A「…」(=。-。()=。|。(キヨロキヨロ

A「ヒヤッハー!」お持ち帰り〜!?!」(;)

疾風奪取

?「やで〜W」(O^ ^O)笑顔

?「めん〜!?!」(。。」(ビックリ

A「誰にも俺を止められない!」(;)

にっ！

脳内シチュを楽しんで頂くために敢えてこの様な形で書かせていただきます。あしからずm(|) m

くぶちます的な何か

A「うん？ 思わず勢いで連れて来ちゃったけど、これからどうしようか？」(- - -) タラタラ

？「やで〜。」コロコロ

？「めんめん！！」ペシペシAの体を手持ちの竹刀で叩いている

A「ん〜先ずは名前を付けてあげないとなあ…。」「(。(。)

A「さてどうすか？何かに似てるんだよなあ？」「(|) ヽポリポリ

？「やで〜？」「悩むAを見つめ小首をかしげる

？「むんむん！！」「ペシペシ！

A「あ、分かった！ アニメのネギま！？に出てくるスカカードの木乃香と刹那に似てるんだ！」() (;) ! ?

A「ふむ。このぶちどるに似たネギま！？のキャラクター似のこの

生物を今日より『ぶちま』と呼ぼ。」「（ドヤ

木乃香似ぶちま「やん？」（〇？？〇）

刹那似ぶちま「めん？」（〇？？〇）

理解出来ず二匹揃って首を傾げる

A「よし！二匹の名前が決まった！！」ポン！

A「木乃香似の方が『このちゃ』、刹那似の方が『せちゆな』だつ
！！」（ドヤ

このちゃ「やんW」（〇^ ^〇）名前を付けて貰えたのが分か
つたのか嬉しそう

せちゆな「め、めん！めん！」（〇〇）ペシペシこちらも
分かったのか若干驚いて竹刀でAを叩く

A「（照れとる照れとるW）じゃ二人共（？）これからも宜しくね
W」（^|^）v

このちゃ「やんW」（〇^ ^〇）Wに」

せちゆな「め、めん！／／」（〇〇）#（テレテレ

『このちゃ』と『せちゆな』が加わった！！

さんっ！

脳内シチュを楽しんで頂くために敢えてこの様な書き方をしております。あしからずm(´`´)m

くぷちます的な何か

A「ふう。 何度見ても可愛いなあ。このちゃはW(´`´) (´`´)寝
っ転がってこのちゃを見ている

このちゃ「やんやんW」何だか分からないけどうれしそう同じく寝
っ転がっている

A「このちゃはもう成分100%可愛さだよなあ。 それに引き換
えせちゆなは…。」

せちゆな「めんめん!!!」パシパシ

A「んゝまだ警戒されてるのかな？未だに竹刀で叩かれてるんだよ
な。」(´`´) (´`´)ゞポリポリ

せちゆな「めんめん!!!」ペシペシ

A「はあ…。 ちょっと寂しいなあ。」(´`´) (´`´) (´`´)

このちゃ「やん？」Aの元気のなさに不思議がる

A「こればかりは仕方ないか。とりあえず地道に信頼関係築いていくしかないよなあ。」(･･････)しょんぼり

A「二人共(?)ちょっと買い物に行ってくるから、いい子で待っててね?」なでなで二匹の頭を撫でる

このちゃ「やんW」さわさわ

せちゆな「め、めん!」さわさわパシパシ

A「イテテ。じゃあ行ってくるね?」m(^| ^;)スタスタ
手を叩かれる

ガチャバタン

このちゃ「やん…」心なしか寂しそう

せちゆな「めん…」心なしか寂しそう

くそれからそれから??

A「はあ。一時間も買い物してしまった。あの子たち大丈夫かな?心配だ。」(。o。;)スタスタ

ガチャ!

A「おい。ただいまあ！」

このちゃ「すやすや」ZZZ

せちゆな「すやすや」ZZZ

A「あちゃー。寝ちゃったかあ。悪い事したなあ。」(^ . ^ ;)

A「しかし可愛いなあ／＼」(^ ^)ツンツン

このちゃ「や〜ん」ちよつといやがるぶにぶに

せちゆな「む〜ん」ちよつといやがるぶにぶに

A「グハアツ!? マジパネエ!」ブシュツ!至る穴から出血)

T ;)

A「う〜ん。コレ以上やると起こしちゃうし辞めましょうか。」

(^ | ^ ;) ヽポリポリ

A「さて、ご飯にしますか。」(^ | ^ ^) v

A「あつ…。この子たち、何食うんだ?」(;) ?

このちゃ「や〜んW」すやすすせ

せちゆな「む〜」。すやすすせ

よんっ！

脳内シチュを楽しんで頂くために敢えてこの様な書き方をしております。あしからずm(| |)m

くぷちます的な何か

このちゃ「むしゃむしゃ」

せちゆな「むしゃむしゃ」

A「ハア良かった。どうにか食べるものが分かって。」(. . .)
ゞ

このちゃ「むしゃむしゃ」夢中

せちゆな「むしゃむしゃ」夢中

A「いやゝまさか、このちゃの好物が『コアラのマーチ』で、せちゆなの好物が『あじの開き』だったなんて。」(^ | ^ ^ . .)ゞ

このちゃ「けぷっ!?!」満足気

せちゆな「けぷっ!?!」満足気

A「おっ満足したみたいだな。良かった良かったW」ニコニコ
^ ^)ノ

このちゃ「や〜ん…」（ ）「じゅくりじゅくり

せちゆな「む〜ん…」（ ）「じゅくりじゅくり

A「ありやりや？お腹一杯になったからオネムかな？」なでなで

このちゃ「や〜ん」zzzz

両手を差し伸べてだっこの意思表示

A「ん？だっこ？はいよ〜」ヒョイ

このちゃ「や〜んW」顔をこすりつけるグリグリ

A「お〜よしよし」「トントントン

このちゃ「ク〜」zzzz

A「あ寝た。起こさないようにゆっくりと…。」「そーっと

A「よいしょっと。「静かに布団に降ろす。

ポスッ

このちゃ「やー」zzzz

A「ふう〜。次はせちゆなの方だなあ。」チラ

せちゆな「め、め〜ん」「ぐしぐし」　　；泣いてる

A「え〜！？　何で泣いてるの！？」取り乱すアセアセ（　　）
「アワアワ」

せちゆな「めんめん…」「メソメソ」　　；

A「ほらほら！　泣かないでヨシヨシ！」「ひょいっ　　（　　）
ノ）ノ持ち上げて高いたかい

A「ほ〜ら！ごめんごめん。一人にしてごめんよ〜！」胸に抱いて
トントン

せちゆな「めんめん…」「ぐしぐし

A「あ〜ほらほら…」「トントン

せちゆな「…」「グス

A「あれ？」「（*―*）？

せちゆな「ス〜ス〜」zzz

A「ありや？　泣き疲れて寝むっちった。」ポンポン

せちゆな「…」「チュウチュウAの服を吸う音

A「か、可愛いW」

せちゆな「…」ツーンとぼれる涙

A「…お休みせちゆな…。」物凄く優しい顔でポンポン

~~~~~

一方その頃

龍騎「あれ？オーデインは？」

アビス「そういや、リュウガもいないな？」

ライア「2人ならぶちまをあちらに届けに行ったぞ」

龍騎「何時の間に!？」

ライア「ちなみに届けに行ったぶちまはメガネをかけた絵描きな奴に恥ずかしがり屋な前髪で目が隠れた奴、不思議なジュースを飲んでる奴、最初の奴と同じ様にメガネをかけてるコスプレが好きな奴、元気なツインテールな奴と喧嘩している金髪な奴だ」

龍騎「6人(?)も!？」

アビス「よつやるな…」

~~~~~


A「あれ？オーディンさんから宅配便が届いてる。えっと、ナマモノ注意？」ガムテープを剥がすバリバリ

底に穴のあいたダンボール「# \$ % & a m p ; !」ボコボコ!?

A「えっ!?!?生き物!」ビクツ!?

底に穴のあいたダンボール「ワー!」バーン

A「ドヒエ〜〜!」驚きのあまりジョジョ立ち!

メガネをかけたスケブを持ったぷちま「んフフW」触覚をぴこぴこしながらスケブになにやら描いているサラサラ

ジュースを飲んでるぷちま「です!」不思議なネーミングの紙パツクのジュースを飲んでいるちゅー

メガネをかけてるピンクの髪の毛のぷちま「ぴょん!」決めポーズ的な何かビシッ!!

元気そうなツインテのぷちま「なのね!」「ふんす!腰?に手を当て気の強そうに立つ

金髪でお嬢様のようなぷちま「ですわ!」意思の強そうな目で此方を睨みつけている

A「な、な、な!?!」あまりのことに思考が追いつかない

ピラッ

A「はっ！？手紙だ！」パシッ

『六匹頼む。 by オーディン』

A「何ですとー！！」魂の叫びが木霊した

オーディン「頼んだぞ…。」腕を組み電柱の上から眺める

リュウガ「…心配だな。」同じく電柱の上 初カラミW

くその頃外ではく

前髪で顔の隠れたぶちま「ですうく？」小脇に本を抱えているキヨ
ロキヨロ

一匹迷っていた…；

ジュー！（１）

脳内シチュを楽しんで頂くために敢えてこの様な書き方をしております。あしからずm（――）m

くぶちます的な何かく

A「しつかしまぁ…増えたな」（……）タラリ

メガネをかけたスケブを持ったぶちま「ソフフW」ぴこぴこ触角（あほ毛）が動いている

ジュースを飲んでるぶちま「です…」ジュースを飲んでいるちゅー

メガネをかけてるピンクの髪の毛のぶちま「ぴょん！！」パソコンをいじっているカチャカチャ

元気そうなツインテのぶちま「なのね！！」バタバタ部屋を走り回る

金髪でお嬢様のようなぶちま「ですわ！」ツインテのぶちまに注意している

A「しかし物の見事に個性バラバラな子たちだなあ」（^―^）

A「さて先ずは名前を付けないと。いつまでも名前がないと可哀想だしなあ」

A「まずは触覚の子。ネギま!？のバルに似てるから『バルナ』だ!」() (ドヤ)

バルナ「ンフフ!」びこびこ

A「次にジューズ飲んでる子。この子はゆえちゃんに似てるから、名前は『ゆえち』だ!」() (ドヤ)

ゆえち「…です」ちゅー無愛想しかし少しほっぺが赤い

A「えつと、次は千雨似の子だね?ん?この子は…良し!」ちさー君の名前はちさーだよ。」() (ドヤ)

ちさー「…ぴよん。」そっぽを向くぶん!

A「ありゃ?気に入らなかったかな?」

A「気を取り直して次に行ってみよう!えつと、次の子は誰かな?」

元気そうなツインテのぶちま「なのね!」ビシッ!手とツインテで意思表示

A「君はネギま!？の明日菜に似ているから…『あしゅなん』だ!」

() (ドヤ)

あしゅなん「ねー!」ふんす!鼻息強

A「さて、最後に残ったのは雪広さんチのあやかさん似の子だけか
ふう(……)疲れた

A「君はねえ？ うん。よし君の名前は『あやにゃー』だ」
(ドヤ)

あやにゃー「ですわW」ペコリ礼儀正しくお辞儀

A「このちゃ、せちゆな？みんな仲良くね？」

このちゃ & せちゆな「やん！／めん！」

A「はあ疲れた。これで全部で六匹、名前を付けられたかな？」ア
レ？紙を見るペラリ

パルナ「ムフW」1

ゆえち「です…」2

ちさー「ぴょん！」3

あしゆなん「ね！」4

あやにゃー「ですわ！」5

A「あつ！？ 五匹しかいない！ 大変だ、探しに行かなきゃ！」

ドタドタ！？

「このちゃ」「ちゃび〜？」

せちゆな「めん？」

~~~~~

龍騎「オーディンが送ったぶちまが一匹迷子になったらしい！俺達も手伝いに行こう！」

春香「それなら……」

はるかさん集団「かつかー！！」

龍騎「何で増やすのかなあああああ！？」

春香「てへっ」

リュウガ「……まあ、探しに行くぞ」

オーディン「そうだな……前回ので見つけた9体のぶちまが行ってるかどうかを確かめる為にもな……」

~~~~~

A「おっ！？真司さんからメールだ。何々？『救助の応援出すよ』だって。いったい誰が来るんだろう？」

オーディン「私だ。」私だ

A「ぬお！？ オーディンさん！あなただったのか！？」お前だったのか

A「えっと、応援ってオーディンさんですか？」

オーディン「いや、他にもいる。」

リュウガ「応援に来たぞ。」

龍騎「俺も！！」

春香「こんにちわW」

A「うわぁ皆さん来てくれたんですね！」

龍騎「うん！迷子はほっとけないからね！」

A「ありがとうございます！」

春香「あれ？はるかさんも来たよね？」

龍騎「あれ？さっきまで一緒にいたのに？」キョロキョロ

？「かつかー」バツ！！

A「はっ！？」「。。。」「ピキーンNTの感

はるかさん」「もちゅー」「Aの顔に張り付く

A「んー！んー！」はるかさんに顔を吸われる

龍騎「うわぁ！！大変だ！？」

オーデイン「前途多難だ」

リュウガ「ああ」

~~~~~

インペラー「ちゃんと探せるかね…。」

タイガ「そうだね…。」

ライア「…出た。次回にて保護されるそうだ…」

ナイト「ライアの占いならそうなんだろうな…」

ベルデ「100%だからな」

~~~~~

A「んーんー！！」ジタバタ

はるかさん「（もちゅー）」「グイグイ龍騎が引っ張っている

リュウガ「占いで結果がでたらしいが」

オーディン「あの様子では……」

A「んー!!」「ビクンビクン」

龍騎「ヤヴィー!!痙攣し始めた!」

ろくっ！(2)

脳内シチュを楽しんで下さい。

「前回までのあらすじ。」「はるかさんに吸い付かれました。」

「ぶちます的な何か」

A「ハアハア。死ぬかと思った…。」ベッタベタ九死に一生

はるかさん「かつかーW」頭の上でご機嫌

龍騎「A君大丈夫？」

A「はい。何度かおじいちゃんに会いましたが、なんとか」

春香「あはは…」苦笑い

オーディン「早速だが時間が惜しい。」冷静

リュウガ「一言ぐらいかけてやれよ…」

オーディン「…行くぞ。」沈着

A「…」(T-T)

はるかさん「かつかー!」アムアム

龍騎「さっ!?!、行くうか?」アセアセ

春香「そ、そうですね!」

リュウガ「…」Aの肩に手を置く

A「リュウガさん」(T—T)

はるかさん「かつかー」アムアム

絞まらない;

くところ変わって

前髪で顔が隠れたぶちま「ぶあゝ?」「キヨロキヨロ」(。・。()
「。」「」のそのそ

前髪で顔が隠れたぶちま「ですう?」「キヨロキヨロ

未だに迷っていた…。

A「ああ。しらみつぶしに探しても仕方ない。 オーディンさん、
配達ルートはどこですか?」

オーデイン「エジプト、エクアドルを経由し、そこからアマゾンを北に渡り韓国で一服の後、日本に着いた。」回想

A「どんなルートたどったんですか!？」

オーデイン「ヘビィンガーは強敵だった…。」感慨

リュウガ「ああ、奴もまた、頂に立つ者だったな。」

龍騎「なんの話だよ…。」

A「行きましょう。スケールが違いすぎて付いていけない。」ベッタベタ

はるかさん「かつかーW」アムアム

全員で移動

ガサガサ

龍騎「ん?何かいるぞ?」

春香「もしかして迷子の子かなあ?」

ガサガサ

A「皆さん慎重に…。」ベッタベタ

龍騎「せ〜の！」

ガサツ！？

龍騎「何だ猫か？」にゃー

龍騎「ほら行きな！」ヒョイッ

ガサガサ

春香「あっあつちにも物音が！？」

龍騎「せ〜の！」

ガサツ！？

リュウガ「…犬だな」ワン！

リュウガ「…さあ行け。」ヒョイッ

ガサガサ

オーデイン「次はあつちか…。」

龍騎「せ〜の！」

ガサツ！？

ぷあ〜

A「何だ、ぶちまか…ってえ〜!？」

前髪で顔が隠れたぶちま「ぶあ〜」。」「ふるふる

A「も、もしかしてオーディンさんこの子…」。」「恐る恐る

オーディン「ああ六匹目のぶちまだ。」

A「存外早く見つかったな…」

前髪で顔が隠れているぶちま「ですう〜W」「恥ずかしくて

ななっ！

脳内シチュを楽しんで下さい

〜ぶちます的な何か〜

前髪で顔が隠れているぶちま「ぶあ〜W
「

A「さてこの子の名前をどうしようか？」

A「ん〜？」

前髪で顔が隠れているぶちま「ですう〜？」顔に手を当てて小首を
傾げる

A「うーん。ヤヴァイ、このままでは次週に持ち越しになってしま
う！」「メタ

前髪で顔が隠れているぶちま「ぶあ〜？」顔に手を当てて小首を傾
げる

A「…」「瞑想

前髪で顔が隠れているぶちま「ぶう？」以下略

A「…。」「瞑想

前髪で顔が隠れているぷちま「ぷう〜W」飽きたのかボールでコロコロし始めた

A「よし！？決めた！」

前髪で顔が隠れているぷちま「ぷっ！？」ビツクリ

A「君の名前は『ののか』だ！？」（ドヤ

ののか「ですう〜。「ビクビク

A「あっごめんよ」なでなで

ののか「ぷあぷあ」グスグス

A「ヤヴァイ！？泣き出しそうだ！ え〜と、え〜と…あっそうだ。
「ガサガサ

A「（本屋ちゃんに似ているなら多分本が好きなんだろうな。）「

A「ののか〜。ご本読んで上げるから泣きやんでくれ！」

ののか「ぷあ〜？」

A「よいしょっと」胡座をかいてののかを座らせる

ののか「ぷあ〜W」チヨコン

A「さあ読むぞ。昔々あるところに多彩な武器を扱う一人の弓兵
がいました。〜弓兵は吸血鬼だったのです。「スラスラ

ののか「ぶあゝW」「ドキドキ

ゝキングクリームゾンゝ

A「そうして弓兵は世界を救い幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし。」

ののか「ぶうゝW」「満足気

A「（はあどうにか機嫌が直ったかな？）」「チラッ

ののか「ぶえゝW」「興奮さめやらぬ

A「また今度新しいの読んであげるよ。これからもよろしくなの
のかW」「ツンツン

ののか「ですうW」「ぶにぶにくすぐったげ

『パルナ』

『ゆえち』

『ちさー』

『あしゆなん』

『あやにゃー』

『のか』

六匹が加わった！

はちっ！

脳内シチュを楽しんでね

くぶちます的な何か

バタバタ！

A「うん」ZZZ

バタバタ！！

A「うん」ZZZ

バタバタ！！！！

A「うん」ZZZ

あしゅなん「なのねっ！！」誠綺麗なFボディーアタック

A「ぶげえ！？」見事にクリンヒット

あしゅなん「ね！！」スタツ両手をあげてポーズ

A「ゲホッ…。あしゅなん。起こし方をもう少し優しくしてくれない？ 正直三途の川が見えてヤヴァイ。」瀕死

あしゅなん「ね！」ふんす！？アホの子

A「…まあいいや。ありがと起こしてくれてW さあご飯にしようか？」ナデナデ

あしゅなん「ね、ねW」照れている

A「どっこいしょ。」ボリボリ

ぶちま達「ワーW」カチャカチャ

A「ほらあチミ達。騒がない騒がない。ご飯にするから静かにしなさい。」おさんどん

A「はい。このちゃはコアラのマーチ」

このちゃ「やんW」

A「せちゅなはアジの開き。」

せちゅな「め！」

A「パルナは『生の魚』」

パルナ「ンフツW」ピコピコ

A「ゆえちは『ヨーグルト』」

ゆえち「です…。」ペコリ頭を下げて受け取る

A「ちさーは『油揚げ』だったね。」

ちさー「ぴょん！」ガジツ口にくわえて逃げる

A「そんな奪い去るようには取らなくても…。」グス

A「あしゆなんは『ホットケーキ』三段だぞ〜W」

あしゆなん「なのね〜W」フォークとナイフで準備OK

A「あやにゃんはアツアツの『コロッケ』だったよね？」ホクホク

あやにゃー「ですわ！」お行儀よく正座

A「最後にののかは『マシユマロ』だったよね？」

ののか「です〜W」嬉しさMAX

A「はい。じゃあみんなと一緒に、いただきます！」

このちや「やんやんW」

せちゆな「めん！」

パルナ「ンフツW」

ゆえち「…です…」

ちさー「ぴょん！」

あしゆなん「ねっ!」

あやにゃー「ですわ!」

ののか「です〜W」

A「ハイ。食べて良いよW」

このちゃ「むしやむしや」ガツガツ

せちゆな「むしやむしや」ガツガツ

パルナ「むしやむしや」ガツガツ

ゆえち「むしやむしや」ガツガツ

ちさー「むしやむしや」ガツガツ

あしゆなん「むしやむしや」ガツガツ

あやにゃー「むしやむしや」ガツガツ

ののか「むしやむしや」ガツガツ

A「うんうん。いっぱい食べるよ〜W」ニコニコ

きゅっ！（1）

脳内シチュを楽しんでね！

くぶちます的な何か

パルナ「ン！！」ピロピロ

サラサラ

A「ん？ パルナく？何やってんだ？」（？―？）

パルナ「ンフW」ピロピロ

サラサラ

A「おつ、お絵描きかあ〜W どれどれ、見せてみてよ。」

パルナ「ン！！」ピロピロ

ピラッ

A「うわっ！？うまっ…。 何だよこのクオリティ。 商業誌レベルじゃないか」具体的には荒木飛呂彦先生や原哲夫先生みたいな感じ（独断と偏見ですW）

パルナ「ンフツW」ピロピロ

A「えっ！？パルナってあの有名な大手サークル『インベリウム・セラフイケース落書帝国』の作家さんなの！？」驚愕

パルナ「ンフツW」「ピコピコ」

サラサラ

A「すごい。そんな凄い作家がこんな小動物だったなんて…」

パルナ「ンフツW」「ピコピコ自慢気」

A「（すごい。ペン持つ手がブレて見えないよ…。）」「（^| ^|）」

パルナ「ン！ン！」「ピコピコ何やら訴えている」

A「え？今描いてる新刊が上がったら、一番に見せてくれるって？」

パルナ「ンフフW」「ピコピコ」

A「ありがとパルナ。 良し！今日は奮発して生のサンマを用意してあげようW」

パルナ「ン！ン！」「ピコピコピコピコ！？いつもより多く動いている」

A「（興奮するとあの触角（あほ毛）が凄い動くんだ…。）（じゃあ頑張ってるね！）」「さわさわ」

パルナ「ンフフツW」「ピコピコピコピコ」

やよい「連れてってくださいますう！」

伊織「んー！んー！！」 袋に入れられている。

じゅっ！（２）

脳内シチュを楽しんでね！

くぶちます的な何か

アビス「さて、着いたか。」

やよい「うっうー！」手を挙げて挨拶

伊織「んー！んー！！」袋に入れられている。

A「皆さんお手伝いありがとうございます…あの、その袋の中から聞こえる声は？」

アビス「伊織だ。」

A「いや…伊織だって、何で袋なんか？」；

やよい「伊織ちゃん来るの嫌がってたからやよいが袋に詰めて連れてきたんです！」

アビス「あの捕縛術は見事であった。」賞賛

A「と、とにかく伊織ちゃんを出しましょう。」ガサガサ

伊織「んー！んー！」口にガムテープ、体はロープでぐるぐる巻く

ベリッ

伊織「ぷはあ！？ やよい〜！！アンタねえ毎回毎回いい加減にしなさいよー！！」

やよい「だつてえ〜。伊織ちゃんと一緒に行きたかったのに、伊織ちゃん行かないつて言ったから…。ゴメンネ」俯くやよい一寸涙目…

伊織「うっ！？わ、分かったわよ！！ 今回だけは許してあげるわ
「！」

やよい「〜」なんかに全くなつてなかった

伊織「やよい〜！！ アンタ騙したわね！！」怒髪天を突く

やよい「うっうーW」ヒョイ

アビスの背中に隠れるやよい

伊織「キー！！」地団駄を踏む

A「あの〜そろそろ漁に行きたいんだけど…」

〜それからそれから〜

A「さて今回獲るサンマはただのサンマじゃない！伝説の高級サンマ『ロイヤルグレートキングサンマ』だ！！」ドギヤーン

伊織「何よそのロイヤルグレートキングサンマって！！全然聞いたこと無いわよ！！」

アビス「なんとR G Kサンマを獲るといつのか？」

やよい「うっうー！それってえースゴイ高級魚ですよえー？」

伊織「何でアンタらその魚の事知ってるのよ！！」

アビス「有名だからな。知らなかったのか？」

やよい「常識だうー？」

伊織「アビスはともかく、やよいに常識って言われた…。」ガーン
o r z

やよい「伊織ちゃん酷いうー！」頬を膨らませてプンスカ

A「あの〜そろそろ行かないと、尺の問題が…。」

アビス「メタ発言だな；」

やよい「うっうー」

伊織「ううー。」o r z

アビス「コレは、次回に持ち越しだな…。」

A「ですねえ」

A「アビス」はあ
「」

じゅじゅいちっ！！（3）（前書き）

今回は鳴神 ソラさんの作品のキャラクターとコラボしています。

若干キャラを掴めていないところもありますがご了承ください。

じゅっいちっー!! (3)

脳内シチュを楽しんでね!

くぶちます的な何か

A「やっと着いたよ…:」

アビス「長い道のりだったな…:」

伊織「うー何で私がこんな目に…」びしょびしょ

やよい「うっうー」

A「じゃあ早速ロイヤルグレートキングサンマを捕獲しようか。」
ガサガサ

アビス「そうだな。下手をすると命に関わる。二人共気を引き締めていけ。」真面目

やよい「うっうー!」

伊織「命の危険って何よ!! 聞いてないわよ!」ガー!!

アビス「R G Kサンマは非常に凶暴でな…。なかなか捕獲の困難な生物なんだ。」

伊織「一体どこのトリ」の話よ!..!」

A「話が進まないから行くよ...」

アビス「伊織とやよいは危険があると不味いのでこの二人を付ける。
」スツ

城戸 鮫剣「はじめまして、城戸 鮫剣と申します。」ペコリ

城戸 槌鮫「城戸 槌鮫と申す。よろしく頼む。」こちらもペコリ

アビス「この二人はアイドルを勤める城戸鮫剣と城戸槌鮫だ。二人の護衛に付ける。」

城戸 鮫剣「よろしくお願いいたします。」ニコ

城戸 槌鮫「よろしく頼むぞ二人共。」頼もしげ

やよい「うっうー! よろしくお願いします」手を挙げて挨拶

伊織「てかアンタ達一体いつから居たのよ...? さっきまで居なかったじゃない。」

鮫剣/槌鮫「海の中に」「しれっと

よく見ると二人の体がしつとりと濡れている。服が張り付いて体のラインが...。

A「色っぱいなあ...」

アビス「二人共大丈夫か？」腕を組んで船首に仁王立ち

伊織「ひいー!?」ザッパア

やよい「うっうー！ 船がスゴイゆれてるう！」ザッパア

アビス「流石に厳しい道のりだな…。」

A「大丈夫。もう少しで着くはずだから…?」

伊織「どの口が言ってるのよ！」キー!

城戸 鮫剣「ああ…。揺れが強くて…。」パタン船酔い

城戸 槌鮫「姉者しっかり!?!」

伊織「もうやだ…。 オウチカエリタイ」ガクッ

やよい「伊織ちゃんしっかり!?!」

アビス「見えたぞ。 あそこがGRKサンマが取れるポイントだ

…。」

A「やっと着いたか…!」

到着

A「さて、僕は潜って漁をして来るから、二人は船の上で待機してね！」スチャツゴーグル装備

アビス「俺もともに行つてこよう。アレ相手に一人ではキツいだろう。」カチャアビスセイバーを装備

アビス「鮫剣、槌鮫二人の事頼んだぞ」

鮫剣／槌鮫「お任せ下さい！」

A「さて行きますか。」

アビス「ついてこれるかな…。」

A「貴方こそ、追いつかれないように気を付けて下さい。」

お互いに相手を見やる

A「どつちが先にロイヤルグレートキングサンマを多く捕獲できるか…。」

アビス「いざ尋常に…。」

A／アビス「勝負！！」

バツシャーン

A「うおー!!」バシャバシャクロール

アビス「ハア!」バシャバシャバタフライ

伊織「アンタ達!!目的違えてんじゃないわよ!!」

やよい「たのしそーW やよいも釣りしよう。」チャポン

鮫剣「それでは我々は、何か飲み物を持ってきましょう。」

槌鮫「そうですね姉者。」

立ち上がり船内に消えてゆく二人

それからそれから?

伊織「はあ…暇ね」頬杖をついてため息

やよい「うー全然釣れないうー」チャポン

鮫剣「伊織様、やよい様。お腹は空きませんか?」

槌鮫「儂が捌いた魚じゃ。良かったら食べてくれんかの?」尾頭

付きの船盛り

やよい「わー美味しそう!!」竿を置いて船盛りに近づぐ

伊織「そうね。少しお腹も空いたし、私もただこうかしら。」

やよい「いただきまあす〜W」

やよい「おいしい〜W」ぱくぱく

伊織「本当。新鮮で美味しいわ。」ぱくぱく

鮫剣「あらあらW」

植鮫「気に入って頂けて何よりじゃ。」

伊織「しっかしあの二人、全然帰ってこないわね…。どこまで行ったのかしら…?」ぱくぱく

鮫剣「お二人ならば大丈夫でしょう。アビスさんもいますしよほどのことがない限りは…。」

植鮫「そうじゃの姉者。しかし相手がああRGKサン〜マ相手では少々手こずるかもしれんの。」フム顎に手を添えて思案する

その時海面が盛り上がった。

伊織「?」

やよい「?」

ザッパア

A「穫ったどおおおおー!!」

アビス「穫ったどおおおおー!!」

伊織「うひゃー!?!」クリビツてんぎよう

やよい「うっうー!」\ *・ワ・(/ 両手をあげて驚く

A「ああゴメンゴメン。驚かせちゃったかな?」ザブーン船上に
上がる

伊織「あんた!驚かせるんじゃないわよ!」キー

やよい「ビツクリしたうー」 *・ワ・(
ドキがむねむね

A「ゴメンゴメン。驚かせるつもりじゃなかったんだけど。」

アビス「うむ。」

伊織「はあ…まあいいわ。で?魚は穫れたわけ?」腕を組んで聞
いてくる

A「うん。バッチリW 勝負は僕の勝ちさ!」誇らしげ

伊織「じゃなくて!?! 何でそんな話になるのよ!」RGKサン

A「だって」

伊織「…」苦虫を噛み潰した様な顔

アビス「では帰るとするか…。」「操舵室に向かう」

伊織「やっと帰れる…。」「グツタリ

やよい「うっうー」「*・ワ・」

鮫剣「あのお何だか釣り竿が引いてるんですけど?」

伊織「!」

やよい「!」

A「何だって?」

釣り竿の下に駆け寄る三人。

槌鮫「早く手伝ってくれ! 儂一人じゃ手に負えん!」孤軍奮闘

A「せーの」槌鮫の背中から手を回し手助けに入る密着

槌鮫「あんW」

伊織「あんた!!!どさくさに紛れてどこ触ってんのよ!!!」

A「いや違う!?! 僕は別にやましいことは!」

やよい「いいなあー」羨望

植鮫「すまんが、保たん！助けてくれ！」必死

A「ヤヴァイ！？ みんなでせーの！！」

グイッ

ザバァー

A「釣れた！」ポス

手の中に釣れた生き物が

？「…」ピチピチ

A「何だか新しいぷちまキター！！」ビックリ

じゅじいちっ！！(3)(後書き)

やっぱり他人の作品のキャラクター動かすのは難しいわ。

じゅじゅっ！(1)

脳内シチュを楽しんでね。

くぶちます的な何か

A「イヤー。ロイヤルグレートキングサンくマ美味しかった！あの何ともいえない触感が癖になるな。例えるならヘヴンズミートを菩提樹の葉で包まなかった味に近いな。食感河豚鮫に近かったかな？」満足

A「さて片づけなければならぬ事柄があつたな…。」チラッ

?「…」スイスイ水槽の中

A「新しいぶちまが来たんだよね…。」ハア

?「…」プカプカ

A「しっかし全く喋らないねこの子は？」水槽の中を見る

A「とりあえず名前を付けないと不便だし始まらないよなあ。」ポリポリ

A「そうだねえ。イカのぶちぐるみに涙みたいな模様があるしザジに似てるんだよなあ？」観察観察

？」「ポツ

A「あれ？赤くなつた？ まさかね。さあてこの子の名前はあ…。」

A「…ん〜ん。よし！君の名前は『ザジユ』だ！ よろしくねザジユ」() (ドヤ

ザジユ」…」触手をあげて意思表示

A「喜んでくれて良かったよ。」「ニユニユ

A「さて名前も付けたしあの子たちの様子でも見に行くか？」「クイクイ

A「ん？」「キヨロキヨロ

ゆえち」…です」「チュー

A「どうしたのゆえち？」「ヒョイ持ち上げる

ゆえち」…です」「チュー

A「どうしたのゆえち？ 何か頼みごと？」「

ゆえち」です。」「ピラッ

A「え？チラシ？ コレを見ろって？」「

ゆえち」ですです」「コクコクチュー

A「えー何々？ 『抹茶コーラ すべしやるりみつくすえでいしよん』？ 何コレ、ゆえちコレ欲しいの？」

ゆえち「ですです」コクコク

A「ん〜何々『あの抹茶コーラがすべしやるになつて帰ってきた！ 今度の抹茶コーラは一口で83の味。 限定8万本！ 買うなら今！』」

A「一口で83の味つて…。 限定8万本つて…。 何か色々ツツコミたくなるけど；ゆえちはコレが欲しいんだよね？」

ゆえち「ですです！！」チューチュー

A「いいよ。買ってきてあげる。家で大人しく待ってるんだよ？」
なでなで

ゆえち「です…／／／」ポツ恥ずかしいのか少し顔を逸らして応える
のか「ぶえ〜W」のそのそ本を読んで貰いたいのか本を両手で掲げる

A「あつのか。ごめんよ〜今から買い物行ってくるから、ゆえちと一緒に本を読んで待っててね」ポンポン

のか「ですう〜。」「若干残念そうなかんじ

A「じゃあ真司さんに連絡して誰か来て貰おうか？ その方が俺も安心だし。」

ののか「ぷあ〜W」嬉しげ

ゆえち「です」「チューー

A「じゃあ二人共（？）大人しく留守番してるんだよ？」なでなで

ののか「ですう〜。」「嬉しげ

ゆえち「…です」「チューーチューー

A「じゃあね！」「シユタツ！！

『ザジユ』が加わった

じゅじゅんっ！(2) (前書き)

今回も鳴神 ソラさんのキャラが出張してくれています！

インペラーの扱いが何だかなあと思うかも知れませんがご了承ください。

鳴神 ソラ先生スイマセンm(´`´)m

じゅじゅんっ！(2)

くぶちます的な何か

インペラー「ふうここがAの家か？ やっと着いたぜ。」

リュウガ「ああ。」

インペラー「ひとまず中にはいるか？」ガチャ

あしゆなん「ねー！！」バタバタ

あしゆなんが勢いよく飛び出してきた。

インペラー「フゲオ！？」ゴチーン

股間にヘッドバッドをモロに受ける。

グニユツ

あしゆなん「ね？」サスサス

頭部の異様な感触（グニユツとした何か）に頭を触るあしゆなん。
不快感に顔を顰める。

インペラー「……………！？」声にならない叫び

ドサッ！

膝から崩れ落ち前のめりに倒れるインペラー

あしゆなん「のねー？」パシパシ

突然倒れたインペラーに分からず頭をパシパシ叩くあしゆなん。

インペラー「…！」プルプル

小刻みに震えているインペラー。

リュウガ「大丈夫かインペラー？」トントントン

インペラー近づき腰の辺りを叩いてあげるリュウガ。

インペラー「あ、ああ…。ダイジョバナイ…。」ピクピク

リュウガ「早速予想が当たったか…。」グイッ

未だにうなだれているインペラーを肩に担ぎ上げ部屋の中に入っていった。

~~~~~

インペラー「…。」ピリピリ

リュウガ「まだ痛むか？」

インペラー「いや大分良くなった。」ヒリヒリ

リュウガ「災難だったな…。」

インペラー「まさか、着いて早々こんな目に遭うとは思わなかった。

」

リュウガ「確かに予想外だったな…。」

インペラー「ああ…。しかし、これで終わらない気がする。何だかフラグ臭いやな予感が…。」ハア

リュウガ「宿命だな。」

インペラー「酷い！ そんな言葉で片づけるな！」グワッ

両腕を上げて講義。

リュウガ「そんな事よりぶちま達の様子を見なければ。」サッ

サッと立ち上がり部屋を出ていくリュウガ。

インペラー「俺の存在って…。」ホロリ

哀れなインペラーであった。

~~~~~

リュウガ「この部屋だろうか？」ガチャ

ザジュ「…」プカプカ

リュウガ「…。」ジー

ザジュ「…」プカプカ

リュウガ「…。」ジー

ザジュ「…」プカプカ

リュウガ「フウ」ガチャ

何事もなかったかのようにドアを閉めるリュウガ。

~~~~~

インペラー「さて俺もチビ達の様子を見なくてはな…。」「ヒリヒリ

腰を叩きながら歩くインペラー。

インペラー「この部屋は？」ガチャ

あやにゃん「あら？」

インペラー「早速一匹発見。 えーっと？このぶちまの名前はあや

にゃんか。「ペラペラ

ぷちま取扱い説明書と書かれたノートをみるインペラー。

インペラー「何々？あやにゃんはおままごとが好きと。」

あやにゃん「ですわ！」カチャカチャ

おままごとの用意をし始めるあやにゃん。

インペラー「これは俺も参加させられるパターンだな。」

インペラーの前に用意されるのは空のお茶碗に箸それと皿に乗った  
タワシであった。

あやにゃん「ですわ！」食べるの意思表示

インペラー「あーハイハイ。いただきます。」カチャカチャ

インペラー「むしゃむしゃ、あー美味しいなあ。」食べたふり

あやにゃん「ですわ！」

インペラー「え？ちゃんと食べるって？ むしゃむしゃばくばく！

あー美味しいなあ！」

あやにゃん「ですわ！！」

インペラー「えっ？本当に食べてないじゃないかって？ いや食えないだろ実際。」

あやちゃん」ですわー!ー!」

インペラー」いやっ」

あやちゃん」ですわー!ー!」  
「ビシッ

インペラー」だからっ!ー!」

あやちゃん」ですわー!ー!」  
「ビシッ

インペラー」あのっ!ー!」

あやちゃん」ですわー!ー!」  
「ビシッ!ー!

インペラー」……………。」  
カサッ

皿上のタワシを手にとって見つめるインペラー。

インペラー」……………。」

パクッ

その日のタワシは、何だかちょっぴり切ない味がした…。

~~~~~

続く！

じゅよんっ！（3）

「ぶちます的な何か」

リュウガの場合

リュウガ「次はこの部屋だな。」ガチャ

パルナ「ピャー！」カリカラ

リュウガ「このぶちまは確かパルナだったか？」入室

パルナ「ンフツW」ピコピコ

リュウガ「何？原稿のチェックをしてくれだど？」

パルナ「ンフツW」ピコピコ

リュウガ「大事な原稿だろ。部外者の俺が見ても良いのか？」

パルナ「ン！ン！」ピコピコ

パンパンと自分の隣を叩き座るように促す。

リュウガ「あまり良いアドバイスはできないと思うがそれでも良ければ見よう。」スッ

パルナ「ン！」「ピコピコ

原稿を渡しリュウガの意見を待つパルナ。

リュウガ「ふむふむ。」

その原稿をじっくりと読むリュウガ。

リュウガ「このシーンはもうちょっとこうした方が良いと思うぞ？」

パルナ「ンフツW」満足気

満足のいくアドバイスが貰えたのか凄い喜んでいる。

リュウガ「満足のいくアドバイスが出来たかは分からぬが喜んで貰えたのなら何よりだ。」なでなで

パルナ「ンーW」ピコピコ

リュウガに頭をなでられ嬉しそうに触角を動かすパルナ。

リュウガ「ではな。作業頑張れよ。」

パルナ「ンーW」ピコピコピコピコ

パルナは触角と手をピコピコ動かしながらリュウガを見送った。

~~~~~

インペラー「ああひどい目にあった…。」トボトボ

インペラー「ん？次はこの部屋かな。」ガチャ

ちさー「ぴょん！」クルッ

パシャパシャ

カメラの前で一回転しビシッとポーズを取るちさー。

インペラー「…!？」

ちさー「ぴ!？」ビクッ

見られたことに気づきびっくりするちさー。

インペラー「いや、すまん！ 覗くつもりは！」

ちさー「ぴ…。」プルプル

インペラー「あの、だから!？」

ちさー「ぴゃー!…」

顔を真っ赤にしたちさーは側にあった物を手当たり次第に投げはじめた。

インペラー「ちょっ!？おま、危ない！」ヒョイッヒョイッ

飛んでくる物をかわすインペラー。流石はライダー。

ちさー「ぴー!!!」ポイ!ポイ!

しかし次第に物が当たり始めるインペラー。

インペラー「あだっ! イテッ! ブゲッ!」カン!コン!ベシ!

ちさー「びょーん!!!」ゴゴゴ

最後には自分の身長より大きなパソコンのディスプレイを持ち上げるちさー

インペラー「ちょ!待て、流石にそれは不味いつて!?!」アセアセ

ちさー「びえー!!」ドッセイ!

インペラー「ウギャー!!!」ズシーン!

ちさー「ぴゅん!!」プンスカ

頬を膨らませドアを閉めるちさー。

インペラー「な、なんで俺ばかり…。」ガクッ

~~~~~

続く!

じゅじゅっ！(4)

「ぷちます的な何か」

ブーン

王蛇「ふうここがAの家か？」

タイガ「何か同じ入り方だね」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー！」

タイガ「アレ！？こあみとこまみ着いて来ちゃったの。」

こあみとこまみを見てびっくりするタイガ。

王蛇「その様だな…。全く気が付かなかった。」フウ

こあみとこまみの行動に慣れているのか冷静な王蛇。

？「ニヒヒW」ブーン

？「くすくすW」ブーン

黒い影が飛び去っていった。

タイガ「ん？王蛇何か言った？」

王蛇「いや何も。」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー！」

タイガ「おかしいなあ？何か笑い声みたいなのが聞こえたんだけど……。」

首をひねり少し納得がいかなげなタイガ。

王蛇「オイ。そろそろ行くぞ。」スタスタ

王蛇タイガに声をかけると一人で玄関まで向かってしまった。

こあみ「とかー」

こまみ「ちー！」

タイガ「あつ王蛇待てよ！」

~~~~~

リュウガ「ふむ。インペラーがこの通りでな応援感謝する。」

インペラー「ウウウ……。む、無理」ボロボロ

ガクツと首を下ろし半分ほど魂が抜けかけた状態のインペラー。

こあみ「とかー」ペシペシ

こまみ「ちー！」ペシペシ

そんなインペラーをペシペシ叩くこあみとこまみ。

タイガ「さて、残りのぶちまは後何匹いるのかな？」ペラペラ

リユウガ「このちゃ、せちゆな、ゆえち、ののか、あしゆなんの五匹だ。」

あしゆなんの名前を言った瞬間インペラーがビクリと震えた。

王蛇「残り五匹か。そこのアホは戦力外だからこの三人でみるわけか？」

インペラー「酷いつ!?!」

王蛇の容赦ない言動にインペラーは言葉を発する。

タイガ「すると、一人で二匹みることになりそうだね。」

このちゃとせちゆな、ゆえちとののかは一緒にいることが多い。

王蛇「とりあえず行ってみるか？ 誰に何が当たるかは分からないからな。」

リュウガ「そうだな。 とりあえず行ってみるか。」

タイガ「そうだね。 じゃあ早速。」

三人は各々歩き出しまだ見ぬぶちまを探しに向かった。

インペラー「俺は無視なのね…（涙）」

こあみ「とかー？」

こまみ「ちー？」

インペラーの眩きに不思議そうなこあみとこまみ。

物陰

？「ニヒヒW」

？「くすくすW」

その様子を物陰から眺める黒い影。

~~~~~


王蛇「さて、どこにいるのか？」スタスタ

王蛇「この家は縁側もあるのか？」

興味深げに縁側を覗く王蛇。

このちゃ「ねーW」せちゆなに問いかけるように鳴く

せちゆな「ねーW」このちゃの問いに応えるように鳴く

そこには縁側でひなたぼっこしながらソフトクリームを頬張るこのちゃとせちゆながいた。

王蛇「こんな場所にいたのか。」スタスタ

このちゃ「やー？」

せちゆな「めん！」

見知らぬ人物に警戒するせちゆな。王蛇の前にこのちゃを庇うように立ちはだかる。

王蛇「ほお。なかなかの殺気だな…。そうか、お前はただの1匹のぶちまの前に闘うものなんだな。」スチャ

ベノサーベルを構える王蛇。このちゃは『ゆうなぎ』と書かれた竹刀を構える。

お互いの構えに隙はない。

そして戦いの火蓋が切って落とされ…

このちゃ「やん！」

無かった。

このちゃの一声にせちゆなは慌てだし王蛇に向かい頭を下げた。

王蛇「いや気にするな。コツチも大人気なかった。」

お互いに謝り、王蛇は縁側に腰を下ろした。

王蛇「おい。顔中ベタベタじゃないか。こつちに来い、拭いてやる。」

このちゃ「やん！」ベッタベタ

せちゆな「めん！」ベッタベタ

王蛇「コレで良し。」「フキフキ

このちゃ「む〜」「コクリコクリ

せちゆな「む〜」「コクリコクリ

縁側がぼかぼかしていたためか王蛇の胡座の上でうつらうつらし始める二匹。

王蛇「寝たければ寝ている。 Aが帰ってきたら起こしてやる。」

このちゃ「やん…」 Z Z Z

せちゆな「めん…」 Z Z Z

寝息を立て始める二匹。

王蛇「フッ」

その様子を微笑ましげに眺める王蛇。

その空間には、ただ穏やかな時間だけが漂っていた。

~~~~~

続く！

じゅじゅくっ！(5)

くぶちます的な何か

タイガ「さて僕の相手はどこにいるのかな？」スタスタ

タイガが歩いているとある一室の扉を発見した。

タイガ「ここに何か居そうだな…。」ガチャッ

ドアノブに手をかけゆっくりと回す。扉が開きソツと中を覗くとソコにいたのは…

ザジュ「…」プカプカ

タイガ「…」

ザジュ「…」プカプカ

タイガ「…」ガチャッ

タイガ「さて違う部屋を探すか。」スタスタ

ザジュ「…イカはイカす」プカプカ

~~~~~

リュウガ「ん…この部屋は。」

まだ見ぬぷちまを探していたリュウガは一つの部屋の前で立ち止まった。

リュウガ「…。」

ガチャッ

リュウガは無言で扉を開けた。

ののか「ぷう〜W」楽しげに本を読んでいる

ゆえち「です…」「チューー

扉の向こうには二匹のぷちまがいました。 ジブリっぽく

リュウガ「ののかとゆえち、ここにいたのか。」

ののか「ぷっ!?!」「ビクッ

リュウガの雰囲気は若干ビクつくのか。

ゆえち「です…」「スッ

ののかを庇うように前へ出るゆえち。

その手には二冊の分厚い辞典らしき本が握られている。

リュウガ「落ち着け…。驚かせてすまなかったな。飼い主のAが不在なので様子をみにきたのだ。」

冷静に状況を説明し二匹を安心させた。

ゆえちは頭の回転が良いのか説明を聞き両手に持った本を下ろした。

リュウガ「恐がらせてすまなかったな…。」サワサワ

ののかの前に膝き優しく頭を撫でるリュウガ。

ののか「ぶあく！」「テレテレ

恥ずかしいのか顔を赤らめるののか。

ふとリュウガはののかの持っている本に視線を移す。

リュウガ「お前たちだけで本を読んでいたのか？」

ののか「ぶう」「コクリ

ゆえち「です…」「チューー

リュウガ「そうか…。怖がらせたお礼に俺が本を読んでやろうか？」

ののか「ぶあく！」「うれしげ

ゆえち「です…」チユー

リュウガ「それじゃあ読むぞ。それは戦いを止めようとした一人の孤独な龍騎士の物語…」スラスラ

二匹はリュウガの胡座の上でワクワクしながらリュウガの朗読に聞き入った。

~~~~~

インペラー「はあ。 やつとダメージが回復したぜ…。」スタスタ

こあみ「とかー」頭の上

こまみ「ちー！」だっこ

インペラーは先ほどのダメージから復活 し、こあみとこまみの二匹と共にぶちまを探さべく歩いていった。

インペラー「さて、ぶち達は一体どこにいるのだろうか？」

辺りを見渡すインペラー。

？「ニヒヒW」

？「くすくすW」

すると物陰から何者かの鳴き声が聞こえてきた。

インペラー「ん？あの曲がり角から鳴き声が…。ふちまか？」

インペラーは鳴き声のする曲がり角に歩き出したその時

グイツ！？

インペラー「のわっ！？」

インペラーは足元に張られていたごく薄のピアノ線に気づかず足が引っかけたしまい、前のめりに倒れてしまった。

インペラー「グエツ！？」ピタン！！

腹から倒れ、こまみを抱えていた為庇った結果顎を強打したインペラー。

頭に乗っていたこあみは倒れた勢いのままぐるぐると回転し投げ出されたら。

こあみ「とかー！」「くるくる

するとこあみは天井に吊り下げられていた紐に掴まった。

ギリギリ！



紐はこあみの重さで下にさがり天井がパカッと開いた。

ガラガラ!!

開いた天井からは何故か粟が大量に降ってきた。 季節です

インペラー「イタ!イタ!」チクチク

そして最後にDXマツコ人形Lサイズが落下。

インペラー「ブゲツ!?!」

哀れインペラーもの見事にペッチャンコ。

?「ニヒヒW」

?「くすくすW」

二匹の謎の鳴き声はブーンと言う羽音と共に遠ざかっていった。

~~~~~

続く!

じゅっなっ！(6)(前書き)

無理矢理ですがしめました。

あとがきに活動報告と同じアンケートありますので良ければどうぞ。

じゅっとなっ！(6)

くぶちます的ななにか

リュウガ「龍騎士は友に思いを託しその生涯に幕を閉じました。」

ののか「クーZZZZ」スヤスヤ

ゆえち「ですーZZZZ」スヤスヤ

リュウガ「寝てしまったか…。」パタン

本を閉じ膝の上で眠っている二匹をゆっくりと降ろし寝かした。

リュウガ「先程から外が騒がしいな…。 大方インペラーが何か災難にみまわれているのだが、少し外を見てくるか…。」

リュウガは静かに立ち上がり物音をたてないように部屋を後にした。

~~~~~

インペラー「うう、散々な目に遭った。」ボロボロ

謎の声の畏にハマリ悲惨な目にあっていたインペラーはこあみとこ

まみを一旦部屋に戻しリュウガ達と合流すべく移動をしていた。

インペラー「とりあえずリュウガ達に会わなきゃ。何者かがこの家の中に隠れている事を伝えなければ…。」

インペラーは周りを注意しながら進んでいくが

カチツ

インペラー「えっ!?!」

床の一部がスイッチとなっていたのか床が沈みカチカチとどこからか音がなり始めた。

インペラー「今度はいったい!」

焦るインペラー。すると突然床から途轍もない威力の電気がインペラーを襲った。

インペラー「ホギヤー!!」バチバチ

骨が透ける程の電圧に悲鳴を上げるインペラー。

ギャグマンガみたいである。

インペラー「アビー!?!」

ようやく放電が止まり電撃から解放されたインペラー。

ブスブスと真つ黒に焦げており体の至る所から煙がたっている。

インペラー「き、効く〜。」「ビリビリ

インペラーは身体をヒクつかせながら気を失った。

~~~~~

タイガ「先程から騒がしいな。まあ大方インペラーが災難にみまわれているんだろうけど。」

タイガの冷静な読みが鋭く的を得ているとちょうどリュウガと鉢合わせをした。

リュウガ「タイガ、この騒がしさは…。」

タイガ「ああ多分インペラーだな…。」

二人は顔を見合わせどちらとも無くため息をつく。

リュウガ「どういう星の下に生まれたんだ奴は…。」

タイガ「仕方ないでしょ。宇宙意思がそうさせるんだから。」

タイガの言葉に内心納得するリュウガ。二人はインペラーを探すために歩き出した。

~~~~~

A「ただいまあ！！ 久々の登場だあ！！」ガチャツ

買い物から帰ってきたA。手には、ゆえちに頼まれた抹茶コーラス  
ペしゃるりみつくすえでいしょんが握られていた。

A「いや〜ゆうに四話くらい出なかつたくらいの遠さだったね。」

抹茶コーラスREを冷蔵庫に仕舞うべく台所に向かうA。

?「ニヒヒW」

?「くすくすW」

A「ん？今の声は…?」

ふいに聞いたことのない鳴き声が聞こえ、Aは謎の音が聞こえた方  
へ歩を進めた。

A「誰かいるのかい？」

A「あれ？あそこに転がっているのはインペラーさんじゃないか？」

Aの覗いた前方には真っ黒に焦げたインペラーが倒れていた。

A「何でまたこんなに立派に焦げてるのかね？」

不思議そうにインペラーに近づいて行くA。

そこには黒こげになったインペラーとそのインペラーを覗き込む二匹の双子の生物がいた。

A「えっ！？新しいぶちま？」

Aの声に反応し二匹のぶちまがAの方へと振り向いた。

？「にゃっ！！」

？「みゅっ！！」

Aに気付いた二匹のぶちまは驚いて背中を羽を羽ばたかせ急いで飛び立った。

A「な、何だったんだ？」

キョトンとしたAは思い出したかのようにインペラーを空いている部屋へと運び出した。

~~~~~

こあみ「とかー」

こまみ「ちー！！」

ところ変わってこちらはちびっ子ツインズのいる部屋。

こあみとこまみはインペラーにここで待つように言われ、珍しく言われたとおりに部屋で待っていた。

ブーン

? 「ニヒヒW」

? 「くすくす」

大人しく遊んでいた二匹の前に、ミツバチの被り物みたいな姿の二匹のぷちまが現れた。

こあみ「とかー?」

こまみ「ちー?」

突然現れた二匹のぷちまにこあみとこまみは首を傾げる。

? 「たー!」 飛んだまま手を挙げて挨拶

? 「みーW」 同じ挨拶

二匹のぷちまはこあみとこまみに挨拶をするとそのまま床に降りた。

? 「たー!」

? 「みーW」

二組のぷち達は何かを感じ取ったのかすぐに仲良くなり一緒に遊べはじめた。

~~~~~

リュウガ達と遭遇したAは謎のぷちまを探すべく家の中を搜索していた。

A「しかしいつの間にあんなぷちまが入り込んだんだか？」

リュウガ「確かにな。俺達が来たときにはいなかったと思うが。」

タイガ「(もしかしてあの時間こえた声は…;)」

王蛇「…。」

四人は次々に部屋を見て回る。

リュウガ「ここが最後か…。」

たどり着いたのは最後の部屋。

タイガ「開けてみようか。」ガチャッ

中を見てみるとソコには…。

タイガ「うわあ…。」

A「げっ!?!?」

リュウガ「ウム。」

王蛇「…。」

壁一面クレヨンで落書きされ、床には出した物がグチャグチャに散乱してた。

タイガ「酷いなこりゃ?」

A「なんてこった…。」

リュウガ「ん、あそこにいるのは…。」

王蛇「こあみとこまみに、例のぷちまか?」

リュウガと王蛇の目線の先には遊び疲れて眠ってしまったのかこあみとこまみに、双子のぷちまが一緒になって横になり寝息をたてていた。

タイガ「幸せそうに眠っているね?」

リュウガ「楽しかったんだろ。」

A「コレを見たら怒れないなあ…。」

王蛇「…ああ。」

四人はしばし四匹のその光景を眺めていた。

しばらくたってリュウガ達はこあみとこまみを連れて帰った。

A「はてさて、今日からまた新しい家族が増えるわけか。」

二匹をみて言うA

A「明日からよろしくなW」ツンツン

双子の頬をつつきながらそうソツとAは呟いた。

部屋の惨状を全力で無視しながら…；

~~~~~

とある一室。

その部屋には忘れ去られたインペラーが未だに気絶していた。

？「あらー？」「こたぶくん

そんな一室に迷い込んだ一匹の小さな生き物。

トトトト歩いているとどこからともなく大きな音ぎ鳴った。

フビュン

インペラーに近づいていた小さな生き物は、インペラー共々どこへともなく消えていった。

じゅっななっ！（6）（後書き）

ぷち姫無双（恋姫無双）

魔法少女ぷちカルなのは（魔法少女リリカルなのは）

ぷちキュアオールスターズ（プリキュアオールスターズ）

あえて読んでみたいとしたら？

じゅっはちっ！(1)

くぶちます的な何か

A「さて思いも寄らないタイミングで増えた新しい家族の名前を考
えなきゃね…？」

？「たー！」

？「みー！」

A「ネギま！？の双子姉妹に似てるなあ。ん？」悩むA

A「よし！ ツインテールの方が『ちーか』とシニヨンの方が『ち
みか』だ。」(ドヤ

ちーか「ニヒヒW」

ちみか「くすくすW」

A「気に入ってくれたみたいだねW これからもよろしく二人共
？」

ちーか「たー！」

ちみか「みーW」

嬉しいのか部屋を飛び回る二匹。

A「ただし、イタズラは程々にね？」チラッ

Aが見た先にはグチャグチャにされた一室が目に入った。

ちーか「たー？」

ちみか「みー？」

あまり分かってないのか首を傾げるちーかとちみか。

A「…うん。まあいいや。元気なことは良いことだからね。」

そんな二匹を見たAは諦めて二匹の頭を撫でると散らかった部屋をかたすために出て行った。

ちーか「ニヒヒW」

ちみか「くすくすW」

Aが出て行ったのを確認した二匹はイタズラめいた笑いをし始めた。二匹はAの言ったことを理解していたがワザと分からない振りをしていたのである。

強かな子達であった。

~~~~~

A「はぁ疲れた。」クタクタ

やっとの事で部屋を片づけたA。

A「全く、あの二匹には困ったものだな。」

そう言ったAの顔には疲れとまた違った感情が浮かんでいた。

A「まあ可愛いから許しちゃうんだけどね」

ニコニコしながら歩いていると、ふと目の前にちさーが歩いているのが目に入った。

A「あれ？ちさーどうしたの？」

ちさー「ぴょん！」もじもじ

尻尾を揺らしながらもじもじして立っている。

A「え？新しい衣装を作りたいから何か布はないかった？」

ちさー「ぴょん！」

A「んゝ布かぁ。ちょっと探してみるよ。ちょっと待っててね？」

ちさー「ぴょん！」



A「えっ？自分で見てみたいって？」

ちさー「ぴよん！ぴよん！」フサフサ

尻尾を揺らしながら意思表示をするちさー。

A「よし。じゃあ一緒に探そうか！」

ちさー「ぴよん！」「フサフサ

布と一緒に探すことになったAとちさー。

Aはちさーを抱き上げると布が有るであろう部屋へと歩みを進めるのであった。

~~~~~

続く

じゅじぎゅっ！(2)(前書き)

ちよつと無理矢理すぎたかな？

じゅじゅぎゅっ！（2）

くぶちます的な何かく

A「んくなかなか無いなあ」ガサゴソ

ちさー「ぴゅー」しなしな

力なく垂れるちさーの尻尾。

二人（？）は今布を探すべく、家の押し入れの中を探索していた。

A「んくもうちよつと奥を見てみようか？」

ちさー「ぴょん！！」

二人は更に奥を探索するべく押し入れの奥へと進んでいった。

A「おーあつたあつた！」ガサガサ

Aが押し入れの奥から引つ張り出したのは古い箱だった。

A「ふう！」ブワッ

箱の蓋に積もっていた埃をふうつと吹いて飛ばすA

A「ちさーあつたよ。昔婆ちゃんが着てた着物だよ。もう着れな

いし、ちさーが好きに使ってくれて良いからね。」

ちさー「ぴょん！ぴょん！」フサフサ

よほど嬉しかったのかこれでもかと尻尾を振り喜んでるちさー。

A「ふふ。じゃあ服作り頑張ってるねW 応援してるよ。」なでなで

ちさー「ぴ、ぴょー！」フサフサ

撫でられて顔を赤くするちさー。照れたのか箱を抱えたまま走り去ってしまった。

A「こけるなよー！」

ちさー「ぴよっ!?!」「ズッコ

A「言わんこつちゃない！」

クルクル

ちさー「ぴょん!?!」「シュタツ!!」

ちさーはつまづき三回転捻りをした。

A「凄いなオイ!?!」「(。(;)」

~~~~~

ちさー「…」チクチク

ちさー「…」チクチク

ちさー「ぴよー」ふう

一息つき、少し休憩をするちさー。

ちさー「ぴよ、ぴよ」チクチク

ちさーは何かを思い出し、再び気合いを入れ縫うことに集中し始めた。

~~~~~

A「ふう。押し入れの片づけも終わったし何するかなあ？」

押し入れの片づけをし終わったAは空いた時間をどうするか考えていた。

ちさー「ぴよん！」

A「あれちさー？ どったの？」

ちさー「ぴよ！ぴよ！」フサフサ

A「え？ちよつと来てくれって？」

ちさー「ぴよん！」

A「いいよ。どこ行くの？」

ちさー「ぴよん！」くいくい

ズボンの端を引っ張り方向を指示する。

A「じゃあ行こうかW」ヒョイッ

ちさー「ぴよんW」

Aはちさーを抱えちさーが示す部屋まで歩いていった。

~~~~~

ちさーに促され連れて行かれたのはちさーの部屋だった。

そこで始まった物は…。

ピカー！

ジャンジャカジャンジャカ

ちさー「ぴょんW」クルッ

ちさーによる、ファッションショーだった。

セーラー服を纏ったちさーがぴこぴこ歩きながらAの前まで来ると、くるりと反転しもと来た道に戻っていく。

次にメイド服

次に体操服<sup>ブルマ</sup>

次にスクール水着

と次々に衣装を変えて出てくる。

もはやコスプレショーである。

そして最後に出てきた衣装は…。

A「あつその衣装。」

ちさー「ぴょん!!」フサフサ

最後にちさーが来て出てきたのはAがちさーにあげた着物の布を使った服であった。

A「コレを見せる為にショーを開いてくれたのかい？」

ちさー「ぴょん！」

A「そうか、ありがとうW」

ちさーの頭を優しく撫でるA。しかしペシッと払いのけるちさー。

ちさー「ぴょん！」

頬を赤らめそっぽを向くちさー。

A「（ほんとツンデレだなあ…）」

A「ちさーもつとファッションショー見せてくれるかい？」

ちさー「ぴょん！」

この日ちさーとの距離が近づいたような気がした。

~~~~~

続く

にじゅっ！（前書き）

急いで書き上げたので何かグチャグチャW

大目に見てくださいm（| |）m

後書きに…

じゅっ！

くぶちます的な何か

あしゅなん「ねー！」ギヤース

あやにゃん「ですわ！」ギヤース

A「はあ。またやつてるよ…。」ハア

Aは毎度の光景に頭を悩ませていた。

あしゅなん「シャー！」ポカスカポカスカ

あやにゃん「にゃー！！」ポカスカポカスカ

この二匹事ある毎に喧嘩をするのである。

A「ごら！ 喧嘩何て止めなさい！」

掴み合いの喧嘩をやめさせるべく、Aは二匹の襟首(?)を掴み上げ両者を引き剥がした。

あしゅなん「シャー！」ジタバタジタバタ

あやにゃん「にゃー!」ジタバタジタバタ

A「ほら暴れないの。全く何でチミ達は、そう毎度毎度喧嘩するのかね?」

呆れ顔で二匹に話すA

あしゆなん「ね!ね!」

A「え?あやにゃんがあしゆなんのおやつを食べたって?」あしゆなんの方を向く

あしゆなん「ね!」

あやにゃん「にゃ!」

A「え?違うって? 先にあしゆなんが、あやにゃんのおやつを食べたの?」あやにゃんの方を向く

あやにゃん「ですわ!」ブンブン

A「本当あしゆなん?」

あしゆなん「ね...」ピタ

先程まで暴れていたあしゆなんがピタリと静かになった。

あしゆなんを床に降ろし、話を聞くA。

A「本当なんだね?」

あしゆなん「ね！ね！」

A「駄目じゃないかあしゆなん。他人のモノを勝手に食べて自分の取られたら手を出すなんて？」

あしゆなん「ね……」

A「ほらあやにゃんにちゃんと謝りなさいあしゆなん。」

あしゆなんを叱るA。あしゆなんはぶるぶると震え出す。

あしゆなん「ね、ね、ねー！」ダッ

A「あ、あしゆなんどこ行くんだ!？」

あやにゃん「にゃー！」

あしゆなんは急に立ち上がると部屋を飛び出し外に出て行ってしまった。

A「あしゆなん！」

急いで追いかけるが既に外には見あたらなく、見失ってしまった。

A「マズいな……。あやにゃん、あしゆなんを見つけに行ってくるから、あしゆなんが戻ってくるかもしれないから家に来てくれないか？」

あやにゃん「にゃー！」

A「頼むよ!?!」ダッ

Aはあやちゃんに口早に言うとその場から駆け出した。

あやちゃん「にゃ…。」

あやちゃんは何かを決意しAの後を追いかけるように駆け出した。

~~~~~

あしゆなん「ねー」

あしゆなんはトボトボとひとりで歩いてきた。勢いで飛び出してしまったが自分には行く宛がなく途方に暮れているのだった。

あしゆなん「ねー…」トボトボ

しばらく歩いていると目の前に公園があったのであしゆなんは公園に行くことにしたのだ。

あしゆなん「ねー」キコキコ

ブランコに座り落ち込むあしゆなん。

辺りは暗くなりつつすら暗くなり始めていた。

ワンワン！

遠くでは犬の遠吠えが聞こえてくる。

あしゆなん「ね！？」「ビクッ

遠吠えに驚き声を上げるあしゆなん。

ガサガサ

するとあしゆなんの後ろにある茂みから何かの物音が聞こえた。

あしゆなん「ね！」「ビクッ

ガサガサ

あしゆなん「ね！」「グス

あしゆなんは恐怖のためか目尻大粒の涙を既に溜めており決壊寸前までになっていた。

ガサガサ

バツ!?

あしゆなん「ねー!？」

茂みから現れたのは…。

あやにゃん「ですわ！」

先程まであしゆなんと喧嘩をしていたあやにゃんが飛び出してきた。

あしゆなん「ねーねー」グズグズ

よほど怖かったのかあしゆなんは頭を抱え震えて泣いている。

あやにゃん「にゃー！」

あやにゃんは自分が驚かせてしまったと悟り泣き止まずようにあしゆなんの背中をポンポンと叩いた。

あしゆなん「ねー」ズズ

鼻を垂らし振り向くあしゆなん。

あやにゃん「にゃー！」ポンポン

出てきたのがあやにゃんと分かり安堵するあしゆなん。

あやにゃん「にゃー!にゃー!」

あしゆなんに帰ろうと促すあやにゃん。

あしゆなんは素直に頷き一緒に帰ることを了承した。

あしゆなんの手を引き歩き出そうとしたその時二匹の前に野犬が現れた。

野犬「ヴウー。 ワン！」

あしゆなん「ね!？」

あやにゃん「にゃ!！」

ビックリする二匹。野犬の唸りに二匹の体は震え出す。

野犬「ヴウー。 ワンワン!！」

野犬は更に威嚇する。

あしゆなん「ねー!」「ぷるぷる

震えるあしゆなんを庇うようにあやにゃんが前へと躍り出た。

あやにゃん「ですわ!！」バツ!

そんなあやにゃんを見ていた野犬はあやにゃんに向かって飛びかかった。

あしゆなん「ねー!？」



あやちゃん「わ…」

覚悟をするあやちゃん。しかしその時。

A「うちの子に、何さらすんじゃー!!」

二匹の窮地を救ったのはあしゆなんを探しに行っていたAであった。

途中偶然見つけたやよに頼み居場所を探してもらったのであった。

A「覚悟しろよワン公…。ドラルララララララララララララララ！」

クレイジーでダイヤモンドな連打を繰り出し見事野犬を撃退したA。

二匹はAに縋りつき泣き出してしまった。

Aは優しく二匹を包み込み声をかけた。

A「二人が無事で良かった。」

A「ごめんよ。あしゆなん、あやちゃん。僕が怒ったりしたから君をこんな怖い目にあわせてしまったね。」

あしゆなん「ね!ね!」フルフル

あやちゃん「ですわ」

頭をふり否定するあしゆなん。

A「それでもごめんよ。 さあ帰ろっか。 帰ってご飯を食べようか  
W」

あしゆなん「ね！」

あやちゃん「ですわー！」

二匹は元気に返事をし三人(?)は家に帰っていった。

~~~~~

A「あしゆなん。 もう喧嘩しちゃ駄目だからね？」

あしゆなん「ね！」

A「うん、 良い返事だW」

あしゆなん「ね！」

~~~~~

〜後日〜

あしゆなん「シャー！」ポカスカポカスカ

あやちゃん「にゃー！」ポカスカポカスカ

A「やっぱりこうなるよね。」

そんなに簡単には直らなかった。

A「トホホ。」

ガシャーン！

A「ごらー！！あしゅなん！！！」

~~~~~

続く！

にじゅっ！（後書き）

ぷちまも二十話に突入したので外伝書きます！

ぷち姫無双

魔法少女ぷちカルなのは

ぷちキュアオールスターズ

どれか選んでね！

にじゅういちっ！(がいでん)(前書き)

あまり気にせず読んでくださいm()m

クオリティはまあ気にしないでくださいm()m

「じゅじゅいっ！(がいでん)」

今回は本編とは関係ないと思います。多分…。

くぶちます的な何か

俺は今非常に困っていた。それは目が覚めたら全く知らない場所に居たからだ。

A「ここどこ？」キョロキョロ

辺りを見回すA。すると背後から声がかげられた。

王蛇「どうやらここは異世界のような…。」「紫の部分をピンクに塗り替えられた姿

A「もう、何も言つまい…。」

こあみ「とかー！」

こまみ「ちー」

A「こあみとこまみまでいるんだ。」

A「と言っか王蛇さん。どうして王蛇さんやおチビ達までいるんですか？」

王蛇「作者の意向だ。」フキフキ

A「それを言っちゃあアカンでしょう。」

王蛇「こあみとこまみと歩いていたら突然灰色のオーロラに呑み込まれてな……。気がついたらここにいたんだ。」

王蛇は自分がここにくる経緯を話した。

A「へー不思議な現象だね。」

王蛇「ライダーではたまにあることだ。」

A「たまにあるの！？ 滅茶苦茶すぎるだろ！」

王蛇「そう言うものだ。」

A「はあ……。」

Aはとんでもない話に考えるのを諦めた。

こあみ「にーちゃ」ポムッ

こまみ「にーちゃ」ポムッ

こあみとこまみはそれぞれAと王蛇に張り付いた。

A「取りあえずここから移動しませんか？　ここにいっても埒がありませんし。」こあみを抱っこ

王蛇「そうだな……。ここがドコなのか調べなくてはいけないしな。
「こまみが王蛇の肩にくっつく

A「それじゃあ行きますか？」

王蛇「ああ行くか。」

こあみ「とかー！」

こまみ「ちー」

こうして二人と二匹はここがドコなのか調べるために動き出した。

~~~~~

A達一行は今近くの町を探索していた。

A「町並みは特に変わった感じはありませんね。」「こあみ頭の上

王蛇「ああ大本は変わらないんだろうなこの世界は。」「こまみ肩の上

一行がしばらく歩いてしていると町の中心部の方で爆発音の様な音が聞こえてきた。

A「な、何だ！？」



王蛇「どつやら戦闘が行われているようだな。」

A「えっ戦闘!?!」

王蛇「ああどつやらこの世界にも世界を護るために戦う者達が居るようだな。」

A「観にいつてみましょう。何かのヒントになるかもしれない。」

王蛇「ああ。行くか。」

こあみ「とかー!」

こまみ「ちー」

~~~~~

戦いが行われているであろう場所で四人が見たものは…。

A「ちっさ。。。」

ソコにいたのはぶちどる達と変わらない大きさのピンク色と水色の小さな生き物が戦っていた。

ピンク色「です〜!」

水色「やるっしゅ!〜!」

二匹は何十体という黒い全身タイトの不気味な者達をちぎっては投げ、ちぎっては投げの大立ち回りをし、面白いように人が投げ飛ばされていた。

A「王蛇さんあれ何すかね…:」

王蛇「あの全身タイトはショッカーの戦闘員だな。」

A「イヤそつちじゃなくて!? 確かにそつちも気になるけど、俺が言ってるのはあつちのチミツこい生き物の方ですよ!」

王蛇のオトボケにAのツツコミが入る。

王蛇「さあな…。 大方この世界でのぶちどると言ったところか?」

王蛇は謎の生き物を冷静分析する。

そうこうしているうちに二匹のチミツ子は戦闘員を全てぶっ飛ばし戦いは無事終了した。

ピンク色「です〜」

水色「しゅー!」

A「あつ戦闘が終わったみたいですね。」

王蛇「ああ行ってみるか。」

~~~~~

俺達は今さっきまで全身タイトツの変な奴らと戦っていた二匹の不思議なチミツ子達と一緒にいた。

A「しかし見れば見るほどプリキュアに似てるなあ。」

Aはこあみとこまみとじゃれ合っているプリキュア似の生き物を見てそう呟いた。

A「ピンク色の毛の方はキュアブロッサム、水色の毛の方はキュアマリンに似てるなあ。まさにぶちキュアだな。」( ) ドヤ

キュアブロッサム似「です〜!」

キュアマリン似「しゅ〜!」

こあみ「とか〜!」

こまみ「ち〜」

四匹はお互いにくっついて転がりながらじゃれ合っている。

A「可愛いなあW」ダバダバ

何とも微笑ましい光景にAは鼻血を滝のように流しながら四匹を凝視していた。

王蛇「取りあえず鼻血を止める。血で真っ赤な顔でニヤニヤしてい

ると変態にしか見えないぞ。」

A「おつと!?!」「ボギッ

ブロッサム似「です〜?」

マリン似「しゅう?」

こあみ「とかー?」

こまみ「ちー?」

四匹はAを見ながら不思議そうな顔をしていた。

~~~~~

楽しかった時間は束の間で、それから程なくして王蛇の言っていた灰色のオーロラが出現した。

王蛇はこれを逃すと次は何時現れるか分からないため帰らなければいけないと言った。

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

こあみとこまみは、せつかく仲良くなった二匹と別れることが寂しいのが目尻に涙を浮かべうつむいている。

ブロッサム似「です〜」

マリリン似「しゅっ〜」

プリキュア似の二匹もぶちどるの二匹と別れるのは寂しいようで同じく寂しそうな顔をしている。

A「もつと一緒に遊びたかったけど、もう帰らなきゃいけないんだ。〜」

ぶちキュア達の頭を撫でるA。

王蛇「そろそろ行くぞ。」

王蛇の言葉に撫でる手を引っ込め立ち上がった。

A「また何時か、何時会えるか分からないけど、その時は俺の家族も連れて会いに来るよ。」

ブロッサム似「です〜」

マリリン似「しゅっ〜」

A「また会おうね!」

こあみ「とかー!」手を振る

こまみ「ちー！」手を振る

王蛇「さらばだ。」

こうしてA達一行はオーロラの中に消えていった。

ブロッサム似ぶちキュア「です〜」

マリン似ぶちキュア「しゅ〜」

~~~~~

？「へえそんな事があつたんですか。」

？「なかなか壮絶な体験だね。」

二人の少女が座るテラス。

一人は眼鏡をかけた二房のおさげの少女。

もう一人は肩口まで伸びた活発そうな顔の少女。

二人の少女は二匹の不思議な生き物と話していた。

？「何時かあつてみたいね！」

？「そうですね。何時の日かこの子達と一緒に。」

おさげの少女が見た先には様々なぶちキュアが駆け回っていた。

後に少女の望んだ事は現実になる。

しかしそれはまた別の話…。

~~~~~

続く！

「じゅしゅいっ！」(がいでん)(後書き)

インペラー「アレ？此処どころ？」

ブロッサム似「です？」

マリオン似「しゅ？」

短いつす！スイマセン。(前書き)

短いつす！スイマセン。

フンフン！！

「ぶちます的な何か」

ある晴れた日。

Aが家でマツタリ寛いでぶちま達とじゃれ合っていた。

A「ほらこのちゃ、プニプニ」「プニプニ

このちゃ「や」W

A「うい奴めW」

A「ほらののか。ボールだよ。」「ヒョイツ

ののか「ぶう」「コロコロ

A「~~~~!?!」バンバン

Aの投げたボールに丸くなりながらじゃれるののか。その光景に悶え壁を叩くA。

A「ああもう可愛すぎて悶死するわ。」

Aは息も絶え絶えと言った感じにいる。

Aが恍惚な表情で惚けていると不意に家のチャイムが鳴り響いた。

ピンポーン

A「ありや？誰か来たのかな？」

Aは玄関まで行き外を確かめた。

ガチャッ

A「はい。どちら様？」

Aはドアをあけ外を見た。

？「ニンニン」

ソコにいたのは風呂敷を背負った、カツパの姿をした細目の長瀬楓
似のぶちまがそこにいた。

A「えっと、どちら様？」

Aは予想外の訪問者に驚き、目を白黒させながら言葉を発した。

楓似ぶちま「ニンニン」スッ

楓似のぷちまは風呂敷の中からキュウリを取り出すとAに手渡した。

A「えつと…俺に？」

楓似ぷちま「ニンニン」

A「えつと…ありがとございます。」ペコリ

楓似ぷちま「ニン！」「フヒュッ

楓似のぷちまは満足気に笑うとAの目の前から一瞬で消えたのだった。

A「何だっただんだ？」

Aは呆然としながら部屋へと戻った。

このちゃ「や〜？」

ののか「ですう〜？」

せちゆな「め？」

A「ああこのちゃにののかにせちゆなか。俺何か疲れてるみたいだからちよつと横になるわ…。」

A「最近異世界とか魚釣りとか色々言っただけだからなあ…。」

Aはそう言つと寝室へと入っていた。

「このちゃ」「や〜?」

「ののか」「ですう〜?」

「せちゆな」「め?」

Aの後ろ姿を見ながら三匹は終始首を傾げていた。

~~~~~

続く!

にじゅうたつ！！（後書き）

お気に入りとか閲覧数が全く伸びない…。

モチベーションが

にじゅうさんっ！(1) (前書き)

スイマセン！昨日は残り一時間で書くことしたら、気が付いたら寝落ちしてしまいました！

見捨てないでください(TOT)

「じいちゃんさー！」(1)

「ぶちます的な何か」

今日はのこのかの一日を見てみましょう。

のこのかは何時も朝の7時頃には起きます。

のこのか「ぶあ〜」あくび

目をクシクシしながら布団から抜け出します。

のこのかはまず起きるとはじめに寝ているAのもとに行き、眠っているAをお越しに行きます。

A「グウ〜」zzz

のこのかは熟睡しているAの枕元にいくとペチペチと叩いて起こそうとしますがAはなかなか起きません。

のこのか「ぶう〜」ユサユサ

次にのこのかはAの顔を揺すり始めました。それから数分経つとかすかにAの目が開き始めました。



A「んゝののか？ もうちょつと寝かしてけるゝ」

Aはそう言うとののかを抱きしめゴロリと寝返りをしました。

ののか「ふうゝ！？」

毎度のことなのだが、大人しいののかは未だに慣れることがなく、胸の中で顔を赤くさせあたふたしている。

しかし次第にAの胸の中が気持ちいいののか、ののかも寝息をたてて眠り始めた。

それから数分後、未だに起きてこないAの様子を見にきたせちゆながAの額を竹刀（ひらがなで、ゆうなぎと書いてある。）で思いつきり叩かれるまでのののかとAは眠り続けていた。

コレがこの家での日常の風景となっている。

~~~~~

Aと共に二度寝から起きたののか。

今は他のぶちま達と一緒に朝の食卓を囲んでいる。

各々好きな食べ物食べており笑顔である。

ののか「ケプッ！」

お腹がいつぱいになったのか可愛いゲップと共に満足気な表情を浮かべていた。

その後このちゃと一緒に食器を洗うのか。

このちゃ「やー」カチャカチャ

のか「ですう〜W」カチャカチャ

二匹は楽しそうに洗い物をしている。

因みにこのちゃは腕立てをするコアラのプリントが描いてあるエプロンをののかは腹筋をするアザラシのプリントが描かれているエプロンを着用している。

洗い物が終わりののかはゆえちのもとへきていた。

お昼までの時間はだいたいゆえちのところへ来て一緒に本を読むのが日課になっていた。

のか「ですう〜」

ゆえち「です…」「チユー

二匹は隣り合わせに座り、のかの持ってきた本を眺めている。

因みに本の題名は『意中のあの男を狙い撃て！〜必殺必中恋のライジングアロー〜Vol.1・2』と言う名前であった。

のか「ですう〜」

ゆえち「…です」チューー

二匹は本を読みながら話に花を咲かしている。

ここからは副音声でお楽しみください。

ののか「今日も朝起こしにいったら胸に抱えられちゃった／＼」

ゆえち「そうですか… それは良かったですね、ののか…」チューー

ののか「うん！私、もう今年は思い残すことはないよ」

ゆえち「それではダメですか！ そんな事では他の人（？）達に先を越されてしまうです！」チューー

ののか「ど、どうしようゆえ」オロオロ

ゆえち「大丈夫手はあります。スペパププと言う生き物の肝を煎じた薬を飲ませればどんな相手オトコもイチコロらしいのです…」

ののか「す、凄いなゆえ」そんなのどこで知ったの？

ゆえち「月刊媚薬と言う本です。なかなか興味深い本でした…」
チューー

ののか「でもスペパププってドコにいるんだろう？」

ゆえち「そうですね。もしかしたらたまに来る仮面の人たちなら何か知っているかも知れませんが。機会があれば連れて行って頂きましょう。」チユー

そんな感じで二匹の午前中は過ぎていくのだった。

~~~~~

続く!?

短くてスイマセン (2) (前書き)

短くてスイマセン

「じゅじゅんっ！」（２）

「ぶちます的な何か」

お昼時。

ののかは人数分の食事の用意をしていた。

今日は彼女の当番である。

愛用のエプロンを身に付けカチャカチャと手を動かしていた。

ののか「ぷう」　ぷう」　「グツグツ

鍋を煮込みながら鼻歌を歌うののか。何とも上機嫌である。

このちゃ「や」

このちゃはののかの手伝いをしている。

昼食の支度が終わり皆一同に席につき食事を取り始めた。

因みに今日の昼食はののか、このちゃ特製の和食になっていた。

あしゅなん「パクパク」カチャカチャ

パルナ「むしゃむしゃ」カチャカチャ

ゆえち「ズズー」

A「ん〜美味しいなあ。 やっぱりののかやこのちやの作る料理は最高だねW」ガツガツ

Aはののかとこのちやを褒めちぎりガツガツと食べている。

ののか「ぶう〜／／／」テレテレ

このちや「や〜／／／」

二匹はAに褒められたのが嬉しかったのか、頬を染めて照れていた。昼食が終わり夕食までの時間のののかはAの部屋を訪れていた。

A「どうしたのののか?」

ののか「ぶう〜」

ののかは恥ずかしそうに少し遠慮がちになりながら一冊の本をAに見せた。

ののか「ぶう〜」

A「ん?本かい?」

ののか「ですう／／／」

A「良いよ。ほらおいで。」ポンポン

Aは胡座をかき自分の膝の上を叩いた。

ののかは遠慮がちながらもAの膝の上に座り聴く体制に入った。

A「え〜と何々？」闘魂　　光と闇の聖剣　　ああこれか。主人公の女の子が二匹の龍を従えて愛する男と戦う話だった？」

ののか「ですうW」

A「前に目読んだよね。ののかはこの話好きだよねえW　よし！じやあ読むよ。」

ののか「ぶあ〜い」ワクワク

Aはゆつくりと本を開き語り始めた。

ののかはAの膝の上でまったりとした午後を過ごし有意義な時間を過ごした。

~~~~~

続く!?

「じゅしゅんっ！」(2) (後書き)

本のネタはバトスピですW

日本語入門！(3) (前書き)

短くてスイマセン

フジのフジ！ (3)

「ぶちます的な何か」

夕食時。

Aとぶちま達は夕飯の支度に勤しんでいた。

A「じゃあみんな用意をするよ」

A「じゃあせちゆな野菜を切ってくれるかな？」ポイツ

Aは野菜を持つとせちゆなに向かい投げた。

せちゆな「めん！」

包丁（村正銘）を構え目に見えない速さで腕を振った。

スパスパスパ！

せちゆなに投げられた野菜は物の見事に細かく切れていた。

A「見事なお手前で。」

せちゆな「めん！」

A「パルナ、ゆえち、ののかは箸とかよういして。」

パルナ「ん！」「ピロピロ」

ゆえち「です…」「チューー

ののか「ぷう」

三匹はAに言われたとおりにテーブルの上に箸や食器などを並べた。

A「じゃあこのちゃ、そろそろ野菜を煮込もうか。」

このちゃ「や〜W」

バラバラバラ

このちゃは鍋に先ほどせちゆなが切った野菜を入れ始めた。どうやら夕食はお鍋のようである。

グツグツ

A「じゃあ野菜が煮えるまで少し待とうか。」

このちゃ「やん！」

ピンポン

A「ん？誰か来たみたい？」

玄関を開けるとそこには、インペラー、王蛇、こあみ、こまみ、はるかさん、ちひゃー、ゆきぽがいた。

王蛇「夕飯時にすまない。遊びに来たんだが、大丈夫か？」

A「ええ構いませんよ！今日は鍋なんで良かったら皆さん食べていってください！」

こあみ「とかー！」

こまみ「ちー！」

はるかさん「かつかー！」

ちひゃー「くっ」

ゆきぽ「ぶー」

王蛇「ありがとう。なら遠慮なくあがらせて貰う。」

A「」どづどづ
「」

玄関から中に入っていく王蛇達。

インペラー「邪魔するぜ」

A「あつインペラー。」

インペラー「（呼び捨て！？）なんだ？」

A「多分お肉とか足りなくなるだろうから買ってきて。」

インペラー「な、なんで俺が！？」

A「えっ？インペラーってそういうキャラでしょ？」

インペラー「ち、ちげーよ！？ 何でいつの間にか俺の立ち回りが
そういうキャラって事になってんだよ！ 可笑しいだろ！」

A「仕方ないよ。 神の意志たへんじなんだから。」

インペラー「チクショー！！（涙）」

泣きながら走り出すインペラー。果たして、彼に明日はあるのか？

A「あついでにお醤油も買ってきて〜！」

インペラー「うわ〜ん！（涙）」



続く！？

にじゅじゅっ！(3) (後書き)

インペラー「はあ。何で俺ばかりこんな目に…。」トボトボ

手に買った肉を持ちながら歩いているインペラー。

インペラー「ハア…。」

ポン！

インペラー「ん？」

？「びっくりおね？」

インペラー「!？」

新たな出会いの予感。

にじゅうろく！(4)(前書き)

あれ？ののかの一日だったはず？

A「なんか最近上げる時間が遅くなってきたな」スイマセン

にじゅうさくっ！(4)

くぶちます的な何か

A達は遊びに来た王蛇、こあみ、こまみ、はるかさん、ちひゃー、ゆきぽと鍋をつついて団欒していた。

王蛇「うん美味しいな。」モグモグ

A「でしょ？この子達が力を合わせて作った鍋ですからね。」モグモグ

このちゃ「や〜」パクパク

せちゆな「めん！」モグモグ

パルナ「んW」ピコピコ

ゆえち「です…」チュー

ののか「ぷあ〜」ふうふう

あしゆなん「ね！」ガツガツ

あやにゃん「にゃ!？」舌がヒリヒリ

ザジュ「…イクラはいくら？」グツグツ

ちーか「たー！」カチャカチャ

ちみか「みー！」パクパク

ちさー「ぴょん…」モソモソ

こあみ「とかー」モグモグ

こまみ「ちー」モグモグ

はるかさん「かつかー」モグモグ

ちひゃー「くっ」モグモグ

ゆきば「ふう〜」ふうふう

ぷち達は各々楽しそうに鍋の具を食べている。

ぷちどる&ぷちま「（バクバクバクバク！）」

A「イヤー良い食いつぶり！ 元気があって良いねW」

ちーか「たー！」ぐいぐい

こあみ「とかー！」「ぐいぐい

ちーかとこあみは肉を引っ張って取り合いをしている。

ののか「ぷあ〜」ズズー

ゆきぽ「ぷう〜」ズズー

ののかとゆきぽはお腹が一杯になってきたのか二匹揃ってお茶を飲んでいた。

ザジユ「…あ、つい暑い」

A「おっと、そろそろ鍋から出すか。」

Aは煮立った鍋の中からザジユを引き上げた。

ザジユは頭に乘せた手拭いで顔を拭くと床に置いてあった氷水の中に入れていった。

王蛇「しかし、あのイカの子は何故鍋の中にいたんだ？」

A「ああ。ザジユって煮込むと良い出汁が出るみたい何ですよね。」

王蛇「確かに色々な魚介類を煮込んだような味がするが…。」

チラリとザジユの方を見る王蛇。王蛇の視線の先にはボールの縁に手(?)をかけ額に手拭いを乗せてくつろいでいる。

王蛇「あの子は大丈夫なのか？」

A「うん。ちよつと熱いお湯に入ってる感覚みたい。茹で上がる前に引き上げて氷水に入れてあげるんだ。」

王蛇「そんな事で良いのか…。」

A「ん〜？まあ本人もノリ気だし。」

そんな会話をしながら夕食会は盛り上がっていった。

~~~~~

インペラー「うい〜す。肉買ってきたぞ〜」

A「ありがとうございます〜！」

肉を受け取り早速鍋で煮込み始める。

インペラー「あ〜腹減った。俺も頂くぜ。」

A「ん。遠慮なく食っちゃって〜」

インペラー「はあ。ん？」

のか「ぷう〜」スッ

インペラーにご飯の盛ってある茶碗を渡すのか。

インペラー「おっサンキューW」

インペラーはそれを受け取り鍋をツツき始めた。

王蛇「ご苦労だったな。」

インペラー「全くだぜ。 店が休みでよ、結局隣町まで行ってきた。」

インペラーは軽くボヤきながらも飯をかつこむ。

あしゆなん「ね！」

インペラー「げっ！？あしゆなん！」

インペラーはあの一見以来あしゆなんに苦手意識を持っていた。  
じゅうさんっ！（2）参照。

インペラー「な、何か用かあしゆなん？」

あしゆなん「ね！ね！」ぴよんぴよん

インペラー「え？何？」

あしゆなんの行動に訝しがるインペラー。あしゆなんはインペラーに頭を下げるように言う。

インペラー「何なんだ？」スッ

あしゆなんの要望通りインペラーは頭を下げた。

あしゆなん「ね！」ぴよん

あしゆなんはインペラーの頭に飛び乗った。

インペラー「うわっ!?!」

驚くインペラー。あしゅなんはそのままインペラーの頭の上に張り付きくつろぎだした。

インペラー「何だ?」

王蛇「どうやら懐かれたみたいだな?」

あしゅなん「のね〜!」

マツタリとくつろぐあしゅなん。

インペラー「まあ懐かれて嫌な事はないけど…」

嫌がる感じのないインペラー。あしゅなんは涎を垂らしながらインペラーの頭の上で眠り始めた。

~~~~~

Aはインペラーと触れ合っているあしゅなんを見ながら他のぶち達と鍋を食べていた。

A「ウマウマW」

ちひゃー「くっ!くっ!」「ペシペシ

A「ありゃちひゃー?どうかしたのかい?」

ちひゃー「くっ!」ぴょん

ちひゃーはAの頭に飛び乗るとAの頭をぺシペシと叩き出した。

こあみ「にーちゃ」

こまみ「にーちゃ」

続いてこあみとこまみもAの両膝に座りぴとっくとくっついてきた。

そして最後に…。

はるかさん「かつかー!」ぴょん!

A「のわっ!」

はるかさん「(もちゅーー)」

Aの顔に吸い付きもちゅーっとするはるかさん。

A「(えっコレ何て状態?)」

Aは一度箸を置き、冷静にはるかさんを引き剥がした。

A「はいはい。くつつくのは嬉しいけど、取りあえず離れてな。」
グイッ

はるかさん「かつかー!」

引き剥がしたはるかさんを胡座の中心に座らせ落ち着かせた。

ちひゃー「くっ!」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

はるかさん「ヴぁーい」

どうやら皆カマって欲しいらしい。

A「わかったわかった。食べたら遊んであげるから。少し待ってな。」

はるかさん「かっかー」あーん

A「何?食べたいの? ほら。」

Aは肉を掴むとフーフーと冷やしそつとはるかさんの口に肉を入れた。

はるかさん「ヴぁーい」パク

はるかさんは大口を開くとAの手ごと食べてしまった。

A「ぬお!?!」

驚いて放そうとするが、スッポンのごとく吸い付き全く放そうとしない。

Aはいくら引つ張つても剥がれないはるかさんを放置し軽く溜息を吐いた。

元気付ける要に頭を叩くちひゃー。

脇からくつつき甘えるこあみとこまみ。

未だに吸い付いているはるかさん。

その楽しそうな姿を眺めるぶちま達。

まだまだ夕飯は終わらない。

~~~~~

続く!?

「ふわふわ〜」 (4) (後書き)

「ふわふわ〜」 (4) (後書き)

にじゅうななつ！(5)(前書き)

おかしい。ののか一日の筈が…

「じいじななっ！」(5)

「ぶちます的な何か」

「このちゃ」「やー」

「せちゆな」「めー」

ぶちどると仲良くしているAをみて寂しげな表情を浮かべるこのちゃとせちゆな。

王蛇「どうしたお前たち？」

二匹の表情に気づいた王蛇はソツと二匹に話しかけた。

「このちゃ」「やー」

「せちゆな」「め！め！」

王蛇は二匹の気持ちを聞きソツと二匹を抱え上げこのちゃを頭にせちゆなを膝の上に座らせた。

王蛇「おまえ達は本当にアイツの事が好きなんだな。」ポンポン

二匹の頭をポンポンと叩いてやり落ち着かせる。

王蛇「アイツは取られたりしない。不安なら…今からアイツのところに行つて、甘えてくれば良い。」ニッ

イタズラめいた笑みを浮かべこのちゃとせちゆなに吹き込む王蛇。その言葉にこのちゃとせちゆなは沈んでいた顔を満面の笑みに変えてAのもとへと駆け寄つた。

このちゃ「やで〜!」

せちゆな「めーん!」

A「うわっ!?!何だおまえ達急に飛び付いて?」

このちゃ「やー」「じろじろ

せちゆな「め!」「じろじろ

A「何だよお前達。今日はやけに甘えてくるなあ。」

はるかさん「かつかー」

ちひゃー「くっ!」

このちゃ「や!」

せちゆな「めん!」

このちゃとせちゆながAに甘えているとちひゃーとはるかさんが二匹話しかけてきた。

A「このちゃ、せちゆな。ちひゃーとはるかさんが仲良くしようだつてさ。」

ちひゃー「くっ！くっ！」

はるかさん「はるかっかー！」

このちゃ「や〜！」

せちゆな「め！」

A「じゃあみんな向こうで遊んできな！」

四匹はAの言葉に従い離れて他のぷちどる、ぷちまと遊びだした。

A「なかなか会う機会がなかったから、これを機に仲良くなってくれば良いかな？」

Aはそう呟きながら遠くで戯れるぷち達を眺め微笑んだ。

~~~~~

王蛇「ではご馳走になった。」

王蛇は眠っているちひゃーを頭に寄せこあみとこまみを両脇に抱え玄關で挨拶をした。

A「イヤイヤ。此方こそウチと其方のぶち達が仲良くなれたし、感謝するのはこちらの方ですよ。」

王蛇「他のぶちどるとも会わせたいな。」

A「今度は此方から行きますよ。」

王蛇「歓迎する。」

インペラー「王蛇、そろそろ行くつぜ。」もにゅもにゅ

寝ぼけたはるかさんに頭をもにゅもにゅされているインペラーが王蛇を促した。

王蛇「ではまたな…。」

インペラー「夕飯ごっそさん!」

王蛇とインペラーは挨拶すると背を向けて歩き出した。

A「行っちゃったか。」

楽しい時間が終わった後の寂しい感じがさつきまで騒いでいた部屋に漂っている。

A「片づけしなきゃ。」

ぶちま達は皆騒ぎ疲れてしまい眠っている。

A「取りあえず余った具材を仕舞わなきゃな。」

ガチャッ

Aはお肉などを仕舞うべく冷蔵庫のドアを開けた。

? 「ふわふわ」

A 「にゃー!!何か知らない子が冷蔵庫の中に入ってる!？」

? 「びっくりおねー」

A 「全くだよ!！」

~~~~~

インペラー「あっ…。新しいぷちま見つけたのAに言ってなかった。」

王蛇「？」

続く!

にじゅうななっ！(5)(後書き)

？「ふわふわ」ふわふわ

ザジュ「…秋は飽きた」ボソッ

？「びっくりおねー」ふわふわ

ザジュ「…」orz

負けたらしい。

にじゅうはちっ！（前書き）

色々と伸び悩んでいるためおかしくなりましたW

ちよくちよくこんな感じで書くかもデスW

気にしないでください！

「じいじはちっ！」

「ぶちます的な何か」

Aは今戸惑っていた。

昨夜楽しかった食事が終わり後片付けをしようと冷蔵庫を開けた  
ら中から知らないぶちまが出てきたのである。

？「ふわふわ」「ふわふわ

A「ん〜君はドコの子かな？ 何でウチの冷蔵庫なんかにしたの？」

？「びつくりおねー」「ふわふわ

A「確かにビックリしたよ…； しかし埒があかないなあ。」ポリ  
ポリ

さっきからこの調子で全く会話が成り立たない。Aは頬を掻きなが  
ら途方に暮れていた。

ピンポン

A「ん？誰か来たみたいだな。」

A「ちょっと出てくるからここで待っててね。」ナデナデ

？「ふわふわ／＼／＼」

~~~~~

A「はいはい！どちら様ですかあ？」

ガチャツ

渡「こんにちはAくん。」

Aが玄関のドアを開けるとソコには一人の男性が立っていた。

A「久しぶり渡くん。最近連絡してなかったけど元気だった？」

渡「うん。最近連絡できなくてゴメン。ちょっとゴタゴタしててさ、最近やっと落ち着いたので顔を見せに来たんだ。」

渡と呼ばれた男性は幼さの残る顔で軟らかく笑い言った。

A「そうか。少し心配してたんだ。元気そうで良かったよ。」

渡「…うん。ありがとう。」

一瞬悲しそうな目をする渡。しかしAはその事に気づかず渡を家中に招いた。

？「ふわふわ」ふわふわ

渡「…この生き物何？」パチクリ

渡は今日の前で漂っている不思議生物に目を白黒させていた。

A「ああ、ぶちまっつて言う魔法先生ネギま！？のキャラクターに似ている謎の生き物。ウチで飼ってるんだ。」

渡「へえ〜不思議だね。 こんにちはは僕は渡。 君の名前は？」

？「ふわふわ」？「ふわふわ

A「ああその子まだ名前がないんだよ。 良かったら渡くんが付けてあげてくれないかな？」

渡「えっ？そんな大事なものを、僕に任せてもいいの？」

Aの提案に驚きを見せる渡。

A「うん。 今日この子がウチにいて、久しぶりに渡くんが僕のウチにきたのは偶然じゃなかったんじゃないかな？ だから記念にこの子に名前を付けてあげて欲しいんだ。」

渡は目の前を漂っているぶちまを見つめる。目の前のぶちまは既に名前が付けてもらえると期待するような眼差しで見つめている。

渡「うん分かったよ。僕に出来るか分からないけど頑張ってみる。」

A「うんお願いするよ。」

渡「君に名前をつけさせては貰うけど良いかな？」

渡は律儀に了承を得るべくふわふわしてるぶちまに名前を付けて良
いか聞いた。

?「ふわふわ」W「ふわふわ

ぶちまは渡の言葉を聞いて嬉しかったのか満面の笑みを浮かべ渡の
顔の周りをふわふわと飛び回った。

A「ありがとう…。じゃあ君の名前を考えるね。」ニッコリ

ニッコリと笑い渡はこのふわふわしているぶちまの名前を考えるべ
くAと話し始めた。

~~~~~

渡「では早速ですが、この子の名前を発表します。」

渡は自分の頭の上に張り付いているぶちまを指して口を開いた。

渡「Aくんの話を聞いて参考にしながら考えたんだ。気に入って

くれると良いんだけど？」

？「ふわふわ」ふわふわ

渡「君の名前は『ちやよ』ちゃんだよ。」

ちやよ「ふわふわ」ふわふわ

渡の口から言われ名前を聞いたちやよは嬉しさのあまり飛び出しふわふわと渡の周りを漂いはじめた。

A「良かったねちやよW」

ちやよ「ふわふわ」ふわふわ

ちやよはAの言葉に満面の笑みを浮かべこたえた。

~~~~~

そして時間は流れ辺りは暗くなっていた。

渡「じゃあAくん僕はそろそろ帰るよ。」

A「うん。今日は楽しかったよ渡くん。」

渡「僕の方こそ楽しかったよ。」

ちやよ「ふわ」ふわふわ

ちやよは目尻に少し涙を浮かべ、寂しそうな表情で渡を見ていた。その表情な気付いた渡はちやよに笑いかけ頭を撫でながら話しかけた。

渡「ちやよちゃん。また今度遊びに来るよ。今度は僕の家族も連れてくるからその時はまた一緒に遊ぼうね？」

ちやよ「ふわふわ〜W」ふわふわ

渡の言葉に頷き、ちやよはAの肩に張り付いた。

渡「じゃあねAくん、ちやよちゃん。」

手を振る渡。

ちやよも渡に手を振る。そして名残を惜しむように手を下げ曲がり角に消えていった。

A「行つちやつたね。」

ちやよ「ふわ〜」

A「さあ中に入るうか。他の家族に君のことを紹介するよ。」

ちやよ「ふわふわ〜」

二人（？）は微笑みながら家の中に入っていった。

~~~~~

続く！

にじゅうはちっ！（後書き）

Aの家から帰路につこうとしていた渡の目の前に灰色のオーロラが現れていた。

？怪人「さあ！？大人しく『闇のキバの鎧』を渡して貰おうか！」

渡「悪いですけど、この鎧は渡せません。」

？怪人「五月蠅い！？ならば力づくでも渡して貰う。」

渡へと駆け寄る異形の怪人。その時、渡に近寄る黒い小さな影があった。

？怪人「ぐあっ！！」

その影は怪人に体当たりをすると渡ももとへと行った。

？「フン。おまえ等如きが闇のキバの鎧を手に入れようなどと甘いわ。」

小さな何かはそう言うくと渡の手の中に収まった。

渡「アナタがこの鎧を奪おうとするのなら、僕は全力でアナタを倒す。」

渡「変身。」

? 「カブツ」

小さな影が渡の手を噛むと渡の身体から力が吹き出しその身体を赤と黒を基調とした異形のモノへと変えていった。

? 怪人「なっ！闇のキバ!？」

驚く? 怪人。

すると異形のモノに変わった渡のそばに三人の人影が現れた。

? 「王の御前だ。」

? 「頭が高いよ。」

? 「控え…ろ。」

? 「ありがたく思え。 絶滅タイムだ。」

三人の影は身体を変化させ怪人に躍りかかった。

? 「もう何も奪わせはしない…。」

異形のモノへと変身した渡も眼前の敵へと狙いを定め駆け出した。

にじゅうきゅう！(1)

「ぶちます的な何か」

今日も今日とて平凡で可愛いぶちまに囲まれたAは何時も通りの日を謳歌しようと考えていた。

A「さあ〜て今日は何して過ごすかねえ？」グイッ

背筋を伸ばすようにグイッと伸びをして軽くストレッチをした。

A「たまにはみんなの様子でも観察してみるかな？」

Aは善は急げと直ぐ様部屋を飛び出しぶち達の居るであろう場所に出かけていった。

~~~~~

ケース〜このちゃ〜

このちゃ「ちゃ〜や〜」パタパタ

Aがこのちゃを見つけたのは暖かい日が入ってくる縁側だった。

このちゃは床に寝そべるとうつ伏せになりながら足をパタパタさせて白い画用紙にクレヨンでお絵かきをしているところだった。

赤に青にとクレヨンを変え、何か鼻歌のように歌を口ずさみながら絵を描き上げている。

A「(か、可愛い…!?)」「バシャバシャ

物陰からこのちゃを眺めているA。顔を赤らめ口元を手で覆い鼻血を流している姿は不審者にしか見えない。

このちゃ「や〜や〜」

物陰から眺めているAには全く気づく様子もなく未だに画用紙に集中している。

A「(しかしいったい何の絵を描いているんだろっな?)」

ふと思った疑問にAは堪らなくこのちゃの絵を見たくなった。

A「(ん〜どうしたのか?)」

目を瞑り思案するA。何かを思い付いたのか、ふと目を開けて口を開いた。

A「お〜いこのちゃ〜ちょっと来てくれない?」

このちゃ「や〜?」

このちゃはAに呼ばれた声を聞きひよこつと立ち上がるとAを捜すべくピヨコピヨコと歩いていった。

このちゃ「や」パタパタ

Aは用事がある風にこのちゃを呼びその隙に絵を見よつと考えたのだ。

大人気ないAであった。

A「さあ〜てどんな絵を描いてたのかなあ？」

Aはこのちゃが残していった画用紙を覗き込んだ。そこに描かれていたものとは…。

A「…もやし？」

画用紙にはただ一本のもやし描かれていた。

A「…。」

Aは顔を上げると何ともいえない表情でその場を後にした。

~~~~~

続く！

さんじゅっ！(2)(前書き)

ネタが分かるかな…(^| ^;) )



せんじゅっ！(2)

「ぶちます的な何か」

A「さつて今日はせちゆなの観察してみるかな？」

せちゆなを探して家の中を歩いていると何やら庭先から声が聞こえてくる。

A「ん？ この声はせちゆなかな？」

Aは声の聞こえる方へと歩き出した。

せちゆな「めん！めん！」シュツシュツ

Aは庭に着いてみるとソコには竹刀を振っているせちゆながいた。

A「（おー剣の練習をしているのか）」

Aはこのちゃの時と同様に物陰からせちゆなをこっそりとストークキ  
…観察する事にした。

せちゆな「めん！めん！」シュツシュツ

せちゆなは余程集中しているのかAには全く気づかないようだ。

A「（凄く熱心に竹刀振ってるWカワエエ〜W）」バシャバシャ  
物陰からせちゆなを眺めるAの鼻からはこのちやの時と同様に鼻か  
ら大量の血液を噴出していた。

せちゆな「めん？」クルリ

何か妖面な気を感じ取ったのか後ろを振り向いたせちゆなだったが  
Aはとつさに隠れせちゆなには気づかれなかったようだ。

A「（あつぶね〜え せちゆなって勘が鋭いと言つか気配を感じ取るのが上手いんだよな…）」

Aは内心ドキドキしながらもう一度このちやを見始めた。

せちゆな「めん！めん！」シュツシュツ

せちゆなはまた竹刀を振っていた。

それからまたせちゆなを眺めているとせちゆなの身体に変化が出てきた。

せちゆな「めん！めん！」キラキラ

A「（あれ？何だかせちゆなの身体が金色に光っているような？）」  
目を擦り再びせちゆなを見るA。しかし何度みてもやはりせちゆな  
の身体が金色に光り出していた。

せちゆなスーパーモード「めん！めん！」ピカピカ

そして遂には完全にせちゆなの身体は金色に染まっていた。

A「(うわ)すっげー金ピカ 手が竹刀もいつの間にか緑色のオーラ纏ってるし」

せちゆなの素振りには更に苛烈になっていた。

せちゆなスーパーモード「めん！めん！」シュバツシュバツ

竹刀の空を斬る音がすでに竹刀の音ではなくなってきた。

A「(こえーよ 何か竹刀(?)を振った後に音が鳴ってるし)」

更に観察を続けていると急に地面から何かが飛び出してきた。

?「…」ウニヨウニヨ

A「(何か出てき…!)」

辛うじて声を出さなかったAであったが内心では驚きのあまり飛び上がる勢이었다。

A「(あれは何だろう 頭に黄色い二本の角に赤いからだに手、それに周りから生えてきたのは…緑色身体に顔、つくし?)」

Aは突如自分の家の庭の地面に生えてきた巨大なつくし(?)を見て唾然としていた。

せちゆなスーパーモード「めん！」ピカピカ

つくし？」「…」「うねうね

緑色のつくし？」「…」「ニヨロニヨロ

A「（なっ！せちゆな戦う気か！）」

臨戦態勢のせちゆな。

金色に輝くせちゆなは緑色に燃え上がる竹刀を振り上げ飛びかかった。

せちゆなスーパーモード「めん！めん！めん……！」ズバーツ

見事竹刀は巨大なつくし（？）を捉え、つくしは頭（？）に大きなタンコブを作りながら消えといった。

せちゆな「めん！」

せちゆなは先程まで金色だった身体を元に戻りフーツと息を吐くとトコトコと片付けをし家の中へと入っていった。

せちゆなが完全に居なくなったのを確認し物陰から出てくるA。

庭は先程までの光景が嘘のように静けさに溢れている。

A「なんだか分からないけど、せちゆなってすげー」

今一度せちゆなの凄さを垣間見た一日だった。

~~~~~

続く！

ウニョウニョ

おんじゅっ！(2) (後書き)

Aの家の庭にある木の影。

ニョキッ

つくし?」「ニョロニョロ

DG生存!!

さんじゅっいちっ！(がいでん！)(前書き)

大好評につきあのキャラが！？

考えるな感じる！

おんじゅじゅいっ！！（がいぞん！）

〜ぶちます的な何か〜

ココはドコだ

ワタシはダレだ

クライ

クライ

オワリのないクラヤミ

ワタシはナンのためにココにイるのだろう

~~~~~

どれホドのジカンがタっただろう

ミギもヒダリもワカらない

セカイはイゼンとしてクライいままだ



イツになったらこのクワイセカイから又けだせるのだろっ

キョウもまたセカイはマツクラなままだった

~~~~~

またどれホドかのジカンがタった

マワりはアイかわらずミゴタエのナイクロイツシヨクのコウケイ

ナゼワタシはココにイるのだろっ

ナンカイ

ナンジュツカイ

ナンゼンカイ

カンガえた

イツもイツもカンガえた

ワタシのソンザイするリユウ

ナゼワタシはココにイるのだろっ

~~~~~

そのヒはイツもとナニかがチガった

クラヤミのナカに感じるカスかなヒカリ

ほんのチョットだけどカスかに感じるアタたかなヒカリ

キョウのセカイはほんのチョットだけア力るかった

~~~~~

シダイに感じるヒカリがオオくなってきた

サイショはフタツツギはムツツ

シダイにフエていくアタたかなヒカリ

マエよりスコしだけア力るくなったマツクラなセカイ

ワタシもイツかあのマブしくもアタたかなセカイへ

~~~~~

感じる

イマまでとチガうつツよいヒカリ

ふれるコトすらハバかれるホドのツよいカガヤキ

ワタシはあの

ヒカリになりたい

ジブンのナカでナニかがかわったトキだった

ワタシはサトった

ワタシがウまれてからずっとカンガえてきたこと

ワタシのソングザイするリュウ

ワタシは

あのヒカリを

ケすモノだ

~~~~~

クラヤミのセカイからヌケダシテにイれたヒカリカガヤクセカイ

ワタシはジユウになった

そしてイマ

ワタシのメのマエには

あのアタタかくもマバユいソソザイがいる

キンイロにカガヤくヒカリのソソザイ

キヨウ

ワタシは

メのマエのヒカ리를

カキケす

~~~~~

キエユくイシキ

ワタシはヤブれた

ヒカリのソソザイに

ワタシはまたモドるのか

あの

クラいセカイへ

ツギ

もしもウまれるなら

ワタシもあのアタタかいヒカリのセカイへ

~~~~~

日がテカテカと照らす昼時。Aは庭に降りて何かをしているこのちやを見つげ呼びかけた。

A「このちやゝまた水あげてるのか？」

庭先にいるこのちやに呼びかけるA。

このちや「やゝ」チヨロチヨロ

このちやが水をあげている鉢植えの中には、小さな小さなつくしが生えていた。

つくし「…」

このちや「やゝ」チヨロチヨロ

今いる世界は

このちや「や」チヨロチヨロ

つくし」∴W「

暖かくて明るい世界



続く

さんじゅうちっ！（がいでん！）（後書き）

お気に入り件数が5件になりました。

チヨットづつですが、読まれる人が増えていただければ嬉しいです！

ありがとうございますm（＿）m

さんじゅじゅっ！ (3) (前書き)

双海姉妹の喋り方がわからねー

なんだじゅじゅっ！ (3)

くぶちます的な何か

今日も変わらず平和な日。

何をするかと考えていたA。

とりあえずコロコロ転がってみたが特に何があるわけもなく直ぐ様飽きてしまった。

その時ふと思いついた考え。

A「そうだ　ちーかとちみかを観察しよう」

京都に行くノリで呟いたAはムックリと起き上がり部屋を出ていった。

ピンポーン

A「ん？誰か来たのかな？」

イタズラ姉妹を探していたAは玄関へと歩き出した。

亜美「おっじゃましまーす！」

真美「おっじゃましまーす！」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

王蛇「邪魔する」「月に代わってお仕置きな格好

そこには双海姉妹とこあみとこあみと凄いい格好の王蛇が立っていた。

A「みんなどうしたのこんなに大勢で？」

亜美「ヒマだから遊びに来たよーん」

真美「来てあげたよーん」

こあみ「にーちゃ」

こまみ「にーちゃ」

こあみとこあみはAへと手を伸ばし甘えている。

王蛇「すまない どうしても遊びに行きたいと聞かなくてな」

A「いえ ちょうど暇しててちーかとちみかの観察でもしようかと思つてたところでしたから」

王蛇「余程暇なのだな」

亜美「えー観察ー！あみもやるー」

真美「なんか探偵みたい！まみもする！」

A「よしならみんなでやるか！」

亜美／真美「おー！」

王蛇「いいのだろうか？」

一行はイタズラ姉妹を探すべく歩き出した。

~~~~~

A「あいた」

ちーかとちみかほ思いのほか早く見つかった。A達は例によって物陰に隠れ観察しはじめた。

亜美「どごどごー！」

真美「どれどれ！」

こあみ「にーちゃ」

こまみ「にーちゃ」

王蛇「お前たち声がでかいぞ」探偵物語の衣装

A「やる気満々だなあ」

王蛇「やるなら形からだ」

亜美「じ ぱん はどうだ!」

真美「ゴリさん      は何やら木のはこの中に入ってるみたいですね!  
」

A「じーぱんにゴリさんてまた古いな」

ゴリさん「      に動きがあつたぞ」

じーぱん「      は何やら木箱に入れているもよーです」

王蛇「もう少し様子を見てみよう」双眼鏡で観察

A「すげーノリノリだよこの人達」

こあみ「とかー」真実はいつも一ツな格好

こまみ「ちー」ジツチャンの名に賭けた格好

A「いつの間にかコスプレ!?!」

実は王蛇が普段こあみとこまみの為にコスプレ衣装をベントカード  
して持ち歩いている。

こあみとこまみはその衣装で着替えさせられていた。

王蛇「ん 更に動きがあつたぞ」

ちーか「たー」ブーン

ちみか「みー」ブーン

ちーかとちみかはせつせと何かを木箱の中に運んでいる。

王蛇「あれは、花粉だな」

A「じゃあ二人(?)はハチミツを造ってるのかな？」

王蛇「かもしれないな」

ゴリさん「あつ！ちーかがどこかに飛んで行くみたい」

じーぱん「ちみかも一緒だ！」

王蛇「チャンスだ 今のウチにあの箱の中身を覗いてみよう」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

皆は二匹が飛び立ったのを確認すると一斉に木箱の前へと近づいた。

A「よし開けるぞ」

亜美「ドキ　ドキ」

真美「ワク　ワク」

王蛇「中身が何か楽しみだ」

A「せーの」

ガバツと一気にフタをとるA。

中であつたモノは!?

箱の中「ブーン　ボクちんいつになったら帰れるんだブーン」

A「……」

亜美「……」

真美「……」

箱の中には緑色した謎の頭部が入っていた。

王蛇「……」ユナイトベント

ジエノサイダー「G u u u u u ! ! !」

何ともいえない表情の4人。

王蛇静かにファイナルベントを差し込んだ。

王蛇「はあー!!」

?「ブーン　ボクちんコレで終わりなの!　ブーン」キラーン  
跡形もなく消えた謎の頭部。

A「見なかった事にしよう」

王蛇「ああ」

ジェノサイダーを戻し王蛇はAの言葉に肯定した。

亜美「にーちゃんさっきのなにー」

真美「なんか変な顔なかったー」

A「気のせいだよ　そんなモノはなかったよ　きつと疲れているんだよ」

ガシツと亜美の肩を掴み言い聞かせるA。

王蛇「ああきつと仕事のし過ぎだな　帰ったら休もう」

Aと王蛇の言葉を信じた二人はさっきの見たものは気のせいと信じた。

こあみ「(ニヤリ)」

こまみ「(ニヤリ)」

~~~~~

王蛇「では邪魔したな」

亜美「またね」

真美「バイバイ」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

A「うん また遊びにきな」

王蛇達はAに別れを告げ帰って行った。

A「あーしかしさっきの顔はなんだったのかな」

Aは首を捻りながら家の中に入っていった。

~~~~~

とある日のとある一室

？「とかー」



? 「ちー」

? 「たー」

? 「みー」

? 「ブーン うまくいったブーン 今度はどうやって驚かすブーン」

こんな会話があったとか無かったとか…。

~~~~~

続く!?

さんじゅじつ！(3) (後書き)

？「ナビコちゃん ミツバチマーヤは一体どこに行ったんだ」

ナビコ「ウーン？ナビコわかんない どっかに落っことして来ちゃったみたい」

？「まーいいか 煩わしいのがいなくていいわ」

さんじゅうさんつー！！（４）（前書き）

何だかなあ

さんじゅんさんっ！！(4)

くぶちます的な何か

今のAの状態を一言で表すなら』トム『である。

【暇 ひま】

用事などのない

余った時間

やる事が無く溶けたアイスのようにダラーっとなっている。

A「何か面白いこと…」

暇つぶしを考え出したA。

そして考えついた案が…

「ぶちまの観察に行くか」

やはり何時もと同じである。

A「そうと決まればレッツラゴーW」

~~~~~

A「ん？何だろう 何やら縁側が騒がしいな」

話し声の聞こえたAは急いでそちらの場所まで向かった。

A「誰かいるのかな？」

例によつて物陰から覗くA。

すでにその姿はどこかの家政婦のような格好であった。

？「せやからな、ワイは武者遊撃隊のリーダーで悪の邪悪武者達をバツバツと薙ぎ倒して、遂には天宮ひいては天馬の国を奴らの魔の手から救つたわけや！」

のか「ぶあゝ！」

Aが覗いた先には見たこと無い謎の生物と、その生物の話を楽しそうに聞くのかがいた。

A「（何か変な奴とののかが喋ってるー）」杉田風

？「せやからワイは二つの国の英雄なんや」

のか「ぶあゝ！」

謎の生物の話聞き更に興奮を露わにするのか。

?「そうかそうかワイの偉大さが分かったW よし!お前を我が武  
ちや遊撃隊の一番隊員に任命したる!」

のか「ぷう〜!」ピシッ

一番隊員に任命されたのかはピシッと綺麗に敬礼した。

その時二人(?)に近寄る人影があった。

?「見つけたぞ武者頑駄無!」

?「何者や!」

?「我々は邪悪武者軍団の残党なり 邪悪武者軍団復興の為貴様に  
は死んでもらう」

A「(何か出てきたー!)」

?「なんやて そんな頼み聞けるかい!」

邪悪武者軍団の残党?「ふん そんな口を利いて良いのかな?こ  
の生き物がどうなっても良いのかな?」

邪悪武者軍団の残党の手には先程まで敬礼をしていたのかが握ら  
れていた。

のか「ぷあ〜」グス

? 「な、ののかに何すんのや!」

残党1 「この生物がどうなるかは貴様の態度次第だ さあどうする!」

? 「ぐ、分かった ワイのことは好きにせえ その代わり、ののには手を出すなや」

ののかをぶち質に取られ抵抗を止めた武者。

残党1 「クツクツク 良い判断だ さあ覚悟しろ!」

ののか 「ぷあゝ」

邪悪武者軍団の残党が武者に刀を振り上げたその瞬間掴まれていたののかが声を上げた。

残党2 「えーい うるさい生き物め黙っている!」

残党がののかを黙らせるため空高く投げた。

ののか 「ぴゃゝ」 クルクルクル

? 「ののか!??」

地面に落ちるより早くののかをキャッチする武者。

? 「お前らゝ 武ちゃ遊撃隊の大事な隊員を、ワイの大事な友達をよくも泣かしてくれたなあゝ」

残党達「!？」

?「ののかが帰ってきたならコッチのモノや覚悟せい!!」

残党達「!？」

?「武者覚醒! 武者丸見参！」

武者の掛け声と共にたこ焼き機が飛来し武者の鎧への変化する。

武者丸「ステキに、無敵に、超やる気! 天下御免の武者丸殺法!!」

武者丸「道頓堀断裂灼熱斬！」

武者丸は刀を地面に突き刺して突進する、その摩擦熱で刀は熱を帯びその熱を邪悪武者軍団の残党へと放った。

残党達「ギャー!!」

武者丸「地獄で閻魔に詫び入れな」 死んではいけません

武者丸は刀を納めるとそう言い放ち、武者丸の技が炸裂し残党達は空高く吹き飛ばされ空の彼方へと消えていった。

~~~~~

むちゃ丸「怖い思いさせてすまんかったなののか」

ののか「ぷう〜」

むちゃ丸「そうか　ワイはそろそろ帰らなあかん　今度はいつ来れるかわからんけど、それまでは武ちゃ遊撃隊の一番隊員であるの
かがココを守るんやで」

ののか「ぷう〜」「ピシッ

むちゃ丸「ほなまかしたで〜」

むちゃ丸はそう言うとは処へと消えていった。

ののか「ぷい！」「ピシッ

ののかはむちゃ丸が消えた道を眺めもう一度敬礼をするのだった。

A「コレ何てアニメ　」；

~~~~~

続く!?

さんじゅうさん！！（４）（後書き）

むちや丸「イタタタ 掘りに落ちてもった」

さんじゅつよんっ！(5)(前書き)

今回は自分で書いててネタが変だと思います。

クオリティもいつもよりなんかなあ

納得があまり行かない作品です( ^ | ^ ; )

さんじゅつよんっ！(5)

「ぶちます的な何か」

A「さて、恒例の観察をはじめるかな」

色々な仮定を吹っ飛ばし早速本題に入っちゃったよ。

A「今・日・の観察は誰にしようかな？」

ふと歩いているとスツと目の前をちさーが通り過ぎていった。

A「あれ？今のはちさー どうしたんだろっ」

先程のちさーが気になり、Aはこっそりちさーの後をつけていった。

A「あれこの先は？」

Aが辿り着いた場所は最近何かと縁のある庭先であった。

縁側の影からこっそりと先を覗くと先程自分の前を通り過ぎたちさーがいた。

ちさーは周辺をきよろきよろし出すと手をパンパンと叩き出した。

A「(何だろっ 猫か何かを呼んでるみたいだ)」

注意深く観察しているとカサカサと何か草の中を歩いてくれ音が聞こえてきた。

A「（そうか、ちさーは野良猫に餌をあげているんだ　優しい子だなあ）」

感動して目尻を拭い再びちさーを見た。

ちさー「ぴょん！」

ちさーが鳴くてソレは草原の中から現れた。

?「プーン」

草原の中から出てきたのは尖った鼻に白い体の不思議な生物だった。

A「何か予想外のキター!!!」

?「プーン」

のそのそと歩くソレは何故だか小刻みに揺れていた。

A「（何だあれは、犬か？犬なのか?）」

ちさー「ぴょん!!」

?「プーン」グー

ちさーは犬(?)に近づくとペロペロキャンディを差し出した。

ソレを受け取りモシヤモシヤと食べ始める犬(？)

ちさーは犬(？)がキャンディを食べる姿が嬉しいのか上機嫌である。

ちさー「ぴょん！」

ちさーは不意に犬(？)を持ち上げるとなんと犬(？)を投げはじめた。

犬(？)は的に刺さる矢の様にザクツと木の幹に突き刺さつ。

A「(えーあの鼻(？)刺さるのー)」

何度か犬(？)を投げていたちさーは急に飽きたのか犬(？)を放り投げどこかへと行ってしまった。

ちさー「ぴょん！」ポイ

？「プーン」ヒューン

そして放り投げた犬(？)はそのまま飛んでいきAの額へと突き刺さった。

A「ぐもー！」バタン

奇声をあげて倒れるA。

それは何ともシュールな光景であった。

~~~~~

次の日

オデコに絆創膏を張ったAは昨日と同じく庭に来ていた。

A「(イテテテ 昨日は散々だったなあ あれ？またちさーが庭にいる)」

ちさー「ぴょん！」

A「(また昨日の犬(？)に餌でもあげているのかな?)」

ちさーが気になり覗くA。

？「叩くぜ叩くぜ！ 俺のビート刻むぜ！」

その先にはちさーと変に顔の渋いラッコがドラムのスティックを持つてものすごい早さで木を叩いていた。

ちさー「ぴょん！」

ちさーもラッコと一緒に木を叩いていた。

A「(また変なのがいる)」

ちさー「ぴょん！」

？「うおー刻むぜ！」

A「（何だろうあのナマモノは　なんであんなに渋い顔してんだ？
ああウチの子が染まっっていく）」

？「さすがだなちさー　だが俺も負けてられないぜ！　うおー！！」

ちさー「ぴょーん」

二匹は一気にスピードを上げ更に早く叩き出した。

自分の心の中の思いのたけを全部吐き出すようにスティックの一打
一打に魂を込めて叩く二匹。

そして二匹はドラムを叩き終わると二匹は視線を合わせソツと握手
を交わした。

？「ナイスなスイングだったぜ…」

ちさー「ぴょん」

堅く手を握りあいお互いがお互いを認め合う光景に確かに二匹の間
には友情が芽生えていた。

~~~~~

A「そんな

ちさー駄目だ

アレは駄目だ

「orz



Aはその日、ちさーの意外な交友関係を目の当たりにし一人ですごい勝手に落ち込んでいた。

~~~~~

続く！

さんじゅつよっ！(5)(後書き)

？「オシヨウダニスイング！」

A「ギャー！！！」

さんじゆじゆー！(6)(前書き)

最後は無理矢理まとめた

クオリティは気にしないで

おんじゅじゅー！（6）

「ぶちます的な何か」

今ぶちま観察ナウ。

A「またまた暇なのでぶちまを観察しようとしているのだが
キヨロキヨロ

A「なかなか今日は見つからないなあ」

最近高確率で出現している庭にも今日は全くいなかった。

A「おつかしーなー 何で今日に限って誰も見あたらないんだろう
？」

首を捻りながら探し歩いているとある部屋の中から誰かの話し声
が聞こえてきた。

A「おっともしかしてここに居るのかな？」

Aは少しあいているドアの隙間からこっそりと中を覗いてみた。

中にいたのはあしゅなんとピンク色の丸い球体であった。

あしゆなん「ね！ね！」

？「ハ口、ハ口」パタパタ

あしゆなん「ね！ね！」

？「ハ口、ハ口 ミトメタクナイ」コロコロ

あしゆなんはピンク色の球体と一緒にあって会話（？）の様な物をしていた。

A「（何だあの物体 生き物なのか？）」

あしゆなん「ね！ね！」

？「ハ口、ハ口」

あしゆなん「ね！ね！」

？「ハ口、ハ口 ミトメタクナイ」

あしゆなん「ね！」パシッ

急に掛け合いを始め球体の発した言葉にあしゆなんがハリセン（はまのつるぎと書いてある）を使って球体を叩いた。

A「（えー漫才なのー！）」

目の前で繰り広げられている光景はまさに漫才であった。

叩かれた球体は反動でコロコロと転がる。

あしゅなん「ふー」

やり切った感じで額を拭う動作をするあしゅなん。

あしゅなん「ね！ね！」

？「八口、八口」

二人（？）は漫才の出来を話し合うように喋り出した。

A「何か凄いやり切った感で話し合ってるよ 凄くうまく行ったのかな？」

更に観察を続けるA。

あしゅなん「ね！」

？「八口」

二人（？）は何やらガサガサとし始めた。

A「（何をし始めたんだ？）」

あしゅなん「ね！」

？「八口」

二人（？）が取り出した物は何と向かし懐かしいダンスダンスレボ

リユーションであった。

あしゅなん「ね！」

？「ハロ、ハロ」

二人（？）はゲームが始まると考えられないほどの速さで踊り始めた。

あしゅなん「ね！ね！ね！」パツパツ

？「ハロ、ハロ ナンデヤネン！」パツパツ

お互いに競い合うあしゅなんと球体。

A「……」

Aはその光景を見ながらソツとドアを閉めた。

A「久しぶりに友達に電話してみっか」

Aは最近会わない友達に電話をかけるべく自室へと戻っていった。

余談であるがその日あしゅなんがいた部屋からは朝まで音楽が流れていたとか。

~~~~~

続け！



さんじゆじっ！(6)(後書き)

伏せ字の意味なくね

「のちや」「ち」

おんじゅくっ！(7)(前書き)

あるキャラの原型はこんなんで大丈夫だろうか？

おなじじゆうくっ！(7)

くぶちます的な何か

例によって例のごとく結局いつもの通りにAは暇なのでぶちまの誰かを観察しようと考えていた。

A「おつかしーなー また誰もいないや」

Aは家の中を隈無く捜したが誰一人として見つからなかった。

A「んー外にいるのかな」

Aは家の中から出て外を探しに行った。

~~~~~

とある路地裏。

ちやよ「ふわふわ」ふわふわ

？「シオ」ベレー帽をかぶった三つ編みのちみっ子

？「み」でっかい盾を背負った銀髪のちみっ子

？「ちゅーん」制服を着た茶髪の幸薄げなちみっ子

ふわふわなちゃよとダンボールに詰まった三匹のちみっ子がいた…。
ちなみにダンボールには拙い文字で“うらるじどーめい”と書かれていた。

A「（H；）」

ソレを見てしまったAだが見なかったことにして歩き出した。

~~~~~

A「はあ 全然見つからなかった」

トボトボと歩くA。

外を捜したのだがぶちまは全く見つからず仕方が泣く家に戻ってきたのだった。

A「ん？」

家の中に入ると誰かの楽しげな話し声が聞こえてきた。

A「誰か帰って来てるのかな？」

Aは声の聞こえてくる方に行ってみることにした。

ゆえち「です」「チュー

?」「ピーピー」

Aが見つめた先にはジュースを飲みながら座っているゆえちと、ゆえちの周りに飛んでいる得体の知れない何かだった。

戦闘機のような身体(?)に青く大きな足(?)に一番目を引くのは右側にくつついている大きなロングライフルであった。

A「あれ何? 鳥?鳥なの? でも明らかに外見戦闘機だよな てかそもそも生き物なの?」

さらに観察するA。良く見ると謎の鳥もどき(?)の身体に何か文字が書かれていた。

A「えつと 型式番号: FXA-05D じーでいふえんさー? 名前書いてある てか型式番号って」

鳥もどき改めじーでいふえんさーはゆえちの周りを楽しそうに飛び回っている。

じーでいふえんさー「ピーピー」パタパタ

ゆえち「です」「チュー

A「何だろっスッゴいゆえちは好かれてるみたいだな」

二匹の様子を眺めていたAだったが不意に床に何故か落ちていたエ

アクツションを踏んでしまい覗いているのを見つけてしまった。

A「えっ!?!」プチプチプチプチ

ゆえち「です!?!」

驚いたゆえちはとっさに振り向き警戒をした。

A「(ヤバい!?!見つかったら何かヤバい!?!)」

Aが慌てて隠れようと、その場を離れようとするがソレをゆえちは許さなかった。

急にじーでいふえんさーが変形しゆえちの体にくっついた。

<sup>スーパー</sup>鳥ゆえち「です」チャキッ

ロングライフルを構え狙い撃つぜの構えをとるゆえち。

そしてロングライフルの銃口が火を噴いた。

チュドーン

A「ギョエー!?!」

ロングライフルのビームが直撃し吹き飛ばされる。空の彼方へと飛ばされお空のお星様になってしまった。

<sup>スーパー</sup>鳥ゆえち「です」チュー

汚え花火だ的な感じで空を見てジュースを啜るゆえちだった。

とある路地裏。

A「どぼちでこんな目に」「ガクッ

?「シオ」「ベレー帽のちみっ子

?「み」「銀髪のちみっ子

?「ちゅーん」「茶髪のちみっ子

続く！

おなじじゆんくっ！(フ)(後書き)

？「カット、カット、カット」「ブレー帽のちみっ子

A「ギャー！？」



さんじゅつなっ！(8)(前書き)

今回は要望キャラを出してみました。

キャラのクオリティは気にしないで下さい。

作中でリアルとSRDの話が出てきますが作者はSRDが好きですが、  
どちらも好きです。

気を悪くしないで下さい。

さんじゅつなっ！(8)

「ぶちます的な何か」

A「また何か居るよ」

今日もまたぶちまの誰かを観察しようと思っ出ていたAは、パルナとリュウガと話している見知らぬ方をまたまた発見していた。

A「今日のお客さんはまたずんぐりした方なのね　パルナとリュウガ氏と何やら話している感じなんだが」

パルナ「ン！ン！」ピコピコ

リュウガ「ああ　やはりガンダムはSDに限る　あの完成されたフォルムはまさに芸術だ」

？「そうだろうか？　確かにSDガンダムのあのデフォルメされた形は素晴らしいものだがリアルがあつてのSDだと思う　そう言うわけで俺はリアルを推すね」

A「なんかガンダムのリアルとSDについて談議してるー！」

パルナとリュウガで話しているのはガンダムタイプの頭部ヘッドに腕部アーム。シールドは　のシールドを装備しており、下半身はホバーになつている、まあぶつちやけデフォルメされたガンダムタイプのキャラだった。

Aが驚いている最中ますます話は盛り上がっていた。

パルナ「ン！ン！」ピコピコ

リュウガ「そうだ SDにはリアルにない可愛さがある」

？「リアルにはSDが捨てていったメカ特有のかつこよさがある！」

リュウガ「SDだ！」

？「リアルだ！」

A「SDキャラのあんたがリアル言っちゃ駄目だろ」

リュウガ「えーい分からず屋め ならば勝負だ！Gコマンダー」

Gコマ「望むところだリュウガ！」

一触即発の事態になってきた。

リュウガ「いざ」

Gコマ「尋常に」

リュウガ/Gコマ「勝負！！」

リュウガ「はあー」

ドラグブラツカー召喚。構えをとりブラツカーの炎を身に纏いながらキックを繰り出した。

Gコマも負けじと盾を構えながら得意のホバーリングを生かしビームライフルで応戦する。

リュウガ「うおー！」

Gコマ「はあっ！」

争い合う二人。次第にボロボロになっていく周り。

A「ああー俺の家が!？」

ボロボロになっていく我が家を見て滝のように涙を出すA。

その時争い合う二人を止めに入った者が居た。

?「そこまでだ 両者武器を下げよ」

二人の間に入った人影は、黄色角飾りに青いマント。背中と腰に二刀宛の剣に盾を装備したガンダムタイプのキャラであった。

?「私はエターナル王国の姫であるラクス姫に仕える騎士フリーダムと申します 何やら争う声が聞こえたので間に割らせていただきました 何が理由でこの様な争いを？」

突如現れた騎士フリーダムと名乗る人物。

リュウガとGコマはそれまでの経緯をフリーダムに話した。

フリーダム「そうですか 価値観の違いから対立するのは仕方ない

でしょう。しかしだからと言って暴力で分からせようとするのはいけません」

フリーダムの言葉にハツとする二人。

フリーダム「お互いが一番を譲れないのであれば相手に自分の好きなどころを教え、二番目に好きになってもらえばいいでしょう」

リュウガとGコマはフリーダムの提案に納得しお互いに謝りだした。

リュウガ「その すまなかつた」

Gコマ「いや、俺こそ大人気なかつた」

お互いに謝り合い次にリアルとSDの自分が好きな所を話し始めた。

フリーダム「ウン」

フリーダムはそんな二人を笑顔で眺めると空高く舞い上がり何処へと消えていった。

その日二人の白熱した話し合いは朝方まで続いたという。

因みにパルナは。

パルナ「んゝzzzz」ピロピロ

相当早い段階で眠っていたようだ。

~~~~~

A「俺は武者頑駄無とか好きだな」

~~~~~

続く！

さんじゅななっ！(8)(後書き)

フリーダム「くっは、早くエターナル王国へ戻らねば！」

さんじゅうはちっ！(9)(前書き)

今回はガンダムからあの有名な？キャラが参戦！反応が気になる！！

おかげまでお気に入り件数が8件に増えました！

少しずつですが着実に増えてうれしいです！

出来れば誰がお気に入りに登録したか知りたいので気が向いたら連絡ください！



さんじゅうはちっ！ (9)

くぶちます的な何か

ちっちゃん「め！」

ザジュ「…」プカプカ

ちっちゃん「め！」

ザジュ「…」プカプカ

A「(会話が成立しているんだろうか?)」

Aの心配をよそに意志の疎通は出来ているようだ。因みにちっちゃんはパルナと話をした後ザジュのところへと赴いていた。

A「ん？水槽の中に何かいる」

ザジュが入っている水槽の中に何やら得体の知れない丸い何かが漂っていた。

？「しゃー」ぶよぶよ

球体がパカッと開いて中から顔が出てきた。左右のトゲが三つに別れニユルと伸びて爪になった。

A「あの生き物は何なんだ？」パラパラ

Aはおもむろに動物図鑑えむえすばんを開き探し始める。

A「何々？あれはモビルスーツ目ガンダム科　ウォルターガンダム  
通称うおるたーか」

パラパラと見て本を閉じるA。

A「つまりあれはガンダムなんだ」

納得してAはまた水槽のなかのうおるたーを眺めた。

『しょうじょうこうご・うおるたー推参』

ちっちゃん「め！」

ザジュ「…水を見ず」プカプカ

うおるたー「しゃー」ぷよぷよ

相変わらず会話が出来ているのか心配になる光景だがちっちゃん達は楽しげにしていた。

ちっちゃん「もー！」

ザジュ「…ナイスなイス」プカプカ

うおるたー「しゃー」ぷよぷよ

三人(?)は話がつきないようである。

~~~~~

A「あれから結構時間経ったけど、まだあの子達は話をしているのかな?」

そつとザジュの部屋を覗くA。

ちっちゃん「もー!」

ザジュ「…イタい板」プカプカ

うおるたー「しゃー」ぷよぷよ

何やらちっちゃんが怒っているみたいである。もう少しじっくり見てみる事にした。

ちっちゃん「もー!」

ザジュ「…」プカプカ

うおるたー「しゃー」ぷよぷよ

どうやらうおるたーが間違えてザジュの頭(イカの耳部分)を咬んでしまったようである。

ザジユは無表情（若干涙目）だが頭の噛み跡が痛々しく見える。

ちっちゃんは腰に手を当てうおるたーにお説教をしている。うおるたーは逆に三本の脚を器用に曲げて正座をしている。

まだまだ説教は続きそうだ。

~~~~~

A「あれから三時間経ったけどお説教は終わったかな？」

Aはまたザジユの部屋を訪れ覗いてみた。

ちっちゃん「もー！」

うおるたー「しゃー」プルプル

いまだに説教は続いていた。

うおるたーは足をしびれさせプルプルとさせて何とも痛々しい。

結局うおるたーが解放されたのはそれから一時間後だった。

~~~~~

ちっちゃんは夕食をA達と一緒にとり夜も遅いと龍騎がむかえにき

と一緒に帰って行った。

それからAは寝るだけと廊下を歩いているとある部屋からしくしくと誰かの泣き声が聞こえてきた。

何事かと見てみるとそこにはうおるたーがいた。

どうやらうおるたーはいまだに足がしびれているらしくうまく歩けないでいるようだった。

A「一緒に寝るか？」

うおるたーを拾い上げ問いかける。

うおるたー「しゃーW」

嬉しそうに爪をパカパカし喜ぶうおるたー。

Aはうおるたーを頭に乘せると自分の部屋に向かっていった。

~~~~~

続く！

おんじいちゃん(9) (後書き)

D G G 「…」

うおるたー「しゃー」

「のちや」 「ちヨロチヨロ

D G G 「…」 W

うおるたー「しゃー」 W

たんじゅんきゅっ！(がいでん！)(前書き)

昨日は投稿して1ヶ月だったので緊急で外伝にしました！

皆様の支え合っこのこのぷちまでですので今後ともよろしくお願います！

今回は作者の好きなあのキャラがまたまた登場！

たんじゅんきゅー！（がいでん！）

くぶちます的な何か

D G 『いつもの決まった時間になると必ずワタシに水をかける存在がいる』

このちゃ「や」「チヨロチヨロ

D G 『理由は分からないが不思議とイヤな感じはしない』

D G 『寧ろ心地の良いとさえ感じてしまう』

このちゃ「や」「チヨロチヨロ

D G 『ワタシは今とても満たされている』

D G 『あの頃のような寂しさを感じなくなった。』

~~~~~

このちゃ「や」「チヨロチヨロピタ

どつやらジヨウロの中の水が無くなったようだ。

このちゃ「や〜?」

D G「…」

このちゃは水が無くなったのを確認するとパタパタと家の中に入っていた。

D G『今日はこれで終わりのようだ』

このちゃの駆けていく後ろ姿を見ながらそう考えた。

D G『ここは本当に暖かくて居心地が良い』

D Gはふと空を眺めた。眩しげに眼をひそめ空を見やると、青く澄んだ空は晴れ渡り雲一つ無い快晴が広がっていた。

D G「…」

空を眺めていたD Gはふと何者かが近付いてくるのを感じそちらを振り向いた。

うおるた「しゃー」

近づいてきたのは最近住み始めたうおるたであった。

D G『最近この場所に住み始めた者か』

うおるた「しゃー」

うおるたーはD Gの前まで来て手足を収納し丸くなった。

最近はD Gの周りがお気に入りに入りやすくよくこうして近くで転がっている。

D G『何故だろう この者からは何故だか懐かしい感じがする』

D Gはうおるたーから奇妙な近親感を感じるようになっていた。

そのせいかD Gはうおるたーが近くにいってもわりとイヤな感じはしなかった。

うおるたー「W」「コロコロ

それはうおるたーも一緒のようで嬉しそうに転がってはしゃいでいる。

D G『近き者よ オマエは何故ワタシの下にいるのだ』

D Gはそう問いかけたいが声を出せないため視線だけがうおるたーに向けられる。

うおるたー「しゃー？」ピタ

D Gの視線の意味が分からず首を傾げ頭の上へクエスチョンマークを浮かべていた。

D G『まあ良い 近き者よお前が何故ワタシの側にいたがるかはわからない だがイヤな気はしない 好きなだけいるが良い』

D Gの視線から思いの雰囲気を感じたうおるたーは嬉しそうに転がった。

うおるたー「しゃーW」コロコロ

D G「…W」ウニヨウニヨ

このちゃ「やんW」

いつの間にか戻ってきていたこのちゃ。

その手には新たに水を張ったジヨウ口が握られていた。

このちゃ「やんW」チヨロチヨロ

このちゃは笑顔でジヨウ口を傾けると先ほどのようにD Gとうおるたーに水をかけ始めた。

うおるたー「しゃーW」

D G『本当に居心地の良い場所だ…』

今日も世界は眩しくて何とも暖かく居心地の良いそんな場所だった。

願わくばこんな世界が続いて欲しいとD Gは願っていた。

あの日がくるまでは。

A 「始まりません！」

多分 W

よんじゅっ！！（がいでん！）（前書き）

ぷちまです。内容は本編関係ないです。多分

読まなくても大丈夫です。

なんだこれと思うかもですが受け止めてあげてください。

よんじゅっ！ー！（がいでんー）

【でふおるまにあ・ばりえーしょん】

突如として世界は悪意に覆われた。

突如現れた黒い球体による人類殲滅の宣言は全人類を恐怖に陥れた。

黒い球体「ワレワレハスベテノジンルイニセンコクスル キサマラ
ハフエスギタ フェスギタセイメイタイハチヨウセイシナケレバナ
ラナイ コレイジヨウノウゾウシヨクヲオサエルタメ コレヨリ ジ
ンルイセンメツサクセンヲケツコウスル」

黒い球体の宣言通りその日から世界は地獄へと変わり果てた。

これが後の世に語られるG・W【ジー・ウォーズ】の始まりである。

~~~~~

このちゃ「や〜」

A「大丈夫だよこのちゃ ここならヤツらも追っては来ないから」

怯えるこのちゃを抱きしめ安心させるように言い聞かせるA。

このちゃ「や〜」グスグス

A「どうしてこんな事に…この前まではあんなにも平和で、クソッ！世界はいつたいどうなっちまうんだ！」

今の世界の現状に思わず悪態を付いてしまうA。

A「他の子達の行方も分からないし 渡君達とも連絡が取れない みんな無事でいてくれ！」

このちゃ「や〜」

このちゃ以外のぶちまや友達が行方が分からず弱気になるA。そんなAの心を感じ取ったのかこのちゃは小さく鳴くと振り向きながら空を見つめた。

~~~~~

街の現状は最悪だった。

建物は崩壊し崩れた瓦礫が道路に散乱し、まともに通ることもままならない状態であった。

そんな状態の中Aは、このちゃを胸に抱きさまよっていた。

A「ここもこんなに変わっちゃった」

通り慣れた道の惨状を見て暗い表情をするA。

「このちゃ」「や〜」

そんなAの表情を見たこのちゃは労るように鳴いた。

A「ありがとうこのちゃ　とりあえず家に戻ろう　もしかしたらみんな戻ってきているかもしれない」

Aは一縷の望みにかけてぶちま達が戻ってきていないか家に帰ろうとしていた。

歩きにくい道路をこのちゃを抱えひたすらに歩く。

A「はあはあ」

「このちゃ」「や〜」

A「大丈夫だよ　もうすぐで着くからね、そしたらまたみんなで暮らせるから」

「このちゃ」「や〜」

Aはこのちゃを安心させようと言葉を発するが、それは自分に言い聞かせているようであった。

A「あと少し、あと少し」

「このちゃ」「や〜」

Aはただひたすらに自分達の家へと向かい歩き続けた。

~~~~~

Aは自分達の家を見て愕然とした。

目の前にはただの廃墟しかなく自分達が住んでいた頃の面影は全くない。

A「そんな　こんなことって」

このちゃ「や」

A「まだだ、誰か居るかもしれない　だれか！」

Aはショックを受けながらもどうにか中に入りぶちま達が居ないか探し始めた。

中にはいるとさらに酷い状態だった。屋根には穴があき壁は崩れ物は散乱している。正直まだ建っているのが不思議なくらいである。

A「せちゆな〜！　パルナ〜！　ゆえち〜！　ののか〜！　あしゆな〜ん！　あやにや〜！　ちさ〜！　ザジュ〜！　ちーか〜！　ちみか〜！　ちゃよちや〜ん！　誰かいるか〜　いたら返事をしてくれ！」

大声で呼びかけるが一つとして返事は帰ってこない。

A「そんな　やっぱり誰も、みんな」

「このちゃ」「や」「や？」

うなだれるAを見るこのちゃ。その時地面にある物が落ちているのが目に入った。

このちゃ「や」「ピヨーン

Aの腕の中から抜け出しソレを拾い上げた。

このちゃ「や」「

それはこのちゃが毎日使っていたジヨウロであった。

このちゃ「や」「ブンブン

軽く振ってみるが、全体的にひしゃげてしまい、もうジヨウロとしては使い物にならないであろう。

思い出されるのは、毎日水をあげていたつくしの存在である。水をあげると嬉しそうにウニヨウニヨと増殖をするつくしだったが、逃げるどさくさのなかで落としてしまい、はぐれてしまったのだ。

このちゃ「や」「

それを見て悲しそうな表情を浮かべAのいる場所へと戻っていった。

~~~~~

あれからAとこのちゃは家の中から使えそうな物を探すと鞆に詰め持って行くことにした。

今世界はサイコフスキー粒子の影響で通信機器はもちろん電子機器も全く使用できない状態にあった。

A「『レジスタンスのいる難民キャンプに行きます』 とりあえずメモを残しておけば誰かが見るかもしれない」

メモを雨に濡れず目立て場所に貼るとこのちゃを抱きかかえ住み慣れた我が家を後にした。

~~~~~

Aは今全速力で逃げていた。

A「（ヤバイ、ヤバイ アイツは、アイツはマズい！）」

Aが逃げている存在は黒い球体が人類殲滅をするために送り出した、白亜紀最強の生物を模して創られた最凶最悪の兵器<sup>あくま</sup>。

黒い凶竜、通称【ジェノザウラー】であった。

Aの住んでいた街を壊滅に追い込んだのもこのジェノザウラーの仕業であった。

大きな脚で大地を踏みしめ地響きをたてながらAを追いかける。

その巨体のわりには素早くAとの距離も徐々に狭まってきていた。曲がり角を曲がり、どうにか撒こうとしたそのとき、その曲がり角から何かが飛び出してきた。

飛び出してきた存在は対人感応殺傷兵器通称【バグ】

人間の体温や、呼吸による二酸化炭素を感知し、発見した人間を攻撃する円盤型の自律型小型殺人兵器である。

凶悪さで言えばジェノザウラーよりも上である。

A「（最悪だ！ アイツは、ジェノザウラーより質が悪い マズい！）」

バグを見たAは無理矢理に方向を変え違う道を走り出した。

このちゃ「や〜」

不安げにAを見やるこのちゃ。手にはひしゃげたジョウロが握られている。

A「大丈夫だこのちゃ このちゃは絶対に護るから」

このちゃをみやり笑顔でそう答えるA。

しかし状況は最悪で内心ではどうしようかと焦っていた。

A「（せめて、このちゃだけでも）」

そう思った矢先に前方から新たなバグが現れた。

A「そんな　！？」

周りに逃げ場はなく、まさに絶体絶命の状況となった。

A「（ここまでか　！？）」ギョッ

このちゃ「や〜」

このちゃを強く抱きしめ護るように腕の中に抱え込んだ。

近づくバグ二機とジェノザウラーにAはダメだと思い目を瞑った。

A「くっ！」

襲ってくる衝撃に身構えるA。

万事休すかと思われたその時、A達を庇うように二つの何者かの影が二人の目の前に躍り出た。

？「クアー！！」バキッ

？「シャーッ！！」ズバッ

二つの陰はバグを一撃の下に下すとジェノザウラーに向き直った。

予想していた衝撃が来ないことを訝しみうつすらと目を開ける。

A「えっ!?!」

思わず声を出したA。そこにいたのはかつて自分の家で共に暮らしていたぶちモビの二匹であった。

A「へぶんずそーど、うおるたー お前たち」

へぶんずそーど「クアー!」

【天劍絶刀 てんけんぜつとう ガンダムへブンスソード招来】

うおるたー「シャー!」

【笑傲江湖 てんせいこくう ウォルターガンダム 推参】

二体の登場に驚くA。

このちゃ「や〜!」

このちゃは久しぶりに会った二匹を見て喜んでいる。

へぶんずそーど「クアー」

うおるたー「シャー」

二体も喜びを感じ声を出すですがすぐさまジェノザウラーに視線を返した。

ジェノザウラー「G a a a a a!」

自らに敵意を露わにするへぶんずそーどとうおるたーに向かって吼

えるジェノザウラー。

ジェノザウラーは両脇に備えられたら巨大ブレードでへぶんずそーどとうおるたーを攻撃する。

ジェノザウラー「G a a a a a ! ! !」

へぶんずそーどは素早く動き敵を翻弄する。

うおるたーはその隙にAとこのちやを素早く収納するとその場を後にした。

~~~~~

へぶんずそーど「クアー!!」

ブレードを避けきつたへぶんずそーどは隙を突き目にも止まらぬ速さで連蹴りを繰り返す。

へぶんずそーど「クアー!!」シュパパパッ

ジェノザウラー「G a a a a a ! ! !」

しかしあまり効かずジェノザウラーは鬱陶しげに虫を払うように尻尾を振り攻撃をくわえた。

へぶんずそーど「クアー!!」

しかしそんな大振りな攻撃は当たらず避けるへぶんずそーど。

尻尾の攻撃で出来た隙を見逃さず、へぶんずそーどは自身の必殺技を繰り出した。

へぶんずそーど「クアーー!!」

へぶんずそーどの脚に虹色のオーラがまわりつきそのままジェノザウラーを攻撃した。

その技の名前は【虹色の脚】へぶんずそーどの最も得意とする技である。

そして虹色の脚がジェノザウラーへと直撃した。

~~~~~

Aとこのちゃはうおるたーに連れられ戦闘の被害が届かない場所まで連れてこられていた。

A「ありがとう うおるたー!!」

このちゃ「ちゃ〜」

パタパタと手を振り感謝の意志を伝えた。

うおるたー「シャーW」



へぶんずそーど「クアー！」

ジェノザウラーは倒れてはいなかった。

無傷でこそ無いが未だに致命傷は与えられてなかった。

ジェノザウラーの厄介なところはその凶悪なまでの攻撃力ともう一つ嫌みなまでに堅い防御力である。

へぶんずそーどではジェノザウラーに直接ダメージを与えるまでの火力は無いのである。

その時Aとこのちゃを避難させたうおるたーが戻ってきた。

ジェノザウラー「G a a a a a！」

へぶんずそーど「クアー！」

うおるたー「シャッ！」

うおるたーが加わり二対一となったがやはり決定打が与えられずにいた。

うおるたー「シャー！！！」

へぶんずそーど「クアー！」

ジェノザウラー「G a a a a a！」

ジェノザウラーの咆哮が木霊し空間が震える。

ジェノザウラーは背部に備えられたらロングレンジパルスレーザーライフルを発射する構えをとる。

ジェノザウラー「G a a a a a ! ! !」

ビームを発射し攻撃をするジェノザウラー。へぶんずそーどとうおるたーはその攻撃を避けるがその瞬間にジェノザウラーの尻尾が迫る。

へぶんずそーどは避けたが、うおるたーは回避に間に合わず直撃を受けた。

へぶんずそーど「クアー！」

ジェノザウラー「G a a a a a ! ! !」

ジェノザウラーは脚をロツクすると集束荷電粒子砲の発射態勢に入った。

口腔内にエネルギーがたまっていく。

うおるたー「ギギ」

うおるたーはダメージがまだ残っており直ぐには動けなさそうである。

へぶんずそーど「クアー！」

へぶんずそーどがうおるたーに近づこうとするがジェノザウラーの  
方がタッチの差で早いようだった。

ジェノザウラー「G a a a a a ! ! !」

集束荷電粒子砲が発射された。

~~~~~

A「ああ！うおるたーが！」

うおるたーが尻尾の攻撃を受けて瓦礫に突っ込むのを見た。

このちゃ「や〜」

その光景を見たこのちゃは小さく声を漏らす。

その時ジェノザウラーが集束荷電粒子砲の発射態勢に入った。

うおるたーはまだ起きあがってこない。

へぶんずそーども発射までには間に合いそうになかった。

そしてジェノザウラーの口腔内から集束荷電粒子砲が放たれた。

~~~~~

ジェノザウラーの口腔内から集束荷電粒子砲が放たれた瞬間ジェノザウラーに覆い被さる巨体な影があった。

？「ゲモー！」

ぶつかり合う巨体と巨体。

ジェノザウラーは横からの突撃に態勢を崩し集束荷電粒子砲を放ちながら倒れ込んだ。

集束荷電粒子砲はうおるたーの横を通り過ぎ直撃を避けた。

ジェノザウラー「G a a a a」

？「ゲモー！」

ジェノザウラーは自分を邪魔した存在に怒り吼える。

反対に影の方もジェノザウラーに吼える。

両者はにらみ合いお互いに睨み合った。

~~~~~

ジェノザウラーが集束荷電粒子砲を放とうとした瞬間ジェノザウラーに覆い被さる存在があった。

A「あれはぐらんどだ！」

ジェノザウラーを押し倒したのはAの家でへぶんずそーどやうおる
たーと一緒に住んでいたぶちモビ、グランドガンダムのぐらんどで
あった。

【獅王争覇ししおうせいぱ グランドガンダム見参】

今ここに三羅将が勢ぞろいを果たしたのだった。

A「うおるたーは無事だ ぐらんどがやってくれたんだ」

このちゃ「や〜ん」パタパタ

このちゃはぐらんどに手を振る。

Aはうおるたーが助かったことに安堵し息を吐いた。

Aは目の前の戦いをただ祈って見ていることしかできなかった。

~~~~~

ぐらんど「ゲモー！」

仲間を傷つけられたぐらんどは怒り興奮をしていた。

ぐらんど「ゲモー！」

ジェノザウラー「G a a a a ! !」

唸り合う両者。

へぶんずそーど「クアー！」

うおるたー「シャー！」

ぐらんとの側にへぶんずそーどと復活したうおるたーが合流した。

さすがのジェノザウラーも自分を吹き飛ばしたぐらんととへぶんずそーどとうおるたーの三体には少したじろいだ。

三体は得意の連携を生かしジェノザウラーに攻撃を仕掛けた。

へぶんずそーどが速さで攪乱しながら足技で翻弄し、うおるたーがビームで遠距離攻撃を仕掛け、ぐらんとがその巨体を生かした一撃をみまう。

その波状攻撃にジェノザウラーは大ダメージを受け疲労困憊の状態だった。

そしてジェノザウラーは最後の力を使い集束荷電粒子砲を放った。

放たれた集束荷電粒子砲は真っ直ぐに進み後方にいたAとこのちやのいる場所に向かった。

それに気づいた三羅将達。



しかしすでに放たれた集束荷電粒子砲にはへぶんずそーども追い付くことが出来ず三羅将はただ届かない手を伸ばすしかできなかった。

そして集束荷電粒子砲がA達のいる場所へと直撃した。

~~~~~

俺達の目の前に迫るジェノザウラーの集束荷電粒子砲。

へぶんずそーど達は間に合いそうにない。

俺はこのちゃを抱き抱えると強く抱きしめた。

このちゃ「や〜」

このちゃも俺に強く抱きつく。

迫り来る死の一撃。だがしかし不思議と恐怖は感じなかった。

何となく分かったからだ。

俺達は死なない。

アイツが俺達を護ってくれと分かっているからだ。

そして集束荷電粒子砲が直撃した。

~~~~~

集束荷電粒子砲の直撃した場所からは砂煙が立ち込めどろったかがわからない。

三羅将は茫然自失となっている。

ジェノザウラーは隙を見て逃げようとするが、突如として巨大な殺気に晒され身動きがとれなくなった。

立ち込める煙が晴れその殺気の持ち主が現れた。

A「やっぱり助けてくれた 信じてたよ」

このちゃ「や〜!」

A達を集束荷電粒子砲の直撃から護ったのはかつてA達とともに暮らしたこのちゃによって救われた存在。

デビルガンダムであった。

DGは集束荷電粒子砲の当たる直前に手をA達の前に出し庇ったのだ。

DGはAとこのちゃを助けられ安堵する。そして自分の大切な者を危険に晒したジェノザウラーに最大級の殺気を放った。

自分が目の前の存在に勝てないという事をジェノザウラーは本能的に感じ取ってしまった。

ジェノザウラーは恐怖にからるその場から逃げ出そうとするが、D  
Gはそれを許さず地面から出現させたガンダムヘッドで拘束をする。

ジェノザウラー「G a a a a a ! ! !」

逃げようともがくがガンダムヘッドの拘束を外すことが出来ない。

D G「G u u u u u ! !」

D Gは頭部から高威力のビームを発射する。

D Gの必殺技【メガデビルフラッシュ】である。

その攻撃を直に受けたジェノザウラーは跡形もなく消滅した。

~~~~~

このちゃ「や〜」

D Gに抱きつくこのちゃ。久しぶりに会えてうれしいようだ。

A「えっ!?! 渡君と他の子供が一緒にいるの?」

へぶんずそーど「クアー」

A「そう 良かった みんな無事で本当に良かった」

Aは涙を流し喜ぶ。

それから暫くしてAが落ち着いたのを確認し、DG達はA達を連れ一路ぶち達がいる渡の住んでいるキャッスルドランを目指して進んだ。

戦いはまだ始まったばかりである。

~~~~~

A「って言う夢を見たっていうの?」

このちゃ「やん!」

A「また凄いストーリーだね」

このちゃ「や」

A「じゃあそんな事が起きたとき助けてもらえるようにDGにお水をあげなきゃね!」

このちゃ「や」W

今日もまたいつも通りの一日が始まった。

~~~~~

続く!?

よんじゅっ！！（がいでん！）（後書き）

？「DG細胞の安定に成功 実験は第二フェイズが完了した 続いて第三フェイズへと移行する まもなくDG・ハンター計画が発動する」

よんじゅいちっ！(10)(前書き)

明日は、【マスターガンダム】【ユニコーンとクシャトリア】【アストレイ レッドフレーム】のどれかを出そうかと考えてます！どれが良いっすか？

最近ガンダムネタが多くなってきました　こんなんでもいいんだろ
うか？

ぶっちゃけネタはガンダムネタオンリーの方が良いですか？

よんじゅういちっ！(10)

くぶちます的な何か

A「今日はあやちゃんを観察しよーかな」

ルンルン気分でスキップしながら廊下を歩いていると、早速あやちゃんを見つけた。

例によって縁側にいるあやちゃん。

あやちゃん「にゃ〜」

?「俺がガンダムだ」

あやちゃん「にゃ〜ん」

?「俺がガンダムだ」

あやちゃん「ですわ!」

?「俺がガンダムだ」

A「何かまた不思議な子がいるなあ あれで会話になってるのかな？」

廊下にいたのは、一方的に会話をしている風のあやちゃんと、縁側に腰掛けて右手に大きな剣を持ったまま、下を俯いたまま、ぶつぶつと同じ事を繰り返しているぶちモビ（ぶちもビルスーツ）がいた。

あやちゃん「ですわ」

？「俺がガンダムだ」

あやちゃんの話しかける言葉に相槌のように同じ言葉を繰り返している。

どうやら、あやちゃんがぶちモビの世話を焼いているようだ。

あやちゃん「にゃん」

？「俺がガンダムだ」

A「たぶんあやちゃんは手の掛かる弟みたいに感じてるんだろうな」

その光景を見ていたAは二人の様子がまるで弟に世話を焼く姉と弟に見えた。

そんな微笑ましい光景を眺めていたAはふと庭に入ってきた陰に気づいた。

？「なんだエクシア こんなとこにいたのか」

軽快にはなす人影（？）の声に顔を上げるエクシアと呼ばれたぶちモビ。

エクシア「デユナメス」

初めてガンダムだ意外の言葉を発したエクシア。

あやにゃん「ですわ？」

デユナメスの突然の登場に首を傾げるあやにゃん。

デユナメス「すまないなお嬢さん 俺はコイツの兄貴のデユナメス
つてモンだ コイツが何か迷惑をかけなかったかい？」

デユナメスは眼帯をした方と逆の目を細め笑いながらあやにゃんに
話しかけた。

あやにゃん「にゃー！」

デユナメス「そうかい そいつは良かった コイツは兄弟の中でも
特に無口でな人見知りもヒドいからなかなか親しいヤツも出来やし
ない 悪いんだがコイツの友達になつてはくれないか？」

デユナメスの申し出をあやにゃんは大きく首を振って頷いた。

デユナメス「そうかそいつは良かった ほらエクシア こちらのお
嬢さんに礼をいっとけ」

エクシア「俺達がガンダムだ！」

あやにゃん「にゃん！」

どうやらコレがエクシア風の感謝の表し方なのだろう。

デユナメス「よかったな」

デユナメスも弟に友達が出来たことが嬉しかったのか目を細め笑っている。

その時デユナメスに声をかける人物（？）が現れた。

？「おいデユナメス 何時まで油を売っているつもりだ エクシアがいたのなら早く連れてくるんだ」

デユナメスに声をかけたのは巨大なバズーカを背負ったぶちモビであった。

デユナメス「ああナドレかどうしたんだ？」

？「ボクをナドレと呼ぶな！ ボクの今の名前はヴァーチエだ」

ナドレと呼ばれたぶちモビは怒り出し名前を訂正させた。

デユナメス「ああ悪かったよヴァーチエだったな」

ヴァーチエ「ふん 全く、こんなのがボクの兄だなんて最悪だ」

怒るヴァーチエ。デユナメスはおいおいと言いながらも笑っていた。

ヴァーチエ「エクシア君もマイスターなら自覚を持つことだ マイスターに相応しくないようならその時はボクがキミを断罪する」

エクシア「悪かった ヴァーチエ」

ヴァーチェの言葉に素直に謝るエクシア。

ヴァーチェ「ふん 謝るなら初めからやらないことだ」

デュナメス「コイツ、お前がいなくなつて一番取り乱してたからな」

ヴァーチェ「なっ!?! デュナメスアナタと言う人は!」

言い合いになったデュナメスとヴァーチェを微笑ましく眺めながら
エクシアに近づくとあやにゃん。

あやにゃん「にゃ」

エクシア「俺達がガンダムだ」

会話は相変わらずだが何となくさっきよりは近くなったように感じるあやにゃんであった。

?「デュナメス、ヴァーチェそろそろ帰ろうよ」

未だに言い争っていたデュナメスとヴァーチェに声をかけた人物(?)がいた。

デュナメス「おキュリオス お前さんもきたのか」

キュリオス「うん エクシアが心配だったし キミとヴァーチェが
ケンカしてないか見に来たんだ」

キュリオスと呼ばれたぶちモビはエクシアに近づくとそつと頭を撫

でながら言った。

キュリオス「心配したんだよエクシア？　ダメじゃないか勝手にいなくなっちゃ」

エクシア「俺にさわるな」

エクシアは照れているのかそう言った。

キュリオス「悪かったよ」

苦笑しながら手をどけるキュリオス。

デユナメス「さて　キュリオスも来たことだしそろそろお暇するか」

キュリオス「そうだね」

ヴァーチェ「ふん　ようやくか」

エクシア「」

皆は帰る用意をし始めた。

デユナメス「じゃあお嬢さん邪魔したな　これからエクシアの事頼むぜ」

あやちゃん「にゃん！」

エクシア「じゃあな」

エクシアが挨拶すると皆キュリオス（MA）に飛び乗り飛び去っていった。

あやにゃん「ですわ〜」パタパタ

あやにゃんはパタパタと手を振りながらエクシア達を見送った。

あやにゃんは新しい友達になったエクシアの事を考えながらいつまでも空を眺めていた。

~~~~~

A「あれ？今回出番少なくな〜ね？」

続く

よんじゅうちっ！(10)(後書き)

エクシア「俺が、俺達がにやんだむだ！」

マイスターズ「「えっ!?!」」

よんじゅうじゅういっぺん(11)(前書き)

今回はあのぷちモビが登場！



よんじゅうじゅう一(11)

「ぶちます的な何か」

A「ふんふんふん 今日にはちやよちゃんを見ようかなあー」

ルンルン気分で歩いているAはふわふわなちやよちゃんを探していた。

王蛇「またぶちまを観察しているのか？」蛇の着ぐるみ

ライア「俺の占いでは、今日は何だかちよつとした活劇が見られる」

タイガ「またインペラーがボコられるんじゃないの？」

インペラー「うらーそーこー！！ 不吉なこと言ってんじゃないよ！」

A「ええ 案外あの子達の知らない交友関係とか知れて面白いんすよ」

Aは家に来ていた王蛇達を引き連れてちやよちゃん観察をしようとしていた。

ちやよちゃん「ふわふわ」

A「あれ？ ちやよちゃんの声かな？」

王蛇「行ってみるか」

ちゃよちゃんの声が聞こえた方へA達はは歩いていった。

~~~~~

ちゃよちゃん「ふわふわ」ふわふわ

ミラージュフレーム（以下MF）「ガウガウ」

A「またまた知らない子がいるよ」

王蛇「変わった奴だな」

A達が見た先には、ちゃよちゃんと謎の紫色した子がふれ合っていた。

ちゃよちゃん「ふわふわ」ふわふわ

MF「ガウガウ」

インペラー「なんか野生児っぽい雰囲気だな」

タイガ「何か近しいモノを感じるな」

ミラージュフレームはちゃよちゃんの周りをガウガウ言いながら駆け回っている。

A「いったいどこの子何だろう?」

ライア「どうやら名前は『ガンダムアストレイミラージュフレーム』
と言うようだ」

A「えっ!? わかるの! それも占い!？」

ライア「いや、首輪にそう書いてある」

Aノタイガノインペラー「「スコー!!!」」

ライアの言葉に王蛇以外の三人が転けた。

A達はさらに二人を観察することにした。

MF「ガウガウ」

ちやよちゃん「ふわふわ」ふわふわ

タイガ「どうやら二人は前から知り合いみたいだな ずいぶんと
仲がよく見える。」

ちやよちゃん「ふわ」

MF「ガウガウ」

ちやよちゃんがMFの頭に掴まると、MFはちやよちゃんを乗せた
まま庭の周りを駆けはじめた。

ちやよちゃん「ふわわ」

M F「ガウガウ」バタバタ

きゃっきゃしながらM Fの頭に乗っているちやよちゃんは物凄く嬉しそうな顔をしている。

インペラー「すっげー楽しそう 仲良いんだな」二人は「

二人の雰囲気を見て笑みがこぼれるA達。

A達がじつと二人を観察していると、二人が何やらガサガサと始め注意深く見た。

M F「ガウガウ」

ちやよちゃん「ふわふわ」

どうやら二人は、おやつを食べるみたいである。(Aが用意したホットケーキ)

ちやよちゃん「はぐはぐ」パクパク

M F「ガウガウ」ガツガツ

王蛇「美味そうに食っているな」

ライア「あのホットケーキは君が？」

A「はい 良くぶちまあしゆなん達にせがまれるんで、作っている内に上手くなりました」

インペラー「へー美味そう」

タイガ「確かに」

A「今度皆さんに作りますよ。ぷちどる達も一緒に」

インペラー「そりゃいい」

そのような会話をしている間に、美味しそうにホットケーキを食べている二人の間に突如乱入者が現れた。

ケルベロスバクウハウンド「わん!」「わん!」「わん!」

乱入者してきたのは野良ケルベロスバクウハウンドであった。

ケルベロスバクウハウンドは、腹を減らしているのかホットケーキの匂いに釣られてやってきたようである。

ちやよちゃん「ふわわ」ビクビク

MF「ガウ〜」

ケルベロスバクウハウンドに威嚇をするMF。

タイガ「ヤバい!? 助けなきゃ!」

インペラー「おう!」

王蛇

「イヤ待て」

二人を制止する王蛇。

タイガ「何で止めるんだ！」

インペラー「二人がやばいぜ！」

王蛇「良いから見てる」

王蛇は静かに言うと二人をそつと見始めた。

~~~~~

ケルベロスバクウハウンド一郎「わん！」二郎「わん！」正「わん  
！」

M F「ガウ~~~~」

一触即発のこの状況に先に動いたのはケルベロスバクウハウンドで  
あった。

ケルベロスバクウハウンド一郎「わん！」二郎「わん！」正「わん  
！」

ケルベロスバクウハウンドはホットケーキを持っているちゃよちや  
んに飛びかかった。

タイガ「ヤバイ！」

タイガ達の脳裏に、最悪の光景がよぎる。

MF「ガウッ！」

しかし皆が想像した最悪の事態は起こらなかった。

MFの咆哮と共にMFの顔が反転し、両腕が折り畳まれると巨大な実大剣が現れ足が回転し巨大な爪が出現する。

これがMFの近接格闘形態のグラディエーターモード（格闘形態）である。

MF「G r a a a a a ! !」ズバツ

バクウは驚き動きを止めた。

MFはその隙を突いて腕を交叉しながら十字に斬りつけ見事ケルベロスバクウハウンドを撃退したのだった。

ケルベロスバクウハウンド一郎「きゃん！」二郎「きゃん！」正「きゃん！」

ケルベロスバクウハウンドは逃げて行きちゃよちゃんは助かったの  
であつた。

~~~~~

王蛇「大丈夫だったろ」

タイガ「分かっていたのか？」

ライア「ああ俺の占いは当たる」

A「俺も聞いてたから」

インペラー「なんだよ〜だったら早く言えよな〜」

どうやらライアの占いで分かっていたようで二人は安堵の息を吐くのだった。

~~~~~

ちやよちゃん「ふわふわ〜」ふわふわ

MF「ガウガウ」

どうやらMFが帰るようで、ちやよちゃんは少し寂しそうな顔をしているが、手を振って別れの挨拶をした。

MF「ガウガウ」ブンブン

MFは手を振りながらバタバタと走り去っていった。

ちやよちゃん「ふわふわ〜」ふわふわ



A「ちゃよちゃん インペラー達が遊びに来てるからこっちにおいで〜」

Aは寂しそうにしているちゃよちゃんに声をかけると手招きをして呼び込んだ。

ちゃよちゃん「ふわふわ〜W」ふわふわ

ちゃよちゃんは先程のような寂しげな顔ではなく、Aに呼ばれ笑顔でふわふわしながら家の中に入っていくのだった。

~~~~~

ライア「結局のところ、特に何もなかったな どうやら俺の思い過ごしだったようだ」

？」「…」「ウニヨウニヨ

ゲームはまだ始まらない…。

~~~~~

その日の夜

あしゅなん「ね〜！」「ゴチン

インペラー」オフウ…!」「ドサッ



続く!

よんじゅつにっ！(11)(後書き)

？「ミラージユフレームなかなかのサンプルだ　これで次のフェイズへと飛躍的に移れるな」

パンダなぶちま「アル！」

ウーパールーパーなぶちま「ですね」

？「コポコポ

よるにうたひれんしん！ (前書)

今回はこの

よんじゅうせんっ！

くぶちます的な何か

晴れた日の午後Aが何気なく外を覗いてみるとキョロキョロしているみづらさんがいた。

みづらさん「あら〜」キョロキョロ

A「あれ？ みづらさんなんであんなとこに？」

Aは慌てて外に出るとみづらさんの下にまで駆け寄った。

A「みづらさんどうしてこんな場所に？」

みづらさん「あら〜？」

みづらさんは頬に手を当て微笑みながら首を傾げた。

A「うーん取りあえずウチに来なさい」

みづらさん「あらー」

Aはみづらさんを抱き抱えると自分のウチへと戻っていった。

~~~~~

取りあえずみづらさんを家に招きあげたAは今後をどうするか考えていた。

A「やっぱり連絡しとかないと不味いよな」

みづらさん「あら〜「ちょこたぷーん

みづらさんはAの前で顔に手を当てちょこんと正座をしている。

「のちや」「や〜っ」

みづらさん「あらーあらー」

みづらさんが座っているとろに「のちや」が入ってきた。

「のちや」「や〜」

みづらさんの登場に喜ぶ「のちや」。

みづらさん「あ〜っ」

みづらさんは「のちや」に近づくと「のちや」をつつ伏せにして頭をなで始めた。

みづらさん「しづら」なでなで

「このちゃ」「や〜W」「m（m）」

みづらさん流スキンスリップを受けたこのちゃは物凄く嬉しそうである。

「このちゃをひとしきり撫でたみづらさんはこのちゃを解放した。」

「このちゃ」「や〜」「撫でられて少しくっしゃくしゃ

A「あつこのちゃ みづらさんと挨拶したんだね 一応事務所に連絡しといたからすぐに迎えが来ると思うよ!」

みづらさん「あら〜」

「このちゃ」「やん!」

A「取りあえずはそれまでお茶でも飲んで待ってようか?」

Aはお茶の用意をするべく台所へと向かった。

みづらさん「あら〜」

「このちゃ」「や〜」

~~~~~

A「さーてお茶を入れますか」

茶葉を取り出し急須に煎れてお湯を注ぎはじめた。

A「さて少し待って煎れるか」

Aはお茶分けに出すお茶菓子を確認するためにお茶分け入れの蓋を開けた。

パカッ

？「　」ボリボリ

A「ピョッ!？」

なんとお茶分け入れを開けると、中から暗い色をしたぶちモビが顔を出したのだった。

せんべいを食べながら。

驚いたAは手に持っていた蓋を床に落としてしまった。

カチャン

？「　!？」レツッゴー

フヒュッ

蓋が床に落ちた瞬間謎のぶちモビはAの目の前から消えたのだった。

A「何だったんだ？」



Aはぶちモビがいたお茶分け入れを見ると中に一枚の紙が入っていた。

『「ちそうさまでした はるふあす」』

A「はるふあす？ さっきの子の名前かな？」

Aはそう呟きながら紙をポケットにしまつと新しいお茶菓子を用意しお茶を注ぎ居間に待つみづらさんとこのちゃの下へと向かった。

~~~~~

みづらさん「あら〜」「こたぷーん

このちゃ」「や〜」

ハルファス「ドギヤーン

A「って早速いるし!?!?」

思わずツツコミを入れるAだった。

みづらさん「あらー」スタンバイ

ハルファス「!」レッツゴー

A「しまっ
」

フヒュッ

Aの突っ込みに驚いたみうらさんとハルファスはAを巻き込み飛んだのだった。

このちゃ「やつー!？」

後に残ったのはびっくりした顔をするこのちゃだけだった。

~~~~~

A「さびー じ、じいはどこなんだ」ガタガタ

みうらさん「あひひひひーっぶしっ」

ハルファス「へっぶし」

.. じの後みんなは無事に帰れました。 ..

~~~~~

続く!

よんじゅうさんっ！(後書き)

？「間もなく第三フェイズが完了する」

よんじゅうよんっ！！（1）（前書き）

久々に新キャラ登場ですよ！

いつもより短いです。すいません！

よんじゅうよんっ！！（1）

くぶちます的な何か

A「どうしてこうなった」

Aの目の前に繰り広げられている光景。

?「ビエーツ！」

ぐるぐる巻きになっているおサルな一匹のぶちま。

リボンで雁字搦めになって抜け出せなくなったのか大声で泣いている。

A「取りあえず助けてやるか」

泣いているぶちまを抱き抱えると絡まったりリボンを解き始めた。

A「よいしょっと ほら解けたよりボン」

?「ウキ」ずびっ

ハナをすすり声を漏らすぶちま。

A「んー新しいぶちまだよ どうしてリボンなんかで絡まってたの

「？」

おサルなぶちま「キー」

おサルなぶちまは事の顛末を話し始めた。

~~~~~

おサルなぶちま「キー」テクテク

ニコニコしながら歩くぶちま。手にはバナナとリボンが一つ。

おサルなぶちま「ウキー」クルクル

ご機嫌にリボンを回しながらテクテク歩いている。

おサルなぶちま「キ？」

目の前には見たことのない生き物がいた。

？「なのね！」

おサルなぶちま「キー？」

見たことのない生き物はトコトコと歩いてくると急におサルなぶちまからバナナを奪い取った。

おサルなぶちま「キー！」

バナナを奪い取った生き物は走り出し逃げようとするがおサルなぶちまはすかさずリボンを伸ばし捕縛する。

おサルなぶちま「ウキーー!!」グイッ

?「なのねー!」バタバタ

バナナを奪い取った生き物はリボンで捕獲されながらもバタバタと走り回りリボンから逃れようとする。

?「なにょー!」

おサルなぶちま「ウギーー!」

バナナを奪った生き物はおサルの周りをぐるぐる回り始め。

おサルなぶちま「キーー!」ぐるぐる

?「なのねー!」バタバタ

ついにはおサルはぐるぐる巻きの簀巻き状態になりバナナを奪った生き物を縛っていたリボンは解けてしまった。

おサルなぶちま「キッ」ぐるぐる

目を回し倒れるおサル。

?「なのー!」バタバタ

リボンから解放された生き物はバナナを持ったまま一目散に走り去っていた。

おサルなぶちま「ウキ」

~~~~~

Aはおサルなぶちまの話を聞き凄いしょっぱい顔をしていた。

おサルなぶちまは不思議そうな顔でAを見る。

A「取りあえずウチにきなよ　もしかしたらバナナがあるかもしれないし」

おサルなぶちま「キー！」

Aは申し訳無さそうに言つとおサルはAの肩に掴まった。

Aは家に向かうべく歩き出すのだった。

~~~~~



よんじゆしよんしー…(1) (後書き)

あしゆなん「はぐはぐ」むじやむじや

「のちや」「ち」「シルシ

よんじゅうじゅう一 (2) (前書き)

今回は繋ぎになりますのでスツゴい短いです。

キリは良いような感じはするんですが…

よんじゅうじゅう一 (2)

「ぶちます的な何か」

A「はいウチに着いたよ」

おサルなぶちま「ウキーW」

A「そう言えば、ネギま!?!のあのキャラに似てるよね?」

おサルなぶちま「ウキ?」

不思議そうな顔をするおサルなぶちま。

A「まあいつか」

おサルなぶちまを連れてAは家の中へと入っていった。

~~~~~

あしゅなん「はぐはぐ」「むしゃむしゃ

このちゃ「や」「ツルツピタン!

そこら中に散乱するバナナの皮で転ぶこのちゃ。

A「ただいま〜ってなんじゃこりゃ!?!」

部屋の惨状をみたAは大声を出して驚いた。

あしゆなん「なによね〜」もぐもぐ

このちゃ「や〜」ツルツビタン!

部屋を見渡してAの目に飛び込んできたのはロイツパイにバナナを詰め込んだあしゆなんとそのバナナの皮で転んでいるこのちゃであった。

おサルなぶちま「ウキー!!!」

あしゆなん「によね!?!」

ほっぺぱんぱんなあしゆなんを見つけたぶちまは乗っかっていたAの肩からあしゆなんへと飛びかかった。

おサルなぶちま「ムキー!!!」ポカスカポカスカ

あしゆなん「なよ〜」ポカスカポカスカ

ついには喧嘩を始めてしまった二匹。

A「こらヤメ口お前たち!」

慌てて二匹を引き離すA。

おサルなぶちま「キー！」じたばたじたばた

あしゆなん「ねー！」じたばたじたばた

A「（この二匹どうしようか）」

離してもなおじたばた動く二匹をどうしようかと考えるAであった。

A「はあ 先が思いやられる」

おサルなぶちま「ウキー！！」じたばた

あしゆなん「なのねー！」じたばた

~~~~~

その頃このちは

このちや「や」ツルツビタン

いまだにスベっていた。

~~~~~

続く！

よんじゅうじゅうにー！(2) (後書き)

このちゃ「や」ツルツビタン！

せちゆな「めー」ツルツペチン

ハルファス「…」すってんころりん

よんじゅうごう！(3) (前書き)

後書きにて今後を左右するかもしれない質問書きます！良ければ意見をば！

よんじゅじぶくっ！ (3)

くぶちます的な何か

おサルなぶちま「キー！」

あしゆなん「ね！」プイッ

A「（いやー困った。まさかと思ったけどやっぱりバナナを盗ったのはあしゆなんだったか）」

二匹の状態を見て冷や汗をたらすA。

おサルなぶちま「キー！キー！」

あしゆなん「なーのね」プイッ

おサルなぶちまは、あしゆなんに言いよるがあしゆなんは全く取り合おうとせず、顔をプイッと背け無視している。

A「（さっきからこの状態なんだよな。全面的にあしゆなんが悪いんだけど…取りあえず）」

おサルなぶちま「キー！」

あしゆなん「なーのねW」プイッ

おサルなぶちま「ムキー!!!」グスッ

ムキになって叫ぶおサルを明らかにおサルをからかっている風のあしゅなん。おサルは涙ぐみ、背を向けているあしゅなんの顔はほくそ笑んでいた。

A「(ムッ) あしゅなん 人様のオヤツを食べた悪い子は3日間オヤツ抜き」

あしゅなん「なのねーっ!!!」アガーン

Aの死刑宣告にも似た言葉にショックを受けるあしゅなん。アガーンとした顔のまま真っ白くなったあしゅなんは、そのまま固まって動かなくなってしまった。

A「しばらく反省してなさい」

Aはおサルを抱き上げるとあしゅなんを残し部屋を後にした。

あしゅなん「な、なの、ね」チーン

~~~~~

おサルなぶちま「ウキー」ズズ

A「まったく、泣き虫だなまっつきーは」

おサルなぶちま「ウキー？」

Aの口にした名前らしき単語に不思議そうに首を傾げるおサルなぶちま。

A「イヤーいつまでも名前がないと不便だし、君ネギま!?のまき絵に似てるからさ 勝手に名付けちゃったけど 気に入らなかったかな？」

おサルなぶちま「キー」「ブンブン

まつきーは首を振り否定する。どうやら気に入ったようだ。

A「じゃあ今日から君は『まつきー』だ」( ) (ドヤ

まつきー「ウツキー！」

大手を広げて喜ぶまつきーを見てAも笑顔になった。

A「さあ あしゆなんが食べちゃったバナナを弁償するよ 確か台所に“ファイティングバナナ”があつたはずだから」( ^ ^ )

まつきー「ウキー!!!」d ^ ^ bピヨン

よほど嬉しいのか、まつきーはAの肩に飛び乗ると、ペタンとAの肩に座り、首を左右に振りながら歌い始めた。

まつきー「キ、キ、ウツキツキー」d ^ O ^ b

A「じゃあ、行くところかまつきー？」

まつきー「キーW」d ^ ^ b

二人は笑いながら台所に向かうのだった。

~~~~~

その頃のあしゆなは

あしゆな「なのね」アガーン

いまだに固まったままだった。

このちゃ「や」W「く） く ツルツピタン

このちゃはどうやらバナナでスベるのにハマってしまったらしく、
まだスベっていたのだった。

~~~~~

続く！

よんじゅうろく！(3) (後書き)

どうもAです。

皆様の意見を頂きたいと思っています。

ぶっちゃけ今後もSDガンダムとか出した方が良いでしょうか？

最近なんかブレてる気がしてならないんですね。

初めはぷちま+ネタ=ギャグ

みたいなのが書きたかったんですが最近ではSDガンダムが前に出てきて、自分で書いてて違うくね？って思うのですよ。ネタとしては出したいんですが

ただ、SDガンダム出さないと今以上に読者減りそうな感じもあるんですね ;

皆様意見を頂けないでしょうか？

書いた方がいい

書かない方がいい

どちらか感想でもメッセージでも良いので送ってください。お願いします！

なにも無い場合は、今後この作品の中ではSDガンダムはだしませ

ん。  
勝手ではありませんが、よろしく願いします！

よんじゅつななっ！(しゅっちようきねんがいでん)(前書き)

今回作者を含めぶち達みんなが出張してまいりましたW

それですので、今回は鳴神 ソラの作者ライぷちの最新話のラスト直後の話になります。

そちらを見ていただいてからの方が楽しめます。

ではどごごぞー！

よんじゅうななっ！(じゅうちようきねんがいでん)

くぶちます的な何か

A「いやくドキッ！ぶちだらけの水泳大会楽しかったね」

アイドル達が主催するドキッ！ぶちだらけの水泳大会から帰ってきたAは一息つくのだった。

このちゃ「や」「こんがり

せちゆな「めー」「こんがり

あしゆなん「なのね！」まっくろこげ

あやにゃん「ですわ！」「こんがり

ザジュ「「こんがり

パルナ「ソフ！」「こんがり

ちやよちゃん「ふわふわ」かりふわ

Aの目の前にはプールでこんがり焼かれたぶちま達がいた。

A「しかし焼けたね」みんな真っ黒じゃん ザジュに関しては何か



もう良い塩梅で炙られてるよね　・クルツと丸まっちゃってるしね」

ザジユ「肴はスルメにするめ？」「こんがり

A「冗談に聞こえないよ」

体を張ったギャグである。

ひとまずザジユを放置し他のぶちま達に目をやった。

A「しかし本当に焼けたね　特にあしゆなん」

あしゆなん「なのね！」まっくろこげ

Aの目の前にはこんがりを通り過ぎたまっくろこげな状態のあしゆなんが元気そうに手を挙げていた。

A「どうしてまっくろこげだけ他の子より真っ黒な分け？　墨頭からぶつかかったみたいに黒いじゃない」

あしゆなん「ね〜？」まっくろこげ

A「まあいいや　考えても多分ぶちまだからって理由でまとまりそうだし：」

Aは考えることをやめ他のぶちまを見た。

A「逆に（？）このちゃにせちゆな、あやにゃんとパルナとちやよちゃんは普通だね」

このちゃ「や〜」「こんがり

せちゆな「めー」「こんがり

あやにゃん「ですわ!」「こんがり

パルナ「ソフW」「こんがり

ちゃよちゃん「ふわふわ〜」「かりふわ

A「しっかしこんだけみんな立派に焼けちゃうと後が大変そうだよ  
ね」

ぶちま達の日焼け具合をみて口を開くA。

このちゃ「や〜?」「こんがり

せちゆな「めん?」「こんがり

あしゆなん「ねー?」「まっくろこげ

あやにゃん「にゃ?」「こんがり

ザジュ「?」「こんがり

パルナ「ソフ?」「こんがり

ちゃよちゃん「ふわふわ〜?」「かりふわ

A「日焼けの後ってかゆくなるから全身焼けちゃうと大変かもよ〜」

Aは日焼けで現れる体の異変を伝えた。

このちゃ「や」W「こんがり

せちゆな「めー！」「こんがり

あしゆなん「なのね！」「まっくろこげ

あやにゃん「ですわW」「こんがり

ザジユ「こんがり

パルナ「ンフフW」「こんがり

ちゃよちゃん「ふわふわ」W「こんがり

Aの言った言葉に特に目立った反応をしないぷちま達。

A「あれ？ みんな反応薄いね 結構な痒みよ？」

Aの言葉に皆は顔を見合わせ各々自分の体の部位を掴んだ。

このちゃ「や」「頭部をグイッ

せちゆな「めん！」「鶴の頭をグイッ

あしゆなん「なのね！」「背中に手を回してグイッ

あやにゃん「ですわ！」「胸元を手で掴みグイッ

ザジュ「八本の手足を使い左右にグイッ

パルナ「umpf!」触角をグイッ

ちやよちゃん「ふわふわ」Aに端っこを持たせてAがグイッ

そして皆一様に掴んだ部分を引っ張った。

このちや「や」キユポン

せちゆな「めん!」キユポン

あしゆなん「なのね!」キユポン

あやにゃん「ですわ!」キユポン

ザジュ「バリッ

パルナ「umpf!」キユポン

ちやよちゃん「ふわわわ」くるくるくる

すると引っ張った部分から綺麗に脱げてさっきまでこんがりだったぶちま達の肌が元の全く焼けていない状態の肌が出てきた。

ただちやよちゃんだけがバカ殿の腰元みたいにくるくると回されてそのまま剥けていた。

A「えー!!! ウッソー!？」

目玉が飛び出るほど驚いたA。

このちゃ「や」つるつる

せちゆな「めん！」ツヤツヤ

あしゆなん「なのね！」テカテカふんす！

あやにゃん「ですわ！」ツヤツヤ

ザジユ「ポツ」ツヤツヤ手鏡を見ている

パルナ「ンフ」！「ツヤツヤ

ちゃよちゃん「ふわふわ」ぷるぷる

逆に元の肌より状態が良いかもしれない。

この日Aはまた一つぶちま達の謎を垣間見たのだった。

~~~~~

続く！

よんじゅつななっ！(しゅっちようきねんがいでん)(後書き)

A「回のアンケートの結果、8000人の方が答えていただきSD
ガンダムは今後も出演する事に決定いたしました！」

このちゃ「や」W「ドンドンドン

せちゆな「めん！」パフパフ

A「アンケートに答えてくださった皆様ありがとうございました！」

このちゃ「や」

せちゆな「めん！」

D G 「」うにょにょにょ

よんじゅうはちっ！(1)(前書き)

今回も新キャラが登場！

あとあのキャラもW

よんじゅうはちっ！(1)

くぶちます的な何か

【前回までのあらすじ】
上手に焼けました

A「おー上手いなまつきー」

まつきー「キー」くるくる

Aに誉められとリボンの回転する速度を上げるまつきー。

Aは今まつきーのリボンの演技を見物しているのだった。

A「しかし急にバナナのお礼に新体操を見せてくれるなんてどうしたの？」

まつきー「キー」くるくる

リボンをしながら脚を上げたり、体を動かし美しい演技を魅せる。

A「えっ？バナナのお礼もそうだけど家に住まわせてくれたお礼だっ
て？」

まつきー「ウツキーW」くるくる

そうなのだ。今まつきーはAの家に住んでいる。それはまつきーが一人で住んでいてAが可愛そうだと思ひ仲間のいる自分の家に招いたのだった。

まつきー「ウキッ！」シュッ！ぱしっ

そうこうしている内にまつきーは投げたりボンをキャッチしてまつきーの演技が終了した。

A「おーブラボー！」パチパチ

まつきーの演技を見たAは物凄い楽しそうな顔で拍手を浴びせた。

まつきー「キー／／／」テレテレ

Aの拍手で照れたのか顔を赤くしながら頭を掻きだした。

A「いやー良いもの見れたよ 凄く感動したよ！ それに可愛かったしW」

まつきー「キー／／／」

まつきーは恥ずかしくなったのかぴよんぴよんと跳びながら部屋の奥に消えていってしまった。

A「ありや？逃げられちった そんなところも可愛いんだけどなあW」

Aは真つ赤になりながら跳び去ってしまったまつきーを思い浮かべながらと苦笑した感じで笑っていた。

A「さて まつきーが落ち着くまで少し外に出てくるかね」

Aはそう言つと家を後にした。

~~~~~

A「んゝ さーて何をするかなあ」

軽く伸びをするとこの後の事をどうするか考え始めた。

A「でも何かこのまま歩いてたら新しいぶちまとかに会いそうだな  
まつきーの話で三話もやった訳だし」

何気にメタ発言をかましてしまうAである。

A「さてとりあえず歩き回るか」

しれつとメタ発言をかました後Aはそのままブラブラと歩き始めた。

~~~~~

A「800超したしそろそろ出てくると思っただけだな？」

更にメタ発言を放り込んだA。いい加減にしないとこの小説の存続
に関わるぞ！

A「んゝもうちょっと向こうに行ってみるかな？」

Aは更に歩き始めた。

すると草むらからガサガサと言つ音が聞こえてきた。

A「おっなんかいる なんだろう?」

Aは草むらに近づくと中をのぞき込んでみた。

野良ネコ「にゃー」

A「なんだ野良ネコか」

走り去る野良ネコ。

ガサガサ

A「次はあつちか？」

次の草むらを覗き込むA。

野良犬「ワンワン!!」

A「今度は野良犬か？」

走り去る野良犬。

ガサガサ

A「今度はあっちか？」

次にのぞき込むと。

野良ハロ「テメー コノヤロー」

A「今度は野良ハロだ 逃げたか捨てられたのかな？」

出てきたのはパープルブラックの野良ハロだった。

野良ハロ「クロス！クロス！」パタパタ

A「イテテ 噛みつくなよ」

目つきや口が悪く、攻撃的な面があるが可愛そうなので野良ハロを抱えるA。

ガサガサ

A「むつまたか？ 今度はあっち」

次の草むらを覗き込むA。そこにいたのは

？「よねー」

？「くぎゅー」

？「うー」

草むらの中から現れたのは三匹のぶちまけであった。

A「ほらやっぱりね（苦笑）」

野良ハロ「ハロ！ハロ！ハロ！」パタパタ

予想が当たったAは苦笑いをする。

その横で小脇に抱えた野良ハロも羽をパタパタさせながらただ鳴いている。

Aは目の前の三匹をどうするか考え始めていた。

~~~~~

続く！

よんじゅうはちっ！(1)(後書き)

？「試作型のGハンターが完成した D G細胞安定、各システム異常なし 計画は次のフェイズに移行する」カチャカチャ

Gハンター「」

？「まもなく、第4フェイズに移る 最初のターゲットは「カチャカチャ」

よんじゅうきゅう！(2)(前書き)

新しい子達の名前が決まります！

そして最後に衝撃の急展開が！

鳴神 ソラさんスイマセン( ) ( ) m

本文最後の文は逃走中のナレーションぽく読んでみてください。

よんじゅうきゅうー！(2)

くぶちます的な何か

【前回のあらすじ】

新しい子がくぎゅーでした。

A「はい」と言うわけで家に帰ってきました　とりあえず連れて来ちゃったけどどうすっかな？」

？「よねー」

？「くぎゅー」

？「うっー」

H A R O「ヨケイナコトスルナー」

Aの目の前には先ほど見つけたぶちまの三匹と野良八口がたたずんでいる。

A「まあ連れてきてしまったのはしょうがない　とりあえず名前がないと不便だよな」

三匹のぶちまを見て悩むA。



A「君はネギま!?!の美砂 君は円 最後に君は桜子に似てるんだ  
よね う〜ん」

美砂似ぶちま「よねー」

円似ぶちま「くぎゅー」

桜子似ぶちま「ううー」

A「よし! 決めた! 美砂似の名前は『みしゃ』 円似のぶちま  
の名前は『くぎみー』 桜子似のぶちまの名前は『ちやくら』」で  
どうだ!?!」( ) (トヤ

みしゃ「よねー!」

くぎみー「くぎゅー!?!」(、#)

ちやくら「ううー!」

Aの名付けた名前に反応を示す三匹。みしゃとちやくらは嬉しそうに  
しているがくぎみーだけは何故だか気に入らないようで反応が悪い。

A「あれー他の二匹は気に入ったみたいなのにくぎみーだけは気に  
入らなかったのかな?」

くぎみー「くぎゅー!?!」

A「まあ慣れるまでの辛抱だから 我慢してよ」

くぎみー「くぎゅー!?!」(。。(ガーン

Aは名前を変える気はないらしくくぎみーはショックを受けてひげを突いていた。

A「まあ何はともあれよろしくね みしゃ、くぎみー、ちやくら」

みしゃ「よねー」

くぎみー「くぎゅー」

ちやくら「ううーW」

三者三様の喜び方で返事をするぶちま達であった。

H A R O「ワスレルナ！ワスレルナ！」パタパタ

A「あつごめんごめん！」

~~~~~

ライア「Aの家に着いたか」

前回の訪問から妙な胸騒ぎの治まらないライアは再びAの家へと訪れていた。

王蛇「やはり胸騒ぎは治まらないのか？」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

一緒に着いてきていた王蛇とこあみとこまみ。

ライア「ああ俺の占いはよく当たる それにこの胸騒ぎ さらに俺の感が、ただ事ではないと告げている」

王蛇「そうか ならば気を引き締めねばならないな」

こあみ「とかー？」

こまみ「ちー？」

ライアと王蛇の話の内容が理解できていなかったのか頭に？を浮かべ小首を傾げている。

インペラー「そんなに気負う程のことかね？」

二人の会話を聞いていたインペラーは余裕を持った感じで二人に近づいてきた。

ライア／王蛇「 はあ」

インペラーの態度を見た二人は割と大きめため息を付いた。

インペラー「おい！何だよそのため息は！？ 最近扱い悪いぞ！」
割と本気で突っ込んでいるインペラー。

ライアノ王蛇「はあ」

そんなインペラーを見た二人は二人は更に大きなため息を吐くのだ
った。

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

~~~~~

？「ふん ライダー達が ちょうど良い、起動実験がてらに少し遊  
ばせてみるか いけ、Gハンター！」

Gハンター「「ビギン！」

もう一つの物語が動き始めた。

~~~~~

次回に続く！

1じじゅう…！【でぶおるまじあ・はありえーしょん】(1)(前書き)

今回はぶちまが出てきません

反応が怖いな

1じじゅっ！！【でぶおるまじあ・ばありえーしょん】（1）

くぶちます的な何か

ライア達がAの家へとたどり着く少し前、Aの家を覗いている謎の存在がいた。

？「ふん ライダー達か ちょうど良い、起動実験がてらに少し遊ばせてみるか いけ、Gハンター！」

Gハンター「ビギン！」

？「さあ仮面ライダーよ、私を楽しませてみる！」

~~~~~

ライア「Aの家に着いたか」

前回の訪問から妙な胸騒ぎの治まらないライアは再びAの家へと訪れていた。

王蛇「やはり胸騒ぎは治まらないのか？」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

一緒に着いてきていた王蛇とこあみとこまみ。

ライア「ああ俺の占いはよく当たる それにこの胸騒ぎ さらに俺の感が、ただ事ではないと告げている」

王蛇「そうか ならば気を引き締めねばならないな」

こあみ「とかー?」

こまみ「ちー?」

ライアと王蛇の話の内容が理解できていなかったのか頭に?を浮かべ小首を傾げている。

インペラー「そんなに気負う程のことかね?」

二人の会話を聞いていたインペラーは余裕を持った感じで二人に近づいてきた。

ライア/王蛇「 はあ」

インペラーの態度を見た二人は割と大きめため息を付いた。

インペラー「おい!何だよそのため息は!? 最近扱い悪いぞ!」  
割と本気で突っ込んでいるインペラー。



ライア／王蛇「　はあ」

そんなインペラーを見た二人は二人は更に大きなため息を吐くのだ  
った。

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

そんなライダー達を見たこあみとこまみはお互いに顔を見合つと  
鳴きするのだった。

ライア「ん？」

ひとしきりインペラーを弄ったライア達。その時ふと何者かの視線  
を感じた。

王蛇「ライア」

ライア「ああ何者かは知らないが此方を見ている者がいるな」

インペラー「しかもすげー殺気だぜ」

ビリビリと感じる凶悪なまでの殺気を浴びせられながら三人は辺り  
に最大級の警戒をしながら構える。

こあみ「とかー？」

こあみ「ちー？」

三人の異変に気づいたのか不思議そうな表情を浮かべるこあみとこまみ。

王蛇「つ来るぞー!!」

ライア「!?」

インペラー「なに!!」

王蛇の声を合図にライアとインペラーは空中を見上げた。

インペラー「なっ!?!」

三人が見上げた先には屋根の上に降り立ちライダー達を見つめる異形の黒い影が佇んでいた。

大きさはライダー達の腰くらいまでの身長をしており、全身が機械の身体をした恐竜のような姿をしている。

Gハンター「Gruuuuu」

ズシャアー

機械の恐竜は低いうなり声を上げ屋根から飛び降り、ライダー達の前へと降り立った。

Gハンター「Gruuuuu」

ライア「どうやらこれが俺の胸騒ぎの原因の様だ!」







ライア「まさか」

王蛇「」

三人は自分の目を疑い驚愕する。

先ほどまで機械の恐竜であったモノが徐々にパーツを組み換え人型へと変形していく。

ガンダムJZ「Gruuuuu」

変形を終えライダーを睨むジェノザウラー。

ジェノザウラーの姿は先ほどとは違ってかわり太い脚は腕に、顔が縦に割れ足に変形している。

太い尻尾は身体から外れ、右腕に槍のように構えている。そして特徴的なのはV字型のアンテナを額に付けた人型の頭部と胸に当たる部分に描かれた紫の顔の様なマーク。

インペラー「コイツは何の冗談だ？」

インペラーは引きつった笑いをする。

三人の間に嫌な緊張感が流れる。

ガンダムJZ「Graaaaaaa!!!」

恐怖を呼び覚ます咆哮が辺りに木霊した。

続く！







いじゅついちっ！（しゅっちよつきねんがいでん）（前書き）

今回の話はLAN武さんの作品である、清涼祭コラボ番外編『芹香と二人の迷子』のすぐ後の話になります！良ければぜひ読んでみてください！

やべー絶対LAN武さんに怒られる

すみませんでした！

しゅっしゅっ！（しゅっしゅっきねんがいでん）

くぶちます的な何か

A「いや〜清涼祭楽しかったね！」

このちゃ「やん！」

せちゆな「めん！」

Aは家の近くでやっていた高校の学園祭へこのちゃとせちゆなを  
伴い顔を出しに行ってきたのである。

A「瀬川さん、いい子だったね 二人を保護してくれたし、二人と  
一緒に俺を探してくれたんでしょ？ まったく今時には良くで  
きた娘だよ」

学祭で出会ったばいんばいんな女の子の事を思い出したAは顎に手  
を当てながらウンウンと首を振りながら頷いていた。

A「それにしても まったく、二人が迷子になったときには心配し  
たんだぞ？」

Aは勝手にいなくなったこのちゃとせちゆなに眉毛を少しムツとさせ  
注意をした。

このちゃ「や〜」シュン

せちゆな「め〜」シユン

Aに怒られたのが堪えたのかまゆをハの字にしてシユンとしてしまった二人。

A「怒ってるんじゃないよ 本当に心配したんだ 現にガラの悪い奴らに捕まってただろ？ あの現場を見たときマジでヒヤツとしたよ ムツ何だか思い出したらまたムカツとしてきたな あと8ページ分ぐらいの無駄無駄叩き込んだきゃ良かった」

学園祭でのあの出来事を思い出したのかムツとした顔で危険な事を口走っていた。

A「でも本当に無事で良かった」

ニツコリと笑い優しい微笑みを二人に向けるA。

このちや「や〜ん」めそめそ

せちゆな「め〜ん」グシグシ

A「おっと！」「ぎゅっ

二人はAの言葉に本当に自分達を心配していたのだと感じ目尻に涙を溜めて抱きついた。

このちや「や〜」

せちゆな「め〜ん」

A「さっ 今日の夕飯はダイナマイトホタテのバター焼きだよ 一緒に作るうか?」

このちゃ「やっ!」「ピシッ

せちゆな「めっ!」「ピシッ

Aの言葉に泣きやんだこのちゃとせちゆなは手を挙げて答えた。

A「さあ行こうか」

このちゃ「やん!」

せちゆな「めん!」

二人はピョンとAの腕の中に飛び乗ると三人揃って仲良く家の中へと入っていくのだった。

~~~~~

このちゃ「やん!やん!やん!やん!」

せちゆな「めん!めん!めん!めん!」

その夜このちゃとせちゆなは何か興奮したように話をしていた。

このちゃ「やん!」(^) (^)ノシ

なにやら胸の周りを円を描くように手で強調する動きをしている。

せちゆな「めん／＼」(*)モフモフ

せちゆなはデッカいマシユマロを両手で抱いてモフモフしている。

二人が思い浮かべるのは昼間、困っていた自分達に手を差し伸べて助けてくれた一人の人間の女性。

彼女の慈愛に満ちた笑顔は二人の不安に包まれた心を癒やし、救ってくれた

このちゃ「や」モフモフ

せちゆな「め」モフモフ

この日二人はある女性の胸に抱かれる夢を見ながらすこやかな寝息をたてるのだった。

~~~~~

続く

しゅっしゅっ！(しゅっちよつきねんがいでん)(後書き)

このちゃ「や」スヤスヤモフモフ

このちゃ「め」スヤスヤモフモフ

【おはようございます】 (2) (前書き)

今回も皆さまは出ません！







ガンダムJZ「G r a a a a a a a a ! ! ! ! !」

王蛇の行動を見たガンダムJZは雄叫びを上げながら王蛇に向かい槍を振るった。

しかし王蛇は一瞬の隙を突いて前転で回避し起き上がりと同時にベノバイザーを構える。

ベノバイザー「アドベント」

ベノバイザーの頭部部分の差し込み口を開きVバツクルから抜き出したカードを挿入する。

ベノスネーカー「シャー！」

アドベントカードの効果によりベノスネーカーが召喚され蛇行しながらガンダムJZへと襲いかかった。

ベノスネーカー「シャー」

ベノスネーカーはガンダムJZに毒液を吐き出し攻撃をする。

ガンダムJZ「フン！ そんなコウゲキなどくらうか！」

しかしその攻撃は易々と避けられ毒液は虚しく空を舞い地面に落ちた。

王蛇「ふっ」

しかし攻撃を避けられた筈の王蛇はいたって平然としており、ベノスナーカーの傍らに立っている。

ガンダムJZが不審に思ったその時、自らの後方から人の声をした機械音が鳴り響いた。

エビルバイザー『ファイナルベント』

ガンダムJZ「ナニ！」

ガンダムJZが振り向いたと同時に空中からエビルダイバーが飛来しライアがその背中へと飛び乗った。

ライア「ハア！！」

エビルダイバーはライアを背中に乗せたままガンダムJZへと目掛け体当たりを繰り返す。

これが仮面ライダーライアの必殺の技。エビルダイバーの背中に乗った状態で目標<sup>てき</sup>に波乗りのように体当たりを仕掛けるAP5000の必殺技『ハイドベノン』である。

王蛇はベノスナーカーを召喚し攻撃をさせその攻撃をわざと避けさせた。それによって生まれたガンダムJZの隙をライアはすかさずつきファイナルベントを放ったのである。

そしてライアの放ったハイドベノンがガンダムJZへと炸裂した。

ライア「ハアーーーー！！」

ガンダムJZ「グアー!!」

両者が激突したことにより発生した爆発がガンダムJZを包み込んだ

~~~~~

続く!

「じゅじゅっ！【でぶめるまたあ・ぱりえーしょん】(2)(後書き)

オーディーン「何なんだコイツ等は！」

Gハンターモドキ「ギャリリリリリ！」

オーディーン「早く向かわなければ！」

しじゆしちんっ！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】(3) (前書き)

何故か難産でした；

クオリティは

1じじゆじぢんっ！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】(3)

くぶちます的な何か

【前回までのあらすじ】
らいあがとつげきました！

インペラー「やったか!？」

ハイドベノンが決まりガンダムJZがいた場所から炎が上がり燃えている為ガンダムJZの状態が確認できない。

ライアもエビルダイバーから降りインペラーの近くへと戻ってきた。

インペラー「ライアやったか!？」

インペラーは戻ってきたライアにガンダムJZを倒したのかを確認した。

ライア「ああファイナルベントは完璧に決まった ヤツは倒れたは」

王蛇「いや、まだだっ!」

倒れたはずと言いかけたその時、王蛇の声に、ライア達の目には信じられない光景が映りこんだ。

メラメラと燃える炎の中にガンダムJZは立っていたのだ。

ガンダムJZ「G a a a ヨクもやってくれたな」

インペラー「嘘だろ ファイナルベントを喰らって生きてるなんて」

ライダー達の、文字通り最後の切り札であるファイナルベントを喰らい立ち上がる敵を見たインペラーは驚き声を震わせた。

無論ガンダムJZも無傷という訳ではない。顔の表面は装甲が剥がれメラアイが剥き出しとなっている。

右腕は肩から完全に消し飛び胸まで抉れている。

瀕死の重傷であり満身創痍と言ったところである。

ガンダムJZ「グウウウウー」

体中からオイルを流し、火花を散らし足を引きずるようにライダーな近づいてくるガンダムJZ。

ガンダムJZ「よもや ココまでのテキズをオウとは ショウジキアナドっていたぞカメンライダー」

ゆっくりと口を開き喋るガンダムJZ。その間にも体中からオイルが流れ火花が迸る。

ライア達はその様子を見て自然と足が後退してしまふ。

そのとき、ガンダムJZの身体に信じられない現象が起きる。

ガンダムJZ「グウ　　ガアー!!」

身体の傷が塞がり始めたのだ。

ガンダムJZの身体を六角形のプレートが傷口から広がり直していく。

失った右腕もまるでビデオの早回しのように骨格などが再生されていく。

ライダー達が与えた傷がみるみる内に直り、傷をおってない状態までに再生するのだった。

インペラー「嘘だろ」

思わず声が出るインペラー。

ライア「再生能力だと!!」

王蛇「」

ライアは驚き王蛇は無言でガンダムJZを見据える。

ガンダムJZは再生した右腕の状態を確認するために爪を交互に動かす顔の前に持ち上げた。

ガンダムJZ「サイセイリツキュウジユゴパーセント　　まずまずの

ハタラきだな」

確認が終わり顔を王蛇達に向ける。

ガンダムJZ「さぁツギはコチラのバンだ」

そう言うとガンダムJZはライダー達めがけ駆け出した。

~~~~~

オーデイン達は謎の軍団の足止めを喰らい、何とかソイツらを退け王蛇達のいる場所へと辿り着いた。

タイガ「なっ!?!」

ナイト「!?!」

オーデイン「」

オーデイン達の目に飛び込んできたものは一人佇んでいる異形の敵と地に伏せるライダー達であった。

~~~~~

続く!

「じゅんじゅん！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】(3)(後書き)

オーデイン「何だヤツは！」

ガンダム「ズ「グギアアアアア！」

しじゆしゆん！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】(4)(前書き)

予想以上に長くなってしまった；

続きをどうぞ！

オリジナルのベントカード出したいと思うのですが何か意見がありましたらご応募下さい！

「じゅじゅんっ！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】（４）

くぶちます的な何か」

【前回までのあらすじ】
だいにらうんどかいし

オーデイン達は目の前の光景を見て驚愕していた。

ライアの懸念していたことが現実となり敵と遭遇し戦闘となった。
オーデイン達はライア達の救援に向かったのだった。

しかし目的地に移動している途中で機械の身体をした謎の敵に遭遇し交戦となったのだった。

そしてどうにか敵を退けたオーデイン達は、ライア達がいる場所へと着いたのである。

だがそこでオーデイン達が見たものは、地に伏せたライア達三人と体中を機械に埋め尽くした異形の敵が立っていたのだった。

オーデイン達は倒れているライア達に駆け寄り声をかけた。

タイガ「ライア大丈夫か！！」

ナイト「インペラーしっかりしろ！」

オーデイン「王蛇よ気をしっかり持て」

三者三様に声をかけライア達の安否を確認する。

ライア「うう」

インペラー「ぐう」！

王蛇「くっ」！

三人は呻き声を発する。意識は無いのだが命には別状は無い様だ。しかし相当のダメージを受けているのか未だに目を覚まさない。

オーデイン「大丈夫 命に別状はないみたいだ」

タイガ「良かった」

タイガはオーデインの言葉に安堵し溜め息を吐いた。

オーデイン達はもう一度ライア達を確認すると、無言で立ち上がり異形の敵へと視線を向けた。

オーデイン「彼らをこの様な姿にしたのは貴様か」

オーデインは怒りを鎮めた静かな口調で敵へと語りかけた。

ガンダムJZ「ソイツラをやったのはオレだ」

ガンダムJZはオーデインの言葉に返答しオーデインを見据える。

オーデイン「貴様は何者だ」

ガンダムJZ「オレはガンダムジェノザウラー アルジにより生み出されたGセイメイトだ」

オーデインの質問に答えるガンダムJZ。

オーデイン「G生命体？ それは何だ」

ガンダムJZ「キサマラにオシえるギリはない」

ナイト「貴様、何故この三人を襲った！」

ナイトは怒りを露わにしガンダムJZへと言葉を発した。

ガンダムJZ「オノレのモクテキはジブンデータとライダーたちのデータをシュウシュウするコトだ」

タイガ「なっ！？ それだけのために！？」

ナイト「ゆるさんぞ！」

オーデイン「貴様は危険だ この場で排除する」

オーデイン達は構えを取り一気にガンダムJZへと駆け寄った。

ガンダムJZ「いいだろう ついでにキサマラのデータもシュウシュウする事にしよう」

ここにライダーとガンダムJZの戦いの第二幕が切って落とされた。


~~~~~

オーデイン「敵はライア達を三人相手に戦い倒した相手だ　油断するな」

タイガ「うん！」

ナイト「ああ最初から全力でいく！！」

ナイトはVバックルから一枚のカードを引き抜いた。

カードには黄金の翼が描かれておりその背景では風が渦巻いている。

突如ナイトを中心とし風が吹き荒れる。

するとナイトの召喚機、ダークバイザーに変化が訪れる。形状が変化し左腕と一体化する。

ナイトが引き抜いたカードは『SURVIVE 疾風』のカード。  
このカードはダークバイザーツバイを使ってナイトを強化変身させる特別なカードである。

ナイトはSURVIVE 疾風のカードをダークバイザーツバイの表面にある差し込み口に挿入した。

『SURVIVE』

召喚機から音声が発せられ突風と共にナイトの鎧が変化をしナイト

はダークバイザーツバイから剣を引き抜き構える。  
仮面ライダーナイトサバイブへと変身を遂げたのだった。

オーデインとタイガもナイトに習いVからカードを引き抜き召喚機  
へと差し込んだ。

『SWORD VENT』

『STRIKE VENT』

オーデインの手には二振りの黄金の双剣ゴルトセイバー。

タイガの手には鋭い五本の爪の付いた鉄甲、デストクローが装備さ  
れた。

三人は武器を構えガンダムJZと対峙する。

ガンダムJZは両腕の鋭い爪を開くと駆け出した。

狙いはタイガ。

ガンダムJZは右腕を振り上げタイガに攻撃を浴びせる。

タイガ「くっ!？」

どうにかデストクローで攻撃を防ぐがあまりのパワーに押されるタ  
イガ。

攻撃を防がれ止まっているガンダムJZにすかさず剣で斬りかかる  
ナイトサバイブ。

ガンダムJZはその斬撃を避けタイガから離れる。

すると避けた先の場所にオーデインが現れゴールドセイバーで斬りかかった。

ガンダムJZ「グアー!!」

オーデインの攻撃は見事に当たり敵の背中を切り裂いた。

ガンダムJZは振り向きざまに腕を振るうが黄金の羽を撒き散らしながら一瞬のうちに消えまたガンダムJZの背後に現れた。

オーデイン「ハア！」

またも切り裂かれるガンダムJZの背中。ガンダムJZはたまらずオーデインと距離を取った。

これが仮面ライダーオーデインの固有能力瞬間移動である。

瞬時にその場から移動し敵の死角を突くなど強力な能力である。

オーデイン「我が仲間にした仕打ち許さん 果てる!!」

オーデインはゴールドセイバーを上下に構えるとガンダムJZに斬りかかった。

切り刻まれるガンダムJZの体。どうにか反撃しようと腕を振るうがオーデインは瞬間移動で避け全ての攻撃が空を切ることになる。

そして決定的な隙がガンダムJZに生まれた。

オーディン「これで終わりだ」

オーディンの腕がガンダムJZの首へと無慈悲に振るわれたのだ  
た。

オーディンの断罪の刃は吸い込まれるようにガンダムJZの首へ  
向かいバスツと言う音と共にガンダムJZの首が切り落とされる  
のだ。

~~~~~

続く！

しじゆしゆんじー！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】(4)(後書き)

翔子「早くこのカードを渡さなきゃ」

フィリップ「ああ 急いじ」

巨大な装甲車を運転しながら二人の少女は目的地を目指し走る。

？「です〜！」

？「やるっしゆ〜！」

車の天井部分に謎の生物が着いてきているとも知らずに

1じじぢじじっ…！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】（5）（前書き）

遅くなつてすいません！

鳴神 ソラさんからの頂いたオリジナルのベントカードが出ます。

都合により一枚しか出ませんでした在今后機会がありましたら出したいと思います。

鳴神 ソラさんすいませんでした！

【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】(5)

くぶちます的な何か

ゴロンと音を立て転がる頭。

ガンダムJZの体はガクツと力が抜けたように崩れ落ちた。

オーデイン「…」

オーデインは無言でゴールドセイバーに付着したオイルをはらうと崩れ落ちたガンダムJZへ近づいた。

タイガ「あんなにあっさり やっぱりオーデインは強い」

タイガはオーデインの実力を目の当たりにして改めてその強さを肌で感じたのだった。

ライア「うう っ!」

タイガ「ライア気が付いたか!？」

ライアの意識が戻りタイガがはライアへと駆け寄った。

ライア「うう っ」

タイガ「ライア大丈夫か？」

ライアを抱き起こし言葉をかけるタイガ。

ライア「ぐうっ　タイガか　どうしてここに」

タイガ「お前達がピンチだと聞いてな」

「ヤツは、ジエノザウラーは　どうした」

ライアは震える声を無理やり出しタイガに確認を取った。

タイガ「大丈夫　オーデインが首を落として倒したよ」

タイガはライアがガンダムJZの事を懸念しているのだと思い状況を説明した。

ライア「首、を？　駄目だ　首を落としたぐらいじゃ　欠片一つ残すな　ヤツは！？　ウグッ！」

タイガ「ライアそれってどういう意味　ライア！？大丈夫か！ライア！？」

ライアの言葉にタイガは聞き返すがライアはまた呻き声を発し悶え始めた。

その時何かの動く気配を感じタイガは後ろを振り向いた。

タイガ「オ、オーデイン！！」

振り向いたタイガの見たものは首のないガンダムJZの鋭い爪がオーデインの体へと振り下ろされる瞬間だった。

~~~~~

オーデインは崩れ落ちたガンダムJZの身体を一瞥するとライア達の元へと向かい歩き出した。

ガンダムJZの機能は完全に停止しており動く気配はない。

オーデイン「（しかし何だ この拭い去れない違和感は）」

敵を倒したにも関わらずオーデインの脳裏からは絶えず不思議な違和感がまとわりついていた。

オーデインがガンダムJZの横を通り抜けようとしたその時タイガの叫ぶ声がオーデインの耳に聞こえた。

タイガ「オ、オーデイン！！」

オーデインはタイガの声に反応し後方へと振り向いた。

ガンダムJZ「!？」

無慈悲な刃がオーデインの体へと振り下ろされた。

~~~~~

タイガ「オ、オーディン!!」

タイガはオーディンへと振り下ろされるガンダムJZの腕を眺めながら叫ぶことしかできなかつた。

オーディン「グウ!!」

間一髪タイガの言葉に反応したオーディンはゴールドセイバーを十字に重ねガンダムJZの攻撃を防いだ。

ナイトサバイブ「何っ!!」

ガンダムJZヘッド「チッ　もうスコしでキサマのクビをオとせたモノを」

切り落とされたガンダムJZの頭が口を開き喋りだした。ガンダムJZの首の下から蜘蛛の脚のようなものが現れたカチカチと音を立てながら首のない己の体の方へと歩き出した。

タイガ「そんな　首を落とされても死なないのか!？」

ナイトサバイブ「馬鹿なっ!」

ガンダムJZヘッド「フン　このテイドでオレはシなん　オレのカラダはトクシユなサイボウによってこのテイドではシないカラダなのだ」

ガンダムJZヘッドが体の元へと着くと切り口の部分からパイプなどが伸び始め元の場所へと収まった。

ガンダムJZ「G a a a a ! !」

オーデイン「ぐあっ!!」

ガンダムJZはオーデインを弾き飛ばし首の具合を確認するようにゴキゴキと首を鳴らし始めた。

タイガ「そんな 首を落とされても死なないなんて反則じゃないか
」

ナイトサバイブ「化け物めっ!!」

ガンダムJZ「さあツギはコチラのバンだ」

ガンダムJZの言葉を合図にガンダムJZの背部から無数のミサイルが発射された。

発射されたミサイルの外装が外れ無数の小さなミサイルがオーデイン達に降り注いだ。

オーデイン「ぬっ!!」

タイガ「うわっ!?!」

ナイトサバイブ「くっ!!」

腕で庇うように顔を覆うとライダー達はミサイルの爆炎に包まれるのだった。

~~~~~

ガンダムJZ「データはジュウブンにアツまった さぁトドめをさしてやるっ」

オーデイン達はミサイルのダメージにより体から煙を出しながら倒れている。

そしてガンダムJZの鋭い爪がオーデイン達に振り下ろされそうになったときガンダムJZの体に大きな衝撃が襲った。

なんと巨大な黒い装甲車がガンダムJZへと体当たりをしその体を吹き飛ばしたのである。

~~~~~

？「そろそろ着くぞ！」

？「不味い どうやら状況は最悪のようだ」

一台の装甲車がライダー達のいる戦いの場へと突入してきた。

装甲車は今まさにライダー達に止めをさそうとしている異形の敵に

向かっていった。

？「捕まってるー!!」

？「OK！」

ガンダムJZ「グアアアア!!」

吹き飛ばされるガンダムJZ。

装甲車はスピンしながらようやく止まり中から二人の幼い少女が出てきたのである。

？「なあアンタらが仮面ライダーか？」

タイガ「ぐっ君たちは？」

ナイトサバイブ「ここは危険だ!! 早く離れるんだ!!」

？「そうはいかねー こっちは依頼を任されてるんだ」

？「君たちに預かり物だ さあ受け取りたまえ」

跪きタイガとナイトサバイブへと一枚のカードを手渡した。

ナイトサバイブ「このカードは？」

？「ある男からの依頼だね そのカードをアンタらに渡してくれって」

？「確かに渡したよ」

ナイトサバイブ「待ってくれ！ 君達は一体？」

翔子「俺の名前は左翔子 こいつの名前はフィリップ」

フィリップ「ボクたちが何者かって？ ボクたちは」

左翔子「W^{ふたり}で一人の探偵さ」

少女はそれだけ告げると再び装甲車に乗り込み颯爽と走り去っていった。

~~~~~

ガンダムJZ「グア！！ ナンなんだイッタイ」

吹き飛ばされたガンダムJZは立ち上がるとライダー達へと近づぐ。

タイガとナイトサバイブは体をよろめかせながら立ち上がった。

ガンダムJZ「まだやるつもりか キサマラではオレには力てない」

ガンダムJZはライダー達に向かい駆け始めた。

ナイトサバイブ「やってみるしかないか」

ナイトサバイブは先ほど渡されたカードを自分の召喚機へと差し込んだ。

『BINDVENT』

音声とともにガンダムJZの体を風の輪が縛り拘束する。

ガンダムJZ「ガアアアア ナンだこれは!？」

急に身動きが取れなくなり混乱するガンダムJZ

タイガ「次はこつちだ!！」

タイガも自分の召喚機に先ほど渡されたカードを差し込んだ。

『FINALATTACKVENT』

音声とともに相手を凍りで更に身動きが取れなくした。

そして両腕に装備されたデスクローでガンダムJZを連続で切り裂いた。

相手を凍り漬けにした後、デスクローで連続で切り裂く技『クリスタルスラッシュ』である。

ガンダムJZ「グアアアア!！」

体を切り裂かれ絶叫を響きわたらせるガンダムJZ。しかし切り裂かれた場所はたちまち自己修復機能が働き直していく。

ガンダムJZ「ナンドやってもムダだ!! キサマラにオレはタオせん!！」

そう叫び風の戒めを解こうともがく。

オーデイン「残念ながら貴様はここで終わりだ。」

いつの間にか立ち上がっていたオーデインはVバックルから引き抜いた一枚のカードを召喚機に差し込んだ。

『FINALVENT』

ゴルトフェニックスが合体し浮かび上がる。

オーデイン「貴様の体は、確かに並の攻撃では倒すことはおろか致命傷も与えられないだろう。しかし再生も出来ないほどの攻撃を与えたらどうなるかな？」

ガンダムJZ「何っ!?!」

その瞬間オーデインの『エターナルカオス』が発動し光が全てを飲み込んだ。

~~~~~

続く!

1じじじじじじじじ！【でぶおるまにあ・ばりえーしょん】(6)(前書き)

やっと終わりました！

こんなに長くなる予定では無かったんですね

PVも徐々に減っているし次回からはぶちま出てきます！

お楽しみに！

内容はやりすぎたw

「ぶちます的な何か」

オーデインのファイナルベント、エターナルカオスが炸裂しガンダムJZは跡形もなく消滅した。

念の為辺りを搜索し再び再生していないかを確認し、ガンダムJZの再生したあとなどは見あたらず完全に倒したと確信した。

リュウガ「派手にやられたな」

オーデイン「ああ見ての通りだ」

戦闘のダメージからへたり込むオーデイン達の下に治療の為に訪れたリュウガ、シザース、アビスが話しかけていた。

オーデイン「ライア達の様子はどうだ？」

リュウガ「ダメージは大きいがそこまで深刻な程ではない 一、三日は安静が必要だな」

オーデイン「そうか」

オーデインはリュウガの報告に安堵の溜息を吐く。

アビス「皆の治療は終わったぞ」

シザース「あとは事務所まで運ぶだけだ」

残りの二人も皆の治療を終えリュウガ達の下へ集まった。

リュウガ「そうか では早速皆を事務所に運ぶとしよう」

リュウガ達は怪我人達を765プロ名の移動車に皆を乗り込ませると運転席に乗り込み発車の準備を始めた。

オーデインも最後に乗り込もうとステップ部分に足をかけ不意に後ろを振り向いた。

オーデイン「（本当にこれで終わったのか？ 私達は何か大きな見落としをしてはいないか）」

この時オーデインは感じていた。

これは終わりではなく大きな戦いの始まりなのではないかと。後にその予感が当たることを今は誰も知らない。

リュウガ「オーデイン出発するぞ早く乗れ！」

オーデイン「ああ」

オーデインは小さな不安を胸に抱えながらバスに乗り込こむと、765プロへの長い帰りの道のりをオーデイン達はバスに揺られ帰るのだった。

~~~~~

とある薄暗い研究室。

外では雷が鳴り響いており、不気味さを一層醸し出していた。

とある人物がモニターの画面を覗き込みながら薄い笑みを浮かべ満足そうな表情をしていた。

？「予想以上の収穫だったな データは十二分に取れた これ  
計画は次の段階に移ることができる ライダー共には感謝をしな  
ければな」

その人物はモニターの下部分にあるキーボードのボタンを押した。  
すると画面が切り替わり何かの液体が入った容器が映し出される。

？「もうすぐ もうすぐですぞ！ あなた様の復活の時は！！」

モニターに映る容器の中には何やら培養されている頭部の様な物が  
映し出されていた。

？「もうすぐです！ このショッ いやこの『ガンダムサイコウエ  
ーブ』があなた様をきつと蘇らせてみせます！！ 『バシャー  
ン トロン』様！！」

大きな音を鳴り響かせ雷が研究室の近くに落ちた。

薄らと明るい研究室の中に蠢く得体の知れない長く巨大な何かガ  
ンダムサイコウエーブの叫びに反応し音を立て動き出した。

Gサイコウエーブ「もうすぐだ　もうすぐこの地球は我々『ネオ  
ディセプティコン』のモノとなる！！　フッフ　ハハハ　フハハハ  
ハハハハハ！！」

Gサイコウエーブの叫びは部屋中に木霊しその笑い声だけが響き渡  
るのだった。

~~~~~

D G 「ビクン！！」

「このちゃ」「ちゅ？」「チヨロチヨロ

~~~~~

続く！

「じゅんじゅん〜！【でぶおるまにま・はじえーじょん】(6) (後書き)

? 「でぶ〜?」

? 「しゅー!」

A 「あれ? 君達は?」

しじゅうなっ！（前書き）

久々にぶちま登場

一応ほのぼの回となっております！

「じゅっなっ！」

「ぶちます的な何か」

ここは『新日本ぶちレス』の選手が集うAの家。

アントニオこのちゃ「や」だこのやるー」

タイガーせちゆな「めん！」

獣神サンダーあしゆなん「ねー！」

赤い手ぬぐいを首にかけアゴをクイツとしたこのちゃ。

虎の覆面を鶴の頭に被せ青いスパッツを履いたせちゆな。

赤い鬼の覆面を被りプロテクターを纏ったあしゆなん。

三匹はAの家の一室に作った小さな特設リングでプロレス、いやぶちレスをとっていた。

アントニオこのちゃ「や」だこのやるー」 正固め

タイガーせちゆな「めん！」 タイガードライバー

獣神サンダーあしゆなん「ねー」 垂直落下式ブレーションバスター



A「ぐえーっ！ も、もう駄目」「ぱたりこ

カンカンカン！

散々技をかけられたAは三匹のホールによりスリーカウントを取られマットに沈んだ。

タイガーせちゆな「めん！」

空中に腕を上げ指を一本上げるせちゆな。

獣神サンダーあしゆなん「ね！」

空中に腕を上げ指を二本上げるあしゆなん。

アントニオこのちゃ「や〜！」

空中に腕を上げ指を三本に上げたあとグイツと手を握り上に突き上げた。

何故この様な状況になっているのかと言うと、最近Aが買ってきた冊子のついたプロレスのDVDを観た三人はドンハマりしてしまい、Aをお願いをしてリングを作ってもらいマスクなども作ってもらいAを相手にプロレスごっこを始めたのである。が、日に日にそのプロレスごっこがただのごっこでは無くなってしまったのである。

次第に技の切れが上がっていくこのちゃ達三匹。終いにはホールでスリーカウントを取られる始末である。

Aの身体の関節はあらゆる方向にねじ曲がっていたりして直視には耐えかねる状況であった。

アントニオこのちゃ「やゝw やゝw」

このちゃは赤い手ぬぐいで汗を拭い物凄くやり切った顔をしている。残りの二匹も物凄く良い笑顔をしていた。

A「うっ イテテテ はあ、三人とも容赦ないなあ 少しは手加減してくれよ」

Aは首に手を当てながらムックリと起き上がり三匹に喋りかけた。

アントニオこのちゃ「やゝだこのやるー」パシン

このちゃはAに向かい突然張り手を見舞った。

A「い、いはい」

頬に手を当てこのちゃをみるA。

アントニオこのちゃ「やゝだこのやるー」

どうやらこのちゃは戦う前から手加減などを考えているAに対し怒り、闘魂注入を施したのである。

タイガーせちゆな「めん！」

せちゆなもAの考えが気に入らないのかリングのコーナーからフライングボディーアタックをかました。

A「うぎゃっ!」

そこにすかさずあしゆなんがAの上に乗リホールをかける。

アントニオこのちゃ「や、や、や!」

カンカンカン!!

カウントを取ったこのちゃの合図とともに再び三匹は立ち上がると互いに手を掲げ喜んだ。

アントニオこのちゃ「や、だこのやろー」

タイガーせちゆな「めん!」

獣神サンダーあしゆなん「なのね!」ふんす!!

こんな事がここ一週間続いているAの家のある日常の「コマ」であった。

~~~~~

続く

しじゅうななっ！（後書き）

武藤ちゃんよちゃん「ふーわ〜」

A「武藤！〜！」

1じゅっはちっ！（がいでん）（前書き）

今回はハロウィンなので特別外伝です

しかも初の現在名前のついでいるぷちま全員出演です！

内容は相変わらず薄いですが楽しんでいただけたら嬉しいです。

じじいおはちっ！（がいでん）

くぶちます的な何か

今日はハロウィン。

10月31日の夜にカボチャをくりぬいて造ったジャック・オー・ランタンを家に飾り、魔女やお化けなどに仮装した子供達が近所の家を訪ねて“トリック・オア・トリート”と唱える。

家ではカボチャのお菓子を作り、子供たちは近所の家で貰ったお菓子を持ち寄ってハロウィンパーティーを開いたりする。

お菓子が貰えなかったら悪戯してもいい一年に一度のお祭りである。

Aの家も例外ではなく、部屋の中を飾り付け、皆思い思いの仮装コスプレをしてはしゃいでいた。

このちゃ「や〜」

せちゆな「めん！」

あしゆなん「ね！」

ゆえち「です」「ちゅー

パルナ「んー」「ピュピュ」

ののか」「ぷう〜」

あやにゃん「ですわ!」

ちさー」「ぴよん!」

ちーか「たー」

ちみか「みー」

ザジユ「 仮装の衣装を貸そう」

ちやよちゃん「ふわふわ〜」「ふわふわ

まっきー「ウツキー!」

みしゃ「よねー」

くぎみー」「くぎゅー」

ちやくら「じー」「じー」

このちやはかぼちゃの被り物を被ったジャック・オー・ランタン。

せちゆなは黒いマントを纏い鋭い牙を付けたドラキュラ。

あしゆなは頭にボルトが刺さった継ぎ接ぎだらけのフランケンシユタインの仮装をしている。

ゆえち、パルナ、ののかの三匹は揃ってお揃いのトンガリ帽子に杖を持った魔女の仮装をしている。

あやにゃんはネコ耳に黒い全身タイツを着た黒猫の仮装をしている。

ちさーはアイスホッケーのマスクのお面を斜めに被り血糊のついたオノを持ったジェイソンの仮装をしている。

ちーかとちみかの二匹は、二匹揃ってボロボロの包帯を巻いたミイラ男の仮装をしている。

ザジュはムンクのようなマスクをつけてナイフを持つスクリームの仮装をしている。

ちやよちゃんは穴の開いた白い布を頭から被りふわふわ浮いているお化けの仮装をしている。

まつきーは黒いハットを被りボーダーのTシャツを着て、手には鉤爪を付けたフレディーの仮装をしている。

みちゃ、くぎみー、ちゃくらこの三匹は顔を真っ白に塗りボロボロの衣服を纏ったゾンビの仮装をしている。

A「可愛いねーw みんな良く似合っているよw」

ぶちまズ「にこにこ」

皆Aのほめ言葉に顔を嬉しそうに歪めると、にこにここと笑いだし喜んだ。

A「それじゃあ可愛くて怖いお化けさん達にはこのお菓子をあげようかな？」

そう言ったAはぶちま達に小さなクッキーの入った袋をそれぞれに手渡していった。

このちゃ「や〜」

せちゆな「めん！」

あしゆなん「なのね！」「ふんす！

ゆえち「です」「ちゅー

パルナ「ンフw」「ピロピロ

ののか「です〜」

ちさー「ぴょん！」「プイッ

あやにゃん「ですわ」「ペロリ

ちーか「ニヒヒッw」

ちみか「ニヒヒッw」

ザジュ「可笑しいお菓子」

ちゃよちゃん「ふわふわ〜」「ふわふわ

まっきー「ウッキー！」クルッ

みしゃ「よねー」

くぎみー「くぎゅーw」

ちやくらじ「うー」

皆大事そつに袋を抱えるとお礼を言つて一斉に喜びだした。

A「さあ夕食を食べようか 食べ終わったらみんなでお菓子を貰いに行こう」

Aの言葉に一斉に頷いて、皆食卓へと席に着くのだった。

~~~~~

続く

しじゅしはちっー！（がいでん）（後書き）

トントーン！

ガチャッ

このちゃ「や」

せちゆな「めん！」

あしゆなん「ね！」

ゆえち「です」

パルナ「ン！」

ののか「ぷう」

あやにゃん「ですわ！」

ちさー「ぴよん！」

ちーか「たー」

ちみか「みー」

ザジュ「 仮装の衣装を貸そう」

ちゃよちゃん「ふわふわ」「ふわふわ

まっきー「ウッキー！」

みしゃ「よねー」

くぎみー「くぎゅー」

ちやくらー「うー」

トリック・オア・トリート（お菓子をくれないとイタズラするぞ）

（皆さんの家にぶちま達がお菓子を貰いに行きました お菓子をあげないとぶちま達がイタズラしちやいます！）

しじゆつきゅっ！（前書き）

短いです！久々に短いです！気をつけて下さい！

あと活動報告のアイドルボタンを見ていただいた方が良いかも知れません。

「じゅんじゅん」

「ぶちます的な何か」

A P「唐突ですがこの度このちゃがアイドルデビューする事になりました！」

このちゃ「や」 「ペコリ

フリフリの衣装を着たこのちゃが円柱状のステージの上でスポットライトを浴びながら、マイクとマラカスを握ったままペコリと頭を下げ挨拶をしている。

A P「そしてコレがこのちゃのデビュー曲『このちゃDEちゃ ちゃ ちゃ』です！ ではどうぞ！」

Aの紹介が終わるとこのちゃの後ろにマラカスを持ったバックダンサー（せちゆなとくぎみー）が付く。

このちゃ「や」 ちゃ  
ちゃん！ ちゃん ちゃ  
「チャッチャッチャ

せちゆな「チャッチャッチャ

くぎみー「チャッチャッチャ

このちやが歌いながらマラカスを降る。

それに続きこのちやとくぎみーが無言でマラカスを鳴らす。

このちや「やゝやゝ　　やゝゝ　　ややん！　ややん！　やゝゝ  
チャツチャツチャ

せちゆな「　チャツチャツチャ

くぎみー「　チャツチャツチャ

右に左にと体を揺らしフリルのスカートを揺らしながら、リズムを刻みマラカスを鳴らし歌う。

バックの二人も静かにマラカスを揺らし音を鳴らしている。

このちや「やゝ　　やんやゝ　　やんやゝ　　ややゝ　　やややゝ

「　チャツチャツチャ

ニコニコと笑顔を絶やさずマラカスを鳴らし力強く歌い上げるこのちや。彼女は今輝いていた。

まさしく彼女は今アイドルであつた。

このちや「や！や！や！「　チャツ！

せちゆな「　チャツ！

くぎみー「　「　チャツ！

ジャーンと言う音が終わると共に、このちゃはマラカスを止め、  
バックの二匹も同時にマラカスを止めた。

観客「わ〜!!」「パチパチ

このちゃ「や〜w」「ペコリ

このちゃは観客の拍手を恥ずかしそうにしかし嬉しそうに笑いペコ  
リと頭を下げ手を振った。

こうしてこのちゃの華々しいデビューが幕を閉じたのである。

~~~~~

続く!

しじゆしぢゆしー！ (後書き)

A P「このちぢゃ〜 このちぢゃのデビューシングル」このちぢゃ D Eち
ぢゃ ちぢゃ ちぢゃ 『ぷちコンランキング一位だって！ やったね W
「

このちぢゃ」ち〜 「チャッチャッチャ

ろくじゅうっ!!!(前書き)

遅くなってスイマセン!

記念すべき60話目の投稿はLAN武さんの作品『バカとテストと
年上の同級生』からとある二人が出てくれます!

オチは薄いですがよろしかったらどうぞ!

LAN武さん好き勝手やってしまいました(特に芹香のセリフの書
き方)

スイマセン!

るくじゅつ!!

くぶちます的な何か

? 「ここがAさんの家か」

? 「うん! このちゃんとせつちゃんに早く会いたいなw」

Aの家の前に佇む二人の男女。

男性の方が、手に持つ紙と家を交互に見比べ探している家かどうかを確認していた。

? 「じゃあ早速チャイムを押すぞ」

? 「うん!!」

ピンポーン

男性はチャイムのボタンを押し少し待った。

チャイムを鳴らしてから一分も経たない内にドアの内側からパタパタと誰かが駆けてくる足音が聞こえてきた。

ガチャッ

「このちゃ「や」？」

玄関のドアを開けたのはコアラの格好をした小さな生物。

？「このちゃんこんにちは！ 芹香だよ！ 覚えてるかな？」

？「よう！ 龍星だ 久しぶり！」

玄関を開けたのはAの家に住む小さなぶちま、このちゃであった。

このちゃ「や」w「

龍星と芹香と名乗った二人の男女の顔を見たこのちゃは嬉しそうな顔を見るとピョンとジャンプし芹香の大きな胸へと飛びついた。

このちゃ「や」w「すりすり

飛び込んできたこのちゃを優しく抱き止めた芹香。

芹香「…久しぶりだねこのちゃんw 会いたかったよ〜！」

このちゃ「や」w「

すりすりとしりすりと芹香の胸にすり寄りこのちゃを優しく抱きしめる芹香。

芹香もこのちゃの頭に頬擦りをしスキンシップをとる。

龍星「おいおい その辺にしとけよ」

龍星の制止にようやく止まった芹香。

芹香「…ごめんなさい つい嬉しくなっちゃって…」

このちゃ「や〜」

二人は少し照れたように笑うと頬を染め離れた。

龍星「さあ中に入ろうぜ Aさんにも挨拶しなきゃ」

芹香「…うん そうだね龍くん じゃあこのちゃんお邪魔するね？

…」

このちゃ「や〜w」

このちゃは二人を家の中に促すと家の中に入っていくのだった。

~~~~~

A「やあお二人さん 良く来たね」

龍星「こんにちははAさん」

芹香「…こんにちははAさん」

居間に座り二人の訪問に挨拶をするA。

A「こんにちはは 今日はどうしたの？」

龍星「セリがどうしてもこのちゃんとせつちゃんに会いたかったからAさんちに来たんだ」

芹香「…コクン」

A「そうか そいつは嬉しいな このちゃとせちゆなが喜ぶよw」

このちゃ「やん！」

芹香の膝の上でニコニコと笑いながら喜ぶこのちゃ。

その時A達のいる居間にせちゆなが入ってきた。

せちゆな「めん！」

芹香「…せつちゃん！ お久しぶり会いに来たよw」

せちゆな「めん！」

このちゃと同様に芹香の胸に飛び込むせちゆな。

芹香は優しい笑顔でせちゆなを抱きしめると目一杯抱きしめた。

せちゆな「め〜w」

せちゆなを同じように膝の上に座らすとニコニコしながら話し始めた。

A「三人とも嬉しそうだねw」

龍星「ええ 連れてきたか甲斐がありました」

このちゃとせちゆなど戯れる芹香を見ながら微笑むAと龍星。

この日芹香は、日が暮れて帰る時間まで二匹を膝の上に乗せ会話を  
楽しんだのだった。

~~~~~

続く

ろくじゅつ!! (後書き)

A「やはり 避けては通れぬか」

龍星「ああ 俺にも退けない訳がある」

A「行くぞ!!」

龍星「オラああああ!!」

A「無駄ああああ!!」

ろくじゅういちっ！（がいでん）（前書き）

今回はアホな内容です！見る人によってはイヤな気持ちになるかも知れませんが。

正直趣味とフェチのバカみたいな内容です。

引かれるかもしれませんがまあ適当に流し読みしてあげて下さい。

ろくじゅついちっ！（がいでん）

くぶちます的な何か

？「だから貴様はアホだというのだ！」

バチンと言つ音と共に吹き飛ぶA。

A「むぎゃ〜！！！」

？「フン！ 鈍つたものだから、これしきの攻撃も避けられないとは、何たる体たらく！！！」

A「す、すいませんししよ〜」

師匠「Aよ、儂に続け！ 流派！東方不敗は！」

A「王者の風よ！」

師匠「全新！」

A「系列！」

師匠「天破！」

A「侠乱！」

師匠「見よ！ 東方は」

師匠/A「赤く燃えているうう！」

突如叫びだした師匠とA。

最後の方には二人とも物凄い激画チツクな顔をしていた。

A「すみませんでした師匠！ この様な醜態を見せるとは、自分が情けない」

師匠「ふん、分かればいいのだ これでお前も分かったであろう」

A「はいっ！！ やはり、私が間違っていました！ やはり真波ではなく綾 なのですね！！」

師匠「ウム 希波も捨てがたい しかし！！ 敢えてそこは波なのだ！！ 蒼い髪！ 紅い眼！ 透き通るような白い肌！ 林ボイス！ そしてあの儂げでミステリアスな雰囲気！！ 確かに真希 も良いだろう 眼鏡にツインテール、坂 ボイス、チエツク のミニスカートに黒いストッキングはワシも大好きだ！！ そしてばいんばいん！！ だがな、ワシはばいんばいんよりも、尻が好きなのだああああ！！」

師匠の後ろで何かが爆発したような映像が見えたが全くの錯覚であろう。

真面目な顔で何を語っているかと思えば師匠とAはエヴァンゲリオのヒロインで誰が良いかと言う話であった。ちなみ新劇場版。

A「師匠 私は、自分が恥ずかしいです！ いくら容姿が物凄くドストライクで、チエックのミニスカートが大好きで、黒いストッキングが好物であるからと言って、ずっと好きだった 波を少しでも裏切り浮気してしまうなんて」

師匠「Aよ気にする事はない 誰しも一度は通る道だ だがな、
敢えて我々は今まで通りアヤ ナミストでいるのだ」

A「師匠オオオオ!!」

師匠「Aエエエエ!!」

A「師匠オオオオ!!」

師匠「Aエエエエ!!」

A「師匠オオオオ!!」

師匠「Aエエエエ!!」

師匠の言葉になぜか感動したAは何かのスイッチが入ったのか唐突に師匠と叫びだし、師匠も触発されたのかAの名前を叫びだした。

A「師匠オオオオ!!」

師匠「Aエエエエ!!」

何のことはない。ただの ヴァンゲリオンが好きな二人のアヤナミス の大分困った会話の風景であった。

~~~~~  
師匠「ではAよ さらなるア ナミストとして己を鍛え、精進するのだぞ！！」

A「はい！ 師匠！！」

師匠「ではな！！」

師匠はそう言うと背中スタビライザーを展開し飛び去っていった。

A「師匠ありがとうございます！ 俺頑張ります！！！」

Aは師匠が飛び去った方向に見える赤く燃える夕日に向かい決意を新たにし堅く誓うのだった。

~~~~~

続く！

ろくじゅっいちっ！(がいでん)(後書き)

師匠「ダアアアクネス フィンガアアア！！」

A「みぎやああああ！！」チユドーン

師匠「ワシはロリよりもムチムチが好きだ！！」

このちゃ「や〜?」

DG「(ザワザワ)」「このちゃに不適切な発言を聞かしたため怒っている」

師匠「まで！デビルガンダム！何をギャー！！」

DG「(ポンポン)」

このちゃ「や〜?」

ろくじゅうたっ！(前書き)

今回はあのぷちモビが登場!!

楽しんでいただければ幸いです!!

るくじゅじゅっ！

くぶちます的な何か

Aはその日の例の如く暇を持って余しボーっとしていた。

一つ違ったのはとなりにせちゆながいることである。

A「ああ〜暇だ 何もやることない」

せちゆな「め〜ん」

無駄に居間をゴロゴロしながら呟いているAとせちゆなは物凄く異様な光景に映るだろう。

A「ああ〜暇だ、暇だ、暇だ！！」

Aの感情が爆発しかけたその時、開いていた窓から何か物が物凄い速さで勢い良く飛び込んできた。

?「キーー!!」「ビュン!!」

ゴチン!!

A「イダァー!!」

Aの顔にめり込むように激突してきた謎の存在はAの顔からポロリと落ちるとAと二人して床に転がった。

せちゆな「めくん？」

そんな二人をせちゆなは不思議そうに見つめているのだった。

~~~~~

A「ふむふむ 昔馴染みの友達を訪ねるために家に来たわけね」

？「キー！」

Aは目の前にいる小さな白い鳥(?)と話をしていた。

聞くとこの鳥は、今は離れて暮らしている友達に会うべく遠路遙々Aの家にまで来たのであった。

A「で？ その友達ってのは誰のこと？」

鳥(?)「キー！」

A「えっ うおるたー？ えっと君の名前は？」

鳥の発した意外な名前に驚くA。

鳥(?)「キー！」

A「がんだむへぶんずそーど 分かった ちょっと待ってて、今呼んでくる」

Aは鳥改め、へぶんずそーどとせちゆなを残し部屋を後にした。

~~~~~

せちゆな「めん!」

へぶんずそーど「キー!」

せちゆな「めん!めん!」

へぶんずそーど「キー!キー!」

Aが部屋から出て行った後、せちゆなとへぶんずそーどは突如話を始めた。

せちゆな「めん!」

へぶんずそーど「キー!」

話に花が咲いているようで二匹とも嬉しそうに、物凄く楽しそうに会話をしているのであった。

A「何だろう お互いに鳥だからか、フィーリングが合うのかな?」

うおるたー「シャー？」

そんな様子を部屋に戻ってきていたAは水の張った桶に入ったうおるたーと共に不思議そうに眺めていた。

~~~~~

A「へぶんずそーどお待ちせ はい連れてきたよ！ うおるたー」

うおるたー「シャー！」

へぶんずそーど「キー！」

Aが連れてきたうおるたーはピョン桶から飛び降り床に降りると、お互いに近づき、じゃれ合うように抱きつくと、喜び合いながら駆け回った。

うおるたー「シャーw」「コロコロ

へぶんずそーど「キーw」「コロコロ

物凄く愛らしい光景にせちゆなはニコニコと笑顔になり、Aも小動物のじゃれ合う姿に真っ赤な鼻血を滝のように流しながら眺めているのだった。

~~~~~

A「さて今後の事を考えようか　へぶんずそーどもまた友達と離れるのはイヤだよな？」

デッカイティツシユの詰め物を鼻に差し込み物凄く真面目な話をするAは凄く滑稽である。

へぶんずそーど「キ〜」

うおるたー「シャ〜」

せちゆな「め〜」

せちゆなもこの短時間でへぶんずそーどとは凄く仲良くなったのか眉をひそめて悲しげな顔をする。

A「そこでどうだろう？　このままウチに住まないかい？　部屋はまだまだ空きはあるし正直せちゆなとうおるたーが可愛そうだしね　君さえ良ければだけど？」

へぶんずそーど「キーー！！」

Aの提案にへぶんずそーどは飛ぶように（実際に飛び回っている）喜びせちゆな、うおるたーと一緒に輪になって小躍りまでし始めた。

A「うん　喜んでもらえて良かった、良かったw　さあ家族のみんなに紹介するよ　付いてきて！！」

へぶんずそーど「キーー！！」

Aはせちゆなを抱き、うおるたーを頭に寄せ、へぶんずそーどを伴い部屋を後にするのだった。

かくしてAの家にへぶんずそーどと言う新たな仲間かぞくが加わるのだった。

へぶんずそーど「キーw」

~~~~~

続く！

ろくじゅうじっ！ (後書き)

せちゆな「めんw」「□□□□

「このちゃ」「や」w」「□□□□

うおるたー「シャーw」「□□□□

へぶんずそーど「キーw」「□□□□

A「(どくどく)」「バンバン!!

ろくじゅうさんっ！（前書き）

現実的にはあり得ないと感じるかも知れませんが楽しんでいただければ幸いです！！

るくじゅつさんっ！

くぶちます的な何か

とある口。

Aは散歩をしようと外に出てみると、家の玄関の前に見知らぬ小さな女の子が立っていた。

A「ん？」

金色の髪を左右で結び、可愛い服を着たウサギのぬいぐるみを両腕で抱いた小さな女の子が立ち止まって周りをキョロキョロしていた。そして一番目を引いたのは女の子の両目が左右で色が違うオッドアイだと言ったことだった。

A「何だろう 迷子かな？」

よく見ると女の子の顔は不安で今にも泣き出しそうなほど暗くなっていた。

？「ママァ〜」「ぐしぐし

Aはそんな女の子に近づき不安にさせないように優しく話しかけた。

A「こんにちは こんにちはどこでどづしたの？」



?「えっ!?!」ビクッ

突如Aに話しかけられた女の子は、声をした方を見上げビクリと体を振るわせぎゅっとぬいぐるみを強く抱き寄せた。

Aは女の子を警戒させない様にひざをつき女の子に視線を合わせ優しく笑いかけた。

A「驚かしてごめんね? えっと何か困っているみたいだから何か探し物かな?」

?「あのね ママがいないの」

女の子はAの優しそうな表情に警戒を解き俯きながらそうAに話した。

女の子の話を聞くとどうやら母親と出かけていたらしいのだが、ふとした時に母親とはぐれたのに気づき探し回っていたということだった。

?「ママァ」グスグス

話したらまた悲しくなったのかウサギのぬいぐるみをぎゅっとして目尻に涙を浮かべ始めた。

A「泣かないで 僕と一緒にママを探してあげるから ねっ?」

?「ママみつかる?」

A「うん 見つかるよ 大丈夫、僕も君のママを探してあげるから

だから、ね？ 泣かないで、絶対見つかるから」

Aは女の子の頭を優しく撫でると安心させるように言い聞かせた。

？「うん！」ズズツ

女の子は鼻を嘔ると笑顔でうなずき涙を拭った。

A「うん 良い笑顔になったね さあ行こうか？」

？「うん！」

Aはゆっくりと立ち上がり女の子と手を握り歩き始めた。

A「そう言えば名前を聞いてなかったね 僕はA<sup>ハジメ</sup> 君の名前は？」

？「えつとね！ ヴィヴィオ！」

A「ヴィヴィオちゃんか、可愛い名前だねw それじゃあママを探しに行こうか？」

ヴィヴィオ「うん！！」

二人は手を繋ぎゆっくりと歩き始めた。

~~~~~

それからAはヴィヴィオの母親を捜すため色々な所を歩き回った。

交番などに行ってもそれらしき人物は来ておらず、また捜し回った。途中ヴィヴィオが疲れを見せたのでAはヴィヴィオを肩車して歩き回った。

しかし一向にヴィヴィオの母親は見つからずとうとう夕方になっていた。

ヴィヴィオ「ママァ〜」グスグス

A「（困ったなあ　　こつも見つからないなんて　　どうしようか？）
」

見るとヴィヴィオの目尻にはまた大粒の涙が溜まっており今にも溢れそうになっていた。

A「取りあえず一旦僕の家に戻ろうか　　もしかしたらヴィヴィオちゃんのママから連絡が来てるかもしれないし」

Aは交番に行ったときもしもの為にと自分の連絡先を覚えてきたのであった。

Aはこのままでは埒があかないと一旦ヴィヴィオを自分の家に連れて帰り連絡が来るのを待つことにした。

ヴィヴィオ「うん　　」

ママが見つかるかと思っていたヴィヴィオの表情には明らかに落胆の色が見える。

Aは落胆するヴィヴィオを担ぎながら自分の家へと帰路につくのだ。
った。

~~~~~

ヴィヴィオ「うわあ〜!〜!」

家につきドアを開けるとこのちゃとせちゆながお出迎えをしてくれた。

その不思議な二匹にヴィヴィオは、さっきまでの落ち込み様はどうへやらと、満面の笑みを浮かべ目を輝かせた。

A「この二人はこのちゃとせちゆな 僕の大切な家族だよ」

このちゃ「やん!」

せちゆな「めん!」

二匹はヴィヴィオに挨拶をした。

ヴィヴィオ「か〜い〜!〜!」

ヴィヴィオは二匹に近づくとギュッと抱きついた。

このちゃ「や〜w」

せちゆな「め〜んw」

ヴィヴィオ「うわぁ〜 か〜い〜w」

A「仲良くしてあげてね？」

ヴィヴィオ「うん！」

このちゃ「や〜w」

せちゆな「め〜w」

ヴィヴィオは二匹を伴って家の中に入っていった。

A「ふう元気なってくれてよかったよ」

Aはヴィヴィオを追うように部屋の中に入っていくのだった。

~~~~~

それから程なくしてヴィヴィオの母親から連絡があり、すぐにヴィヴィオを迎えに来たのだった。

ヴィヴィオ「ママア〜!!」

?「ヴィヴィオ!!」

ヴィヴィオが母親を見つけると一目散に走り出し抱きついた。

？「ヴィヴィオを保護していただきありがとうございます」

ヴィヴィオの母親は丁寧に関心を示すと感謝の言葉を述べた。

A「いや そんな気にしないでください それより見つかった良かったですよ」

？「本当にありがとうございます」

ヴィヴィオ「ありがとうございますおにいちゃん！」

A「もうママの手を離しちゃだめだよ？」

ヴィヴィオ「うん！ ねえまたこのちゃんたちにあいにきてもいい？」

A「勿論だよ いつでも遊びにおいで？ ほかの子達も待ってるからね？」

このちゃ「やん！」

せちゆな「めん！」

ヴィヴィオ「うん！ このちゃん！せつちゃん！ バイバイ！」

？「さあ行くつ、ヴィヴィオ？ それじゃあ、お邪魔しました さあヴィヴィオもご挨拶して？」

ヴィヴィオ「うん！なのはママ おにいちゃん！おじやましました

「!」

A「じゃあね」

「このちゃ」や」w」

「せちゆな」め」w」

こうしてヴィヴィオとヴィヴィオの母親は帰って行った。

こうして、Aの不思議な迷子との一日は幕を閉じたのだった。

~~~~~

続く!

るへいじゅんぱんっ！(後書き)

ヴィヴィオ「こんにちはっ！..!」

A「いらっしやい..!」

このちゃ「やっw」

せちゆな「めっw」

ぷちまズ「うえっいw」

D「(おっしんぱんぱん)」GD



ろくじゅうよっ! (1) (前書き)

今回はまた短いです

スイマセンm ( | | ) m

ではじいねー!

ろくじゅうよっ！(1)

くぶちます的な何か

ある晴れた日、Aは数匹のぶちまを連れて近くの沼に釣りに来た。  
た。

A「さあ 今日とは絶好の釣り日和だ！！ みんな楽しもうねw」

パルナ「ンフw」「ピロピロ」

あしゆなん「なのね！！」「ふんす！

まつきー「うつきー！！」

A「よしっ！じゃあ、各自釣りを開始しましょう あつこの沼、何か河童出るらしいから気をつけてね？」

パルナ「ンフw」「ピロピロ」

あしゆなん「ねっ」「ふんす！

まつきー「キ」

かくして一人と三匹による釣り大会が開催された。

~~~~~

【パルナの場合】

パルナ「ンフw」ピコピコ

パルナはA達から離れると、脇に抱えていた折りたたみの椅子を地面に下ろし、そこに腰を下ろすと、竿をセットして糸を垂らしゆっくりとスケッチブックを開くと風景などをスケッチし始めた。

パルナ「ン」w「ピコピコ

その時パルナの竿に当たりが来た。

パルナ「ン」！「ピッコリン

パルナはすぐさま竿を掴むと思いつき引っ張り出した。

パルナ「ン」！「ン」！「ピコピコ」！

思いつきり踏ん張り竿を上げる。

パルナ「ン」！「ン」！「ピッコリン」！

グイッと思い切り竿を引っ張り上げた。

ザバァ〜！

大きな水しぶきを上げながらバルナは獲物を釣り上げた。

魚「(ピチピチ)」

バルナ「ンン」w「」

バルナが釣り上げたのはバルナの身長を優に越す大きさの魚であった。

魚「ボエエエエ(ピチピチ)」

謎の呻き声を発する魚。バルナは魚を見上げ物凄い喜んでいる。

バルナ「ンフw」ピコピコ

バルナは魚を小さな(バルナサイズの)バケツに入れると再び釣り糸を垂らし釣り竿をセットした。

バルナ「ン」w「ピッコリン

そしてバルナは再び魚がかかるのを待つのだった。

~~~~~

続く！

ろくじゅじよん！ (1) (後書き)

魚「(ピチピチ)」

魚「(ピチピチ)」

魚「(ピチピチ)」

パルナ「ソフソフ」ピロロ

るへいじゅいじゅー！(2) (前書き)

今回はぶちますとライダーとアイドルが出ます！

長くなりますよ〜

ではー！

るくじゅじゅー！（2）

くぶちます的な何か

パルナと別れたA達は意外な人物達に出会っていた。

王蛇「奇遇だな」

双海姉妹「こんちわ」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

やよい「うっうーw」香り松茸味しねじ（Tシャツの柄）

やよ「うっうー」

たかにや「『息災』」

袋「んー！んー！」

A「あれ？ 王蛇さん達もここで釣りですか？」

王蛇「いや 俺達は今日とあるロケをしにこの沼に来たんだ」

A「ロケ？王蛇さん達だけですか？」

王蛇「経費削減でな」

A「じゃあ もしかして、その袋の中身って」

王蛇「伊織だ」

A「あー」

Aは妙な納得をし先ほどからうなり声を発している袋へと視線を移した。

伊織「んー！んー！」

A「それで？ 一体どんなロケなんですか？」

王蛇「ああ 人気のシリーズものでな、『高槻ゴールド伝説シリーズ』生きた河童を捕獲に逝く』という名前の特番なんだ」

A「今のでどんな番組なのかはだいたいわかりました」

やよい「うっうー」

Aはやよいの方をチラリと見ると、コレから訪れるであろう伊織への災難を思い浮かべ、心の中で静かに合唱をするのだった。

~~~~~

伊織「はあはあ やっと、できたわ」

何やら物凄く疲れ切っている伊織。

やよい「伊織ちゃんお疲れさまー」

伊織「あんたのせいでしょうが！　毎回毎回で袋に詰めて連れてくるのよー！」

亜美「それはいおりんがにげるからじゃん」

真美「そ　そ」

伊織「くっ！」

真美の凶星を突かれ言葉に詰まる伊織。

やよい「伊織ちゃんごめんー」　うるうる

伊織「うっ！」

やよいの涙目に言葉を詰まらせたじろぐ伊織。

伊織「ま、まあ　仕方ないわね　今回だけだからね！」

伊織は顔を赤らめそっぱを向いた。

やよい「ありがとうー」

その時そっぱを向いていた伊織は見えていなかった。

ニヤリと笑うやよいの表情を。

~~~~~

王蛇「では、我々はこれで行く。ロケの時間も押しているのでな」

双海姉妹「「じゃーね」」

やよい「またう」

伊織「ハア」

カメラを担いだ王蛇は双海姉妹、やよい、そして肩を落とした伊織を伴い番組のロケをするためにA達から離れるのだった。

A「大変だなあ」

去っていく王蛇達（特にトボトボ歩く伊織）の背中を眺めながらA一人呟くのだった。

~~~~~

A「さーて それでは我々も釣りを始めるとしますか」

あしゅなん「なのね！」

まつきー「うつきー!」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

やよ「うっうー」

たかにや「『楽しみ』」

A「そう言えば、やよとこあみ、こまみそれから、たかにやは残ったんだね」

四匹は頷くとAに近寄った。

A「それじゃあ 僕はここいらで釣りをするけどあしゆなんとまつきーはどうする?」

あしゆなん「なのね!」

まつきー「きー!」

A「そうか、別々の場所に行くんだね? よーし じゃ、ここからは解散だね あしゆなん、まつきーくれぐれも沼には落ちないよう気を付けるんだよ?」

あしゆなん「なのね!」 ふんす!

まつきー「うつきー!」

あしゆなんとまつきーははAの言葉に返事を返すと、
匹一緒に歩き出した。

~~~~~

あしゆなん「ね！ね！」

まつきー「うつきー！」

二匹が話を始めた。

どうやらここからは分かれるようだ。

まつきー「うつきー」

あしゆなん「なのね〜!!」

手を振りあしゆなんとまつきーは分かれるのだった。

~~~~~

【あしゆなんの場合】

あしゆなん「なのね!!」「ふんす！」

あしゆなんは、まつきーと離れ歩いていると丁度良い場所を見つけ、
一人沼の縁に腰を下ろし手に持っていた釣り竿をセットするとジー

ツと釣り竿を眺め始めた。

あしゆなん「な〜のね」

手持ち無沙汰になり当たりをキョロキョロし始めたふと近くに何やら小さな足跡を見つけた。

あしゆなん「なのね？」

不思議に思ったがあしゆなんはそれほど気にせず再び釣り竿を眺めた。

その時、あしゆなんの竿に当たりが来た。

あしゆなん「なのね!！」

あしゆなんは慌てて竿を掴み、思いっきり引つ張った。

ググツ!!

あしゆなん「な〜の〜ね〜!！」

かなりの引きらしく今にも折れそうな竿からは、魚が全くあがる気配がない。

あしゆなん「な〜の〜ね〜!！」

あしゆなんは渾身の力を込めあしゆなんは釣り糸を引き上げた。

ザッバァー!!

釣り上げられたのは全身が青く魚の口に当たる部分には顔があり、ヒレの部分からは腕が生えており尻尾の付け根ね当たりからは脚も生えている奇妙な魚だった。

マーメイドガンダム「釣りは、釣りは良いぞおおおお！！　グハア！！い、息があ！」　ビチビチ

手足の生えた反魚人と言える生物が陸でビチビチはねている様子は何とも異様で気持ち悪かった。

あしゆなん「なのね」

あしゆなんもその光景をみて物凄い顔をしてマーメイドガンダムを蹴り落とし沼に帰したのだった。

あしゆなん「なのね」

あしゆなんは気を取り直し、再び釣り竿をセットすると、またジーツと釣り竿を眺め獲物がかかるのを待っているのだった。

しかしあしゆなんは気づいていなかった。

？「ごじやる」　ちやぷん

その様子を沼の中から眺めて自分に視線を送っていた謎の人影の存在を。

人影はそのまま水に潜ると何処へといなくなっていた。

あしゆなん「な〜のね〜」

あしゆなんはまだ気づいていない。

~~~~~

続く！

ろくじゅじゅっ！(2)(後書き)

あしゆなん「ね〜!!」

ザッバァー!!

マーメイドガンダム「い、息がああああ！ 息があああああああ！  
！」ピクンピクン

あしゆなん「なのね〜」ハァ



るくじゅくじゅく!! (3) (前書き)

続きです!!

今回のネタは分かるかな？

ろくじゆじゆくっ！！（3）

くぶちます的な何か

まつきー「うつきー　　うつきー　　うつきつきー」

まつきーは自作の歌を口ずさみながら、あしゆなんかから離れ一人自分の釣り場を探すために歩いていた。

まつきー「うつき？」

辺りを見回しながら歩いていたまつきー。その時、丁度いい感じで倒れている大木が目に入った。

まつきー「うつきー」

まつきーはすぐさま大木の方まで駆け寄り登り始めた。

まつきー「うつきー」

大木の先端は丁度沼に架かるようになっておりまつきーはその先端まで行くとポテツと腰を下ろし一息吐くのだった。

まつきー「うつきー」ポテツ

腰を下ろしたまつきーは背中に背負っていたリュックを降ろすと何やら中をガサガサと探り始めた。

まつきー「うつきー」ガサガサ

ヒョイッ

まつきーがリュックから取り出したのは一房のバナナだった。

まつきー「うつきー」

しかしただのバナナではない。大きさは一本だけでまつきーと同じぐらいの大きさをしているバナナの王様。

通称『ファイティングバナナ』であった。

このファイティングバナナはAがおやつにと（バナナはおやつに含まれます）まつきーに持たせたのだった。

まつきー「（あくあく）」

まつきーは早速バナナの皮を剥き口いっぱい頬張りだした。

まつきー「（あくあく）」

瞬く間にまつきーのお腹の中に消えていくファイティングバナナ。

まつきー「（ケプツ）」 d b

全部のバナナをお腹の中に納めたまつきーは、ぼっこり膨れたお腹

をさすると小さくゲップをして満足気な表情を浮かべるのだった。

~~~~~

それからお腹が落ち着くまで休憩したまつきーはおもむろに尻尾を水の中に垂らすとじっとし始めた。

まつきー「うつきー」

そのまま身動きをせず何かを待つように座っている。

その時水面に何かの影が映った。

その影は水の中に浸かっているまつきーの尻尾に目掛け口を開いた。

その瞬間、まつきーは素早く尻尾を引き上げそれにつられて獲物が水中から飛び出してきた。

ザッバァー!!!

飛び出してきたのはまつきーの半分ぐらいの大きさの魚だった。

まつきー「うつきー!!」

まつきーはすかさずリボンで魚を絡め捕るとバケツの中へと捕まえた魚を放すのだった。

まつきー「うつきー」

まつきーは釣れた魚を見ると笑顔で喜びぴよんぴよん跳ねた。

実はまつきー、Aの家にお世話になる前から同じ様な方法で魚を捕っていたのである。

まつきー「うつきー!うつきー!」

魚を放したまつきーは再び尻尾を水の中に垂らすと同じ様な方法で再び魚を釣り始めた。

それからまつきーは、途中得体の知れない半魚人みたいな魚を釣り上げるが、その魚には丁重にお断りし沼に帰っていただと、その他に三尾ほど魚を釣り、まつきーは満足気な表情を浮かべ、食べたものなどを片付けるとAの下へと帰るのだった。

~~~~~

続く

ろくじゅじろくっ！！（3）（後書き）

まっきー「（もぐもぐ）」

ザッバアー！！

魚「ブラアアア」

まっきー「（もぐもぐ）」リボンヒョイッ

魚「グエ！！」ぐるぐる

まっきー「（もぐもぐ）」ポチャン

魚「オボオー」

まっきー「（もぐもぐ）」ポチャッ

ろくじゅつななっ！（4）（前書き）

今回はライぶちキャラオンリーの繋ぎの話になります！

変に難産でした

内容とクオリティーは気にしないでください！！

やよいに対する双海姉妹の呼び方が分からないので勝手に想像で書きました！

正解が解る人がいましたら正しい答え教えてください！！

ろくじゅうなっ！（４）

「ぷちます的な何か」

王蛇達ロケ隊は特番の撮影をするため沼の奥の方へと進んでいた。

王蛇「ふむ いやいよ雰囲気が魔が魔がしくなってきたな」

王蛇の言つとおりボートで奥に進むに連れどんどん景色が変わって行きおどろおどろしい雰囲気になっていく。

伊織「何なのよこの雰囲気は！！ ここは一体どこの魔境よ！！」

やよい「まこちー？」

伊織「まきよーじゃなくて魔境よ！！ 何よこの光景！ どう見たって日本じゃないじゃない！！」

亜美「いおりん落ち着いて〜」

伊織を落ち着かせようと亜美が話しかける。

伊織「落ち着いてなんかいられないわよ！？」

やよい「まあまあ伊織ちゃん ここは先ず、コレでも飲んで落ち着きなよ」

そう言いながら、荒れている伊織にやよいは、自分が持っていたり



ユックの中から水筒を出すと中身を注ぎ伊織に手渡そうとした。

伊織「何でアンタはいつもマイペースなのよ!? 大体原因の半分はアンタじゃない!!」

しかし伊織は受け取るうとしない。

やよい「ごめんなさい やっぱり迷惑だよね でもどうしても伊織ちゃんとロケしたくて だからあんな強引なやり方しちゃって」

やよいは顔を俯かすと今にも泣きそうな雰囲気ですり始めた。

亜美「あゝ伊織がやよいちゃん泣かせた」

真美「いけないんだゝ やよいちゃんかわいそー」

伊織「うっ! な、泣かせてなんか無いわよ!? ほ、ほら!! 飲み物頂戴よ 一緒に飲みましょう」

伊織は無理やり話を変えるとやよいに飲み物を飲もうと言った。

やよい「うん」「ニヤリ

やよいは手に持っていたカップを伊織に渡すと自分もカップに注ぎ手に持った。

伊織「さゝて 飲みましょう ブハア!？」

伊織はやよいから渡された飲み物を口に流し込んだ瞬間、アイドルとは思えない盛大な吐き方を披露した。

伊織「ゲホッ！　ゴホッ！　や、やよい、アンタ　何、飲ませたのよ！？」

やよい「えっ？　何って『抹茶コーラ　超アニキ伝説一番搾り味』だよ？」

伊織「だよ？　って、何得体の知れない物体Xみたいな液体飲ませてるのよ！？」

やよい「えゝ美味しいのに〜」

伊織「美味しい分けないじゃない！！　そんなもの飲むぐらいならピーマンかじってた方がましよ！　大体そんなもの誰が飲むって言うのよ！」

亜美「お　いこ〜」

真美「さいこー」

王蛇「うむ　まったりとねっとりとし、何とも深みのある味わいだな」

伊織がそういつた瞬間、伊織の視界の端に抹茶コーラを飲んでいる王蛇と双海姉妹を捉えた。

やよい「おいしいうー」

やよいも三人のように抹茶コーラを飲んでいる。

伊織「なんであんだ達も飲んでるのよ!？」

信じられないという風に怒鳴る伊織。

しかし三人から返ってきた返答は意外な物だった。

亜美「え〜 だって普通に美味しいじゃん 抹茶コーラ」

真美「そーそー この味が分からないなんて、いおりん案外お子ちゃま〜？」

伊織「ガーン」

王蛇は何も言わなかったが、今まで子供とからかっていた双海姉妹、特に真美に子供と言われた伊織は物凄く落ち込んだ。

伊織「そんな あたしの常識って何？ あたしが変なの？」

自分の中での常識が音をたてながら崩れ去っていくのが分かった伊織。

伊織「イヤー！ 誰か私を助けて〜〜!！」

半狂乱気味の伊織を乗せたボートは静かに沼の奥へと進んでいく。

今日も伊織の叫び声が木霊するのだった。

~~~~~

続く！

ろくじゅうななっ！(4)(後書き)

伊織「(じくじく)やだ、案外イケるじゃない」

やよい」「うっうーw

王蛇「階段を一つ登ったな」「シミシミ

ゆえち「です」「チュー

ろくじゅうはちっ！！（5）（前書き）

今回はぶちますのネタになっております

楽しんで頂けたら幸いです！

るくじゅじはちっ！…！(5)

くぶちます的な何か

A「さー僕達も釣りをしようか」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

やよ「うっうー」

たかにゃ「『』」話ぶり「

Aの言葉に反応を返すぶちどる達。

A「じゃあ釣りを開始しよう！…！」

Aとぶちどる達は早速釣り竿を用意し釣りを始めるのだった。

~~~~~

【こあみとこまみの場合】

Aはこあみとこまみの釣りの状況を確認するために二人の側に来たのだった。

こあみ「とかー」

こあみの釣り竿に当たりの気配は未だ無いらしくバケツの中身は空っぽであった。

A「そつかあ まだ魚は釣れてないんだね？」

こまみ「ちー」

その時、二匹がAに話を使用したとき急にぶちサイスにこあみの持つ釣りの釣り糸が引つ張られ竿が物凄くしなった。

こあみ「とかっ!?!」「ぐいぐい

一生懸命引つ張るがこあみの力では釣り上げるのは難しいみたいである。

こあみ「と とかー!」「ぐぐぐぐ

バチャバチャ

こまみ「ちー!」

こあみの様子を見たこまみは直ぐにこあみの持つ竿を掴むと二匹で力を合わせ一緒に竿を引つ張り始めた。



こあみ「とかー」ギギ

こまみ「ちー」ギギ

バチャチャチャ

しかし二匹で踏ん張るが一向に釣れる気配がない。

手を出すまいと思っていたAだったが見かねて手伝おうと手を伸ばしたその時事件は起こった。

こあみ／こまみ「」( ) ( ) 「」ぶわっ

なんとこあみとこまみの両者が魚の力に負けて逆に引っ張られてしまったのである。

バツチャーーン!!!!!!

A「えらいこつちゃ!!!」

沼に落ちたこあみとこまみを慌てて助けに行くA。

すぐに助けられたらこあみとこまみに怪我などはなく無事であった。

この日こあみとこまみは釣るはずだった魚に逆に釣られるという貴重な体験をするのだった。

~~~~~

【やよの場合】

沼に落ちたこあみとこまみを助け出した後びしょびしょの二匹をその場で待たすとやよの様子を見るために捜しに来ていたのだった。

A「やよはどこにいるのかな？」

辺りを見渡しやよを探すA。

A「あついたいた」

Aは沼の縁の石の上に水をじーっと見ながら身動き一つせず寝そべっているやよを見つけた。

やよ「うっうー」

A「ん？なにを見ているのかな？」

Aは水の中の魚を眺めているのだろっと思いついて

バツシャアアア！！

やよの手が目にも止まらぬ速さで動きドロドロのクマみたいに沼の中の魚を捕らえていた。

A「（えー！？）（ ）（ ）

やよの突然の行動に物凄く驚くA。

ばっしゅ

ビチビチ

A「(すごいとってるー!?)」

その後もやよはその手法で魚をとり続け大量にゲットするのだった。

~~~~~

やよの知られざる技を見たAはその場を後にし最後にたかにやを探しに来ていた。

A「あれーどこ行つたのかな?」

キョロキョロ辺りを見渡すがたかにやらしき影は見当たらない。

あるのは、たかにやが使っていたであろう釣り竿がおいてあるだけ。

その時たかにやの釣り竿に当たりが来たようですごくくしなっている。

A「おっと、ヒットしてるな」

Aはたかにやの竿を掴むと一気に引き上げた。

A「どりゃー」

サパーー!!!

引き上げた釣り竿の先についていたのは

たかにゃ「びちびち

口に魚をくわえ、手にはもう一匹の魚を掴まえているたかにゃであった。

A「た、大量だね」( )

たかにゃ「『大量』」しじょーん

~~~~~

続く!

るくじゅはちっ！！（5）（後書き）

こあみ「（へっぶし！！）（とかー）」

こまみ「（へっぶし！！）（ちー）」

A「風邪引いちやうから早く着替えようね」

こあみ「（ずびっ）（とかー）」

こまみ「（ずびっ）（ちー）」

ろくじゅつぎゅっ！（がいでん）（前書き）

物凄く遅くなりました！

投稿2ヶ月目の記念外伝になります！

あまり本編と関係ありませんが楽しんでいただけたら幸いです！

11/12編集しました！

ろくじゅじゅっ！(がいでん)

くぶちます的な何かく

激突する二つの影。

高速で飛び交う拳と蹴り。

? 「ぬおおおお!!!!!!」

? 「はああああ!!」

その一撃一撃が相手を倒すための必殺技の攻撃。

? 「甘い! 甘いぞおおお!!」

? 「うおおおお!! どりゃああ!!」

更に激しくなる拳の応酬。

常人では捉えられない程の速度を出している拳だが、そのどれもが相手を捉えておらずお互いに皮一枚で避けている。

? 「せやああああ!!」

? 「ぬああああ!!」

そしてお互いに、己の最後の一撃を見舞い合い密着していた二つの影は離れたのだった。

二つの影は岩の上に着地すると、お互いを見た。

？「やるなゴッドよ　ますます腕を上げたようだな」

？「ありがとうございます　師匠！！」

ゴッドと呼ばれた人物はもう一人の人物師匠に感謝を頭を下げた。

師匠「しかし己力を過信せず、これ一層精進をするのだぞ」

ゴッドガンダム「はい、師匠！　ありがとうございます！」

師匠「それでは、今日の修行はこれまでとする」

ゴッド「ありがとうございます！」

ゴッドガンダムは師匠であるマスターガンダムに頭を下げると休憩をするためにその場を離れ歩き出していった。

ゴッドガンダムが離れたのを見計らい、マスターガンダムは誰もいない木の影に向かい言葉を発した。

師匠「そこにいるのは分かっている　さっさと出てこい！！」

マスターガンダムの呼びかけに、先ほどまでは誰もいなかった場所から人影が現れた。

? 「くつくつく バレていましたか」

師匠「ふん!! わざわざワシに分かるように殺気を放ちおって! 貴様何者だ! 姿を現せ!!」

そう言つて、マスターガンダムは布状に生成されたビーム・マスタークロスを人影のいる場所へと放った。

? 「おっと 危ない危ない 流石は東方不敗マスターガンダム殿 噂に違わぬ腕をお持ちのようだ」

人影はマスターガンダムの攻撃を避けた。

マスターガンダムは東方に敵なしとまで言われた武人である。

その攻撃を避けることなど並の者では到底できない。

しかしそれを人影は平然とやってのけた。かなりの実力者である。

人影は、マスターガンダムの攻撃を避けるとそのままマスターガンダムの前に姿を現した。

? 「はじめまして東方不敗 私の名は玖辺麗キュベレイしがない呪い師をしております」

現れたのは白い仮面に、赤い袴を着た不気味な人物であった。

師匠「ふん その呪い師がワシに一体何の用だ?」

マスターは鬼武零を睨みつけ用件を聞き始めた。

玖辺麗「はい 少々頼みたいことが御座いまして」

師匠「頼みたいこと だと？」

玖辺麗「はい 簡単なことでございます あなた様に私わたくしどもの組織に協力をして欲しいのです」

玖辺麗はマスターガンダムにそう言った。

師匠「組織？」

玖辺麗「はい 我々は、とある目的の為に集っておるのです その目的にはどうしてもあなた様のお力が必要 どうでしょうか？」

マスターは玖辺麗の話を聞き考える素振りをする。

師匠「ワシが貴様らに協力をしたとしてワシに何の利益があると言うのだ？」

玖辺麗「はい 協力をしていただけた暁には、あなた様にそれなりの地位を約束しましょう」

師匠「ぬふふ ぬはは なーはっはっ！！」

玖辺麗の話を聞いたマスターは突然大声で笑い出し鬼武零を見た。

玖辺麗「何が 可笑しいので？」

玖辺麗は突然笑い出したマスターガンダムに不機嫌な声で聞き返し
仮面から覗く不気味な瞳で睨みつけた。

師匠「このワシが、東方不敗とまで言われたこのワシが、たかが地位や名誉など為に他人に組みするとも思ったか！ 片腹痛いわあ
ああああ！！！」

マスターの怒号が響き渡りここ一体の空間を震わせる。

玖辺麗「どうしても、協力していただけないと　　そう言うのです
ね？」

師匠「ああ　そんな気など毛頭無いわ　さあ用事が済んだらさっさと
と帰れ！！　目障りだ！」

玖辺麗「そうですか　非常に残念ですが仕方ありませんね　あ
なた様なら、良き同志となれたでしょうに　　お気持ちは変わりま
せんか？」

師匠「諄くどい！！　疾くワシの視界から消え失せる薄汚い狗風情めが
！」

マスターは玖辺麗を罵り後ろを向いた。

玖辺麗「そうですか　誠に残念ですが、致し方ありませんね
残念ですがあなたにはここで死んでいただきます」

玖辺麗は怒りに声を震わせながら言葉を発し、懐から数枚の札を指
に挟み取り出した。

マスターガンダム「ふん　貴様如きに、このワシが殺れるとも思
つておるのか？」

玖辺麗「ええ お見せいたしましょうか？ その如きに下されるあなたを屠る私の力を？」

札を構える玖辺麗。

マスターガンダム「やってみる青二才！！」

布状のビームを握りしめるマスターガンダム。

玖辺麗「セイイツ！！」

マスターガンダム「ハアアアア！！」

玖辺麗から投げつけられた札を、マスターガンダムはマスタークロスでハジく。

すると札は地面に刺さり、その途端札は燃え上がり跡形もなくなってしまう。

かなりの呪いがかかっているようだ。

マスターガンダム「ふん！ これで終わりか！！」

玖辺麗「まだまだ往きますよ！！」

マスターガンダム「ハアアアア！ ダアアアアクネスフィンガアアアア！！！！」

玖辺麗「いけ！！ 符ファンネル音留！！」

ぶつかり合う両者。

お互いに一步も譲らない、一進一退の攻防。

こうして東方不敗マスターガンダムと呪い師玖辺麗の二人の戦いの火蓋が切って落とされたのである。

~~~~~

続く？

ろくじゆじきゅっ！(がいでん)(後書き)

キュベレイ  
玖辺麗 キュベレイ

ファンネル  
符闇音留 ファンネル

元ネタはキュベレイになります!!

ななじゅっ！！（6）（前書き）

今回は新たなぷちまが出てきます！

と言っても少しだけです

次回は外伝で師匠の釣り話を書きたいと思います！

もし何か小ネタがありましたらお書きください！！

お一人様一個までで可能な限り盛り込みたいと思います！

ななじゅっ！！(6)

「ぶちます的な何か」

A「さあーて最後は僕の番だね」 頑張るぞ」

Aは一通りぶちどる達の様子を見終わると自分の釣りをなるべく用意にかかった。

因みにに沼に落ちたこあみとこまみは服を着替えさせ暖を取らせている。

A「」

鼻歌を歌いながらセッティングするA。

？「ぎゅいっん」

そんなAの上を謎の声と共に飛んでいった影がいた。

A「なんだ？」

Aは声が聞こえた方を上向き見た。

？「ぎゅいっん」



何やら戦闘機らしい物体が上空を自由に飛び回っているのが目に入った。

しかしただの戦闘機とはどこか違った。

そう、サイズが小さいのである。

A「何だアレ？」

Aは謎の戦闘機を眺めていると急に戦闘機から煙が立ち始め勢いが無くなってきた。

A「えっ!？」

そして遂には謎の戦闘機は沼の中に落ちてしまったのである。

ばっちやーん!!

?「ぎゅっぎゅび!」ばちやばちや

A「マズい!？」

Aは溺れる戦闘機を助けるためにとつさに師匠直伝の布術を使い救出を試みた。

A「ふおおお ハイハイハイ!!」

布は見事戦闘機に絡まりAは思いつ切り引き上げた。

A「フイフイフイッシュ!!」

？「ぎゅぴ〜！！」

引き上げられた戦闘機は天高く舞い上がり地面へと落下した。

？「ぎゅぺっ！？」ベシッ！？

A「あつ」

謎の戦闘機は落下した衝撃で目を回しそれを見たAは後頭部に大きな汗を流しながら眺めているのだった。

~~~~~

？「ぎゅぴ〜散々な目にあったび〜」

Aの目の前には先まで沼で溺れていた戦闘機“だった”ものが大きなたんこぶを作って座っている。

A「いや〜申し訳ない つい力加減を間違えて思いつ切り引っ張り上げてしまった」

反省するAを見た戦闘機モドキは頭を振って否定した。

？「オイラこそ助けて貰ってありがとうぴ オイラの名前はムラサメと言っぴ 改めてありがとうだぴ」

ムラサメと名乗った戦闘機モドキは頭を下げると感謝の言葉を述べ

た。

なぜ急に沼に落ちたのかと聞くと朝ご飯を食べ忘れ空腹で落ちてしまったのだという。

それを聞いたAはお昼に食べようと持ってきていたおにぎり(このちゃ特性)をムラサメに分けてあげることにした。

ムラサメ「ありがとうだぴー！ いただきぴー」むしゃむしゃ

よほどお腹が空いていたのかペロリとおにぎりを平らげ満足そうな顔をしている。

それからムラサメはお礼にとって何故か持っていたキュウリをA渡しました大空へと飛び立ったのである。

ムラサメMS携形態「ぎゅぴーん」「バビューン

A「元気な子だなあ」

~~~~~

紆余曲折ありながらようやく釣りを始められるとAは針に餌をつけるべくリュックの中を探すが

A「あちゃーしまった 餌を家に置いて来ちゃった」

餌を置き忘れ困っているとふと視界の先には、先ほどムラサメから

もらったキュウリが目に入った。

A「うーん 致し方ない」

悩んだあげく釣り糸の先に先ほどのキュウリを結び始めるA。

ギョツギョツ

A「コレで良しw」

キュウリを縛り終わったAはそのまま沼目掛けて投げた。

A「さーて 釣れるかなあ？」

するとキュウリを入れて間もなくしてAの釣り竿に当たりが来た。

A「フィィィィッシュ!!!」

Aが釣り上げたのは体長20cm大の魚だった。

それからもAのヒットは止まることを知らず釣れまくった。

A「フィィィィッシュ!!!」

カニガンダム「釣られタラバ!!!」

A「フィィィィッシュ!!!」

ヒラメガンダム「ミギヒラメ!!!」

A「またまたフィィィィッシュ!!! 案外キュウリでも釣れるなあ」

そんな事を言いながらまた魚を釣り上げる。

瞬く間にAのバケツは釣った魚で一杯になり入れ食い状態だった。

そしてまた当たり。

A「ぬお!? 今度の当たりは今までより強いな!」

Aもつ竿は大きくしなっており釣り糸もピンと張った状態で今にも切れそうな状態だった。

A「こなくそ〜!!」しかしAは諦めない。

粘りに粘り暴れる獲物に食らいつく。

その攻防は30分にも渡って繰り広げられた。

すると獲物の抵抗が若干だが弱まってきた。

Aはその隙を見計らい一気に竿を引き上げた。

A「フィィィィッシュウウウウ!!!」

渾身の力を込めAは遂に獲物を引き上げた。

A「えっ!?」

Aは釣り上げた獲物を見て驚愕した。

Aが引き上げた釣り竿の先にいたモノは

?「ごじやる?」m ) m

緑色の体をした頭に皿を乗つけた生物。

A「河童だああああ!!」

Aの驚愕染まつた絶叫が沼中に木霊するのだった。

~~~~~

続く!

ななじゅっ！！(6)(後書き)

?「いじやる」モキュモキュ(「)(

A「んゝ俺もしかして世紀の大発見した？」

?「いじやる?」()

ななじゅうちっ！(がいでん！)(前書き)

今回はマスターガンダムこと師匠が愛馬風雲再起と釣りをする話になっております！

ぶちまは一切出て来ませんのであしからずm((m

ななじゅっいちっ！（がいでん！）

くぶちます的な何か

とある沼に、一人の師匠と純白の馬が訪れていた。

マスターガンダム師匠「ふむ どうやらここが、今回の戦場のようだな、風雲再起」

風雲再起「ヒヒイイイン！！」

一人は言わずもがな、我らがマスターアジア・東方不敗マスターガンダム師匠である。

そして、そのマスターガンダムを背中に乗せ、悠々とした態度で立っているのがマスターの良き相棒でもあり、良き戦友ともでもある風雲再起であった。

マスター師匠「さて、早速だがワシ達も釣りをするとするか風雲再起！ 東方不敗流の釣りを見せてやろう！！」

風雲再起「ヒヒイイイン！！」

マスター師匠の問いかけに鳴いて反応を返す風雲再起。

因みに全くの余談だが、風雲再起のサイズはイメージ的に、緑のマ

キバオとか武者精太の愛馬みたいなサイズである。

マスター師匠「それでは！！ 魚釣り《ガンダムファイト》 レデ
イイイイ」

風雲再起「ヒヒイイイン！！（ゴー）」

こうしてマスターガンダムと愛馬風雲再起の掛け声により、魚釣り
《ガンダムファイト》が幕を開けたのである。

~~~~~

マスター師匠「風雲再起よ 先ずはワシの手本を見ておくのだぞ！  
！」

風雲再起「ヒヒイイイン！！」

マスターはそう言うと手に布を持ち沼の方へと歩き始めた。

その様子を静かに見つめる愛馬風雲再起。

沼の辺<sup>ほとり</sup>まで近づくとマスターはおもむろに手に持った布をおろすと  
天高く舞い上がった。

手に持った布は体の周りを螺旋を描くように回리しながら体操選手  
のようだった。

マスター師匠「はああああ

流派東方不敗は王者の風えええ！！

奥義！『霸王釣爆縛布陣！』」（はおうちょうばくばくふじん）」

マスターは体の周りを回転させていた布をその勢いのまま水面へと向かって振り下ろした。

マスター師匠「ぬうううう はああああ！！」

そしてマスターは振り下ろした布をうなり声と共に引き寄せた。

バシヤツ！！

引き上げられた布の先には見事な大きさのマーメイドガンダムが捕縛されており見事マスター師匠に釣り上げられていた。

マーメイドガンダム「ぶはあああ！？ い息が！ 息があああああ

¥#？ …！！」

マスター師匠「どうだ風雲再起よ！ コレが東方不敗流の釣り方  
名を『霸王釣爆縛布陣』と言う奥義である この奥義のポイントは  
布を回転させる時の手首の角度だな テストに出るから覚えておく  
ように！！」

風雲再起「ブルルルルル」

風雲再起はお見事と言いそうなほど大きく鳴き、前脚で地面をパカ  
パカと叩いた。

マスター師匠「そうかそうか 因みにこの技は流派東方不敗の釣り  
技の中でも最もポピュラーな技である だいたい通常（師匠の常識  
で）ならば三日間で誰でも出来る様になる簡単な技だ しかし流派

東方不敗にはまだまだ様々な釣り技がある」

風雲再起「ヒヒイイイン!!!」

マスター師匠「それがコレだあああああ!!!」

マスターはそう叫ぶと沼に向かい更にこう叫んだ。

マスター師匠「はあああ!!! 釣れるおおおお!!!」

一言。

たった一言マスターが叫んだだけで大量の魚がマスター目掛けて飛び出してきた。

マスター師匠「これが、東方不敗流釣り技 『気合いで呼び込む』である」

特殊な技法で声帯を揺らし、特殊な空気の振動が水中を伝わり魚達の脳を刺激する事により魚達に水の外に飛び出し捕まるよう錯覚をさせる東方不敗流の秘奥義である。

マスター師匠「今までのを踏まえて と言ってもその足では布は持てんか」

風雲再起「ヒヒイイイン!!!」

マスター師匠「だがそこは気合いでどうにかするのだ!!! さあ風雲再起よ!!! 早速お前も釣りを始めるのだ!!! どちらが多く釣れるか勝負をしようではないか」

風雲再起「ブルルルル!!」

マスター師匠「では行くぞおおおお!!」

風雲再起「ヒヒイイイン!!」

マスターは先ほどのように布を使い、風雲再起は後ろ脚で立ち上がると、ドンと前脚を叩きつけ、前脚を器用に使い魚をとっていた。

誰もが思ったであろう。

これはもう、最早釣りでは無いと。

~~~~~

マスター師匠「なかなかの釣れ具合であったな風雲再起よ」

風雲再起「ブルルルル!!」

あれからマスターと風雲再起は魚をとり続け終いには持ち帰れないほどの大量な魚を釣ったのだった。

持ち帰れない魚については沼に戻し、大物だけを持ち帰る事にした。

マスター師匠「ぬはははは!! それでは帰って取れたたの魚を食すとするか!!」

マーメイドガンダム「ああもう駄目だ マジで息できない 死
んじやうよ マジで俺死んじやうよ！！ どうすんのねえ！？ ホ
ントだよ！マジだからな！！ ああヤバい キタな これキタな！
！」

風雲再起「ブルルルル！！」

マスター師匠「勿論人參もつけるぞ風雲再起！」

マーメイドガンダム「あれ、無視？ 目の前で苦しんでるのに無視
？」

風雲再起「ヒヒイイイン！！」

マスター師匠「では帰るぞ！」

マーメイドガンダム「じゃー良いよ こっちにも考えがあるからな
！ アレだよえーっと ホラ！ だからその とにかくアレをやる
からな！ ホントに良いのか！！ マジやべーかな！！ ねえち
よっと！！マジで無視はやめて下さい！！ ホントお願いします！
」

マスターはそう言うと何かを叫んでいるマーメイドガンダムを完全
に無視し、風雲再起の背中に跨り、風雲再起の背で揺られながらこ
の沼を後にするのだった。

マーメイドガンダム「誰か俺に優しくしてよ！！」

~~~~~

続く！

ななじゅっいちっ！（がいでん！）（後書き）

マスターガンダム「それ！！」布クルクル

まつきー「うつきー！」リボンクルクル

マスターガンダム「なかなかの筋だなまつきーよ！！」布クルクル

まつきー「うつきーw」リボンクルクル

マスターガンダム「そらああああ！！」クルクルクルクル

まつきー「うーつきー！！」クルクルクルクル

マスターガンダム「まだまだああああ！！」クルクルクルクル

まつきー「うつきー！！」クルクルクルクル

マスターガンダム「セイヤアアアア！」シュバババ！！

巨大な丸太を輪切り

まつきー「ううううつきいいいい！！」シュバババ！！

大根の輪切り&桂剥き

マスターガンダム「流石だまつきー！！」

まつきー「うつきーw」





ななじゅうたっ！(7)(前書き)

まだ続きます！

短いです！

すいません！

ななじゅうにっ！(7)

「ぶちます的な何か」

？「ごじやる」シヤリシヤリ

Aの目の前には先ほど釣り上げた河童がペタンと座り、きゅうりをかじりながらAを見ていた。

A「ん」よく見ると、河童は河童だけどこの子ぶちまだよ 世紀の大発見かと思っただのに」

目の前のぶちまを見てそうボヤクA。

ぶちまを見つけただけでも相当の大発見である。

A「え」っと 急に釣り上げてゴメンね？ 怪我とかはないかな？」

Aは膝をつき目線を河童のぶちまに合わせてと話しかけた。

？「ニンニン」ブンブン

ぶちまは首を横に振り自分に怪我が無いことを伝える。

A「あれ？　そう言えば前に一回会ってるよね？」  
？「ごじやる！」

ぶちまは頷き手を挙げて了承の意を表す。

実はこの二人、会話らしい会話は無かったのだが前に一度会っているのである。　ぶちま！？にじゅうにつ！参照

A「君はここに住んでいるのかな？」

楓似ぶちま「ごじやる！」

楓似のぶちまは頷き手を挙げた。

A「一人でかい？」

楓似ぶちま「ニンニン」

A「そうか　寂しいね」

楓似ぶちま「ごじやる」

A「友達とかは一緒に住んでないの？」

楓似ぶちま「ごじやる」

コクコクと首を振り少し寂しそうに言う楓似のぶちま。

A「うーん　それじゃあ僕の家に来るかい？　家にも君と似た子達

がいつぱいいるんだ。 もう寂しくないよ

楓似ぶちま」じゅじゃ〜…!」

楓似のぶちまは嬉しそうに頷きAに着いていくのだった。

~~~~~

続く!

ななじゅうにっ！(7)(後書き)

王蛇「危ない!!」

やよい「うっうー」「ヒョイッ

双海姉妹「うきゃー!!」

伊織「オウチカエルー!!」

ななじゅっさんっ(8)(前書き)

遅くなってしまいました！

短いですが楽しんでいただけたらありがたいです！

あと前々回で釣りじゃねえとツコんでいただきありがとうございます！
す！！

ななじゅづまん(8)

釣りから帰ったAとぶちま達。

そして沼から連れて帰ってきた楓似のぶちま。

A「さて、先ずは君の名前を考えないとな。いつまでも君じゃ不便だしな」

楓似ぶちま「しじゃ〜」

A「ん〜 ネギま!?!の楓に似てるんだよな。ん〜」

楓似ぶちま「しじゃ〜」

考え込むA。

A「よし決めた!! 君の名前は『かえっぱ』だ!!」() ()
ドヤ

かえっぱ「ニンニン!!」

手を挙げて喜ぶかえっぱ。

Aはかえっぱの頭を撫で抱きかかえた。

A「さあみんなに紹介しよう　新しい家族を」

Aは笑顔でかえつぱにそう言つと家族の待つ部屋へと向かい歩いていった。

~~~~~

A「さあみんな新しい家族だよ　名前はかえつぱ　さあかえつぱみんなに挨拶をして」

かえつぱはAの胸から飛び降りるとぶちま達に挨拶をした。

かえつぱ「ごじゃ！　ごじゃる！」

ぶちまズ「ウエイ！」

かえつぱの挨拶に皆一様に挨拶を返すぶちま達。

ぶちま達はかえつぱの周りに集まりワイワイとさわぎはじめる。

このちゃ「や〜」

せちゆな「めん！」

あしゆなん「なのね！！」　ふんす

・  
・  
・

皆次々にかえつぱに挨拶をしてゆく。

かえつぱ「ニンニン！」

かえつぱは一匹一匹に挨拶を返してゆく。

クイツクイツ

かえつぱ「ごじゃ？」

かえつぱは何かにつ引張られ振り向いた。

ちーか「かえねえ！」

ちみか「かえねえ！」

かえつぱ「ニンニン！」

かえつぱは二匹の手を取り挨拶をした。

どうやら双子はかえつぱを気に入ったみたいですぐになつき始めた。

ちーか「かえねえ！」

ちみか「かえねえ！」

かえつぱ「ごじゃ！」

かえつぱに抱きつきクルクル回り始める三匹。

A「かえつぱ早速仲良くなったみたいだね」

かえつぱ「ニンニン！」

ちーか「かえねえ！」

ちみか「かえねえ！」

Aとぶちま達は笑顔で三匹を眺めているのだった。

~~~~~

続く！

ななじゅづまんっ(8)(後書き)

王蛇「はっ!?!」

双海姉妹「うわー!?!」

やよいい」」うえうえうえー!?!」

伊織「イイイイイイヤアアアアア!?!」

ななじゅっよんっ！(9)(前書き)

今回で釣り編は終わりです！

今回はあえてこのような書き方をしています。

あれから伊織達がどうなったかを書きました。

クオリティは気にせず何も考えず感じて下さいw

ななじゅっよんっ！(9)

「ぶちます的な何か」

A「さうて 今日王蛇さんの言っていたやよいちゃん達の特番の
放送日だ 楽しみだなあ」

「やよ」

「こあみ」

「こまみ」

「たかにや」

「ぶちます」

「返事をするぶち達。」

A「おっ！始まるぞ」

A「達はテレビを見始めた。」

~~~~~

ナレーション『高槻ゴールド伝説シリーズ 生きた河童を捕獲に逝く』

~~~~~ (それっぽいBGMが流れている。)

伊織「プロデューサーのアホオオオオオ!!」

開始早々ボートの先端で叫ぶ伊織。

やよい「うっうー 楽しみですうー」

笑顔ではしゃぐやよい。

亜美「わくわくする〜 カツパいるかなー」

真美「カツパめつけたらお金貰えるかな〜」

イタズラめいた笑顔で笑う双海姉妹。

ナレーション『一行はそれぞれの思いを胸に沼の奥地へと進んでいくのだった。』

~~~~~

やよい「まっくらうー」

伊織「ドロよこ」（涙）

亜美「何か出そー」

真美「カップ出そー」

ボートが奥に進むにつれ周りをキョロキョロし始める一同。

伊織「なんで毎回毎回あたと行くと魔境に着くのよ!」

亜美「まきよー?」

真美「まこちー?」

伊織「まきよーじゃなくて魔境よ!」 前にもこのくだりやったわよ!」

ガーンとまくし立てる伊織。

やよい「伊織ちゃんうるさいうー」

亜美「いおりんうるさーい」

真美「うるさーい」

伊織「うるさいって何よ!! てかこのくだりもやった覚えがあるわよ!」

またもガーンと唸る伊織。



伊織「もうあなた達（特にやよい）と話すとお頭が痛くなるわ」

伊織は頭を抑え俯く。

やよい「元気だして伊織ちゃん」

伊織「あなたのせいでしょうが！あなたの…！」

ナレーション『各々の思いを乗せながらボートは先へと進むのだった。』

~~~~~

ナレーション『更に奥地へと進んだアイドル一行。彼女たちを待ち受けるものとは』

伊織「だいぶ置くまで来たわね」

やよい「もう来た場所がみえないっ」

亜美「何が出るか楽しみ」

真美「カップ出そ」

辺りを見回す伊織達。

やよい「何かいるかな」

キヨロキヨロ辺りを見回しカップを探す伊織。

亜美「あつ魚だ」

真美「こつちにはカニもいるよ」

双子に関してはすでに飽きてしまったのか水面を覗き魚などを見ている。

伊織「あんた達も真面目に探しなさいよ！」

伊織は亜美と真美に注意をする。

亜美「あれ？」

真美「あつ!?!」

ナレーション『その時！亜美と真美は水面を泳ぐ謎の影を捉えた。』

亜美「なんかいたー」

真美「うん 何か泳いでたー」

やよい「とにかく行ってみましょー」

一行は先ほどの影を追いボートを進めた。

~~~~~

それから紆余曲折あり、先ほど見た影を探していた。（前話などの  
あとがき参照）

やよい「うーん いないですねー」

伊織「あんた達本当に見たんでしょうねー!!」

亜美「見たよ」

真美「間違いないよ」

伊織「本当かしらね ん？」

伊織が喋っていたその時後ろの方でポチャンという音が鳴った。

皆が振り返ってみると、そこには真っ暗で見えないが、水面から顔を出した謎の生物がいた。

?「ニンニン！」

伊織「なっ!?!」

やよい「うっうー!?!」

双海姉妹「出た!?!」

?「!?!」

ちやぷん

謎の生き物は皆の驚いた声に驚き水の中へと潜ってしまった。

伊織「!?!」

やよい「!?!」

双海姉妹「!?!」

みな驚きに口が開いたまま固まっている。

~~~~~

ナレーション『こうして今回の旅は終わりを告げた。 残念ながら
カッパを捕獲する事は叶わなかったが、いつの日かまた彼女たちは
やってくるだろう』

伊織「二度とやるかああああ!?!」

~~~~~

A「(H)

Aはしょっぱい顔をしてキュウリをかじっている一匹のぶちまを眺  
めている。

かえっぱ「しじゃ?」(シヤリシヤリ)(「) (「)?

ちーか「たー？」

ちみか「みー？」

A「(まさかね」

~~~~~

続く！

ななじゅつよんっ！(9)(後書き)

かえっぱ「ニンニン！！」

伊織「なんか見たことあるよっなっ」

やよい「うっうー！」

ちーか「かえねえ！」

ちみか「かえねえ！」

こあみ「ねーちゃ！」

こまみ「ねーちゃ！」

ななじゅうじっ！(しょうげき・えいちん)(前書き)

今回は久々にあのキャラが!?

ななじゅじゅっ！(しょげき・えいちへん)

くぶちます的な何か

あの衝撃的な釣りから数日。

A達は今日も今日とてダルツと暇そうにしていた。

テレビ『本日、世界で二人目の男性によるIS起動者が発表されました 起動者の名前はシュウジ・クロス』

ピッ！

テレビ『またもや、黒と緑の服を着た二人の少女により人々が救われました！』

ピッ！

テレビ『またもや謎の骸骨男が現れ怪物を倒し街を救いました。』

ピッ！

テレビ『ぬはははは！ 甘い！甘いぞ！ この馬鹿弟子が
ああああ！(しばらくお待ち下さいm()m)』

ピッ！

A「うん 何だかぱっとしないなあ」

ピンポーン！！

A「ん？ 誰か来たかな？」

Aは腰を上げて玄関へと歩いていった。

~~~~~

ガチャッ

A「ハイハイ」

Aが玄関の扉を開けるとそこに待っていたのは

ぷちブロッサム「です」

ぷちマリ「やるっしゅー！」「ふんす！

？」「だよねー！」

？」「ふう」

扉の前に居たのは、前に異世界で出会ったぷちキュアのぷちブロッサムとぷちマリであった。(にじゅうち！)(がいでん！)(参照)

A「あれ！？　ぶちブロッサムとぶちマリク久しぶり！！　いつこ  
つちに？」

ぶちブロッサム「です〜」

ぶちマリク「やるっしゅ！！」「ふんす！

A「へえ21話前に来てたんだ！」

Aは屈んでブロッサムとマリクと会話をする。

A「ん？ところで、其方のお二人はどちら様？」

？「だよねー！」

？「ふう  
」

Aはブロッサムとマリクと共にいた二匹のぶちキュアに目をやった。

一匹は日の光のように暖かな黄色の髪をツインテールにしたぶちキ  
ュア。

もう一匹は月の光のように神秘的な蒼銀色をしたストレートな髪  
のぶちキュア。

ぶちブロッサム「です〜」

ぶちマリク「やるっしゅ！！」「ふんす！

二匹はAに説明をした。

A「へえ 二人の仲間の『ぷちサンシャイン』と『ぷちムーンライト』って言うんだ こんにちは、Aです よろしくね?」

二匹に握手をするために手を出すA。

ぷちサンシャイン「だよね!」

すべてを照らすような暖かな笑顔でAの握手に応じるぷちサンシャイン。

A「よろしくね?」

続いてぷちムーンライトに手を出すA。

ぷちムーンライト「ふう」プイッ

しかしぷちムーンライトは腕を組んだままそっぽを向いてしまった。

A「ありやりや 嫌われちゃったのかな?」

ぷちブロッサム「です」

ぷちマリン「やるっしゅ!」

握手を拒んだぷちムーンライトに何かを言う二匹だがぷちムーンライトは一向に取り合おうとしない。

A「良いよ二人とも きつと二人と仲の良い得体の知れない俺を警

戒してるんだよ 大丈夫、きつと認めて貰うから」

ニコツと笑い頭を撫で二匹を安心させるA。

ぶちムーンライトはそんな彼をジッと眺めていた。

~~~~~

続く！

ななじゅじっ！(しょげき・えいちん)(後書き)

ぷちB「です〜」()

ぷちM「やるっしゅー！」ふんす！

ぷちS「だよね！」

ぷちM「ふう」

ハートキャッチぷちキュア「ぷあキュ〜」

四人集まったポーズ

A「かわええ」ポタポタ

ななじゅうろくっ！(しよっげき・えいちへん)(前書き)

しよっげき・えいちへんは今回で終了です！

楽しんで頂けたら幸いです！

ななじゅづろくっ！(しょうげき・えいちへん)

くぶちます的な何か

A「さあ〜あがって」

ぶちキュア達を家に上げ、Aはお茶の用意を始めた。

ぶちブロッサム「です」

ぶちマリ「やるっしゅー！」「ふんす！

ぶちサンシャイン「だよね！」

ぶちムーンライト「ふう」「キョロキョロ

Aがお茶の用意をするために奥に引っ込み、ぶちキュア達は居間で待つように言われ、ぶちムーンライトはキョロキョロと居間を見渡しはじめた。

ぶちムーンライト「ふう」

ぶちムーンライトは居間を見渡し終わると静かに正座しAを待っていた。

~~~~~

A「お待たせ」

それから暫くしてお盆にちーちゃんな湯飲みと急須、お茶菓子を持って居間に現れた。

A「はい！ ブロッサムにはこの湯飲みね」

ぷちブロッサム「です〜w」

Aは桜の花びらが描かれた桜色の湯飲みを渡した。

A「マリンはこれ」

ぷちマリン「やるっしゅ！！」「ふんす！

マリンにはデフォルメされた魚の絵が描かれた水色の湯飲みを渡す。

A「はい！ サンシャインはこっち」

ぷちサンシャイン「だよね！」

ぷちサンシャインに渡されたのは、可愛いヒマワリが描かれた山吹色の湯飲み。

A「はい！ 最後にムーンライトはこの湯飲みね？」

ぷちムーンライト「」



ぷちムーンライトが受け取ったのは、小さな銀色の三日月が描かれた藍色の湯飲みである。

ぷちムーンライトは無言で湯飲みを受け取るとまたふつと顔を反らしてしまった。

A「（ん）まだ仲良くなれないかあ」

Aは少し寂しそうな顔をしまた奥へと引っ込んでいった。

ぷちムーンライト「」

そんなAを見ていたぷちムーンライト。

彼女は少し申し訳無さそうな表情をすると、Aから渡された湯飲み口に口を付けた。

ぷちムーンライト「（ズズッ！）　！！」

ぷちムーンライトは渡されたお茶のその飲みやすさに驚きを露わにした。

熱すぎず温すぎず、適度な温度であり苦味も丁度良く調整されている。

ぷちムーンライト「ふう」

ぷちムーンライトはAの細かな配慮に自分の中の考えが確信に変わるのを感じた。

ぷちマリッ「やるっしゅ！！（バリバリ！むしゃむしゃ！）」「ふんす！ふんす！

そんなぷちムーンライトを余所に、ぷちマリッは遠慮なく菓子を喰い漁っていた。

ぷちムーンライト「めっ！！」

ぷちマリッ「しゅっ」

ぷちマリッを軽く窘め、ぷちムーンライトはAを待つのだった。

~~~~~

ここからは音声のみで妄想を掻き立てて下さい。

A「それそれw」

ぷちブロッサム「ですっw」キヤッキヤッ

A「ホレホレっw」

ぷちマリッ「しゅっw」プニプニ

A「そろっw」

ぷちサンシャイン「だよっw」クルクル

A「おいでムーンライト!!」

ぷちムーンライト「ふう／＼／（プイッ）「ポヨンポヨン

A「（ブシューー!!）（デベロッパ!!）＼（。T T。；）
トントン

~~~~~

それから暫くして、Aと色々と触れ合ったぷちキュア達はそろそろ帰るとAに告げた。

ぷちプロッサム「です〜!!」

A「そうかあ〜 そろそろ帰るんだね?」

ぷちプロッサム「です〜」

A「寂しいなあ また遊びに来てくれるかい?」

ぷちマリ「やるっしゅ!!」「ふんす!

もちろんと言わんばかりに両手を上げて、Aに行動を表すぷちマリ。

Aはそんなマリをみて頭を撫でながら微笑んだ。

A「また遊びな来てくれるかい？」

ぷちサンシャイン「だよ!!!」

綻ぶような笑顔で答えるぷちサンシャイン。

そして最後にぷちムーンライトをみるA。

ぷちムーンライト「」

未だにそっぱを向いているぷちムーンライト。

A「(結局　あまり心を開いて貰えなかったかな?)　ふう」

Aの寂しげな視線。

それに気づいたぷちムーンライトはAに近づく。

クイツクイツ

A「ん？」

ぷちムーンライトに引っ張られ顔を向けるA。

A「どうしだのムーンライト？」

スッ

ぷちムーンライト「／／／」

ぷちムーンライトは無言で手を差し出してきた。

それはぷちキュア達が訪れたときにAがぷちムーンライトと出来なかつた握手。

A「ムーンライト」

ぷちムーンライト「ん／／／」

ぷちムーンライトは妹分のぷちブロッサムとぷちマリリンが仲の良いAが、どんな人間か見極めるために初めの時にAと握手をしなかつた。

しかし今日家に来てAの人なりを観察し、妹分達の言っていたAの優しさを感じ安心し握手をやり返したのである。

A「また 遊びに来てくれるかな？」

Aは微笑みながらぷちムーンライトの手を取る。

ぷちムーンライト「ええ / / /」

ぷちムーンライトは頬を染め、神秘的な柔らかい笑みをこぼすとキユツと手を握り返した。

そして別れの挨拶を済ますと、ぷちキュア達は帰って行ったのである。

~~~~~

【某所】

? 「そうですね　　いっぱい遊んで貰えたんですね？」

ぷちブロッサム「です」

? 「それで　　彼は信用に値する人だったのかしら？」

ぷちムーンライト「ええ」

? 「よかったねw　　ぷちサンシャインw」

ぷちサンシャイン「だよw」

? 「あんたも、いっぱい遊んで貰って良かったじゃん！」

ぷちマリリン「やるっしゅ!!」「ふんす！」

? 「いつか会ってみたいですね」

? 「ええ」

? 「うん！　　ボクも会ってみたいな!!」

? 「どんな人なのかきになるなあ」

ハートキャッチぷちキュア「ぷあキュ〜W」

？「私達も〜！」

？「わたしも会いた〜いW けつてーいW」

ぷちキュアオールスターズ「ぷちぷあ〜!!！」

ぷちキュア達は、皆笑顔でAの家のことを話すのだった。

~~~~~

続く！

ななじゅづろくっ！(しょうげき・えいちへん)(後書き)

ハートキャッチぷちキュア「ぷちキュ〜W」ピシッ！

A「／／W」パチパチ



ななじゅうなつ！！（1）（前書き）

早めに新キャラ登場！？

正体はまさかの人物！！

ななじゅうなっ！！(1)

くぶちます的な何か

とある平日。

またもやテレビのニュースを見ながらダレきっていた。

テレビ『またもや銀の骸骨仮面によって街の平和は守られました！』

ピッ

テレビ『巷で目撃が多発している小さな生き物がまたも発見されました』

ピッ

テレビ『ぬはははは！！ たぎる！たぎるぞ！！ やはり  
しばらくお待ち下さい』

ピッ

A「あゝ 世界は変わらず平和だな」

Aは気だるげな感じでチャンネルを回す。

そんなとき、Aの家に意外な訪問者が現れた。

ドツゴオオオオン！！！！

A「何じゃああああ！！！」

訪問者はAの家の天井を突き破り突入してきた。

モクモクと立ち込める煙の中にその人物は立っていた。

？「くつくつく 私が誰かって？ 私の名はエヴァンジェリン！！

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！！ 悪の魔法使いさ

！！！」

尊大な名乗りを上げ、煙の中から現れたのは

A「えっ？」

エヴァンジェリン「ふふん！」（DIDD）

ちっちゃいウサギさんでした。

エヴァンジェリンはきらめくブレンドをはためかせ、どつだと言わんばかりにちっちゃな胸を精一杯張り、片方にはキリンのぬいぐるみを抱えもう片方の手を腰に当てている。

A「え〜つと エヴァンジェリンちゃん？」

エヴァンジェリン「ええい！！ 私をちゃん付けで呼ぶな！！ 私

は悪のまほーつかいだぞ！！」

A「えつとゴメンね？ えつと エヴァンジェリン、さん？ どうしてまた家なんかにつっ込んできたの？」

エヴァンジェリン「ふん！！ 大した理由ではない ほんのチョット魔法の操作をミスっただけだ」

A「（ほんのチョットで家に突っ込むって）」

Aはエヴァンジェリンの突っ込んできた理由に大粒の汗を垂らした。

エヴァンジェリン「むっ！ 疑っているな！！ 私はさいきよーの悪のまほーつかいなんだぞ！！ ホントなんだぞ！！」（D×D）

必死でAに言い聞かそうとするエヴァンジェリン。

その姿は、まるで小さな子供が威張っているみたいで微笑ましい光景だった。

現にAも

A「（か、可愛い）」

Aは知らず知らずの内に小さな子供をあやすように、エヴァンジェリンの頭を撫でていた。

エヴァンジェリン「ええーい！！ 頭を撫でるなあ！ 子供扱いるなあ！！」

A「あっ!?!?ゴメンよ つい」

慌てて手を引っ込めるA。

エヴァンジェリン「えーい もう怒ったぞ! 悪のまほーつかいを怒らせたらどうなるか思い知らせてやる!!!」

エヴァンジェリンのこめかみには、 のマークが現れており、プルプルとふるえている。

A「えっ!あっ!ゴメンよ!!マクダウエルさん!!」

エヴァンジェリン「いや!許さん! 我がまほーを受けてみるが良  
い!!!」

A「!?!?」

エヴァンジェリン「リク・ラクラ・ラック・ライラック 『凍る大地』!!!」

エヴァンジェリンの呪文に反応し、Aを巻き込み部屋中が氷に包まれるのだった。

A「(カッチコッチ)」

エヴァンジェリン「ふん!?!?」(#DxD)プイッ

~~~~~

続く！

ななじゅっとなっ!!!(1)(後書き)

エヴァンジェリン「わたしがさいきよーなの!!!(#DxD)

A「ハイハイ そうだね」ニコニコ

エヴァンジェリン「キー!!」

ななじゅうはちっ！(2)(前書き)

続きです

短いです！

ななじゅっはちっ！(2)

くぶちます的な何か

エヴァンジェリン「ふん！思い知ったか人間め！」(DxD)

A「(はあはあ) えらい目にあつた」

エヴァンジェリン「ふん！わたしを子供扱いするからだ！」(#D皿D)
皿D)

A「いゝやゴメンよ つい可愛くてね」(^| ^;)

エヴァンジェリン「だから！可愛いとか子供扱いをするんじゃない
！！ また氷漬けにされたいらしいな」(#D皿D)キッ

A「ゴメンゴメン！？ それだけは勘弁して下さい！！」m) . . .
(. . .m)

エヴァンジェリン「ふん！ 分かればいいのだ！」

A「(良かった)「ふう) . . .」(

エヴァンジェリン「おい人間 貴様名を何という」

A「えっと A^{ハジメ}って言います」

エヴァンジェリン「ふん　良かろう　貴様を我が家来にしてやる
！　ありがたく思え！！」(D×D)　ビシッ

A「えっ？　ああ　ありがとうございます？」「(・|・)エツ・
？」

エヴァンジェリン「くっくく　良い返事だ　素直に従っていれば、
それ相応の褒美をやるう！！」(D×D)ニヤリ

A「えつと　ご期待に添えるように頑張ります？」

エヴァンジェリン「良い心掛けた　貴様には特別に、私のことはエ
ヴァと呼ばせてやるう！！ありがとう思えよ！」

A「あゝうん　ありがとうね　エヴァちゃん」

エヴァちゃん「ふふん　！」テレテレ(*D×D)

~~~~~

A「そう言えば　エヴァちゃんは家の他の子と違って喋れるんだね  
？」

エヴァちゃん「ふん！　私を他のヤツと一緒にするなよ！　私は不  
老不死だからな、ほかのヤツより長く生きているんだ　喋るくらい  
訳ないのさ！」バリボリ　(D皿D)せんべいを食べている

A「えっ!?エヴァちゃんて、もしかして僕より年上?」( ;

エヴァちゃん「そっだ 何だ?なんだと思っっていたんだ?」

A「えっと 物凄く年下の子かと」

エヴァちゃん「なん、だと 貴様!」

A「ひえっ!!」

エヴァちゃん「えい許さん!! また氷漬けにしてやる!!」(

#D皿D)

A「(ま、マズい!!)。(。 ;)ガクガク

エヴァちゃん「喰らえっ!?!」

A「うっ 「顔をガード

ドゴーン!!」

エヴァちゃん「何だ!?!」

A「!?!」

?「マスター おいたはダメですよ」

~~~~~

続く！

ななじゅっはちっ！(2)(後書き)

エヴァちゃん「(ジッ)／／」「(*DxD)キリンのぬいぐるみ
をジッ眺めている

A「エヴァちゃん可愛い／／」

ネギま！？のスカカードEDを見ていただければ分かるかもw

ななじゅきゅっ！(3)(前書き)

主人公空気ですw

完結短いですがよろしくお願いします！

ななじゅきゅっ！（3）

くぶちます的な何か

エヴァちゃん「ちゃ、ちゃちゃまる！」

ちゃちゃまる「マスター 他人様に迷惑をかけてはいけませんよ
（D D）

エヴァちゃん「わ、私は何をしようと私の勝手であろう！ 貴様に
とやかに言われる筋合いはない！！」

（#DxD） ビシッ
ちゃちゃまる「いいえ マスターの過ちを正するのが私の役割です
マスターが悪いことをしたのならば私が叱らなければなりません」
（D D）

エヴァちゃん「何だと！？ えーい人形の分際で偉そうな！ 身分
の違いを分からせてやる！！ リク・ラクラ・ラッ！？」
（#DxD）

ちゃちゃまる「あなたをお仕置きです」（D D） ガチャン

エヴァちゃん「なっ！？」

ちゃちゃまる「発射」

ロケットパンチ（D D）
||||||
||||||
||||||
||||||
||||||
||||||
||||||
||||||
||||||
||||||
||||||

エヴァちゃん「あびっ!」

〃 # (X X X)

ちやちやまる「お仕置き完了です」

(D D)

エヴァちゃん「い、いはい!」

(頬に手を当てる) (ヒリヒリ) # D A D)

ちやちやまる「さあ帰りますよマスター」

エヴァちゃん「くう 覚えへるよちやちやまる! 必ず思い知らせ
てやるからな!」 (ビシッ) (D X D)

ちやちやまる「分かりました ですがその前に、お家に帰りお仕置
きの続きです」

(D D)

エヴァちゃん「なっ! 仕置きは終わりとっていただろう!」

(D 皿 D)

ちやちやまる「それは余所様にご迷惑をおかけした分です 他にも
色々御座いますのでお覚悟を 先ずは、今夜の夕食はネギとニンニ
クの料理ですね」 (D D)

エヴァちゃん「なっ!?! それだけは止めてくれ!」 (D D)

ちやちやまる「さあ逝きますよ」

(D D) (ガシッ)

エヴァちゃん「いやだああ!? 助ける人間!?!」 (D D)

A「えっいや!?!」

ちやちやまる「それでは失礼します」

ペコリ(D D)ボボボボ(足の裏から火を噴射)

エヴァちゃん「ニンニク漬けはいやだああああ!?!」 (T T)

ちやちやまる「レッツゴーです」ボシュー(天井の穴から飛び立っ
た)

A「何だったんだ てか、家がボロボロに」(。(。)

~~~~~

A「ありがとうDG おかげで家は直ったよ」(^|^\*)

DG「(ズニユズニユ!?!)(DG細胞で家を直している)

~~~~~

続く!

ななじゅきゅっ！(3)(後書き)

ちやちやまる」(ジッ

「

(*)D D(うさぎのぬいぐるみをジッ眺めている) > 皿 <

A「ちやちやまる可愛い / / / 「

ネギま！？のスカカードのEDをご覧頂ければわかります！

~~~~~

PVが800を超えました！

ですがお気に入りが一件へり感想が来なくなりました

何かを得るためには同等の代価を支払わなければならないのですね

## はちじゅっ！(前書き)

今回は、鳴神 ソラさんとLAN武さんのキャラとのコラボです！

えー若干内容が薄く(いつものことか;)、お二人のご希望に添えたかは分かりませんが、楽しんでいただけたら幸いです！

最終的に、一昨日のPVは900でした！一気にbest3トップになりましたw

ユニークは相変わらずですが、とても嬉しかったです！

今後もぶちまを見捨てず、よろしくお願いします!!

はぢいぢい！

くぶちます的な何か

Wセリカ「ふぶん 今日Aさんの家にお呼ばれだよ 楽しみだな  
あゝ」ルンルン

W龍星「あんまりはしゃぐなよ」

セリカ「だって、楽しみなんだから所為がないじゃないか」ニコニコ

龍星「全く、ほら早くいけど」

セリカ「うん！」

~~~~~

あふう「ナノー」パタパタ

ちひゃー「くっ！くっ！くっ！」（目をキラキラさせながら走る）

ぴよぴよ」「ぴー」

王蛇「お前たち、そんなに急ぐと危ないぞ」

(キイイイイン)

王蛇「ん?」「キヨロキヨロ

びよびよ」「び?」

王蛇「済まないが、少し用事を思いだした 地図を渡すから先に行
つてくれ」

びよびよ」「び!」() () あふうとちひゃーを伴いAの家に向
かった)

王蛇「ふう」(近くにあった鏡を覗く)

~~~~~

王蛇「またお前達か」

量産型Gハンター「キシヤー!!」

王蛇「全力でいくぞ」(Vバックルからカードを引き抜く)

『SURVIVE』

王蛇SV「いくぞ!!」

量産型Gハンター「キシヤー!!」

セリカ「リュウくん」

龍星「ああ 来るぜ」

量産型Gハンター「ガアー!!」

セリカ「これからAさんちで楽しく騒ぐはずだったのに  
イライラするね」スツ（メモリを取り出す）

龍星「早いとこ終わらせて、Aさんちに急ぐぞ」スツ（メモリを取り出す）

サイクロンメモリ『Cyclone!!』

ジョーカーメモリ『Joker!!』

龍星「変身!!」

セリカ「バタン

量産型Gハンター「ガアー!!」

仮面ライダーW「さあ お前の罪を数えろ」ピシッ

王蛇SV「はあ！せい！」

量産型Gハンター「ギャウアー！！」

王蛇SV「トドメだ」(Vバツクルからカードを引き抜く)

『FINALVENT』

ベノヴァイパー「シャアアア！！(ボハア)」(毒液を吐き出す)

王蛇SV「ハアアアア！！」(毒液の勢いで回転し、相手を蹴る)

量産型Gハンター「グギャー！！」(FINALVENTが命中)

ドガンー！！

王蛇「ふう　さて急ぐか」(ミラーワールドを抜け出す)

~~~~~

W「せい！たあ！！！」

量産型Gハンター「グガガガ！！」

W「さてそろそろトドメだ！」(ダブルドライバーからジョーカーメモリを引き抜く)

『Joker Maximum Drive』

W「ジョーカーエクストリーム!!」(風で飛び上がり、体が左右に別れ相手を蹴る)

量産型Gハンター「グギャー!!」

ボガン!!

龍星「さて、Aさんちに急ぐか」

セリカ「うん」

~~~~~

ピンポーン

A「やあ、いらっしやい さぁ中に入って」

龍星「お邪魔します!」

セリカ「お邪魔するよ」

このちゃ「や〜!」「ピヨロン」(セリカに飛びつく)

セリカ「このちゃんこんにちは 遊びに来たよW」スリスリ



A「さあ、王蛇さん達も来ているから上がって上がって」  
スタスタスタ（家の中に入る）

A「さあみんな揃ったし パーチーの始まりじゃいー！」

一同『イエーイー！』

~~~~~

あふう「ナッノー」ガツガツ

あしゆなん「なにょねー」ガツガツ

ぴよぴよ「びー」

A「あつありがとう はい、こちらもどござ」

ちひゃー「くっ！くっ！」（頭の上で）バンバン

龍星「おっ？何だ ほらよ」（料理を渡す）

セリカ「きゃー／＼／＼ かわいいーw」モフモフ

このちゃ「や〜w」ギゅっギゅっ

まっきー「うきーw」ギゅっギゅっ

ちさー」「ぴょんー」「ぎゅっぎゅっ

~~~~~

王蛇「ではA また遊びに来るぞ」

あふう「はいー」「ぎゅー

A「よし、あふうとりあえず離れようか」「ぎゅー

びよびよ」「ぴっ！ぴっ！」（あふうを説得）

ちさー」「くっ！くっ！」

龍星「ああ また今度な！」

セリカ「このちゃん！みんな！ また遊びに来るよー！」

ぷちまズ『（パタパタ）』（手を振っている）

セリカ「それじゃあ！またねー！」

~~~~~

続く！

はちじゅっ！(後書き)

↓作中のオリジナルベントカード↓

(鳴神ソラさん作)

SURVIVE 猛毒

絵柄：紫色の背景に黄金の龍の爪を模したレリーフがある。

王蛇を王蛇サバイブに変身させるカード

王蛇サバイブ

外見：王蛇の胸にベノスネーカーの頭部を模した鎧を装着した感じ

概要

王蛇がサバイブのカードを牙召杖ベノバイザーツバイ(ベノバイザーの蛇の部分がアドベントカードを入れられる位の大きさになり、口にサバイブのカードを入れる事でサバイブになれる)に使用することにより強化変身した姿。

武器にベノサーベル以外にスイングベントで呼び出すベノスネーカーの胴体から尻尾を模した鞭『ベノウィップ』を持つ。

またカードにファントムベントを持つ。

必殺技はベノヴァイパーの吐いた毒液の勢に乗って回転しながら
蹴りを繰り出す『ポイズントルネードクラッシュ』

はちじゅっいちっ！(がいでん！)(前書き)

今回は久々にあのキャラにスポットが！！

Gジェネネタがあります

本編とは関係ありませんし、時間軸も違いますw

はちじゅっいちっ！(がいでん！)

くぶちます的な何か

A「さうて 久々にDGでもいじるかなあ」

DG「(ズニユズニユW)」

A「えーつとこの前買っておいたアストナージ・エンジンがあったよな(ガチャガチャ)」(工具箱を漁る)

DG「(ズニユズニユW)」

A「あつたあつた！ コレを組み込んで、と」カチカチ

DG「(ズニユズニユW)」カチツ(パーツがハメ込まれる音)

A「それと、プレミアム・EXAMもここに組み込んで」カチカチ

DG「(ズニユズニユW)」カチツ(パーツがハメ込まれる音)

A「最後に特製のアンリミテッドユニットを取り付けて」カチカチ

DG「(ズニユズニユW)」カチツ(パーツがハメ込まれる音)

A「はい、完成！　これで今までに無いほどパワーが出るかな？」
「どっど」

D G「（ズニユズニユW）」（嬉しげに蠢く）

A「うん　良かった良かったW　また何かあったらやっであげるね」

D G「（ズニユズニユW）」

~~~~~

A「おーいこのちや  
ちよっとおいでー」

このちや「や〜W」「コロコロ」（四輪の小さな台車にD Gの鉢植えを  
乗せて歩いてくる）

A「このちや、そろそろD Gの鉢も小さくなってきただろうから、  
新しい鉢に変えようか」

このちや「や〜W」（手を挙げて喜ぶ）

D G「（ズニユズニユW）」（嬉しそうにっっなっている）

A「よし、ちよっと待っててね」

~~~~~


A「このちゃお待たせ！ 丁度良いコロニーがあったからこれにしよう」

このちゃ「や〜！」

A「うん じゃあ移し替えようか」

D G「(ズボツ)」

A「よし、じゃあ移し替えるよ」

D G「(ゴキ！グキ！？ズチ！！ブチ！？ブニ！！ニャーw)」
コロニーに取り付いている音)

D G「(ギユニユギユニユw)」(喜んでいる)

このちゃ「や〜w」(嬉しそう)

A「うん、良かったね あれ？」

D G「(ギユニユギユニユw)」(グググ！！グググ！！)(何やら体が震えている)

A「なんだ!？」

このちゃ「や〜!？」

〜
〜
〜 (何かレベルが上がる有名な音)

D G 「 W (D G はデビルコロニーに進化した!)

A 「びっくりした! ? 進化したんだ おめでとぅ D G

このちゃ 「 や W 「 ギュッ (D G にくっつく)

D G 「 W 「 なでなで (このちゃの頭を撫でる)

A 「 ホントに二人は仲が良いなあ W 「

このちゃ 「 や W 「

D G 「 W 「

A 「 さて、みんなに D G が進化したことを知らせてくるかな せち
ゆな達は今何処にいるかな? 「 てくてく (ぶちまを探しに家の中に
歩き出した)

このちゃ 「 や W 「 ギュッ

D G 「 W 「 ギュッ

~~~~~

このちゃ 「 や W ( D G の頭の上で嬉しそう )

あしゆなん 「 なのね! ! 「 ( D G の右肩に乗ってはしゃいでいる )

ののか」「ぶあゝw」「D Gの手の平の上で嬉しそうに笑っている

まっきー」「うっきー」「D Gのアンテナに尻尾でぶら下がっている

他のぶちま」「キヤツキヤツw w w」「

A「すっかりみんな懐いちゃったよ」「

D G」「w」「満足そうに目を細めている

~~~~~

続く！

はぢじゅついちっ！(がいでん！)(後書き)

D G H 「」

D G H 「ガア」「ポコン」(D G Hが飛び出る音)

D G H 「ガア」「ポコン」

D G H 「ガア」「ポコン」

D G H 「ガア」「ポコン」

A 「わあ！！ ビックリ！？」

はぢいぢうたっ！ (1) (前書き)

新キャラ出ます！

またまた短いです
すいません！

はぢいぢいっ！(1)

くぶちます的な何か

『拾って下さい』

A「(家の前にあるダンボールに入った大きなタマゴを凝視している)

A「えっと 色々突っ込みたいけど、なんで？」(しゃがみ込み、タマゴを眺める)

タマゴ「

A「とりあえず、置いておくのも何だし、家に入れるか」ヒョイツ
(タマゴを持ち上げ家の中に入っていった)

~~~~~

A「さて 持ってきたは良いものの、一体誰が置いていったんだ？」  
(タマゴを眺め首をひねる)

タマゴ「

A「ん」とりあえず温めてみるか」（水の入った鍋とガスコンロを  
用意）

タマゴ「」；

A「よし セットOK！ 後はお湯が煮立つまで放置しとくか」

~~~~~

1分経過

タマゴ「」

A「」

3分経過

タマゴ「」

A「」

5分経過

タマゴ「」；

A「」

8分経過

タマゴ「 ; カタ

A「 }
「

10分経過

タマゴ「 ; カタカタ

A「 }
「

15分経過

タマゴ「 ! カタカタカタ

A「 }
「

20分経過

タマゴ「 !!(ピキ!)「カタカタカタ!!

A「 }
「

24分経過

タマゴ「 !!(パキ!)「カタカタカタ!!

A「 }
「

29分経過

タマゴ「！！（ピキ！パキ！）」カタカタカタカタ！！

A「そろそろかな？」

30分経過

タマゴ「（パツカーン！！）」

A「おっ生まれた」

？「ぴー！！」（ノ）ほっぺた真っ赤

A「はじめまして 僕の名前はAだよ」

？「ぴよ！！」

A「可愛いね ぴよこなぶちまだね」

？「ぴよ！！」（ノ）頭にタマゴの殻を乗せたまま頷く

A「とりあえず鍋を片づけて、君のことを考えようか」

？「ぴっ！！」（ノ）

A「よし！ じゃあ片づけようか」

？「ぴよ！！」

続く！



ははじじいだっ！ (1) (後書き)

? 「」 ぴよぴよ (おじりフリフリ)

A 「うん 可愛い／＼」 モフモフ

? 「」 ぴよ／＼」 モフモフ

はちじゅづさんっ！(2) (前書き)

前回の続きです！

今回で名前が決まりますw

ちゃちゃまるはDSではありません。あしからず！

【緊急アンケート】

明日の話で書いて欲しいネタなど募集したいと思います(こんなシチュエーション、こんなキャラ、こんなMSなどなど)

お一人様一つまでで自分に分かるネタなどをお願いします。(複数
はなしでお願いします) キャラならキャラだけとかをお願いします
自分が分からないネタや、シチュエーション、不適切なものは受け
付けません。

投稿されたネタは独断と偏見で勝手に選ばせていただきます。

突然やめる可能性もありますがご了承下さい。

期限は明日の12時まででお願いします。

アンケートはメッセージボックスの方に直接自分に送って下さい。

突然で申し訳ありませんが、アンケートお待ちしております！

はぢいぢいぢい！(2)

くぶちます的な何か

A 「トトトトトト」

? 「びっ!びっ!びっ!」 フリフリフリ (声にあわせてお尻を振りながら歩いている)

A 「トトトトトト」

? 「びっ!びっ!びっ!」 フリフリフリ (Aの足音に合わせてお尻を振りながら歩いている)

A 「ピタッ」 クルリ (後ろを振り向く)

? 「び?」 ピタッ (首を傾げ、立ち止まって振り向いたAの顔を不思議そうに見る)

A 「(すっげー懐かれた? これが俗に言う刷り込みってやつか)」

? 「び?」 (首を傾げ不思議そうにAを見る)

A「(でも可愛いから良いかあ~~~~w)(何でもないよ さあ行こうか)に入らあ(鼻の下が伸びきって、締まってません)

?「ぴー!

A「~~~~」

?「ぴー!ぴー!ぴー!」フリフリフリ

~~~~~

A「さて、鍋も片づけたし君のことを考えなきゃね

?「ぴー!

A「え」と 先ずは名前とかはあるの?」

?「ぴ」フリフリフリ(首を振る)

A「そっだよね 生まれたばかりだもんね じゃあ、自分が誰かは分かる?」

?「ぴ」フリフリフリ(頭を振る)

A「そっだよね 名前もないんだし」

?「ぴー!

A「とりあえず名前がないと不便なんだよな　さて、どうするか」

？「ぴ〜」

A「見た目はネギま！？に出てくる亜子に似てるんだよな」

亜子似のぶちま「ぴ〜」

A「う〜ん」（首をひねる）

亜子似のぶちま「ぴ〜」（Aの真似をして首をひねる）

A「う〜ん」

亜子似のぶちま「ぴ〜」（．．．）zzzz（目をつむっていたら眠くなってきた）

A「よし！決めた！」

亜子似のぶちま「ピヨッ!?」（＋＋）ジュルリ

A「君の名前は『チャコ』だ！　よろしくね!」（トヤ

チャコ「ぴ〜!」（ノパタパタ（羽をパタつかせて喜ぶ）

A「気に入ってくれて良かったよw」（^| ^）v

チャコ「ぴ!」（．．ノ

A「ぶぶ　よろしくねチャコw」（^v ^）v

チャコ「ピヨ〜w」( )ノ

~~~~~

エヴァちゃん「ふっふっふ 久々に遊びにきてやったぞ！」(右手を腰に当て、左手には、ちゃちゃまるを模したキリンの人形を持っている) (*DxD)

ちゃちゃまる「マスター ご機嫌ですね」

(D D)

エヴァちゃん「当たり前だちゃちゃまる！ 生意気な人間め 突然私 came ことに慌てふためく様が目に見えるは」(DxD)

ちゃちゃまる「流石はマスター 普通に遊びに行くと恥ずかしいから、あえて尊大な物言いで気恥ずかしさを紛らわせて上がり込むツンデレ気質 よっ 誇り高き悪のまほー使い そこがシビれる憧れるー」(若干棒読みな感じで話すちゃちゃまる)

(D D)

エヴァちゃん「くっくっくっくっ よせ、褒めるでない 照れるではないか」(満足気のどを鳴らすエヴァンジェリン)

(*DxD)

ちゃちゃまる「よっ大統領「ぷ〜」(トランペットを吹きながら紙吹雪を投げる)

.. / (D D)

エヴァちゃん「さて！ では行くぞ！」スタスタ(DXD)

ちやちやまる「はい」スタスタ(D)

エヴァちゃん「ん？」(こっそり窓から中を覗く)(DXD)?

A「ふふふW」ポイー！ポイー！(ぶちま達をお手玉みたいに投げている)

ぶちまズ『キャツキャツW』(Aと戯れて、はしゃぐぶちま達)

エヴァちゃん「」(DXD)

ちやちやまる「楽しそうですね 皆さん」(D)

エヴァちゃん「(グスッ)「ギュッ」(涙目でちやちやまる人形を抱きしめる)

(DへD)

ちやちやまる「(ああマスター なんて愛らしい)」(ハンディカムで撮影)

(*DD)

~~~~~

続く！

はぢいぢいさんっ！(2)(後書き)

A「それそれ」w「ポイ！ポイ！

エヴァちゃん」キャッキャッ／／／

ちやちやめる」／／／「

はちじゅうよんっ！（前書き）

今回はアンケートのネタを書かせていただきました！

偶然いただいたネタの中に合わせてかけるものがありましたので、  
書かせていただきました！

クオリティはいつもの通りですが、楽しんでいただければ幸いです！

はちじゅつよんっ！

「ぶちます的な何か」

ピンポーン

A「はい どちら様？」ガチャツ

リュウガ「俺だ」

A「お リュウガ久しぶり どうしたの？」

リュウガ「少し所要で出かけてきてな これはお土産だ」スッ

A「こりゃどうもご丁寧に」

チャコ「ぴ？」

リュウガ「ん 新しいぶちまか？」

A「ええ 昨日新しく家の家族になりました まだ生まれたばかり  
なんかですよ」

チャコ「ぴ！」スリスリ

リュウガ「そうか はじめまして、リュウガだ よろしくな いる  
とは知らずに、お前の分の土産は無いんだすまん」

チャコ「ぴ〜？」（首をひねる）

A「まだ生まれたばかりだから分からないかな？」ナデナデ

チャコ「ぴ〜w」グリグリ（Aの手に頭を擦り付ける）

リュウガ「ふふ えらく懐かれてるな」

A「どうも生まれたときにいた俺を親だと思っているみたいで」

チャコ「ぴ〜ぴ」

A「可愛いなあ」

リュウガ「さて、そろそろ他のぷちま達にも土産を渡しに行くか」

A「あっはい こちらにございぞ」

チャコ「ぴ〜！」

~~~~~

【このちゃ&せちゅな】

リュウガ「やあ二人とも」

このちゃ「や〜」トテトテ

せちゆな「めん！」パタパタ

リュウガ「二人にお土産だ」(プレゼントを出す)

このちゃ「や〜」

せちゆな「めん！」

リュウガ「このちゃはこれだ」(プレゼントを渡す)

このちゃ「や〜」(リュウガから限定品のコアラのマーチを受け取る)

リュウガ「せちゆなはこれだ」(プレゼントを渡す)

せちゆな「めん！」(リュウガから『純情ときめきハイスクール』と書かれた限定品の木刀を受け取る)

A「良かったなあ二人とも お礼を言いなさい」

このちゃ「や〜！」ペコリ

せちゆな「めん！」ペコリ

A「よくできましたw」

リュウガ「では、次に行こう」

チャコ「ぴ〜」

~~~~~

【パルナ&ゆえち&のか】

A「おい三人ともリュウガがお土産持ってきたったよ！」

パルナ「ンフワ」ピコピコ」

ゆえち「 です」チューー

のか「ぷう」

リュウガ「さあ三人にはこれをやろう 先ずはパルナからだ」(プレゼントを渡す)

パルナ「ンフワ」ピコピコ(生の川魚を受け取る)

リュウガ「つぎはゆえち」(プレゼントを渡す)

ゆえち「 です」チューー(限定版『抹茶コーラめぐり哀・宇宙にば〜じょん』を受け取る)

リュウガ「最後にののかだな」(プレゼントを渡す)

ののか「ぷう」／／／「キャツキャツ」(どことなくAに似たぬいぐるみを受け取る)

チャコ「ぴ〜！」（Aに似たぬいぐるみを見てののかの側に近づく）

A「さあみんなお礼して」

パルナ「ンフW」「ペコリ

ゆえち「 です」「チュー

ののか「です〜」「ペコリ

リュウガ「きにするな さて次に行くか」

ののか「ぷう〜」「キヤツキヤツ」（チャコと戯れている）

チャコ「ぴ〜W」「キヤツキヤツ

~~~~~

【あしゆなん&あやにゃん&まつきー】

リュウガ「さあみんなにお土産だ」（プレゼントを渡す）

あしゆなん「なのね!!」（チュパカブラの絵の描かれたTシャツを受け取る）

リュウガ「次はあやにゃんだ」（プレゼントを渡す）

あやちゃん「ですわ！」（最新式IHのおままごとセットを受け取る）

リュウガ「次はまっきーだ」（プレゼントを渡す）

まっきー「うっきーw」（物凄くおいしいバナナを受け取る）

A「良かったね さぁお礼しなさい」

あしゆなん「なのね！」「ふんす！

あやちゃん「ですわ」ペコリ

まっきー「きー」ペコリ

リュウガ「ではな」

~~~~~

【みちや&くぎみー&ちやくらこ】

リュウガ「さぁお土産だぞ」（プレゼントを出す）

A「みんなおいで〜」

リュウガ「さあ三人にはこれだ」（三人にご当地ストラップを渡す）

みちや「よねー」（角が生えている子鬼のストラップを受け取る）

くぎみー」「くぎゅー」(あらーな子鬼のストラップ受け取る)

ちゃくら」「うー」(なんかこたぷーんな子鬼のストラップ受け取る)

A「みんな良かったね」 さぁリュウガにお礼は？」

みちゃ」「よねー」「ペ」

くぎみー」「くぎゅー」「ペ」

ちゃくら」「うー」「ペ」

リュウガ「ではな」

~~~~~

【ザジュ&ちゃよちゃん】

ザジュ」「

ちゃよちゃん」「ふわふわ」「ふわふわ

リュウガ「さぁお土産だ ザジュはこれ」(プレゼントを出す)

ザジュ「ありがとう」(イカの絵の描かれた手ぬぐいを受け取る)

リュウガ「ちやよちゃんにはこれだ」「プレゼントを渡す」

ちやよちゃん「ふわふわ」(七色マッシュマロの詰め合わせを受け取る)

A「さあお礼をしよう」

ザジユ「ペコロ」

ちやよちゃん「ふわ」ペコロ

リュウガ「さて行くか」

~~~~~

リュウガ「さてあらかた配り終わったかな」

A「そうですね あとはどれほど残ってますか？」

リュウガ「あとはぶちモビの分だな」

A「じゃあ呼んできますね」

~~~~~

師匠「なんとワシに土産とな」

リュウガ「ああこれだ」(プレゼントを渡す)

師匠「ほう 中々使いやすそうな布だな ありがたく受け取ろう」
パンパン！！

リュウガ「次はDGにお土産だ」(プレゼントを渡す)

DG「(ズニユズニユ)」(はいばーようぶんDG用を受け取る)

リュウガ「これで終わりだな」

A「わざわざありがとう」

リュウガ「なに、いつも世話になっているからな」

A「いやこちらこそ 今日夕飯食べていってよ」

リュウガ「ああありがたくいただく」

A「さあ行こう」

~~~~~

はちじゅうよんっ！（後書き）

エヴァちゃん「わ、私のお土産は」

（TEXT）

ちやちやまる「仕方ありません 私達は面識がありませんから」

エヴァちゃん「うえーん」（DD）

はちじゅじゅっ！（前書き）

今回は鳴神 ソラさんとのコラボになります

前回のちょっとした続きと家の三人娘が意外な人と出会います

クオリティはいつも通りですが気にせずw

はぢいぢいっ！

くぶちます的な何か

渡「こんにちはAくん」ガチャツ（玄関を開ける）

A「こんにちは渡君」

チャコ「ぴ〜」

渡「わっはじめまして どちら様？」

A「この子はチャコ 新しく加わった僕の家族だよ」

チャコ「ぴ〜」スリスリ（Aにすり寄る）

渡「はじめましてチャコちゃん 僕は紅渡 よろしくね」ナデナデ

チャコ「ぴ〜」スリスリ

渡「それでAくん 今日はどうしたの？」

A「うん リユウガから昨日お土産を貰ったんだ 渡君の分もあるから渡そつと思って」

渡「わざわざありがとうAくん」

A「えーっと あったあった はいコレ」(渡にプレゼントを渡す)

渡「ありがとう」(名産のこたぶん饅頭を受け取った)

A「いやいや お礼ならリュウガに言ってよ」

渡「うん 今度お礼の電話しておくよ」

A「うん」

~~~~~

へぶん「くわー」

うおる「シャ〜」

A「ほら〜リュウガから二人にお土産だつて」(へぶんには最高級の止まり木、うおるには最高級の水槽を渡した)

へぶん「くわー」(止まり木で喜ぶ)

うおる「シャ〜」(水槽の中で喜ぶ)

A「良かったね〜」

~~~~~



辰戸真一「ふう 中々いい風景が見つからないな「キョロキョロ」  
写真を撮るために歩いている」

?「や」

?「めん!」

?「なのね!!」ふんす!

真一「ん?」

このちや「や」

せちゆな「めん!」

あしゆなん「なのね!!」ふんす!

真一「ようお前たち こんな所でどうしたんだ?」

このちや「や」?」(誰か分らず首を傾げている)

せちゆな「めん!!」(知らない人なので警戒し、このちやの前に  
出て庇うように竹刀を構える)

あしゆなん「なのね!!」ふんす!(せちゆなの横で気合いを入れ  
ている)

真一「ああこの姿では分からないか 俺はリュウガだ 昨日も土産  
を渡しに行っただろ」(柔らかに笑う真一)

このちゃ「や〜w」（真一に近づく）

せちゆな「めん！」（安心したのか竹刀をおろす）

あしゆなん「なのね？」（未だに誰だか分かっていない）

真一「驚かせど悪かったな 散歩でもしているのか？」

このちゃ「や〜」

真一「そうか 俺は雑誌で使う写真を撮りに来たんだが、あまり好調でなくてな」

せちゆな「めん！」

真一「確かにな 分かった」

あしゆなん「なのね!!」「ふんす！

真一「それは、18だな」

このちゃ「や〜!」

真一「なに？ 一緒に遊んでくれたと？」

このちゃ「や〜」

せちゆな「めん！」（このちゃに無理言っちゃダメだよ的なこと言っている）

真一「まあこのまま歩き回っていても埒もあかないし、別にかまわ  
ないぞ」

このちや「や〜」

せちゆな「めん！めん！」「ペコペコ」

真一「では行くかみんな」

このちや「やん！」（手を挙げて意思表示）

せちゆな「めん！」（手を挙げて意思表示）

あしゆなん「なのね！」「ふんす！（やっぱり未だに誰だか分かつ  
ていない）

真一「それは禾<sup>のぎへん</sup>偏だな」

~~~~~

このちや「や〜」「キヤツキヤツ」

せちゆな「めん！」「キヤツキヤツ」

あしゆなん「なのね！」「ふんす！ふんす！

真一「ふっ」「三匹で戯れるぶちまを眺めている（

このちゃ「や〜」コロコロ

せちゆな「めん〜!」(転がるこのちゃを慌てて追いかける)

あしゆなん「なのね」

このちゃ／せちゆな／あしゆなん「(キヤツキヤツ)」「(三匹でくつきながら戯れている)

真一「ふっ」カシャツ(三匹でくつきながら戯れている姿を眺めカメラのシャッターを切った)

このちゃ／せちゆな／あしゆなん「(キヤツキヤツ)」「

真一「(こつ)言つのも良いものだな」カシャツ

~~~~~

続く!

はちじゅじゅっ！（後書き）

エヴァちゃん「え〜い人間風情が いつも私をのけもにして!!  
思い知らせてやる!! ベ、別に、淋しくなんか、ないんだからね  
!」カチャカチャ

ちやちやまる「ああマスター あんなに楽しそうに」

エヴァちゃん「よし!完成だ!!」

?「ハジメマシテダナゴシユジン デ?ダレヲヤツザキニスレバイ  
インダ」

エヴァちゃん「くっくっくっ 見てろよ人間、今に吠えズラかせ  
てやる!」

ちやちやまる「ああマスター あんなに楽しそうに」

はちじゅつろくっ！(1)(前書き)

久々にクオリティ目も当てられない；

今回はリクエストでいただいたぷちモビが出てきます！

全く分からないため、時間もかかりキャラが掴めなかったのですが、楽しんでいただけたら幸いです！



A「なんだ!！」

?「FUN」「ニヤリ

?「FUN」「ニヤリ

?「FUN」「ニヤリ

A「だ、誰だお前ら!？」

ゼダス「ガウ!」「バツ!

ガフラン「ギウ!」「バツ!

バクト「グウ!」「バツ!

デデーオン!!（何かポーズ的な物をとっている）

A「えっ?ぷちモビ? でも全く見たことないタイプだ」

へぶん「くわー」（威嚇をしている）

うおる「シャー」（威嚇をしている）

ゼダス「FUN!」「ニヤリ

ガフラン「FUN!」「ニヤリ

バクト「FUN!」「ニヤリ



ガチャッ（手の平をAに向ける）

A「ま、まさか!?!」

ダダダダダ!?!

A「ウギヤー!?!撃ってきた!?!」

へぶん「くわー!?!」（ゼダスに突撃）

ゼダス「ガウ!?!バシッ

うおる「シャー!?!」（ガフランに突撃）

ガフラン「ギウ!?!ゲシッ

バクト「FUN!?!」ビシューン（背部のビームライフルを撃つ）

A「うわああ!?!」（咄嗟に避ける）

へぶん「くわー!?!」

ゼダス「FUN!?!」（へぶんを行かせないようにブロック）

うおる「シャー!?!」

ガフラン「FUN!?!」（うおるを行かせないようにブロック）

バクト「FUN!?!」ジャキッ（Aを追いつめビームバルカンの銃身

を向ける)

A「あわわわわ!?!」

バクト「FUN!」「ニヤリ

A「のわああああ!?!」

?「もー!」「ドガン(バクトに激突)

バクト「グウ!?!」(弾き飛ばされる)

A「た、助かった ありがとう えっと、君は?」

ぐらんど「もー!?!」

【獅王争覇ぐらんどがんだむ 招来】

~~~~~

続く!

はぢじゅうななっ！(2)(前書き)

おかしい

当初はギャグで、一話で終わるはずだったのに…

はちじゅうなっ！(2)

くぶちます的な何か

このちゃ「や」キヨロキヨロ(Aを探して辺りを見ている)

?「くわー!」

?「ガウ!」バシッ

このちゃ「や」? (何やら声が聞こえたので気になっている)

?「シャー!」

?「ギウ!」ゲシッ

?「グウ!」

A「のああああ!」

このちゃ「や」?

?「もー!」ドガン

?「グウ!」

「このちゃ」や〜」トテトテ（Aがいるのだと思い其方に向かい歩き出した）

~~~~~

ぐらん「もー!!」（後ろ足で立ち上がり威嚇をする）

バクト「グウ!!」（背部のビームサーベルを構える）

ぐらん「もー!!」（グランドボンバーを構える）

ボシユウウウ!!（グランドボンバーから弾が発射された）

バクト「グウ!!」（飛んできた弾丸を避ける）

ぐらん「もー」（避けたバクトに向かい突撃をかます）

バクト「グウ!!」バチン（ぐらんの激突に弾き飛ばされる）

A「凄い!?!あのぶちモビが推してる!!」

ぐらん「もー!!」ドタドタ（バクトに向かい突進をする）

バクト「グ、ウ」（ぐらんの突進の衝撃ですぐに立ち上がれない）

ぐらん「もー!!」ドタドタ

A「いけー!!」

このちゃ「や〜!」トテトテ（Aの声に反応しぐらんとバクトの間に出てきた）

ぐらん「もー!?!」キュキュキュ（急ブレーキをかける）

バクト「グウ」「ニヤリ

このちゃ「や〜」（Aの下に行こうとする）

バクト「グウ!」（このちゃを捕まえ背部のビームサーベルを向ける）

A「このちゃ!?!」

ぐらん「もー!?!」（バクトの行いに怒りを露わにしている）

バクト「FUN!」「ニヤリ

このちゃ「や〜」グスグス（Aに向かって鳴き声を発し涙を流している）

A「このちゃを離せ!」

バクト「FUN!」「ニヤリ

このちゃ「や〜」グスグス

ぐらん「も〜」（このちゃがぶち質に取られ手出しが出来ない）

このちゃ「や」ポロツ（このちゃの涙が地面に落ちた）

?「グオオオオオオ!!」

?「ガアアアア!」

バクト「グウ!?」バシン!!（突然地面から飛び出してきた謎の物体に吹き飛ばされる）

デビルガンダムヘット「グウウウウ…」（バクトを威嚇するように唸る）

このちゃ「や」ズズ（鼻をすすり上を見上げる）

デビルガンダム（1f）「ウオオオオオオ!!」（このちゃを手の平に乗せこのちゃに涙を流させたバクトに対し怒りを露わにしている）

バクト「グウ!?」ビリビリ（デビルガンダムから発せられるプレッシャーを感じている）

デビルガンダム「ウオオオオオオ!!」（バクトに向かい怒声を浴びせる）

【魔帝デビルガンダム 降臨!!】

~~~~~


続く！

はちじゅうななっ！(2) (後書き)

デビルガンダムの二つ名あれで良かったですかね？

リュウガ「急がねば！」

ムラサメ「ぎゅーん！」

はちじゅうはちっ！！（3）（前書き）

ラストです

クオリティは例によって気にしちゃいけません！
先生との約束だよ！

今回は戦い方に多少のオリジナルが含まれてますが気にしないよ
うに！
先生との約束だよ！

はちじゅうはちっー!! (3)

くぶちます的な何か

へぶん「くわー」ガシャン (MF形態に変形)

ゼダス「ガウ！」バサッ! (背中 of 羽を 広げ 空中に 飛び 上がる)

へぶん「くわー！」 (ゼダス目掛け跳躍する)

ゼダス「FUN！」ヒラリ (避ける)

?「やれ、ドラグブラッカー！」

ドラグブラッカー「グオオオオオオ!!」 (ゼダスに向かい炎を吐く)

ゼダス「ガウ!？」 (黒い炎が固まり拘束する)

へぶん「グルアアアアア!!」シュバババババ!! (虹色に光る足を高速でゼダスに蹴り出す)

ゼダス「ガアアアア!!」

~~~~~

うおる「シャー！」（ガフランにクローを伸ばし攻撃）

ガフラン「ギウ！」ヒラリ

うおる「シャー！」

ガフラン「FUN！」

うおる「シャー！」

ガフラン「ギウ！」ダダダダ（手の平を向けて弾を撃ち出す）

うおる「シャー！」カンカンカン（弾を受ける）

ガフラン「ギウ！」ダダダダ！！

うおる「シャー！」カンカンカン！！

？「ぎゅぴー！！」バビューン

ガフラン「ギウ！？」

？「びゅー！！」バシュツ！バシュツ！（ビームを撃つ）

ガフラン「ギウ！」

？「いまだぴー！」

うおる「ジュリアアアアア!!」ズガアアアアア! (口とクローの  
中心から三点の砲撃を放つ)

ガフラン「ギアアアアア!!」

~~~~~

デビルガンダム「グルルルルルル」

バクト「グウ」

このちゃ「や」

デビルガンダム「グルアアアア!!」

デビルガンダムヘット「ガアアア!!」 (無数のDGHが螺旋状に
なりバクトを飲み込みながら天に登る イメージはローゼスハリケ
ーン)

バクト「ゲアアアアア!!」ボロボロ

デビルガンダム「グルルルルルル」 (メガデビルフラッシュを
放とうと溜にはいる)

バクト「グウウウウ」 (デビルハリケーンを喰らい立ち上がれな
い)

デビルガンダム「グルアアアア!!」 (メガデビルフラッシュを

放とうとした)

このちゃ「や〜!」バツ(バクトの前に庇つように立ちふさがる)

デビルガンダム「グルル」(メガデビルフラッシュを放つのを止める)

このちゃ「や〜!」

バクト「グウウウウ」

デビルガンダム「グルル」ズズズ(このちゃの説得により帰って行く)

このちゃ「や〜?」そー(手を伸ばす)

バクト「グウウ」バシッ(手を弾く)

このちゃ「や〜」ポンポン

バクト「グウウ」ポロポロ

このちゃ「や〜」

~~~~~

リュウガ「大変だったな」

A「本当だよ 助けに来てくれてありがとう」

ムラサメ「ぎゅぴ」

リュウガ「何、気にするな で？襲われた原因は何だったんだ？」

A「何でも、昔捨てられたら人に似ていたんだって それで思わず やっちゃったみたい」

リュウガ「傍迷惑なヤツらだ」

ムラサメ「ぎゅぴ」

A「うん まあいっぱい謝られたし」

リュウガ「そうか」

ぐらん「もー」

A「君もありがとう えっと、ぐらん」

ぐらん「もーw」

A「でもなんで家に？」

ぐらん「もー」

A「えっ!？」



~~~~~

このちゃ「や」パタパタ（手を振っている）

ゼダス「ガウ！」パタパタ

ガフラン「ギウ！」パタパタ

バクト「グウ！」パタパタ

このちゃ「や」！「パタパタ

~~~~~

続く！

はちじゅうはちっ！！（3）（後書き）

会話の内容はいつも通り脳内変換で

このちゃ「や〜」ギョッ

デビルガンダム「グルル…」（優しげな眼差しでこのちゃを見る）

へぶん「くわー！」

リュウガ「何お前もなかなかの蹴り技だったな」

うおる「シャー！」

ムラサメ「ぎゅぴ オイラも今度一緒にやってみたいぴ」

ぐらん「もー」

？「あらあら〜」たゆ〜ん

A「あれ！？新しいぷちま！？」

はぢいぢいぢいぢい！！(1)(前書き)

今回は皆さんもお分かりのあのキャラが登場しますw

今回はある被害者達のセリフはネタバレ分かるかな？

クオリティはいつもの通りですm( ) ( ) m



A「よし じゃあ会いに行こうか」

ぐらん「もー!」

~~~~~

?「あらあら」(手にネギを持ったぶちま)

ガンダム「ゴホゴホ」

?「あらあら」ジャキン(ネギを構える)

ズボツ

ガンダム「アゝー! オヤジが熱中するわけだ!」

?「うふふ」スタスタ

ガンダム「ぼへー」ORZ(魂)

~~~~~

シャアザク「ゴホゴホ!?!」

?「あらあら」ジャキン(ネギを構える)

ズボッ

シャアザク「アゝー！ 私にも見えるぞー！！」

？「うふふ」スタスタ

シャアザク「ぽへー」ORZ（魂）

~~~~~

Zガンダム「ケホケホ」

？「あらあら」ジャキン（ネギを構える）

ズボッ

Zガンダム「アゝー 俺は男だよ！？」

？「うふふ」スタスタ

Zガンダム「ぽへー」ORZ（魂）

~~~~~

ZZガンダム「ゴボッゴホッー！！」

?「あらあら」ジャキン(例によってネギを構える)

ズボッ

ZZガンダム「アゝー! やゝってやるぜ!」

?「うふふ」スタスタ

ZZガンダム「ぼへー」ORZ(魂)

~~~~~

A「な、なんだこれ!」

ガンダム/シャアザク/ZZガンダム/ZZガンダム「ぼへー」死屍
累々

A「どうなってんだ…? 皆尻にネギ突き刺してぶっ倒れてんだ?」

ぐらん「もー…」ガタガタ

A「どうしたの 急に震えだして?」

ぐらん「もーもー」ブンブン(頭を振る)

A「そう? とりあえず探そうか」

ぐらん「もー…」

続く！



きゅじゅじゅっ！(2) (前書き)

ぷちま至上最大の事件は今回で終幕ですW

今回は彼女の名前が決まるかも？

クオリティは気にしないで下さい！

きゅんきゅん…… (2)

くぶちます的な何か

A「しつかしまあ ぐらんの友達はどこにいるんだろっな？」

ぐらん「もー」

A「あっちの方かな？ 行ってみよう」

ぐらん「もー」

~~~~~

？「あらあら」スタスタ

「のちや」や「？」

「あははあはは」

「のちや」や

「？」

「のちや」や「スタスタ」

? 「うふふ」 スタスタ

~~~~~

ガンタンク「ぽへー」

ザク? 「ぽへー」

デュエルガンダム「ぽへー」

ティエレン「ぽへー」

A 「なんか 皆凄い状態だね」

ぐらん「もー…」

A 「とりあえず向こうに行ってみようか」 スタスタ

ぐらん「もー」 スタスタ

~~~~~

ぐらん「もー」

A 「え? 見つかったの?」

ぐらん「もー」

A「ん？あれは」

このちゃ「や〜」スタスタ

？「あらあら〜」スタスタ

A「やあこのちゃ　もしかしてぐらの友達の子かな？」

？「あらあら〜」たゆ〜ん

A「なんかゆったりした落ち着きのある子だな」

？「うふふ」たゆ〜ん

A「とりあえず家においでよ　疲れてるでしょ？」

ぐらん「もー」

？「あらあら〜」

このちゃ「や〜」

A「さあ行くうか…ゴボツゴボツ　あれ？　なんか咳が…」

ぐらん「もー…」サー（顔が青ざめる）

？「あらあら〜」スッ

ぐらん「もー!?!」サッ(このちゃの目を慌てて覆う)

このちゃ「や〜?」(見えない)

?「あらあら〜」ズバツ(ネギを構え駆け寄る)

A「ん? なんか落ちてる」ヒラリ

?「あらあら〜」(避けられる)

A「なんだ、ゴミか」ポイツ

?「あらあら〜」ズバツ(ネギを構え駆け寄る)

A「ん? 靴ヒモががほどけてる」スツ(靴ヒモを結ぶため、しゃがむ)

?「あらあら〜」スカッ(避けられる)

ぐらん「もー」(Aの動きに感心している)

このちゃ「や〜?」(まだ見えない)

A「さあ行こうか」スタスタ

ぐらん「もー!」スタスタ

このちゃ「や〜」(まだ見えない)

?「うふふ…」スタスタ(ネギを構え薄く笑っている)

続く！



きゅじゅじゅっ！(2) (後書き)

A「ん？ またなんか落ちてる」スッ (物を拾うためしゃがむ)

？「うふふ…」スッ

A「ん？ 何やら尻に寒気が…」

？「あらあら」ズバッ

アゝー！ー！ー！ー！ー！



きゅっじゅっいちっ！（がいでん！）（前書き）

今回は、あのぷちまがついに主役に？

皆さん、微笑ましい顔で見てください！

最近、ヴァイスシュヴァルツのゲームにハマりまして、今日やっとメガネおっぱいのツンデレ委員長をおとしました！！

次は、妄想癖の凜とした巫女さんです！

ゲームやっていてクオリティ下がってるかもですが、楽しんでいただけたら幸いです！



ちやちやまる「マスター 作られたのはチャオチャオとハカセですが、私はマスターを見て学びましたので、私を育てたのはマスターです」

エヴァちゃん「はあそうだったな どこで育て方を間違えたんだか」

ちやちやまる「マスターを見て学びましたので初めからでは？」

エヴァちゃん「おい それでは、私の性格が悪いみたいではないか」

ちやちやまる「いえその様なことは マスターは意地っ張りだとか、マスターは子供っぽいだとか、マスターはワガママだとか、マスターは自分勝手だとか、マスターはロリッ娘だとか、マスターは幼女だとか、マスターは寂しがり屋だとか、マスターはAさんの事が気になっているだとか、マスターはロリッ娘だとか、マスターはイジリがあるとか、マスターは泣き顔が凄く可愛いとか、マスターはロリッ娘だとか、マスターはツンデレだとか、マスターは面倒くさいとかはまったく思っておりません」

エヴァちゃん「おい！ちやちやまる 今不穏な言葉が凄く出てきたぞ！？ しかも同じ言葉が三回も出てきたぞ！！ 誰がロリッ娘だ、誰が！！！」

ちやちやまる「いえ気のせいでは？」

エヴァちゃん「貴様が私をどう思っているかよ~~~~く分かった」

ちやちやまる「いえその様にはまったく」

エヴァちゃん「キチャマ〜」「わなわな

ちやちやまる「おっと、そろそろお時間のようです 行きましょう  
マスター」スタスタ

エヴァちゃん「おい！ ちょっと待て！ コラ、ちやちやまる！！  
結局こんなオチかい！！」

~~~~~

続く！

きゅじゅじゅいっ！(がいでん！)(後書き)

エヴァちゃん「コラ！ちゃちゃまる！ まで！！」バタバタ

ちゃちゃまる「(必死なマスターかわいいです / / /)」ゴゴゴ

エヴァちゃん「までええええええ！！！」

ちゃちゃまる「/ / /」「ゴゴゴ」

きゅじゅじゅじゅ！ (前書き)

今回で、新メンバーの名前が発表となります

名前自体は前々から考えていたので、結構じっくりしていて気に入ってますw

A「それは大変だったね　ちなみに、知り合いの子ってどんな子？
見たことあるかも知れないから特徴を教えて？」

？「あらあら〜　あらあら〜」

A「ふんふん　ちっちゃくて、ソバカスで、主役になれそうにない
ハムスター的なぶちまなんだね？」

？「あらあら〜」

A「う〜ん　申し訳ないけど見たことなかったな」

？「あらあら〜」しゅん

A「でも大丈夫！　必ず見つかるよ　僕も探してあげるから」

？「あらあら〜w」

A「さて、そうすると　いつまでも名前がないと不便だよなあ」

？「あらあら〜」

A「う〜ん　容姿はまあネギま！？に出てくる千鶴にソックリなん
だよな」

千鶴似のぶちま「あらあら〜」

A「さーて　どうしたもんかなあ？」

千鶴似のぶちま「あらあら〜」

A「……」（考え中）

千鶴似のぶちま「あらあら〜」

A「……」（考え中）

千鶴似のぶちま「あらあら」キョロキョロ

A「……うーん……」（ブリッジをしながら考え中）

千鶴似のぶちま「あらあら〜」トコトコ

A「……うーん……」（倒立をしながら考え中）

千鶴似のぶちま「うふふ」スッ（手には取れたたのネギを持っている）

A「うーん……」（四つん這いになって考え中）

千鶴似のぶちま「うふふw」ズバッ（四つん這いのAの尻めがけてネギを突き入れた）

A「フオオオオ！！ ファンタスティック！！」

千鶴似のぶちま「あらあら〜」

A「効く〜… あっ、でも今ので思いついた」

千鶴似のぶちま「あらあら〜?」（首をひねりAを見ている）

A「ネギま!？の千鶴にソックリな君の名前はズバリ、『ちずるさん』だっ!?!」() (ドヤ)

ちずるさん「あらあら〜w」ポン(笑顔で手を叩き喜んでいる)

A「気に入ってもらったみたいで嬉しいよ」

ちずるさん「あらあら〜」

A「名前も決まったことだし、ちずるさんの知り合いの子が見つかるまで、僕の家に住るといいよ」

ちずるさん「あらあら〜?」

A「大丈夫 迷惑なんかじゃないから なんなら知り合いの子も見つかったら家で一緒に暮らすかい? 優しいお姉さんが増えてウチの子達も喜ぶと思うよ」

ちずるさん「あらあら〜w」

A「うん こちらこそよろしくね さて、早速だけど僕の家族に紹介するよ みんな良い子達だから気に入ると思うよ?」

ちずるさん「あらあら〜」

A「うん じゃあ行こうか」スタスタ

ちずるさん「うふふw」スタスタ

続く！



きゅじゅじゅじゅー！ (後書き)

みづらさん「あらー」「こたぶーん

ちずるさん「あらあらー」「たゆーん

みづらさん「あらー」<)

ちずるさん「あらあらー」<)

みづらさん「あらー」「こたぶゆーん

A「なんだかマツタリとするなあ」

きゅじゅじゅじゅんっ！(前書き)

今回は前々から考えていたネタですw

何個かネタ放り込みましたw

きゅんきゅんきゅん!!

くぶちます的な何か

ちずるさん「あらあら」ツルッ

A「ぬおっ!!」

(ブズリ!)

A「フオオオ!! セクシャルヴァイオレット!!」(尻に深々と刺さるネギ)ボタン

ちずるさん「あらあら」?(倒れたAに駆け寄る)

A「…」(ヘンジガナイタダノシカバネノヨウダ)

ちずるさん「あらら」オロオロ

A「…」

ちずるさん「あらら」!「パタパタ(驚き慌てて誰かを呼びにいった)

A「…」

~~~~~

A「うーん あれ？ここは一体 僕はたしか「キヨロキヨロ」訳が分からず周りを見回している」

A「ここは 道場？ なんで道場なんか」

？」「どこを見とるかこのこの馬鹿者がああああ！！」

A「えっ！？ だれ！！」

マスター師匠「ワシがあ！！ このマスター塾塾長のマスターガンダムである！！」「ドーン」腕を組んで立っている」

弟子一号「お、おっす！ 師匠の弟子兼アシスタントのヴィヴィオこと弟子一号です！」（体操服とブルマでちよっと恥ずかしそうに話す）

A「ポカーン

弟子一号「し、師匠 なんかポカーンとされてますが」

マスター師匠「ふん！ 情けないヤツめ ちえりおおおお！！」  
ベシッ（呆けているAに気付けの手刀（割と強め））

A「あべしっ！？」

マスター師匠「ふん 気がついたか馬鹿者」

A「い、いはい えっと 君達は マスターとヴィヴィオちゃん？」

マスター師匠「違ああああう！ ワシはマスター師匠 そんなハ  
ンサムとは別人である！！」

弟子一号「わ、わたしもヴィヴィオじゃないよお兄ちゃん！ 師匠  
の弟子の弟子一号だよ！」

A「いや ヴィヴィオって自分で名乗ってたじゃん」

弟子一号「あう」

マスター師匠「そんな事よりも Aよ、ここがどこだかわかるか」

A「いや全然 たしか僕は自分の家にいたはずなんだけど？」

マスター師匠「ここはマスター塾 人生の敗北、所謂BADEND  
をした奴らが集まる場所である」

A「BADEND!？」

弟子一号「はいっす！ お兄ちゃんはお家にいたところを、滑った  
ちずるさんの持っていたネギがお尻に刺さってこの度めでたくBA  
DENDを迎えました！」パチパチ（笑顔で拍手をしている）

A「嬉しくないわそんなの!!！」



マスター師匠「諦める　ここに来た時点で貴様の人生は終わりを迎えたのだ」

A「そんなあ　何とかならないんですか!」

マスター師匠「一つだけ貴様のBADENDをコンテニューする方法がある」

A「何ですか!教えてください!」

弟子一号「その方法は、クソゲーの穴に落ちて、クソゲー100本をクリアすることです!」

A「く、クソゲーの穴?」

弟子一号「そうっす!」

マスター師匠「クソゲーの穴とはBADENDをコンテニューするための救済措置　積み上がったクソゲーを100本クリアすればこの空間から抜け出せるのだ」

A「マジですかっ!?!」

弟子一号「はいっす!　ただしクソゲーの穴にあるゲームソフトは未だかつてクリアを出したことはない、本物のクソゲーっす　それ故に、この穴から抜け出せた者は一人もいないっす」

マスター師匠「と言うわけで、逝ってこい」グイッ（なぜかあったロープを引く）

パカッ（Aの下の床が開く）

A「えっ　！？　うわー！！」「ピュッ

マスター師匠「達者でな！」

弟子一号「また来てね〜！」

A「二度とくるかチクシヨオオオオオ！！！」

~~~~~

A「はっ！？」「ガバッ

このちゃ「や〜！！」

せちゆな「めん！！」

あしゆなん「なのね！！」

ちずるさん「あらあら〜」

A「あれ　僕は一体？」

ちずるさん「あらら〜」

あしゆなん「やん！！」

A「そうか 僕はちずるさんのネギをお尻につけて」

ちずるさん「あらう〜」

A「うん 大丈夫なんともないよ」

あしゆなん「なのね!」

せちゆな「めん!」

A「心配してくれてありがとうw」なでなで(四匹の頭を撫でる)

このちゃ「や〜w」

ちずるさん「あらう〜w」

A「さあ そろそろ行くこうか 今日の夕飯はみんなの大好きなジェルミートのステーキだよ」

このちゃ「や〜w」

せちゆな「めん!」

あしゆなん「なのね!」ふんす!

ちずるさん「うぶぶぶw」



続く！

きゅじゅじゅんっ！(後書き)

インペラー「うっ…ここは一体？」

マスター師匠「ワシがあ！！ マスター塾塾長のマスターガンダムである…！」

弟子一号「弟子一号っす！」

インペラー「えっ？」

きゅじゅじゅんっ！(前書き)

クオリティ低っ！！

石投げないでね！

今回は鳴神ソラさんのライブとクロスしています！

こちらを読んでからそちらを読むと、良いかも知れません

きゅじゅじゅんじゅん！

くぶちます的な何か

A「りっちゃん風邪で大変なんだってね 事務所に手伝い向かわせたからお大事にね」ピッ（携帯電話を切る）

チャコ「ぴ？」

A「知り合いが病気なんだって 色々大変そうだからお手伝いを向かわせたんだよ」

チャコ「ぴ〜！」（よく分かってない）

A「はは まだ分からないかな？ とりあえず、チャコモ気を付けようね」さわさわ

チャコ「ぴ〜！〜！」ぐりぐり（手に頭を押し付ける）

A「さてそろそろお散歩に出かけようか？」

チャコ「ぴ〜！〜！」

A「よし行こうか！〜！」

~~~~~

A「いや〜清々しいね」「トトト」

チャコ「ぴ〜」（Aの頭の上でくっついてる）

A「こんな日は、ゆっくりひなたぼっこかしたいよね〜」

チャコ「ぴ〜」

A「チャコは可愛いね〜」

チャコ「ぴ〜」

A「あんまし分かってないのかな」

チャコ「ピヨ〜」（まったり）

A「ん？あれはゆえち?」

ゆえち「です」「キヨロキヨロ」

A「おーいゆえちどうしたの?」

ゆえち「です」

A「え？ジュースをどこかに置いて来ちゃったの?」



ゆえち「です」「コクコク

A「よし！じゃあ一緒に探すよ」

チャコ「ぴゅー！」

ゆえち「です」

A「さあ行こうか！」

~~~~~

A「いや〜ジュースあつて良かったね」

ゆえち「です」「チュー

A「まさかあんな場所にあつたなんて もう少しで体中の血管が沸騰するところだったよ」

ゆえち「です」「しゅん

A「大丈夫別に怒ってないから 次からは気を付けるんだよ」
なで

ゆえち「です」「チュー

チャコ「ぴゅー！！」「グイッ」
(頭を撫でられているゆえちを見てゆえちを押し退けようとする)

ゆえち「 です」「グイッ（踏ん張る）

チャコ「ぴ〜!〜!」

A「こらこら喧嘩しないの」

チャコ「ぴ〜」「めそめそ

ゆえち「 です」「プイッ

A「ほらほら仲直りして 今夜の夕飯はハンバーグしてゆーだよ」
（言えてない）

ゆえち「です」「チュー

チャコ「ぴ〜」

A「それじゃあ帰って作るつね」

ゆえち「です」「チュー

チャコ「ピヨ〜!〜!」

~~~~~

続く!



きゅじゅじゅんっ！ (後書き)

A「あれ？ちずるさんはどこに行ったんだろっ？」

チャコ「ピヨっ？」

きゅじゅじゅっ！(前書き)

今回は、(何十話か前の)後書きにてエヴァちゃんがとっていた行動の意味が分かります

あと、決してエヴァちゃんは可哀想な子ではありません！あしからず

きゅんきゅんきゅん！

くぶちます的な何か

エヴァちゃん「くつくつく 遂にこの日がやってきた！ おじやま虫のちやちやまるもない さあ今こそ積年の恨みを晴らしてやる  
！！ 往くぞ」

？『アイサーゴシユジン！！』

パタパタ

~~~~~

エヴァちゃん「おい！A！ 勝負だ！」

A「あれエヴァちゃんこんにちは 今日はどうしたの？ ちやちやまるもないね」

エヴァちゃん「ふん！あのおじやま虫は今日はいない 今日貴様をケチヨンケチヨンにしにやってきたのだ！」

A「そうか 一人大変だったでしょ？ さああがんな」

エヴァちゃん「ふっふっふ 私は一人ではない！ 新たなる下僕を

連れてきたのだ!!」

A「へー新しいお友達かな？」

エヴァちゃん「驚くなよ これが新たなるしもべ『チャチャゼロ』だ!」バツ! (右手を挙げる)

チャチャゼロ『オレノナハチャチャゼロダ ヨロシクナ』カチャカチャ (エヴァちゃんの右手の上で動いている)

A「」

エヴァちゃん「ふっふっふ あまりの恐ろしさに声も出ないかふはははは! 情けないヤツめ」

チャチャゼロ『シカタネーヨゴシユジン コノオレヲミテビビラネーワケネー ンダカラヨ』カチャカチャ

エヴァちゃん「確かにそうだな はっはっは!」

A「(て言うかアレどう見ても腹話術の人形だよな)」

エヴァちゃん「はっはっは!」

チャチャゼロ『ケケケW』 (イメージはてるてるぼっずみみたいな形で、スカート部分から手を入れている)

A「(しかも腹話術に程遠い声色だけ変えてるだけだし 端から見たらお人形ごっこしてるみたいだ)」

エヴァちゃん「(キヤツキヤツW)」

チャチャゼロ『ケケケケケW』カチャカチャ(手に持った剣を動かしている)

A「エヴァちゃん その子が新しいエヴァちゃんのお友達かな?」

エヴァちゃん「友達などではない! チャチャゼロは私の下僕だ! 私の忠実なしもべなのだ!」

チャチャゼロ『ケケケケケW』

A「しもべ? お友達じゃないの?」

エヴァちゃん「そうだ! 私が造り上げた(作業時間10分)下僕なのだ」

A「そうか? エヴァちゃんはチャチャゼロが気に入ってるのかな?」

エヴァちゃん「うむ 私の命令には忠実で、決して逆らわない! どこかのバカロボットとは大違いだ」

チャチャゼロ『ヨセヨゴシユジンテルダロ』カチャカチャ

エヴァちゃん「(キヤツキヤツW)」

チャチャゼロ『ケケケケケW』

A「(いやー楽しそうだな)それで? 今日は何しに来たんだっけ

？」

エヴァちゃん「そうだ 今日はお様をケチヨンケチヨンにするために来たのだった」

A「ケチヨンケチヨン？」

エヴァちゃん「私に味あわせてきた数々の屈辱 その恨みを、今日この場で晴らさせてやる！ 往くぞチャチャゼロ！」

チャチャゼロ『アイサーゴシユジン！！』

A「あーじゃあ何しようか？ あっちょっと待ってて」（部屋を出ていく）

エヴァちゃん「？」

A「お待たせ じゃあこれで遊ぼうか？」

バルカン300『』

エヴァちゃん「ぬお！？ そっちも仲間がいたのか よし！だが負けはせんぞ 往けチャチャゼロ！」

チャチャゼロ『アイアイサー！』カチャカチャ

A「こっちも行けバルカン300！！ 空気ミサイル300発だ！！」

バルカン300『ブシュー！！』（Aが口で言っている）

エヴァちゃん「なんの！ よけるチャチャゼロ！！」

A「そこだバルカン！！」

エヴァちゃん「（キャツキャツW）」

A「あははw」

チャチャゼロ『ウオリヤー！！』

バルカン300『ブシュー！！』（Aが口で言っている）

~~~~~

エヴァちゃん「ではなA また勝負するのだぞ」

チャチャゼロ『コンドコソキリキザンデヤルゼ』

A「うん また遊びにおいて」

エヴァちゃん「ぶん／＼」「ビューン（飛び上がり飛んでいく）

チャチャゼロ『マタナー』カチャカチャ

A「」（飛んでいくエヴァちゃんを眺め、微笑んでいる）

続く

? 「  
」  
ジ  
ー



きゅじゅじゅじゅっ！（後書き）

ちやちやまる「ああマスターなんと愛らしい（／＼／＼） 今回の映像は、永久保存用フォルダに保存し、私だけで楽しませて頂きますよっ」

きゅじゅじゅじゅくっ！（ぶちたる・はざーどんぐん）（前書き）

今回はちょいシリアス展開になっていきます

また長くなるかなあ

きゅじゅじゅくっ！（ぶちたる・はざーどん）

〜ぶちます的な何か〜

このちゃ「や」（ケホケホ）「\*、\*」（顔が真っ赤で咳をしている）

A「このちゃ〜調子はどうだい？」

このちゃ「や」（ケホケホ）「（か細く鳴いている）」

A「まだ熱が下がらないみたいだね　とりあえずひえぶたを取り替えようか」

このちゃ「や」（ひえぶたが心地いいのか気持ち良さそうに鳴く）

A「ん〜困ったなあ　全然熱が下がらない　ただの風邪じゃないのかな？」（首をひねりながらこのちゃを見ている）

このちゃ「や」（ぶつぶつ）「（熱のせいか呼吸が早い）」

A「ちょっと調べてみるかな」

~~~~~

A「何々、ぷちま風邪

ぷちまやそれに類似した生き物がかかる病気

人間の風邪に病状が似ている

潜伏期間が長く、発祥すると咳、寒気、高熱など病状が出てくる
人間やほかの動物にはうつることはない この病気を治すには、アマゾンに住んでいる、ヘビビンガの牙を煎じた薬が必要である
放っておくと、最悪の場合死に至る可能性がある マジか？」
パタン（開いていたぷち医学書を閉じる）

A「あの子達が死ぬ？ そんな、嘘だろ」（茫然自失）

A「どうにかしなきゃ でもどうやって アマゾンなんてどうやっていけば」

せちゆな「めん〜（ケホケホ）」

A「せちゆなどうしたの？ まさかせちゆなまで？」

せちゆな「めん〜（ケホケホ）」（*、*、*）

A「おいでせちゆな とりあえずお布団に行こうか」グイッ（せちゆなを持ち上げる）

せちゆな「ちゃ〜（ぽわぽわ）」ギュッ

A「せちゆなにまでうつっちゃった まずいな」

A「そうだ ほかの子達は！」バタバタ

~~~~~

あしゆなん「なのね」（ぼへー）「

あやにゃん「ですわ」（ケホケホ）「

ちーか／ちみか「たー／みー（ずびー）「

ぷちま達『ぷあ〜』

A「みんなかかっちゃまった クソッ！もっと早く気づいていたら」

せちゆな「め〜ん（ケホケホ）「

A「一体どうしたら」

ピリリリ！ピリリリ！

A「電話？誰からだろう」（ピッ！）ハイもしもし 渡君？」

~~~~~

渡「うん分かった とりあえず落ち着いて 僕に任せて うんじゃあね（ピッ）」

キバツトバツト？世「渡」どこかへ行くのか？

渡「うん ちょっとアマゾンまでね」

~~~~~

続く！

きゅじゅじゅくっ！（ぶちたる・はざーどへん！）（後書き）

キャッスルドラン『ギャオ〜』バサバサ

エヴァちゃん「ほお 今の時代にドラゴンとは珍しいな」

きゅじゅじゅなっ！（ぶちたる・はざーど）（前書き）

今回は渡君に縁のあるキャラクターが登場します

まだまだ話はこれからのぞ（はあ）

きゅじゅくなっ！(ぶちたる・はざーど)

くぶちます的な何か

芹香「.. Aさんこのちゃん達は大丈夫ですか?..」

セリカ「心配で見に来たんだよ 状態は良くないみたいだね」

このちゃ「や〜(ケホケホ)」(顔真っ赤っか)

A「うん 全然熱が下がらなくて凄い苦しそうなんだ 食欲も無いみたいだし、今は水分を取らせて寝かせてる」

セリカ「そうか 可愛そうに 苦しいだろうね」(そっこのちゃの頭を撫でる)

このちゃ「や〜w」(セリカの手が冷たくて気持ちいいのか声を出す)

芹香「.. せっちゃん ..」

せちゅな「め〜(ふーふー)」

芹香「.. どうにかならないんですかAさん!..」

A「今の僕には現状これ以上手の出しようがないんだ」

芹香「…そんな！？」

セリカ「」

A「でも力の無い僕の代わりにこの子達を助けるために動いてくれた人たちがいるんだ」

芹香「…え？」

セリカ「それって」

A「（渡君頼む 力のない僕の代わりにどうかこの子達を助けてくれ）」（上を向く）

芹香「」

セリカ「」

~~~~~

ガルル「渡 急にアマゾンに行くなどと、一体どうしたんだ」

バツシャー「そうだよお兄ちゃん キャットスルドランまで持ち出して一体何をしに行くの？」

ドツガ「旅行、か？」

渡「友達が、助けを必要としているんだ」

ドツガ「友、達？」

バツシャー「友達って、あの不思議生物を飼ってる人間のこと？」

渡「うん 彼の家族が病気で苦しんでるんだ 僕はあの子達を助けたい」

ドツガ「渡、やさしい」

ガルル「しかし渡 何故そこまでする 相手はたかが人間だろう お前自らが、わざわざ出向くことはあるまい それもちっぽけな不思議ナマモノの為に」

バツシャー「確かにそうだよね お兄ちゃんがわざわざやってあげることも無いんじゃないの？」

ドツガ「フンガー」

渡「黙れ」

ガルル「っ!？」ズン（渡がら発せられた威圧感を感じ膝を突く）

バツシャー「うっ!？」ズン（＃）

ドツガ「あ、う！」ズン（＃）

キバットバット？世「ガルル 王の前で無礼だぞ 王は自らの手で友とその家族を助けたいのだ 貴様がとやかく口を出す必要はない」

ガルル「すまない渡 出過ぎた真似をした」(膝を突いて頭を下げ
る)

渡「以後彼らの事を侮辱することは許さん 分かったな」

ガルル「分かった」

バツシャー「うん!」

ドツガ「う、ん」

キバット?世「それで、渡 これからどうするんだ」

渡「うん アマゾンに行つて、ヘビビンガーを探す 先ずはそれか
らだね」

ドツガ「へび、ビンガー」

バツシャー「ねえ次狼それって」

ガルル「ああヤツがそうならマズいかも知れんな」

渡「次狼さん達はヘビビンガーの事知ってるの?」

ガルル「ああお前の言っているヘビビンガーが俺達の知っているヤ
ツと同じなら、少々マズいことになるかも知れない」

渡「それはどういう」

？「その話し、俺達にも教えてもらおうか」

？「」

ガルル「誰だ！！」

バツシャー「っ！！」

ドツガ「フンガー！！」

渡「あなた達は！？」

~~~~~

っじくっ！！



きゅっじゅっなっ！（ぶちたる・はざーどど）（後書き）

エヴァ様「ジー（腕を組み睨んでいる）

エヴァちゃん「ジー（キリンのぬいぐるみを抱えて睨んでいる）

なおぼん「まさかのエンカウト！？ こっちでもバトル勃発か！

「！

きゅじゅじゅはちっ！（ぶちたる・はざーどろ）（前書き）

今回は繋ぎな為短いです

そしてへびビンガーに勝手な設定盛りました

はたして何人の人がへびビンガーのことを知っているのだろうか

^ー^；)

僕ら世代ボンボンなら知っているかな？

きゅじゅつはちっ！（ぶちたる・はざーどっ）

「ぶちます的な何か」

渡「あなたは」

ガルル「貴様達何者だ！ どうしてここに！」

渡「彼らはA君の知り合いの方達だ 安心して」

リュウガ「勝手に入ってすまない 俺達もどうしてもアマゾンに行きたくてな」

バツシャー「どうして？」

王蛇「俺達の家族が、今も病気で苦しんでいる あの子達を助けるためにどうしてもヘビビンガーの牙が必要なんだ」

ドツガ「友達」

リュウガ「教えてくれ ヘビビンガーとは何なんだ」

ガルル「」

渡「僕も知りたい ヘビビンガーって一体」

王蛇「」

ガルル「分かった　へビビンガーとは古代の地球から生き続けているガイアの怪物　キャッスルドラゴンと同じ幻想種だ」

~~~~~

【某密林にて】

龍騎「ここは一体どこなんだよ」ガサガサ

みづらさん「あらー」こたぷーん（龍騎の頭の上に乗っている）

ナイト「無事アマゾンに到着したみたいだな」

龍騎「無事到着じゃないよ！　なんで勝手にアマゾンまで飛んじゃうんだよ！！」涙目w

ナイト「実は一部のぷちどる達にもぷちま風邪が発祥し始めた一刻も早く血清が必要だ」

龍騎「何だつて！」

みづらさん「あらー」

ナイト「だから少しでも人手が欲しくてな」

龍騎「わかった　悠長にしてる暇はないんだな」（気が引き締まっている）

ナイト「ああ」

龍騎「じゃあ行くところか」

みづらさん「あー」

~~~~~

続く！

きゅじゅじゅはちっ!! (ぶちたる・はざーどっ) (後書き)

龍騎「やっぱりここはどこなんだよ!!」 (迷ってる)

みづらさん「あらー」 (ゝ)

ナイト「はあ」

【ぶち全滅まであとX時間】

きゅじゅきゅっ!! (がいでん!) (前書き)

今日でぶちまを投稿してから三ヶ月になります  
ですので、特別記念外伝になります!

早いですね〜

ここまで頑張れたのも皆様のおかげです!

これからもよろしく願います!

今回はこのちゃとあのぶちモビのお話になります

楽しんでいただけたら幸いです!

明日はついに100話目に到達しますので、また外伝になると  
思います

本編は次次回になりますのでお楽しみに!

ぎゅじゅじゅじゅっ…！（がいでん！）

〜ぶちます的な何か〜

このちゃ「や〜」パタパタ

D G「…」

このちゃ「や〜」チヨロチヨロ（如雨露で水をあげている）

A「このちゃまた水をあげているのかい？」

このちゃ「や〜！」

A「このちゃは本当にD Gが好きなんだなあw」

このちゃ「や〜w」ぎゅっ

D G「（／／／）w」

A「ははw D Gも喜んでいるみたいだね」

このちゃ「や〜w」チヨロチヨロ

D G「…w」グイグイ（水とこのちゃの愛を浴びてすくすくと伸び



ている)

A「でもほどほどにしておきなよ　あまり水をあげすぎると体を壊しちゃうからね」

このちゃ「や〜」「コクリ

A「ふふふw」

このちゃ「や〜」「チヨロチヨロ

DG「…w」

~~~~~

【次の日】

このちゃ「や〜」「パタパタ（如雨露を持って走っている）

DG「…」「くたー（物凄い萎れている）

このちゃ「や〜!?!?」

DG「…」「くたー

このちゃ「や〜」「ゆわゆわ

DG「…」「くたー

「このちゃ」「や〜」

A《ほどほどにしておきなよ　あまり水をあげすぎると体を壊しちゃうからね》回想

「このちゃ」「ややや〜!?!」「ゆさゆさ」(凄く焦っている)

DG「…」「くたー」

「このちゃ」「や〜」「ぼろぼろ」(大粒の涙が流れている)

DG「…」「ポチャン」(このちゃの涙が落ちる)(ビクン)

「このちゃ」「や?」

DG「…」「グググ」(身体が震える)

「このちゃ」「や〜?」

DG「…」「ピキピキ」(DGの体中にビビが入る)

「このちゃ」「や〜」

DG「…」「ピッカーン」(外皮が弾け飛び光が溢れる)

「このちゃ」「や〜〜!?!」「(凄くビククリしている)

DG「…」「(光が収まりDGが現れる)

「このちや」「や〜!」「トテトテ(DGに駆け寄る)

DG「…W」「わっ

「このちや」「や〜」「(ちょっと大きくなったため上を向いて話す)

DG「…W」

「このちや」「や〜W」「(嬉しそうにDGにくっつく)

DG「…W」

「このちや」「や〜W」

DG「…W」

A「あれこのちや 凄い嬉しそうだね」

「このちや」「や〜W」

DG「…W」

A「あれ? DGなんか雰囲気変わった?」

DG「…W」

「このちや」「や〜」

A「へー じゃあDGは進化したんだね」

このちゃ「や〜?」

A「うん 多分ある程度のパラメーターが一定値を超したんじゃないかな? それでD Gの身体が進化したんだよ」

このちゃ「や〜?」(D Gの方に振り向いて話す)

D G「…W」

このちゃ「や〜W」ぎゅっ

A「(多分このちゃの愛情を受けて、このちゃを守るために進化したんだろっな)」「(そっつとD Gの顔を見る)」

D G「…」(Aの視線に気づきそっつとAを見る)

A「(俺に何かあったとき、このちゃをぶちまのみんなを頼むぞ)」

D G「…」コクッ(Aの考えていることが伝わったのか首を振る)

このちゃ「や〜?」

A「何でもないよこのちゃ 何でもね」「ニッコッ」(D Gをちらりと見このちゃに笑いかける)

このちゃ「や〜W」

D G「…」ズニョズニョ
「W」

A「さあそろそろご飯にしよう そのあとで、みんなにD Gを紹介

しよつか
「

このちゃ「や」W「トテトテ

D G「∴W「ガシツガシツ

A「ふふW さて行きますか「

【デビルガンダムは第一形態に進化した】

~~~~~

続く！



ひゃくつ!!! (前書き)

記念すべき100話目に突入しました!

嬉しい限りですw

そして今回の内容はいつもとちょっと違います

作者の日頃の考え?を書きました

本編には全く関係ないのでスルーしていただいても大丈夫ですよ

ではございませー!





せちゆな「めん！」

A「そうなんだよ 終わらずどころかまだ全キャラすら出ていない状態なんだよ」

せちゆな「めん！」

A「うう 仕方なかったんや!! あれこれ書いている内に何か趣旨が変わってきて、収集つかなくなっちゃったんだ うう」

(T—T)

このちゃ「や」なでなで

A「ありがとうこのちゃ このちゃは優しいなあ」「プニプニ(撫でるこのちゃのほっぺをつつく)

このちゃ「や」w「くすぐったそうに体を竦める」

せちゆな「め」(このちゃが羨ましいのか眉をひそめAを見つめている)

A「ん?どうしたのせちゆな ほらせちゆなもw」「プニプニ

せちゆな「め」w「恥ずかしげだが嬉しそうに体を竦めている」

A「ん」せちゆなも可愛いなあw それぞれw「プニプニ

せちゆな「め」w「」

このちゃ「や〜」（自分もかまって欲しいにしている）

A「はいはい このちゃもね〜」プニプニ

このちゃ「や〜」W

A「ふう堪能したW」（物凄いやりきった男の顔をしている）

このちゃ「や〜」テツカテカ

せちゆな「め〜ん」テツカテカ

A「はは 二人も満足したみたいだね」

このちゃ「や〜」W

せちゆな「めん！」

A「ふふW」なでなで

このちゃ「や〜」コロコロ

せちゆな「めん！」コロコロ

A「可愛いなあW 可愛いと言えばぶちどるのメンバー あの子達の存在が、この作品を作る切っ掛けとなったんだよね 本当に作者の鳴神ソラ先生には感謝しなくちゃだよなあ」しみじみ

あしゆなん「なのね！」ふんす！

A「あしゆなんは本当にインペラーが好きなんだねw インペラーが来るといつも吹っ飛んで駆け寄るよね」

あしゆなん「なのねw」（うなずいている）

A「じゃあインペラーのところについてw」

あしゆなん「なのねw」バタバタ

A「行っちゃった 本当に元気だなああしゆなんはw」

このちゃ「やw」

せちゆな「めん！」

A「やあお疲れ様 そう言えば二人は芹香ちゃんズに特に気に入られてたよね」

このちゃ「やw」（芹香を思い出し笑顔）

せちゆな「めん！」（セリカを思い出し笑顔）

A「このちゃとせちゆなを凄く可愛がってくれて僕も本当に嬉しいよ 二人を呼んでくれたLAN武先生には本当に感謝しなくちゃそれに感想をいただき読者の皆様 皆様の励ましや面白い感想などがあつて続けられてるんだよな」

このちゃ「やw」

せちゆな「めん！」

A「そうだよ〜 そう考えると、この作品って読者の皆様によって作られていると言っても過言じゃないよね」

このちゃ「や〜」

せちゆな「めんめん」

A「うんそうだね これからも読んで下さっている皆様の期待に応える為にもより一層気を引き締めて頑張らなきゃねw」

このちゃ「や〜w」

せちゆな「めん！」

A「読者の皆様 いつもぶちまを読んでいただいております ありがとうございますとございませう 鳴神ソラさんとLAN武さんには、自分の力量の無さで、キャラクターを生かし切れていなくて本当に申し訳なく思っています 先にも言いましたが、ここまで頑張ってこれたのは皆様の応援のおかげです！ これからも、より良い作品を作っていきたいと思っています 目指せ200話、300話！！ これからも、ぶちまをよろしくお願いします！！」ペコリ

このちゃ「や〜w」ペコリ

せちゆな「めん！」ペコリ

A「それでは皆さんまた明日！〜！」

続く！



ひゃくつ！！！（後書き）

あしゆなん「なのね」バタバタ

ゴチン！！

？「はう！！」「ドサア（膝から崩れ落ちた）

エヴァちゃん「なぜだ！　なぜ私の出番がないのだあ！！」

ちやちやまる「マスターはそう言った星の下に生まれた残念な子だからです」

エヴァちゃん「ちやちやまるうううう！！」

ぷちまズ『（ワイワイガヤガヤ！！）』

ひゃくいちっ！（ぶちたる・はざーど4）（前書き）

本編回帰です

内容は ほのぼの？

ひゃくいちっ！（ぶちたる・はざーど4）

くぶちます的な何か

このちゃ「や」（ふーぶー）

芹香「…辛そうだよー」（ちょっと涙目）

このちゃ「め」

セリカ「全く熱が下がらない 本棚で探してみても、治療法はへび  
ビンガーの血清でしか治せないとしかない クッソ！」

このちゃ「や」（はあはあ）

芹香「…このちゃん …」

A「二人ともありがとう こんなにもこの子達を心配してくれて  
なでなで

まつきー「きー」

芹香「…Aさん …」

A「二人とも少し休んで 二人まで身体を壊しちゃうよ」



セリカ「でも、それじゃあAさんも」

A「僕は大丈夫 君達まで身体を壊したら本末転倒だよ」

セリカ「それはAさんも同じじゃないか アナタが身体を壊したら元も子もないよ」

芹香「…そうだよ この子達にはAさんが必要なんだから 目が覚めたときにAさんの顔が見れたら凄く嬉しいと思うよ」

A「ありがとう二人とも そうだよね僕が無理したら元も子もないよね」

芹香「…うん！」

セリカ「うん」

A「じゃあ看病は皆で交代をしながら（ピンポン）ん？」

セリカ「誰か来たみたいだね」

芹香「…うん」

A「はいはい」パタパタ

（ガチャッ）

エヴァ様「きてやったぞ さあ茶を出せ」

なおぼん「チヨットオオオオ！！ いきなり他人様の家に来て茶を

出せとか何無礼なこと言ってるの！！ エヴァ様の今までの教育疑われるよ！！」

エヴァ様「ふん 貴様にとやかく言われる筋合いはない 黙っていろなおぼん」

A「（ポカーン）」（；）

なおぼん「黙ってなんかいられないでしょ！ 見てよAの顔、あまりの驚きに固まっちゃってるじゃん！！」

エヴァ様「ふん」

A「（ポカーン）ん？」（；）クイツクイツ

エヴァちゃん「大丈夫かA」

A「やあエヴァちゃんいらっしやい えっと、この人達は？」

なおぼん「俺はなおぼん .. こっち .. では初めましてだな そしてこっこの幼児がエヴァ様だ」

エヴァ様「誰が幼児か！！ ふん！ 私の名はエヴァンジェリン・

A・K・マクダウエルだ」

A「はあ？」

なおぼん「ひよんなコトからそのエヴァちゃんと知り合ってるね 何でもあなたの家族が大変なことになってるって聞いたからな 何か力になれるんじゃないかと思って出向いたまでだ」

エヴァ様「ふん」

A「エヴァちゃんが連れてきてくれたの？」

エヴァちゃん「う、うむ 少しでも役に立てるかと思ってなか、勘違いするなよ！ 私は病気の同胞の為を思って 別に貴様の為じゃ無いんだからな！」「プイッ

A「うん、ありがとうエヴァちゃん（ニコッ）」「なでなで

エヴァちゃん「（きゅう）」「ぱたりこ

A「ええ！どうしたのエヴァちゃん！！もしかしてエヴァちゃんも発症！！」

エヴァ様「なんだ、案外平和ではないか」

なおぼん「（あははははは…）」

~~~~~

続く！

ひゃくいちっ！（ぶちたる・はざーど4）（後書き）

エヴァちゃん」（ぶーぶー）「

A「エヴァちゃんが別のところで熱出したー！ー！」

ひゃくじゅう！（ぶちたる・はちーとら）（前置き）

すいません凄く短いです！！

ひゃくじゅう！（ぶちたる・はちーとら）

「ぶちます的な何か」

リュウガ「さて着いたか」

王蛇「ああ」

ガルル「俺達はこのままキャッスルドランで待つ」

バツシャー「お土産よろしくねw」

ドツガ「フンガー」

キバット？世「遊びに行くのではないのだぞ」

渡「じゃあ皆さん行ってきます」

~~~~~

龍騎「えーん ここは何処なんだよ」ガサガサ（草をかき分けながら歩いている）

みづらさん「あらー」「こたぷーん」v (龍騎の頭の上に乗っている)

ナイト「ふう どうやら迷ったらしいな」ザクザク(ダークバイザーで草木を切りながら歩いている)

龍騎「うう 王蛇達は居ないし ここが何処だかもわからない  
一体どうすりゃいいんだよ!」

みづらさん「あらあら」「ペしペし」

龍騎「ありがとうみづらさん 慰めてくれるんだね」

ナイト「しかし、確かに居場所が分からないのは不味いな」

龍騎「確かにそうだよな マジでどうするか」

ナイト「とりあえず歩くしかないか」

龍騎「はあ〜」

みづらさん「あらー」

~~~~~

インペラー「で…」は一体何処なんだよ…」

オーデイン「さあな」

タイガ「これってもしかして」

ライア「ああ迷子だな」

シザース「そうなんですか？」

ベルデ「遭難です」

インペラー「冗談言ってる場合かあああああ！！」

~~~~~



ひゃくじっ！(ぶちたる・はざーどら)(後書き)

?「誰か、ここに、来た俺、友達、護る」

?「グルルル」

ひゃくせんじつ！（ぶちたる・はざーどろ）（前書き）

またまた短いです

すいませんm（――）m

あるキャラの特徴出せてるか心配です  
意見がありましたら下さい！

ひゃくせんっ！(ぶちたる・はざーどろ)

くぶちます的な何か

龍騎「あー暑い 疲れた」( ; ) (木の枝を杖代わりに歩いている)

みづらさん「あら」こたぷーん(暑そう)

ナイト「確かに、少し疲れたな」

龍騎「一体いつになったらへビビンガーは見つかるんだよ」

みづらさん「あらー」

ナイト「なかなか見つからないな」

龍騎「なあ 一回事務所に戻らないか？ みんなにも手伝ってもらってもう一回来ようよ」

ナイト「ふむ そうだな 誰だ！」

龍騎「え？」

ガサッ

?「キキー!!」(木の上から飛び降りてきた)

龍騎「うわっ!」(驚いてバランスを崩す)

みづらさん「あららっ!」

ナイト「くっ!」

?「お前たち、ココに何しに来た! ココ、よそ者ダメ すぐに、  
出て行け!」

龍騎「タ、ターザン!?!」

ナイト「どっちかと言うと、ただの野生児って感じだな」

みづらさん「あらー」( ) ( )

?「早く、出て行け!!」

龍騎「ま、待ってくれ! 俺達は怪しい者じゃない!!」

ナイト「俺達はヘビビンガーと言う生き物を探しているんだ」

?「ヘビビンガー!!」

ナイト「知っているのか?」

龍騎「なあアンタ! ヘビビンガー知ってるんだったら、何処にいるか教えてくれないか!」

？「お前たち ヘビビンガー、どうする気だ！」

ナイト「どうしてもヘビビンガーの牙が必要なんだ 居場所を知りたい」

龍騎「なあ頼むよ 教えてくれないか！」

？「お前たち、ヘビビンガー狙う密猟者 俺、ヘビビンガー守る！」

龍騎「へっ？」

？「アアアアアゾオオオオン！！」バツバツ！（腕を交差させながら叫ぶ）

ナイト「なにっ！」

みづらさん「あららららー！！」（突然すぎて驚いている）

アマゾン「キキー！！ トモダチ、守る そのために、お前たち、倒すー！！」（獣のような構えを取って龍騎達と対峙する）

龍騎「くっー！！」

ナイト「むっ」

アマゾン「キキキキキキ！！」バツ（二人に向かい飛びかかった）

~~~~~

続く！

ひゃくせんっ！(ぶちたる・はざーどろ)(後書き)

オーデイン「何者だ」

？「俺は、太陽の子！！」

インペラー「なっ！」

ひゃくよんっ！（ぶちたる・はざーどフ）（前書き）

皆さんはお気づきだと思われませんが、私はキャラが増えれば増えるほど内容が雑になっていきます

キャラクターをお貸しいただいている作者の方々に本気で申し訳なく思っていますm（　　）m

力量不足ですいませんm（　　）m

内容は一部皆さんの思っていたのとは違うと思います

クオリティはいつも通りですがどうぞ！

ひゃくよんっ！(ぶちたる・はざーどフ)

くぶちます的な何か

アマゾン「キキー！！」バツ！(龍騎に飛びかかり爪で攻撃を繰り返す)

龍騎「うわっ！」(アマゾンの攻撃を横に飛び回避する)

みづらさん「あらら」(龍騎の頭にしがみついている)

ナイト「くっ！」(アマゾンに駆け寄る)

アマゾン「ガウッ！」(後ろから駆け寄ってきたナイトに向かい両手をついたまま両脚で蹴りを放つ)

ナイト「はっ！」シュバツ！(アマゾンの蹴りを避け龍騎の下に駆けつけた)

龍騎「ナイト！」

ナイト「大丈夫か？」

龍騎「ああ 俺は大丈夫だ みづらさんは」

みづらさん「あらららら〜」「ぐるぐる（凄く目を回している）

ナイト「みづらさんはどこかに降ろしておいた方がいいな」

龍騎「そうだな みづらさん、少しここで大人しくしていてね？」

（みづらさんを木の陰に降ろす）

みづらさん「あらららら〜」「ぐるぐる

ナイト「来るぞー!」

アマゾン「ケケーン!」 シュバツ！（再び飛びかかる）

龍騎「クソツ!」 ウリヤアアア!」（手に持っている木の枝でアマゾンに殴りかかる）

アマゾン「キキー!」 バキッ！（龍騎の振るった木の枝を腕で受け折る）

龍騎「折れたア!」

アマゾン「キキー!」 バシユツ！（爪で切りかかる）

龍騎「うわああ!？」

ナイト「龍騎!」 （龍騎に駆け寄る）

みづらさん「あらー」（木の陰から頭を出して覗いている）

ナイト「大丈夫か？」

龍騎「ああ あいつすげー強いよ」

アマゾン「ガルルルル！」

ナイト「とりあえず、力づくでも話を聞いてもらうしかないな」

龍騎「やっぱり、それっきゃないよな」

ナイト「往くぞー！」

龍騎「了解！」

アマゾン「ケケーンー！」

~~~~~

？「貴様達、ここで何をしているー！」

インペラー「おいおい あんな奴がいるなんて聞いてないぜ」

オーデイン「我々はヘビビンガーと呼ばれる生物を探している」

？「ヘビビンガーだと？ 見つけてどうするつもりだ」

タイガ「僕達の家族（おんけいぞう)を助けるためにどうしてもヘビビンガーの牙が必要なんです」

？」「

ガイ「なあアンタ、何か知ってんだろ 知ってんだったら何か教えてくれない？ 時間がないんだよ」

ライア「頼む どうしても必要なんだ」

？「話は分かった だが、すまないが君達のこととはまだ信用できない」

インペラー「なっ！？」

オーデイン「」（駆け寄ろうとしたインペラーを片手で抑える）

？「君達に会わせたい人達がいる とりあえず着いてきてくれ そこで君達の話をもう一度聞かせてもらう」

ガイ「そんな時間は無いんだよ！ 早くしないとアイツらが！」

タイガ「そっだよ！」

オーデイン「良いだろう」

ガイ「オーデイン！？」

オーデイン「我々には時間がない あの子達を助けるためには、奴の言つとおりにするのが最善の手段だ」

ガイ「くっ ！？」

？「悪い様にはしない さあこつちだ」

インペラー「その前に、あんたの名前を教えてくださいか？」

R X「俺の名は、BLACK RX」

~~~~~

続く！

ひゃくよんっ！）（ぶちたる・はざーどフ）（後書き）

王蛇「何者だ」

リュウガ「名を名乗れ」

？「天が呼ぶ！ 地が呼ぶ！ 人が呼ぶ！ 友を護れと俺を呼ぶ！」

ダークキバ「あなたはまさか レジェンドの ！？」

ひゃくじゅう！（ぶちたる・はな一ど）（前書き）

すみません短いです

内容はまた皆さんの思っていたモノとは違うと思います

楽しんでいただけたら幸いです

ひゃくじっ！(ぶちたる・はせーど)

「ぶちます的な何か」

？「天が呼ぶ！ 地が呼ぶ！ 人が呼ぶ！ 友を護れと俺を呼ぶ！」

王蛇「誰だ」

リュウガ「何者だ」

ダークキバ「そんな！？ あの人はレジェンドの！」

？「聞け！悪人共よ！ 俺は正義の戦士！仮面ライダーストロンガー！」

リュウガ「あ、悪人」

王蛇「」

ダークキバ「ああ まさか、よりもよってこの人が出てくるなんて」

リュウガ「渡 やつは一体何者なんだ」

ダークキバ「あの人は仮面ライダーストロンガー 僕達の大先輩当

たる人です どんな人かと言うと」

ストロンガー「さあ悪人共！ このストロンガー様が退治手やるぜ！」

ダークキバ「見ての通りの人です」

リュウガ「あぁー」

王蛇「」

ストロンガー「あぁ？ 何コソコソ話してんだ？ そっちから来ねーんだったらコツチから行くぜ！！」

ダークキバ「ちょ、ちょっと待って下さい！！」

ストロンガー「あ？ 悪人が今更命乞いか？ 見苦しいぜ」

ダークキバ「そうではなくて、僕達は悪人ではありません」

ストロンガー「は？」

リュウガ「俺達は、病気の家族を救うためにこの地に来たんだ」

ストロンガー「へ？」

王蛇「貴様の勘違いだ」（イライラしている）

ストロンガー「マジ？」

~~~~~

ストロンガー「いやーハハハ！ すまなかつたな てつきり密  
獵者かと思っちまつてよ」

ダークキバ「いえ」

リュウガ「」

王蛇「」

ストロンガー「そうムキになるなって 悪かつたな」

ダークキバ「あのどうして僕達を密獵者と勘違いしたんですか？」

ストロンガー「だってお前ら、明らかに悪人顔だろ 最近  
は密獵者が多いからついな」（頭に手を置いて言う）

ダークキバ「ズーンorz」

リュウガ「ズーンorz」

王蛇「ズーンorz」

ストロンガー「ん？ お前らどうした？」

ひゃくじっ！(ぶちたる・はざーどお)(後書き)

W龍星「うえーん　ここは一体何処なんだよ　セリカアア！

Aさあああん！　龍騎さあああん！！」ガサガサ

？「君は？」

W龍星「えっ！？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6443w/>

---

【でふおるまにあ・わーど】ぷちま!? ~ぷちます的な何か~

2011年12月18日00時53分発行